

今宿バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡

第 2 集

1971

福岡県教育委員会

今宿バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡

第 2 集

序

この報告書は、一般国道 202 号線今宿バイパス予定路線決定の為に、九州地方建設局から委託を受けて、福岡県教育委員会が行った埋蔵文化財の予備調査記録であります。

この発掘調査は、予定路線内の埋蔵文化財価値評価の為の予備調査であるため、満足のゆく結果は得られませんでした。福岡県文化財専門委員永井昌文教授・九州大学農学部松本勗教授・堤壽一助教授、ならびに福岡市教育委員会と土地所有者、関係各位の御援助御配慮により本書を発刊するはこびになりましたので深甚の謝意を表します。

昭和 46 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長

吉 久 勝 美

例 言

1. 本書は、昭和45年10月から昭和46年3月までに福岡県教育委員会が、九州地方建設局から委託されて、国道202号線今宿バイパス路線決定の為に予備調査した福岡市西北部の遺跡群の調査報告書である。
2. 本書の執筆は次のとおりである。

第1-1	柳田康雄
第1-2	浜田信也
第2-1・2・3・4・5	柳田康雄
第2-6	副島邦弘
第2-7	柳田康雄
第3-1	副島邦弘
第3-2	柳田康雄・副島邦弘
第3-3	副島邦弘
第3-4	永井昌文
第3-5	副島邦弘
第4・5	浜田信也
3. 掲載の写真の撮影、実測図の作成および製図は、図版目次と挿図目次に示すとおりである。
4. 本書の編集は、各遺跡については各調査主任が行ない、柳田康雄がとりまとめた。

本文目次

第1	序 説	1
1.	はじめに	1
2.	今宿一飯氏地区の遺跡	2
第2	若八幡宮古墳	7
1.	はじめに	7
2.	墳丘の調査	12
3.	内部構造	20
4.	遺物	25
5.	その他の遺構と遺物	31
6.	考察	35
第3	飯氏馬場遺跡	45
1.	はじめに	45
2.	遺構と遺物	50
3.	土坑墓出土人骨について	85
4.	結 び	87
第4	飯氏鏡原遺跡	100
1.	はじめに	100
2.	第Ⅰ調査区	101
3.	第Ⅱ調査区	102
4.	第Ⅲ調査区	102
5.	結 び	106
第5	福岡県内前方後円墳地名表	107

図 版 目 次

本文対照頁

図 版	1	女原付近航空写真 (パシフィック航業K. K. 撮影)	3
	2	徳永付近航空写真 (パシフィック航業K. K. 撮影)	3
	3	飯氏付近航空写真 (パシフィック航業K. K. 撮影)	2

若 八 幡 宮 古 墳

図 版	4	(1) 若八幡宮古墳遠景 南から (柳田康雄撮影)	10
		(2) 若八幡宮古墳近景 東から (柳田撮影)	10
	5	(1) 調査前の古墳の側面 北西から (柳田撮影)	12
		(2) 調査前の古墳の側面 南西から (柳田撮影)	12
	6	前方部全景 後円部から (柳田撮影)	19
	7	(1) 東くびれ部葺石俯瞰 (柳田撮影)	16
		(2) 東くびれ部葺石側面 (柳田撮影)	16
	8	(1) 後円部東側葺石部分 (柳田撮影)	16
		(2) 前方部東側葺石部分 (柳田撮影)	16
	9	(1) 西くびれ部葺石俯瞰 (柳田撮影)	18
		(2) 前方部西側葺石側面 (柳田撮影)	18
	10	(1) 西くびれ部葺石側面 北西から (柳田撮影)	18
		(2) 墳頂部遺構全景 北から (柳田撮影)	20
	11	(1) 銅製円盤と土師器の出土状態 東から (柳田撮影)	20
		(2) 銅製円盤 (柳田撮影)	20
	12	(1) 墳頂部遺構 (調査後) 北から (柳田撮影)	20
		(2) 主体部調査前 北から (副島邦弘撮影)	21
	13	主体部全景 東から (柳田撮影)	21
	14	(1) 主体部全景 北から (柳田撮影)	21
		(2) 主体部頭部 西から (柳田撮影)	23
	15	(1) 銅鏡上面の木片 (柳田撮影)	23
		(2) 銅鏡出土状態 (柳田撮影)	23
	16	(1) 銅鏡直下の木片 (柳田撮影)	23
		(2) 玉類出土状態 (柳田撮影)	23
	17	(1) 棺内南側出土遺物 北から (柳田撮影)	23

	(2)	棺外北側粘土下の環頭大刀 南から (柳田撮影)	23
18	(1)	棺外北側出土鉄器 北から (柳田撮影)	23
	(2)	棺外北側出土鉄器部分 (柳田撮影)	23
19	(1)	棺外西側出土短甲俯瞰 (柳田撮影)	24
	(2)	棺外西側出土短甲 西から (柳田撮影)	24
20	(1)	□是作二神二獸鏡 (柳田撮影)	25
	(2)	管玉・小玉 (柳田撮影)	26
21	(1)	環頭大刀・鉄剣 (柳田撮影)	27
	(2)	鉄製環頭大刀部分 (柳田撮影)	27
	(3)	刀子 (柳田撮影)	28
22	(1)	鉄鏃 (柳田撮影)	28
	(2)	鉏・鉄斧 (柳田撮影)	28
	(3)	土師器 (柳田撮影)	28

飯 氏 馬 場 遺 跡

図 版	23	遺跡遠景 (副島撮影)	47
	24	(1) A区遺構全景 (副島撮影)	50
		(2) B区遺構全景 (副島撮影)	50
	25	(1) 住居跡 北から (副島撮影)	51
		(2) 住居跡内出土土器 (副島撮影)	52
	26	(1) 住居跡内出土遺物 (副島撮影)	52
		(2) 住居跡覆土出土遺物 (副島撮影)	53
	27	(1) 1号木棺墓 (副島撮影)	55
		(2) 2号木棺墓 (副島撮影)	57
	28	(1) 3号木棺墓 (副島撮影)	57
		(2) 4号木棺墓 (柳田撮影)	57
	29	(1) A区西端の甕棺墓と木棺墓 (副島撮影)	59
		(2) 1号甕棺墓 (副島撮影)	59
		(3) 2号甕棺墓 (柳田撮影)	59
	30	(1) 3号甕棺墓 (副島撮影)	62
		(2) 4号甕棺墓 (副島撮影)	65
		(3) 5号甕棺墓抜き跡 (副島撮影)	67
	31	(1) 6号甕棺墓 (副島撮影)	67
		(2) 7号甕棺墓 (副島撮影)	68

32	(1)	8号甕棺墓 (副島撮影)	70
	(2)	9号甕棺墓 (副島撮影)	70
33		甕棺 (副島撮影)	59~70
34	(1)	1号石棺墓 (副島撮影)	75
	(2)	2号石棺墓 (副島撮影)	75
	(3)	3号石棺墓 (副島撮影)	75
35	(1)	3号石棺墓付近出土の刀子 (柳田撮影)	75
	(2)	2号石棺墓付近出土の不明鉄器 (副島撮影)	75
	(3)	3号石棺墓付近出土の小型仿製内行花文鏡 (柳田撮影)	76
36		歴史時代土塚墓全景 東から (副島撮影)	78
37		土塚墓 (副島撮影)	78~81
38	(1)	Pit 遺構出土遺物 (副島撮影)	82
	(2)	文様土器及び埴内出土遺物 (副島撮影)	83
39		表土層出土遺物 (副島撮影)	84
40	(1)	表土層出土遺物 (副島撮影)	84
	(2)	第Ⅱ層出土遺物 (副島撮影)	84

飯 氏 鏡 原 遺 跡

図 版	41	(1)	鏡原遺跡遠景 (浜田信也撮影)	101
		(2)	第Ⅰ調査区発見土塚墓 (副島撮影)	101
	42	(1)	第Ⅱ調査区全景 (浜田撮影)	102
		(2)	第Ⅲ調査区全景 (浜田撮影)	102
	43	(1)	円形周溝墓 (浜田撮影)	104
		(2)	円形周溝墓主体部 (浜田撮影)	104
	44		鏡原遺跡出土遺物 (浜田撮影)	105

挿 図 目 次

第 1 図	今宿一飯氏地区遺跡分布図 (国土地理院地形図 1:25,000 浜田信也作成) …	5
第 2 図	わら人形 (柳田康雄撮影) ……………	8
第 3 図	後円部の調査 (柳田撮影) ……………	8
第 4 図	葺石の調査 (副島邦弘撮影) ……………	9
第 5 図	若八幡宮古墳付近地形図 (福岡市役所原図1:5,000 柳田製図) ……………	11
第 6 図	若八幡宮古墳地形図 (宮小路賀宏・柳田・副島・岡本孝之・山崎茂孝・ 桜井康治実測、柳田製図) ……………	13
第 7 図	若八幡宮古墳墳丘実測図 (宮小路・副島・桜井・青木豊・安藤文一・ 千家和比古実測、柳田製図) ……………	14
第 8 図	墳丘主軸断面図 (宮小路・副島・岡本・青木・安藤・千家実測、柳田製図)折込み	
第 9 図	墳丘横断面図 (宮小路・岡本・青木・安藤・千家実測、柳田製図) ……………	折込み
第 10 図	西側くびれ部葺石実測図 (柳田・桜井・青木・安藤実測、柳田製図) ……………	折込み
第 11 図	東側くびれ部葺石実測図 (柳田・桜井・青木・安藤実測、柳田製図) ……………	17
第 12 図	西側くびれ部石組 (柳田撮影) ……………	18
第 13 図	後円部墳頂部遺構実測図 (宮小路・副島・岡本実測、柳田製図) ……………	20
第 14 図	主体部実測図 (副島・桜井実測、柳田製図) ……………	折込み
第 15 図	玉類出土状態実測図 (浜田・桜井実測、柳田製図) ……………	23
第 16 図	棺外北側鉄器出土状態実測図 (柳田・浜田・桜井実測、柳田製図) ……………	折込み
第 17 図	短甲出土状態実測図 (柳田・浜田・副島・桜井実測、柳田製図) ……………	24
第 18 図	□是作二神二獸鏡拓影 (柳田作製) ……………	25
第 19 図	玉類実測図 (柳田実測、製図) ……………	26
第 20 図	鉄製環頭大刀・鉄剣実測図 (柳田実測、製図) ……………	折込み
第 21 図	鉄製環頭大刀部分実測図 (柳田実測、製図) ……………	27
第 22 図	鉄刀子実測図 (柳田実測、製図) ……………	28
第 23 図	鉄鎌実測図 (柳田実測、製図) ……………	29
第 24 図	鉄鉞・鉄斧実測図 (柳田実測、製図) ……………	30
第 25 図	銅製有孔円盤実測図 (柳田実測、製図) ……………	30
第 26 図	土師器実測図 (柳田実測、製図) ……………	30
第 27 図	土塚状遺構実測図 (副島実測、製図) ……………	32
第 28 図	土塚状遺構 (副島撮影) ……………	32

第 29 図	土坑及び墳丘出土遺物実測図（副島実測、製図）	33
第 30 図	若八幡宮古墳地山削土図	36
第 31 図	若八幡宮古墳築造過程図（柳田作製）	36
第 32 図	若八幡宮古墳復原図（柳田作製）	37
第 33 図	尚方作二神二獸鏡（柳田複写）	39
第 34 図	吾作明二神二獸鏡（原版 東京国立博物館）	39
第 35 図	尚方作二禽二獸鏡（尾崎喜左雄氏提供）	40
第 36 図	尚方作二禽二獸鏡（柳田複写）	40
第 37 図	尚方作画像鏡（原版 東京国立博物館）	41
第 38 図	銀象嵌青銅環頭刀と青銅環頭刀子（京都大学文学部考古学研究室提供）	41
第 39 図	飯氏馬場遺跡付近地形図（福岡市役所原図1：5,000 副島作成）	46
第 40 図	鏡出土状態（副島撮影）	48
第 41 図	A区遺構配置図（桜井・青木・宮沢明久実測、桜井製図）	49
第 42 図	B区遺構配置図（桜井・青木・宮沢実測、副島製図）	50
第 43 図	住居跡実測図（柳田・水城一俊実測、副島製図）	51
第 44 図	住居跡内出土遺物実測図①（副島実測、製図）	52
第 45 図	住居跡内出土遺物実測図②（副島実測、製図）	53
第 46 図	住居跡内出土遺物実測図③（副島実測、製図）	54
第 47 図	住居跡床面出土遺物実測図（副島実測、製図）	55
第 48 図	1号木棺墓実測図（千家実測、桜井製図）	56
第 49 図	2号木棺墓実測図（桜井・安藤実測、桜井製図）	56
第 50 図	4号木棺墓実測図（柳田・水城実測、桜井製図）	57
第 51 図	1・2号甕棺墓実測図（肥山正秀・安藤実測、副島製図）	60
第 52 図	1号甕棺実測図（桜井実測、副島製図）	61
第 53 図	2号甕棺実測図（桜井実測、副島製図）	62
第 54 図	3・4号甕棺墓実測図（安藤・青木・宮沢実測、副島製図）	63
第 55 図	3号甕棺実測図（副島実測、製図）	64
第 56 図	4号甕棺実測図（副島実測、製図）	65
第 57 図	4号甕棺墓内出土遺物実測図（副島実測、製図）	66
第 58 図	5・6・7号甕棺墓実測図（桜井・安藤・千家実測、副島製図）	66
第 59 図	5号甕棺石膏型（副島撮影）	67
第 60 図	5・6号甕棺実測図（副島実測、製図）	67
第 61 図	7号甕棺実測図（副島実測、桜井製図）	68
第 62 図	8・9号甕棺墓実測図（青木・千家・安藤・宮沢実測、副島製図）	69

第 63 図	8号甕棺実測図（桜井実測、副島製図）	71
第 64 図	9号甕棺実測図（副島実測、製図）	72
第 65 図	1・2号石棺墓実測図（桜井・肥山・安藤・千家実測、副島製図）	74
第 66 図	3号石棺墓実測図（桜井・肥山実測、副島製図）	76
第 67 図	3号石棺墓付近出土遺物実測図（副島実測、製図）	77
第 68 図	1・2・3号土塚墓実測図（桜井・千家・安藤実測、桜井製図）	79
第 69 図	4・5号土塚墓実測図（安藤・副島実測、桜井製図）	80
第 70 図	歴史時代遺物実測図（副島実測、製図）	81
第 71 図	6・7号土塚墓実測図（副島・桜井・千家実測、桜井製図）	81
第 72 図	Pit遺構出土遺物実測図（副島実測、製図）	82
第 73 図	表土層出土遺物実測図（副島実測、製図）	84
第 74 図	表土層出土遺物実測図（副島実測、製図）	85
第 75 図	小型仿製鏡分布地図（桜井作製、製図）	91
第 76 図	小型仿製鏡鏡式一覧（副島作製）	92
第 77 図	福岡市弥永原遺跡出土の鏡（副島撮影）	94
第 78 図	鏡原遺跡付近地形図（福岡市役所原図、副島製図）	99
第 79 図	遺構配置図（副島・肥山・桜井・桑田和義実測、浜田製図）	折り込み
第 80 図	土塚墓実測図（副島・肥山・桑田実測、浜田製図）	102
第 81 図	土塚墓出土土器実測図（浜田実測、製図）	102
第 82 図	掘立柱穴遺構実測図（副島・桜井・肥山・桑田実測、浜田製図）	103
第 83 図	円形周溝墓実測図（副島・桑田実測、浜田製図）	104
第 84 図	円形周溝墓出土土器実測図（浜田実測、製図）	105
第 85 図	第Ⅲ調査区出土須恵器実測図（浜田実測、製図）	106
第 86 図	第Ⅲ調査区出土遺物実測図（浜田実測、製図）	106

目 次

表 1	玉類計測表	26
2	復原墳丘数值表	38
3	九州古式古墳一覽	43
4	柱穴計測表	52
5	木棺墓一覽表	58
6	福岡県弥生時代木棺墓地名表	58
7	甕棺墓一覽表	59
8	石棺墓一覽表	73
9	中世土塚墓一覽表	78
10	人骨一覽表	86
11	柱穴の間隔計測表	87
12	飯氏馬場遺跡甕棺編年表	89
13	福岡県内前方後円墳地名表	108

第 1 序 説

1. はじめに

昭和43年度に今宿バイパス全線の遺跡分布調査を行ない、昭和44年8月から12月に福岡市拾六町と同市今宿青木間の遺跡群の予備調査を実施したが、本年度は、昭和45年10月から昭和46年3月にかけて、福岡市徳永から同市飯氏間の3カ所の遺跡を対象に予備調査を行なった。第1地点は前方後円墳、第2地点は弥生時代住居跡と墓地及び中世土塚墓群、第3地点は7世紀初頭の掘立柱群と中世周溝墓で、調査主体を福岡県教育委員会とし、同文化課技師の柳田康雄、副島邦弘、浜田信也がそれぞれ現場主任となり調査した。

発掘調査関係者

福岡県教育委員会

総 括

教 育 長 吉 久 勝 美

教 育 次 長 森 田 実

文 化 課 課 長 杉 原 信 彦

課長補佐 岩 下 光 弘

庶務会計

庶務係長 赤 司 岩 雄

主 事 中 村 一 世

発掘調査

課 長 渡 辺 正 気

技術補佐 宮小路 賀 宏

技 師 同 柳 田 康 雄 (第1地点主任)

同 浜 田 信 也 (第3地点主任)

同 副 島 邦 弘 (第2地点主任)

なお、各遺跡の調査期間と調査補助員は次のとおりである。

第1地点(若八幡宮古墳) 昭和45年10月26日～12月30日

慶応大学大学院 岡 本 孝 之

福岡大学学生 山 崎 茂 孝 水 城 一 俊 桜 井 康 治

肥 山 正 秀 桑 田 和 義 佐 藤 保 雄

木 太 久 守

- 国学院大学学生 青木 豊 安藤 文一 千家 和比古
第2地点 (馬場遺跡) 昭和45年12月7日～12月29日
 福岡大学学生 水城 一俊 桜井 康治 肥山 正秀
 桑田 和義
 国学院大学学生 青木 豊 安藤 文一 千家 和比古 宮沢 明久
第3地点 (鏡原遺跡) 昭和46年2月22日～3月10日
 福岡大学学生 山崎 茂孝 桜井 康治 肥山 正秀
 桑田 和義 佐藤 保雄
- この外に大濠高校歴史部、九州女子高校考古学同好会の生徒諸君が参加した。(柳田康雄)

2. 今宿一飯氏地区の遺跡

今回調査の対象としたこの地域は、福岡市内の西部地区で糸島郡前原町と接するところである。所謂糸島平野の一部と考えられる地域で、糸島平野から西に延びる海岸沖積地で、背振山塊から連らなる高祖山(怡土城跡)が背後にせまり、当時かなりの狭少な平地部をもつ地域であったろう。しかし数多くの遺跡が高祖山の裾部に展開する好適地に所在し、また適地を求めて谷の奥部にまで入っている。

この地域でことに注目すべきことは、数多くの前方後円古墳と古墳群である。11基の前方後円古墳と10数の古墳群があり、古墳時代前期から後期にわたっている。それらの個々について若干の説明を加えてみよう。

丸隈山古墳 福岡市大字周船寺小字ウエノに所在する前方後円墳である。主軸を南北におく北向きの古墳である。丘陵先端部に位置する古墳で、古く開墾にあいかりうじて原形をとどめている。主体部は横穴式石室としては古いもので、室内には石棺がある。仿製二神二獣鏡、仿製六獣鏡と巴形銅器等を出土している(註1)。

子捨塚古墳 福岡市大字飯氏小字鏡原に所在する前方後円墳である。台地上に在り周堤をもつ。全長51m、前方部幅37m、後円部径24m、前方部高4m、後円部高6mの墳形である。墳丘は主軸を北東におく。後円部は陥没しており、主体部は全壊しているらしい。

マツヲ古墳 福岡市大字飯氏小字マツヲに所在する円墳で、径約40mを測るもので、南に開口する横穴式石室を主体部におく。この地域ではかなり大きな円墳である。

中原古墳群 福岡市大字千里小字中原に所在する。4基の円墳からなる。いずれも丘陵の斜面に在り、横穴式石室をもつ古墳群である。

都ヶ浦古墳群 福岡市大字飯氏小字都ヶ浦に所在し、2支群からなる総数13基の円墳群である。このうち2基が堅穴式と考えられる石室をもつ。

正善寺古墳群 福岡市大字飯氏小字正善寺に所在し、2支群17基の円墳からなる。いずれも小

円墳で径15mをこえるものはない。全て横穴式石室である。

四ツ谷古墳群 福岡市大字飯氏小字四ツ谷に所在する。3支群15基の円墳群である。ほとんどが頂部陥没である。開口しており、石室は横穴式である。径15mをこえるものはない。

猪ノ谷古墳群 福岡市大字飯氏小字猪ノ谷所在の古墳群である。5基の円墳からなるが、2号、3号はともに墳丘径が6mで、墳丘高が0.6mと0.5mを測る極めて小さい古墳で、内部主体が石棺もしくは小竪穴式石室とも考えられる。他の3基は横穴式石室である。

山ノ鼻1号古墳 福岡市大字徳永小字山ノ鼻に所在する北向きの前方後円墳である。低台地に在り若干墳形をとどめ、推定全長50mを測る。後円部頂に石碑が建てられており、このため削平をうけている。主体部は竪穴式石室と考えられている。葺石がある。

山ノ鼻2号古墳 福岡市大字徳永小字山ノ鼻に所在する。1号古墳の西側に隣接し、やはり低台地に位置する。現在墳丘は全くとどめていない。北向きの前方後円墳である。

若八幡宮古墳 福岡市大字徳永小字下引地に所在する。若八幡宮の境内に在り、北向きの前方後円墳である。山ノ鼻1号古墳の南にあり、丘陵端部に位置する。

下谷古墳 福岡市大字徳永小字下谷に所在する南向きの前方後円墳である。若八幡宮古墳の在る同じ丘陵上に所在し、同古墳の南に在る。近年造成工事によって破壊された。付近に石室の構築に使用されたと考える石材が散在していることから、主体部は横穴式石室であったと考えられる。

アラタ古墳群 福岡市大字徳永小字アラタ・真竹ヶ浦及び大字女原小字浅ヶ谷に所在する古墳群で25基の円墳からなる。径25mを測る22号墳が最も大きく、他はほとんどが7～8mの径である。石室の形式は3号墳が竪穴系横口式石室であるほかは全て横穴式石室である。

平原古墳群 福岡市大字徳永小字平原に所在する古墳群である。4基の古墳からなり、この内2基が全壊している。

鐘つき古墳群 福岡市大字女原小字鐘つき・鳴子尾・万徳に所在する古墳群で60基の円墳からなる大古墳群である。谷の奥部にあり、標高もかなり高い位置にある。径が20mをこえるものはなく、墳高はほとんどが1～3mである。大半が半壊か頂部陥没で盗掘等の痕跡がある。このうち22号及び51号が石室が解るが、どちらも南側すなわち平地部とは逆の方向に開口する横穴式石室である。

小松原古墳群 福岡市大字女原小字小松原に所在する古墳群である。前方後円墳（1号墳）と15基の円墳からなる古墳群である。前方後円墳は墳丘を造成工事によって半ば削られているが、推定全長22m、同前方部幅13m、同後円部径13mを測る小型のものである。横穴式石室が内部主体である。円墳群はほとんど半壊か頂部陥没である。

今宿大塚古墳 福岡市大字今宿に所在する。沖積地に突出した丘陵端部の低位置に在る前方後円墳で、東西に軸をおく西向きである。全長約60m、前方部幅約36m、後円部径約28mを測る。

2段築成である。周堤があり主軸の長約100mになる。後円部は削平をうけている。形象埴輪と

円筒埴輪が発見されている。主体部の形式は不詳である（註2）。

新貝古墳群 福岡市大字今宿小字新貝に所在する古墳群である。A・Bの2つの支群からなるが、総数52基の円墳を数える。最大径20mをこえるものはなく、ほとんどが小円墳である。ことにA支群の4基は6～8mの径で墳丘高1～6mという円墳である。3号墳は墳丘が半壊しているが、その断面に主体部と考えられる箱式石棺がみられ、他の3基は墳丘の状態から3号墳と同様の主体部と考えられる。

谷上古墳 福岡市大字今宿小字谷上に所在する古墳群の中の1号古墳で前方後円墳である。この前方後円墳は全長36m、前方部幅14m、後円部径17m、後円部高5mを測り、北向きである。主体部の横穴式石室はやはり主軸を同じくするが、南に開口する。石室は天井部を欠いている。

新田 墳群 福岡市大字今宿小字新田に所在する古墳群である。丘陵の稜線上に在り、2号墳は径25mの円墳である。

イヤソノ古墳群 福岡市大字今宿小字イヤソノに所在する古墳群である。A・Bの2つの支群からなる。A群は「今宿古墳群」（註3）として報告されたもので、1号墳は径30mを測るかなり大きな円墳であり、横穴式石室である。ほかは小型の円墳である。

相原古墳群 福岡市大字今宿小字相原に所在する古墳群で、25基の円墳からなる古墳群である。最大径25mを測るものが2基ある。石室は現在判断できるものは全て横穴式石室である。

ウソノ口古墳群 福岡市大字今宿小字相原所在の古墳群である。17基の小円墳からなる。ほとんどが盗掘をうけている。どれも横穴式石室が主体部である。

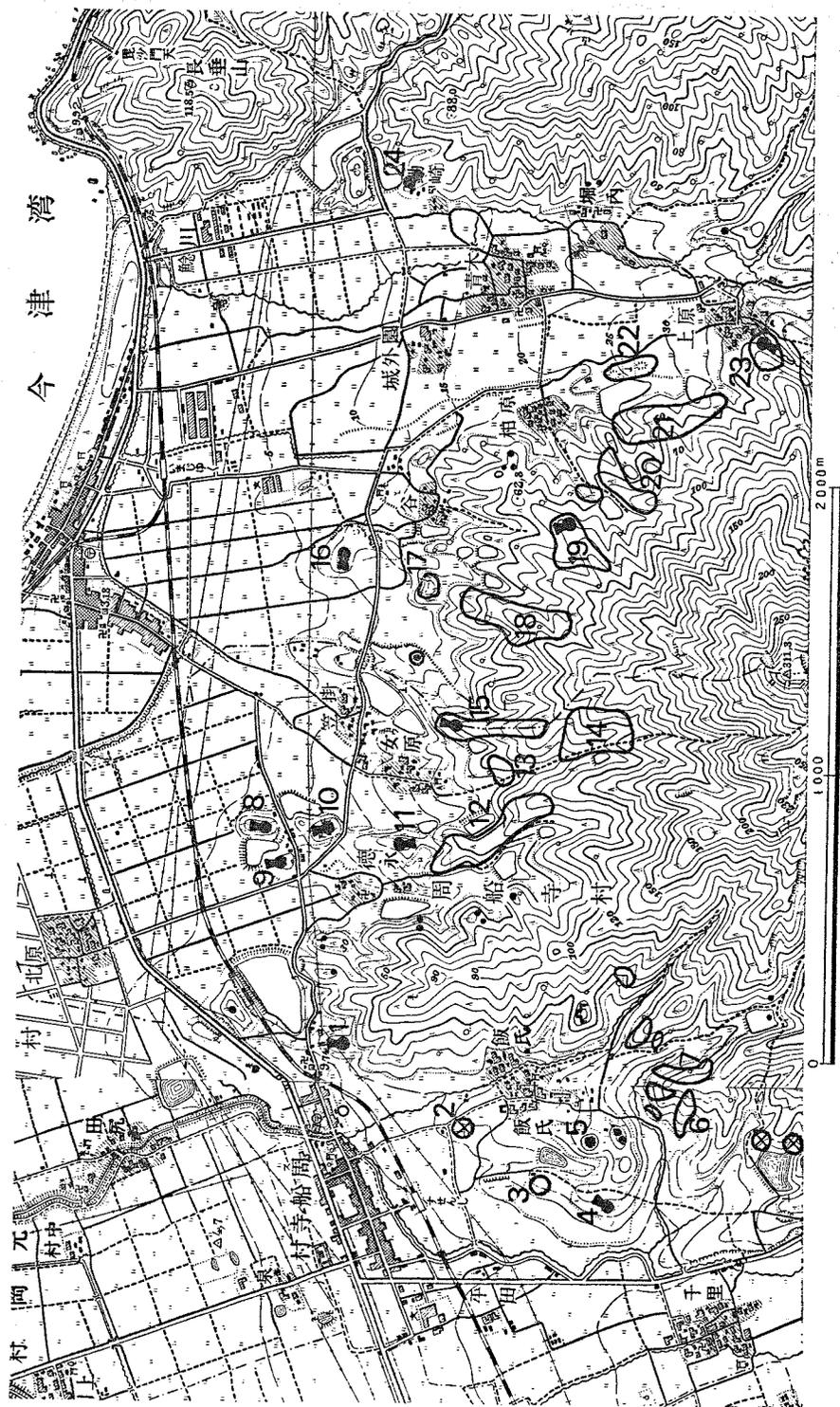
西ノ原古墳群 福岡市大字今宿小字西ノ原に所在する。4基の円墳があったが、いずれも宅地造成により消滅した。

本村古墳群 福岡市大字今宿小字本村に所在する古墳群である。本村前方後円墳（1号墳）を主体として5基の円墳からなる。1号墳は平地に所在し、他は丘陵斜面に所在する。1号墳は宅地造成によって消滅した。

鋤先古墳 福岡市大字今宿小字鋤先に所在する。丘陵端に在り、南西に向く前方後円墳である。主体部の形式は不詳である。形象埴輪片が採集されている。

以上概略を記したこれらの前方後円墳と古墳群は、広く糸島平野という視野からみれば、この平野が弥生式時代から伊都国として中国大陸との交渉の要衝の地として受け継ぎ活躍した人々の痕跡である。ことにこの地域は末盧国から伊都国そして奴国に至る経路でもあり、この経路に展開する11基の前方後円墳は重要な意味をもつ。また、丸隈山古墳は糸島水道の西側開口部を一望できる位置にあり、その解釈には重要な意味がふくまれていると考えられる。またこの地域にこれだけの古墳群が集中していることは、糸島平野の中にあっても一つの大きなグループをつくり、国の中にあっても強力的な働きをなしていたことだろう。

なお、いまひとつ注目すべき点は、この地域の古い時期の前方後円墳一丸隈山古墳、山ノ鼻



1. 丸隈山古墳
2. 飯氏馬場遺跡
3. 鏡原遺跡
4. 子捨塚古墳
5. マツヲ古墳
6. 都ヶ浦古墳群
7. 正善寺古墳群
8. 山ノ鼻1号古墳
9. 山ノ鼻2号古墳
10. 若八幡宮古墳
11. 下谷古墳
12. アラタ古墳群
13. 平原古墳群
14. 籠ツキ古墳群
15. 小松原古墳群
16. 今宿大塚古墳
17. 新貝A古墳群
18. 新貝B古墳群
19. 谷上古墳群
20. 相原古墳群
21. ウソノロ古墳群
22. 西ノ原古墳群
23. 本村古墳群
24. 御先古墳

第1図 今宿一飯氏地区遺跡分布図

1号古墳、山ノ鼻2号古墳、若八幡宮古墳が、いずれも同一方向に向き、丘陵先端部の立地的には最適な位置に在ることは、地形的な影響ばかりでなく、なにか一考を要するところである。また後三者の接近した所在のあり方にも我々は問いかけてみる必要があるのではなからうか。
(浜田信也)

註1 島田寅次郎「丸隈山古墳」(『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』1, 1925)

福岡市教育委員会編「丸隈山古墳」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』10, 1970)

2 福岡県教育委員会編「福岡県の文化財」(1968年)

3 宮小路賀宏「今宿古墳群」(『福岡県文化財調査報告書』38, 1968)

なお、この遺跡分布調査には、福岡市教育委員会の協力があり、田坂美代子氏の参加があった。

第2 若八幡宮古墳

福岡市大字徳永所在前方後円墳

本文目次

1. はじめに	7
(1) 調査の経過	7
(2) 古墳の立地	10
2. 墳丘の調査	12
(1) 後円部	12
(2) くびれ部	16
(3) 前方部	19
3. 内部構造	20
(1) 墳頂部遺構	20
(2) 主体部	21
(3) 遺物の配列	23
4. 遺物	25
5. その他の遺構と遺物	31
6. 考察	35
(1) 墳丘の復原	35
(2) □圓作二神二獸鏡	38
(3) 鉄製環頭大刀	41
(4) 古墳の年代	42

第2 若八幡宮古墳

1. はじめに

(1) 調査の経過

昭和45年10月にはいと発掘調査のために、土地の地番や土地所有者の調査を始めた。若八幡宮古墳は、その名のとおり若八幡宮所有地内にあるため、発掘調査に際しては氏子の同意が必要であった。しかし、境内地は含まれていないので割合早く承諾を得ることができた。

若八幡宮古墳関係調査員は次のとおり。

福岡県教育委員会文化課

課長技術補佐	渡 辺 正 気
技 師	宮小路 賀 宏
”	柳 田 康 雄 (調査主任)
”	浜 田 信 也
”	副 島 邦 弘

10月26日 現場に機材搬入し、氏子代表者3人に挨拶まわりをする。

10月28日 三角点の標高調べと、立木補償の件について福岡国道事務所用地課と話合う。

10月29日 午前中に周船寺の水準点から標高を移し、若八幡宮境内に24.517mのB.M.を設定する。午後から氏子5人の立合いのもとに伐採と発掘面積の確認を行なう。

10月30日 立木補償の対照となる立木を残し、根ざらいを行ない、借上面積の測量を行なう。この時松の根元に丑の刻参りのワラ人形を発見する。もう1本は釘だけ残っていた。

11月1日 墳丘の測量を1/100で始める。

11月4日 測量を続行し、午後から立木補償の話がついたので伐採を始める。

11月6日 前方部の伐採、除草が終わったので、現況写真撮影を行なう。

11月7日 完全に除草が終わったので近景、遠景写真をとり、午後から墳丘の割付を行ないトレンチを設定した。後円部の中心と思われる地点を中心に主軸とそれに直交する幅1mのトレンチの表土はぎにかかる。後円部南側トレンチで早くも表土下20cmのところでは黄褐色の粘土らしものに当る。

11月8日 昨日確認された粘土は、盛土の中に混入しているものであった。後円部東西トレンチの表土はぎを終ったので、北半のトレンチにかかったところ木の根の下で土師器片と銅製

の円盤を発見する。

11月9日 土器と銅製品が発見された遺構の追求を行なう。南トレンチでは1.4 mで地山となったが主体部の掘方はずかめない。西トレンチでは同レベルで炭化物混入の粘土に当たった。北トレンチでは浅くて地山に達した。ここでは地山直上に炭がたまるところがある。前方部は、表土下で地山となる。

11月10日 西トレンチの粘土層を追求したところ西側に傾斜している。東トレンチでも同様であった。東トレンチ北側に2×3 mのトレンチを掘り進めたところ墳頂下70cmで方形にめぐる青灰色粘土帯を確認する。さらに西トレンチの北側も拡張したところ、ほぼ全容があらわれた。

11月11日 南トレンチの両側を2 m×4 mにそれぞれ拡張したが、表土下70cmでは遺構は発見できない。次に後円部中心から西側くびれ部に向う幅1 mのトレンチを設定。

11月13日 後円部トレンチの墳丘断面図作製にかかる。西くびれ部のトレンチでは転石が多い中で移動していない石列が確認された。

11月15日 墳頂部遺構の写真、実測終る。西くびれ部の葺石は2段築成であることがわかる。

11月16日 墳頂部遺構の下にあらわれた主体部の表面プランを出し、写真撮影にかかる。

11月17日 主体部棺内の発掘を始める。鉄器と棺蓋らしき木片が見えだした。

11月18日 木片の下で鏡を発見する。さらに西側小口を確認し、その外側から短甲が出始め



第2図 ワラ人形



第3図 後円部の調査

る。東くびれ部葺石の調査を始めたところ割合よく残っており、土師器片も出土する。九大農学部の高木勲教授、堤壽一助教授に木片の鑑定のため現地に出張していただいた。また、この日から現場のテントに交替で泊込みを始める。

11月19日 棺内の調査を続行し、管玉と小玉を発見する。棺外の短甲はほぼ全容を掘出す。両くびれ部葺石の調査を続行する。

11月20日 棺北側の粘土の下に鉄剣、鉄鏃、鉈などが出始めた。東くびれの葺石は裾が完全に残っていた。

11月23日 主体部は、鉄器の錆除去を続行。後円部東、南トレンチ断面図を完成し、さきに完成した東西トレンチの埋もどしを始める。前方部では後円部のつけ根のところで土塚状の落込みを確認する。

11月24日 主体部の清掃をし、写真撮影を行なう。葺石と前方部の落込みの追求を続行する。また、前方部の掘上ったところの墳丘測量を始める。三宅副知事、福岡国道事務所田辺課長ら来観。

11月28日 副葬品各部分の出土状態の写真撮影を終り、鏡を裏がえしてみたところ二神二獣鏡であった。

11月29日 主体部の実測にかかる。

11月30日 雪積のため午前中は葺石の撮影できず。主体部の実測続行。

12月1日 前方部は、葺石実測のため割付を行ない、水系を張り始める。

12月3日 主体部の実測を続行し、鉄器がのぞいていた北側の粘土を除去したところ、大刀は鉄製環頭大刀であることが判明した。

12月5日 主体部北側鉄器群、棺内環頭大刀、鉄斧、刀子、銅鏡下木片の写真を終る。

12月7日 主体部遺物出土状態の実測続行。

12月9日 主体部北側の鉄器を取上げながら実測を続ける。

12月12日 前方部西側は裾がはっきりしないのでさらに調査を進めていたが、くびれに近く葺石と違った石組を確認する。さらに北側の墳丘裾付近と思われる所に石組を発見する。

12月15日 北側の石組は、土塚状の落込みに石が落込んでおり、さらに石の下は空洞のところ



第4図 葺石の調査

若八幡宮古墳

がある。

- 12月17日** 前方部西側裾に確認された2基の石組はその掘方のプランがつかめないので今回は調査を打切ることにした。
- 12月18日** 前方部の葦石外と後円部の主体部外の埋もどしを始める。
- 12月20日** 葦石の平面実測を1/20で始める。
- 12月24日** 葦石の平面実測を終り、葦石と前方部横断面の実測を行なう。
- 12月26日** 主体部をなるべく破壊しないで、短甲を現状のまま取上げるためにシリコン樹脂型をとることであり、樹脂を直接短甲にかけていった。東芝シリコン樹脂は、お互いは接着するが、異物には接着しないのでこれを使用した。
- 12月28日** シリコン樹脂は柔軟性があるので、現形を保たせるため、石膏で裏うちするため樹脂の上から石膏をかける。
- 12月29日** 裏うちの石膏だけを取上げようとしたが、樹脂と石膏が付着してとれないので、短甲と共に取上げることにした。
- 12月30日** 短甲はほぼ現形のまま取上げることに成功した。短甲の下から出土した小口外側の粘土を実測し、主体部の埋もどしが午後2時に完了した。本日で調査終了。

(2) 古墳の立地

若八幡宮古墳は、福岡市大字徳永字下引地の若八幡宮の東側にあり、水田面との比高約18mの丘陵上に位置する。この舌状の丘陵は、今津湾、さらには博多湾、玄界灘を望むことのできる怡土城のある標高415mの高祖山の北側に派生する丘陵の1つで、同様な立地に築成されている丸隈山古墳の東約720mのところにある。

若八幡宮古墳のある丘陵には、現在山ノ鼻1・2号墳をあわせると3基の前方後円墳が確認でき、さらに土地の人の話によると若八幡宮古墳と山ノ鼻1号墳の間と、中谷池の北西側に割合大きな塚があったと言うことであるが、現在は消滅している。しかし、昭和42年10月10日にパシフィック航業株式会社によって撮影された航空写真によると、中谷池北西の塚は南向きの前方後円墳らしい。現地に行くと開墾された畑の横に大きな花崗岩が多数集めてある。これから見て古墳が存在したのは確実のようである。石材から見て横穴式石室と思われる。この古墳を字名から下谷古墳と命名した。下谷古墳の南側には、横穴式石室をもつ小円墳からなるアラタ古墳群がある。

若八幡宮古墳は、地形的に見ても中心的地位にあり、最初に造営される古墳が最もすぐれた立地条件を選定すると思われるので4基の前方後円墳中、最も古いと考えられる。現在でも糸島から早良、福岡に貫ける交通の要所である。

(柳田康雄)



第 5 図 若八幡宮古墳付近地形図 (1/5000)

1 若八幡宮古墳 2 山ノ鼻1号墳 3 山ノ鼻2号墳 4 下谷古墳

2. 墳 丘 の 調 査

昭和43年の分布調査で発見した当時、採土工事は前方部に達していなかったが、雑木のため前方後円墳と判断するには容易でなかった。その後の工事で前方部が削られ、その断面から前方部は地山整形によるものであることが判明した。今回の調査は予備調査であるから、古墳の性格をつかめる程度の調査にとどめ、全面発掘を目的としなかった。したがって、後円部の主体部以外はトレンチによる墳丘の観察のみにとどめた。くびれ部はこのみが葺石が顕著であったので墳丘の復原ができる範囲の調査を行なった。前方部はそのほとんどがかって茶畑に開墾されているため、原位置にある葺石は少なく、とくに西側裾にあたる石列が発見されないので、裾線付近の全面発掘を行なったが、段々畑の痕跡が強く残り、墳丘基底線はつかめなかった。ここで記述するトレンチ名・地区名は、墳丘地形測量後、後円部に推定中心点を設け、これと前方部幅推定中心点をむすぶ線を墳丘主軸線とし、後円部中心点から南を南トレンチ、東を東トレンチ、西を西トレンチ、北の前方部に続くトレンチを北トレンチとした。またくびれ部は東・西を付けて区別し、前方部も同様にした。

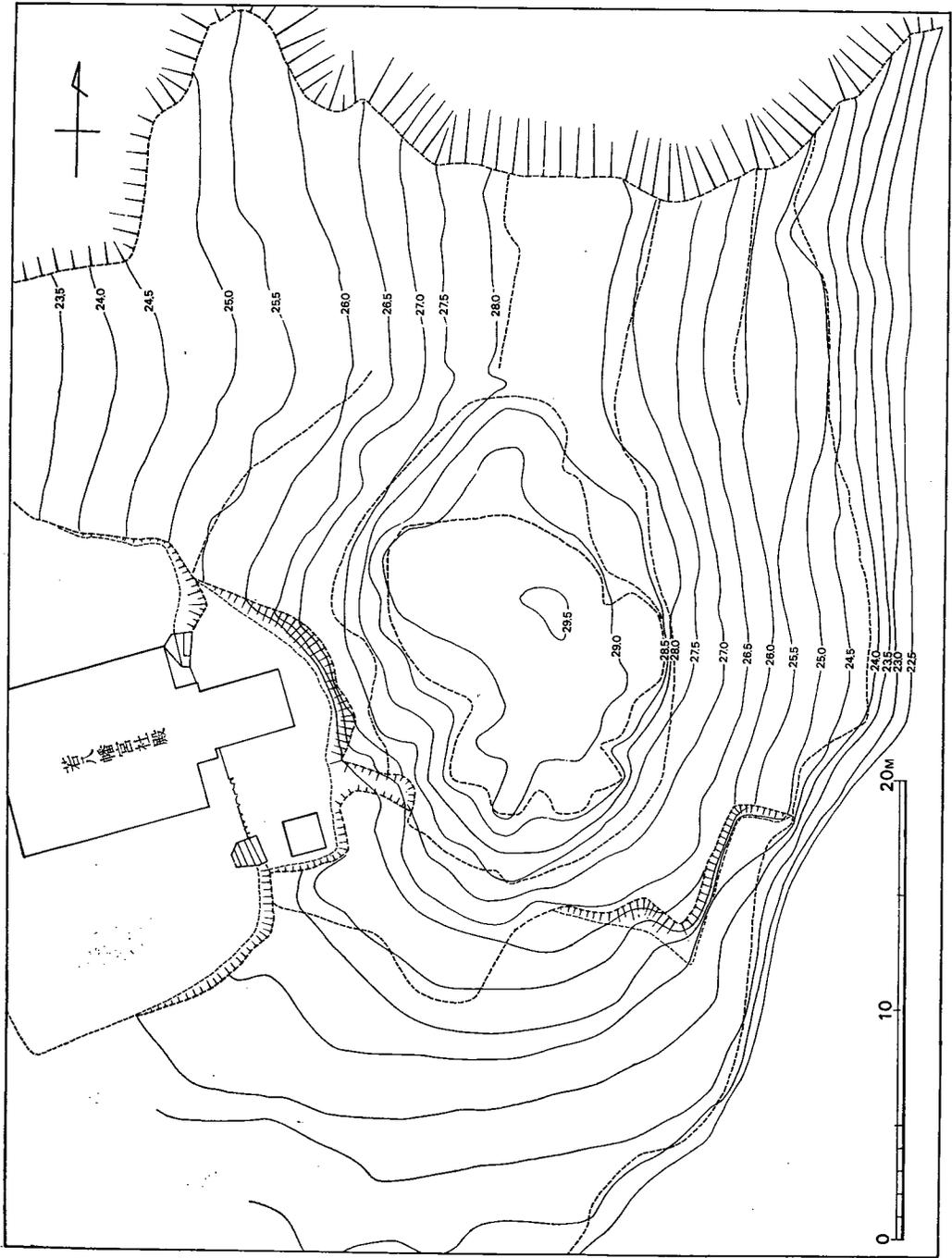
(1) 後円部〔第7・8・9図〕

後円部の西側には若八幡宮の社殿が造られているため大きく削られている。しかも境内から墳頂に登るためにも削られている。さらに南東側も開墾により原形を損じている。このため墳頂部も凹凸が激しく、主体部の完存があやぶまれた。

南トレンチ 墳頂下1.40mで赤褐色粘土の地山に達し、それ以下約1.5mは地山整形により墳丘を形造っている。土層断面の観察によると、わずかに南傾斜の地山を高さ1.5mの台形に削り出し、その上にさらに盛土をしている。この盛土にも順序があり、先ず主体部付近には地山の上に炭化物混入の青灰色粘土が敷かれている。地山を削り出して造られた台形の南縁には、全ての盛土に先立って粘質の強い赤色系の土を断面三角形に積み上げ、次に棺台といえるものを造り、木棺を安置した上に盛土を行ない次第に積重ねて広げ、最後に墳頂を平坦に整える盛土法をとっている。

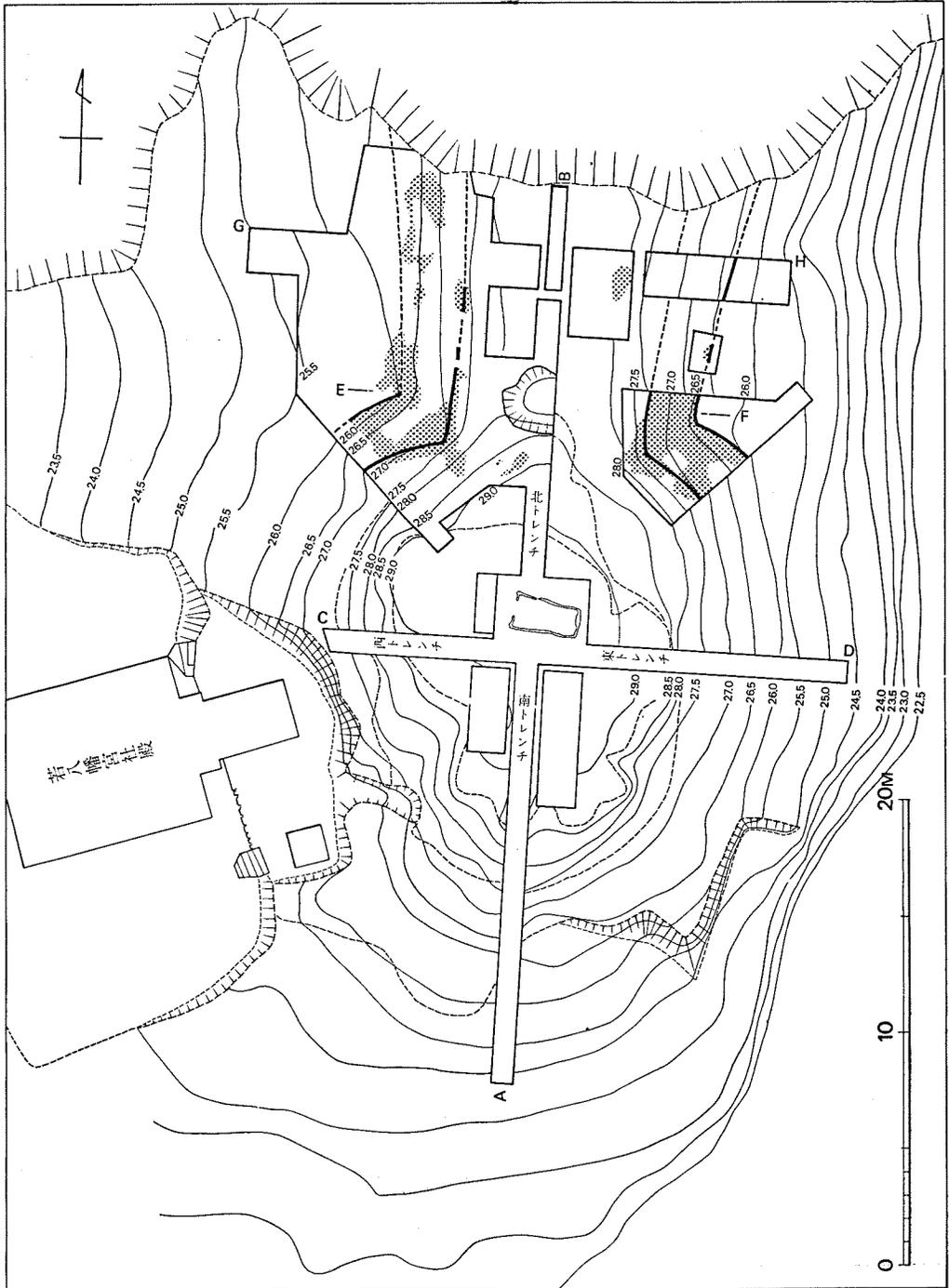
東トレンチ このトレンチでは中央で地山が高く、東西両側に少し傾斜して行く。ここでもやはり地山は赤褐色粘土で、その上に薄く炭化物混入の青灰色粘土が敷かれているが、東側は削られているので、南トレンチのように端を先ず盛土し固めたかどうか不明である。東斜面は表土の下は柔らかい赤褐色の花崗岩バイラン土になっているが、これは地山のような。主体部に近い方は、主体部の上に盛られた土層が明らかである。葺石は見られなかった。

西トレンチ 西側は若八幡宮のため削られているので盛土がどこまであったかトレンチでは

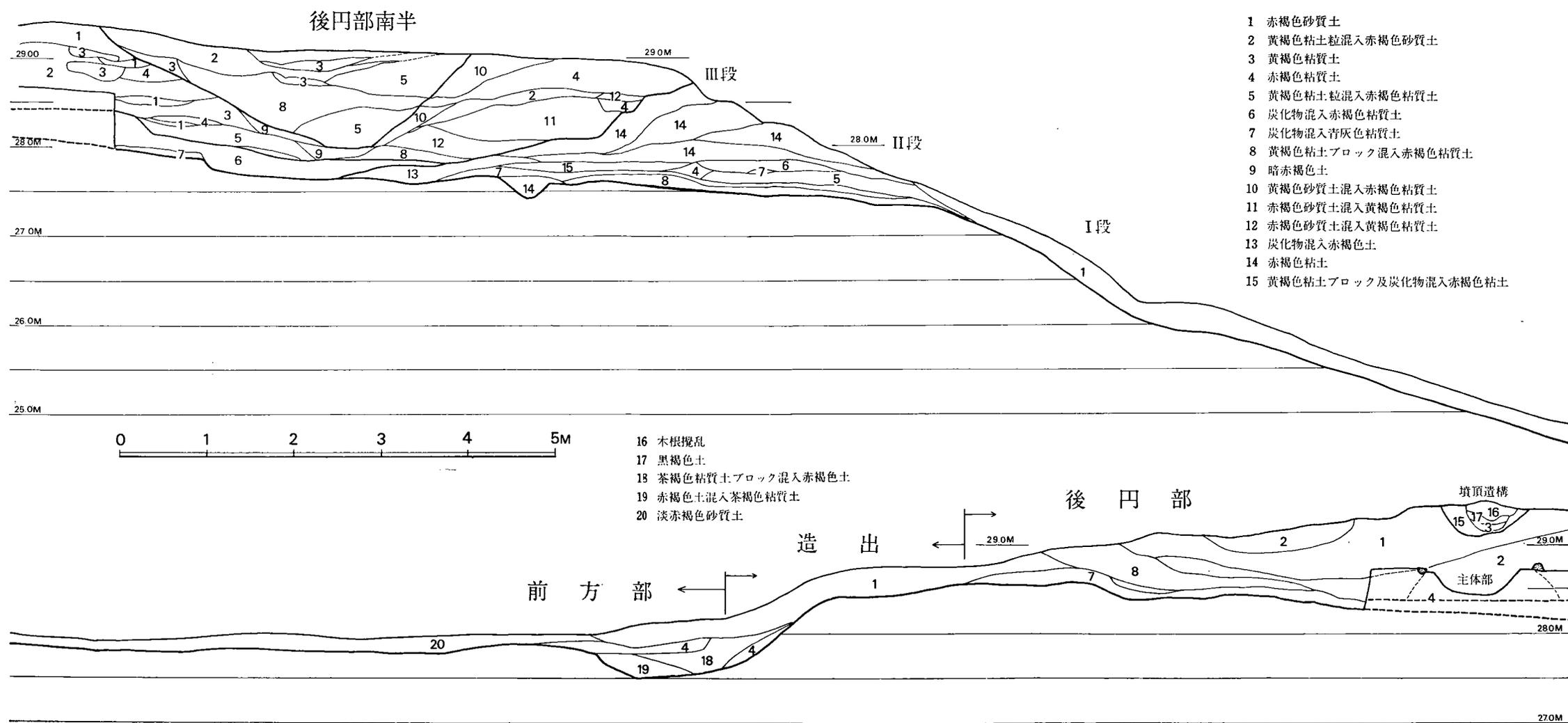


第 6 図 若 八 幡 宮 古 墳 地 形 図 (1/300)

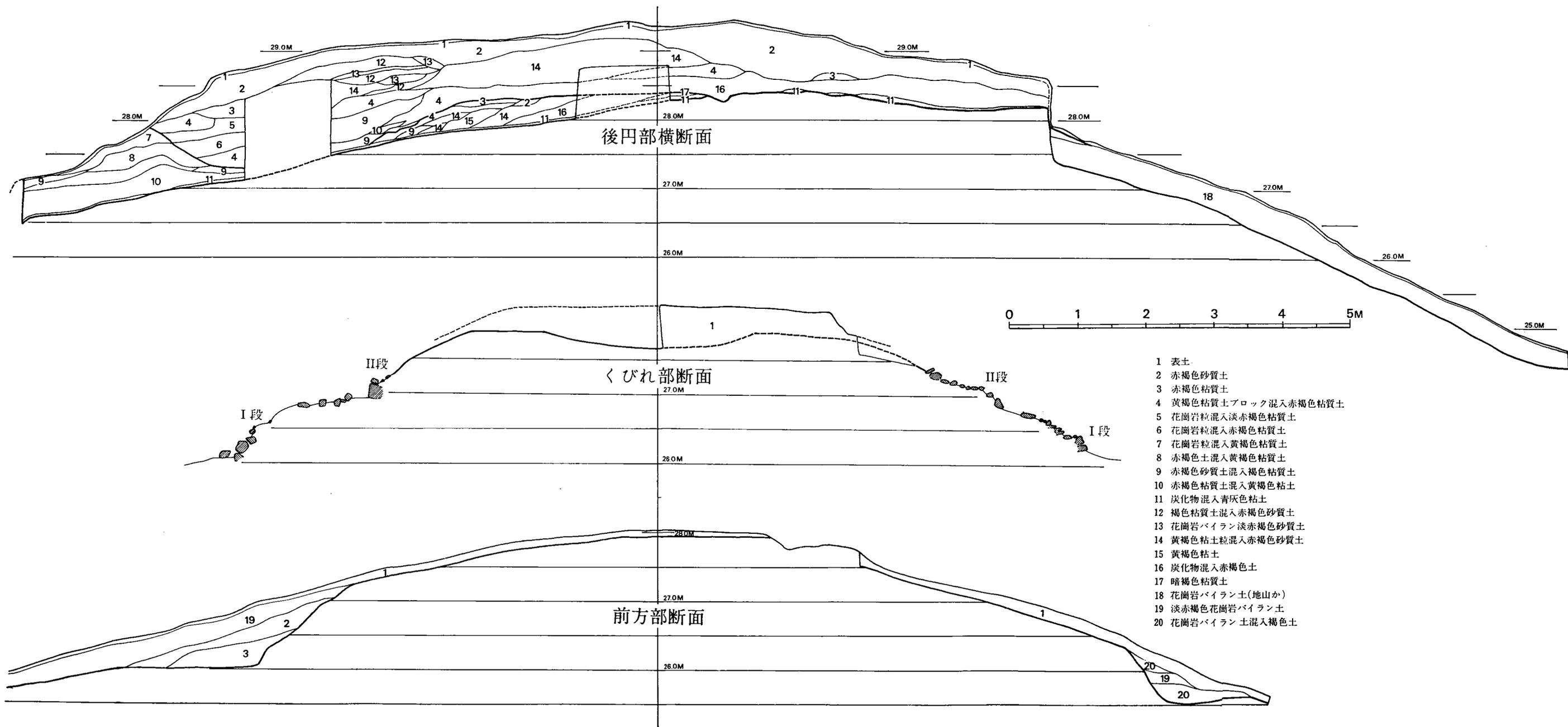
若八幡宮古墳



第7図 若八幡宮古墳墳丘実測図 (1/300)



第 8 図 墳丘主軸断面図 (1/60)



第 9 図 墳 丘 横 断 面 図 (1/60)

確認することができなかった。赤褐色粘土の地山は西側に傾斜し、その上に薄く炭化物混入の青灰色粘土を敷き、西端の斜面に粘質の赤褐色土で固めて堤防状のものを造る。次には、木棺を安置するため東トレンチの地山の高さに合わせて断面台形の棺台を造っている。その後は他のトレンチと同様に主体部上から盛られてきた土層が延びてきている。

北トレンチ このトレンチで墳頂部の遺構と主体部が確認された。前方部は表土下に柔かい淡赤褐色の花崗岩バイラン土と思われる砂質土があるが、この厚さは20cm程で自然に地山の花崗岩バイラン土に変わる。後円部になると地山の高さは最も高いところで28.6mあり、前方部の地山の高さは28.0mであるから少なくとも60cmは削られているようだ。前方部から後円部に移るところには、深さ30cm程の楕円形のくぼみがある。このくぼみは、茶褐色の粘質土がブロックで混入したり、粘質土で埋まっているので、埋もどされているようだ。このくぼみから一気に地山が高くなり後円部に移るが、ここで断面図にもその痕跡が見えるが、平面図とも考え合わせるとここに1つの段を設けていることがわかる。後円部では、くびれ部以外は葦石らしきものが認められないが、この部分にはわずかに葦石と思えるものが残っている。以上のことから後円部には前方部と同方向に突出した造出しを設けていたことが考えられる。造出しは長さ約2m、幅約3m程の方形のものであったようだ。造出しには盛土はなく、地山を整形して直接その上に葦石が並べられていたようである。盛土のあるところからが後円部で、この部分の地山が最も高く、南に傾斜している。またこの部分から地山上に炭化物混入青灰色粘土が敷かれている。ここでは、主体部北側で径50cmほどの範囲に炭化物が特に多く固まっているところがあり、地山もわずかにくぼんでいる。このトレンチでも後円部の中心とは反対に縁の方から盛土していることが明らかである。

主体部は、薄く敷かれた粘土の上に粘土柳や竪穴式石室内に見られるような粘土床を、この主体部では赤褐色粘質土で設けているようだ。主体部が埋納された後、墳頂部には別に墳丘に掘込まれた遺構がある。

以上後円部の各トレンチの観察によると、地山は北トレンチから東トレンチにかけてが最も高かったようで、この部分から見ると後円部は先ず、高さ約3mの地山整形による墳丘が形造られている。しかし、この時点での墳丘上面は、南と西に約10°～15°の割で傾斜している。次に行なわれた作業は地山の上に粘土を敷くことであるが、この時点で炭化物が多く混入していることから墳丘築成とは別な行為が行なわれたようだ。封土が形成されるのは次の段階で、先ず地山の低かった南側から西側に粘土質の土を使用し、堤防状に盛土を行なっている。これで側面的には墳丘は形造られたことになるが俯瞰するとカルデラのように外輪山ができたかっこうになる。次の盛土作業は、問題となるが土層図から判断すると明らかに主体部埋葬後に行なわれている。つまり主体部の埋葬は、完全に形造られた墳丘にあらためて墓壇を掘るものでないことがわかる。埋葬を終って墳丘を整えられた後円部の形状は、墳頂が平坦ないわゆる截頭

円錐形であったものと思われる。墳頂部の平坦部の直径は約13mと推定される。

(2) くびれ部〔図版6～10, 第10・11図〕

くびれ部の調査は、古墳発見当時東くびれ部に3個の石が並んでいたのと、西くびれでは多くの石が散乱していたことで葺石の可能性があったのでこれを確かめることと、墳丘の規模を確かめるに欠かせない部分であるから墳丘の調査では主力をここに置いた。調査は、墳丘主軸線からそれぞれ45°に振った幅1mのトレンチを基準とし、さらに前方部方向へ拡張する方法をとった。

東くびれ部 (第11図) 古墳発見当時露出していた3個の石は2個が失なわれ、抜き痕が残っていただけであったが、調査の結果その続きの列石が現われ、これが2段目基底線にあたる列石であることが判明した。発掘前には地表にほとんど石は散布していなかったが、表土をはぐと無数の石が散乱した状態が出てきた。この中で移動した石と原位置にとどまっている石との区別は容易でなかったが、I段・II段とも基底部に割合大きな石を並べていたので、この石列を確認すると作業もはかどった。この付近は後円部のトレンチ観察によっても、盛土はなく地山整形された墳丘に直接葺石が積まれたことが明らかである。

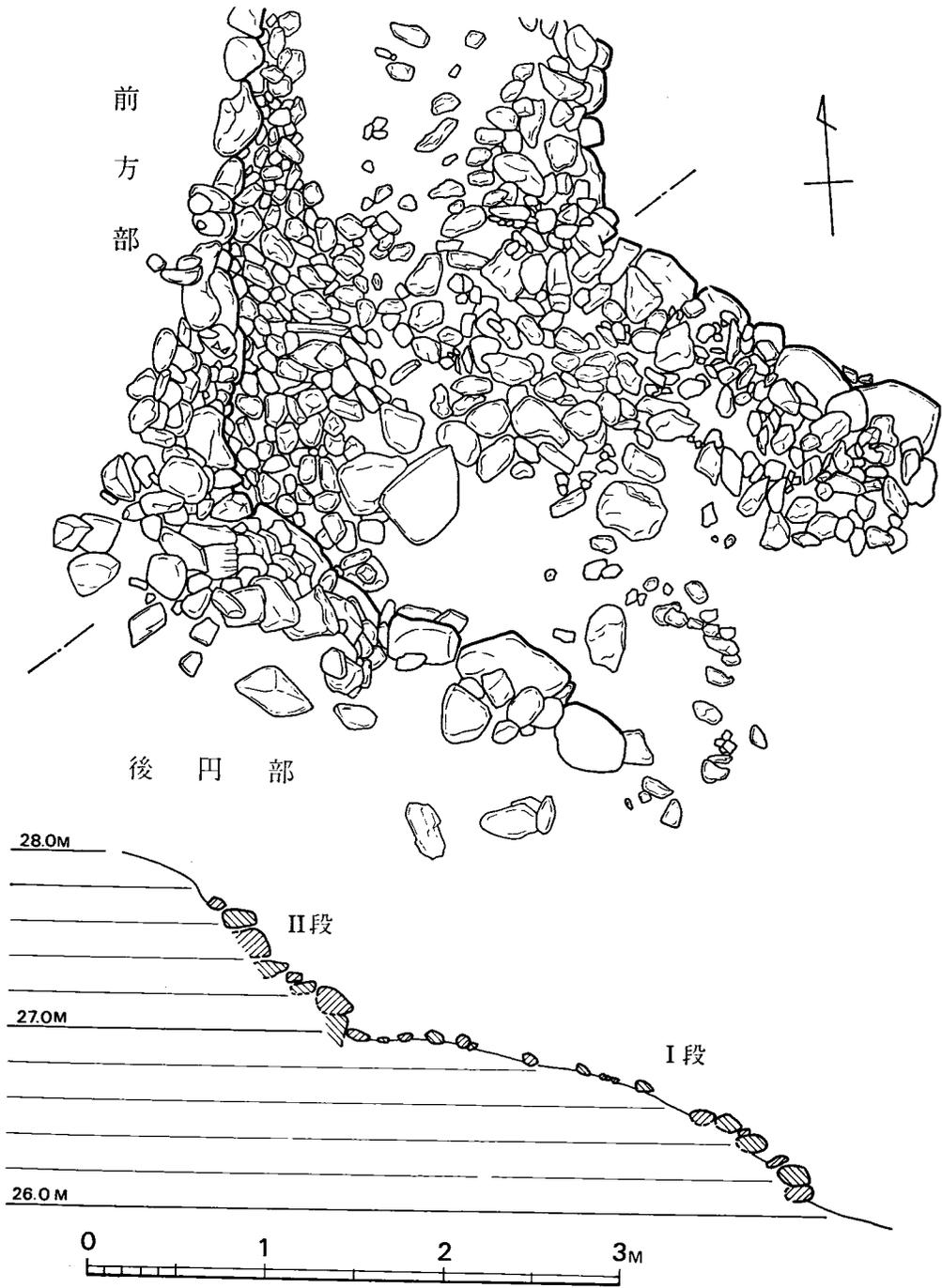
I段、II段とも基礎石は、総じて後円部の方が大きな石を使用し、I段はとくに縦積みしている感が強い。これに対し前方部になると他の葺石とたいして差のない石を使用しているが、基礎の部分には横積に整然と並べている。葺石に使用されている石は、ほとんどが花崗岩で、形も大きさもさまざまなものが使用されている。I段の基礎石の上は、約10段程小石を小口積した後、傾斜もゆるくなってII段の基礎石に至るテラスの部分には小石を敷き並べる程度のものである。テラスの部分は、くびれ部付近のみ三角形に設けられているだけで、とくに前方部になると狭くなっているようだ。II段の基礎石は他の葺石との区別はつくが、I段程整然としたものではない。くびれの角にだけ小口積した葺石が三角形によく残っているが、前方部、あるいは後円部に行くにしたがってほとんど残っていない。

東くびれ部で確認された葺石は、他の部分と比較して最も保存のよいところであったが、これが、前方部あるいは後円部に続かず、この調査区のみで終るようである。しかしこのわずかの葺石によって、前方部あるいは後円部の復原を可能にした。I段、II段ともその基礎石列の高さをくらべると次のようになる。I段は後円部南端25.8m、くびれ部26.1m、前方部北端26.0mとなりくびれ部が最も高く、前方部、後円部にいくにしたがって低くなっている。II段は後円部南端が26.9m、くびれ部が27.0m、前方部北端が27.2mとなり、I段と違って前方部に行くにしたがって高くなっている。

また、葺石の調査中に転石の間から少量の土師器片が発見された。これらは全て壺の胴部の破片であるが、底部付近の破片が含まれており、焼成後に底部穿孔された痕跡をとどめるもの



第10図 西側くびれ部葺石実測図 (1/40)



第11図 東側くびれ部葺石実測図 (1/40)

がある。土器片は墳頂部付近から流れたものらしく、まとまって発見されない。

西くびれ部 幅1mのトレンチに残存しているⅡ段目基礎の西端の石2個が当り、この石列を追求するやりかたで調査を進めたところ、後円部で8個の基礎石が並び、前方部では断続的に6.5mにわたってⅡ段の基礎石が礎認された。Ⅰ段の基礎石は2、3それらしきものが認められたが、確実な墳丘裾線はつかめなかった。Ⅰ段には東くびれ部と同様三角形のテラスを設け、それが前方部と後円部に続いている。後円部Ⅱ段の基礎石は、割合大きな花崗岩が使用されているが、どれも不整形のもので整然としていない。前方部は現存しているものから考えて、横積し割合整っていたものと考えられる。Ⅱ段くびれの角のみ小口積された葺石が墳頂近くまで残っている。東くびれで見られたようにⅡ段基礎石の高さは前方部に行くにしたがって高くなるが、Ⅰ段の場合はわからない。

Ⅰ段基底線がはっきりしなかった中で注意されたのは、くびれの角と思われるところから前方部に沿って長さ1.7m、幅0.7mの範囲に石を敷くというより組まれたかっこうの遺構が発見されたことである(第12図)。時間的にこの遺構を調査する余裕がなかったので未調査のまま埋もどしたが、この北側にも墳丘裾に沿って石蓋土塚状のものが発見されているので、この古墳に関係ある遺構と考える。



第12図 西側くびれ部石組

後円部の調査でつかめなかった後円部の規模は、くびれ部の調査で葺石列を復原することによってその大きさを推定することができた。これは両くびれのⅠ・Ⅱ段の基礎石が描く弧により円の半径を出し、後円部の中心点を求める方法をとったが、葺石の描く弧は一定ではなく、Ⅰ・Ⅱ段あるいは東西で多少違った数値が出る。したがってⅠ・Ⅱ段とも中心を同じくする同心円であるとする仮定しその平均値から復原した。これによると後円部Ⅰ段の径32m、Ⅱ段径27mとなった。径円部径32mとすると、南トレンチで確認できなかった墳丘裾は24mの等高線を通ることになり、くびれ部の標高26mに対しかなり低くなり、不合理な点が多くなっていく。先に述べたように葺石が後円部に行くにしたがって低くなることを考え合わせると納得いくかもしれないが、この復原によるとⅡ段以上が復原できなくなる。したがってくびれ部の葺石からただちに径32mの後円部にすることはできない。

(3) 前方部〔図版6，第9図〕

前方部は、戦後作られたという茶園のため開墾され、その段畑が現在でも残っていたので、墳丘が荒れていることを予想していたが、はたしてくびれ部で確認した葺石列もほとんど前方部には続かなかった。主軸に沿ったトレンチと、これと直交したトレンチにも埋葬施設や原位置のままの葺石は確認できなかった。

G-Hのトレンチの東半では、小石の集積が一部に見られたが葺石としては疑わしく、後世に集められたものであろう。墳丘裾線には、葺石は発見されず、地山の段落で確認することができた。この段落は先に述べた東くびれのⅠ段基礎石線とむすびつく。やはり開墾のためかⅡ段は確認できなかった。

西側では幅2mのトレンチに多くの石が確認されたが、この石は全部移動したものであった。東側のような段落も確実なものが認められないので、裾線確認のため西側は全面調査に踏み切った。しかし結局は確実な葺石列は発見できず、地山の段落にそれらしきところを認めた。これも開墾時につけられた可能性が強い。したがってくびれ部の葺石列からN5.5°Eの方向の主軸線を割り出し、これを中心に東側の墳丘裾線を折り返して復原した。この復原によると、現存する前方部最大幅16m、くびれ部幅13mの前方部で、現在長さ10mが残っているが、破壊される前の地形図によると前方部は約23mはあるようであるから、復原最大幅は約20mになる。

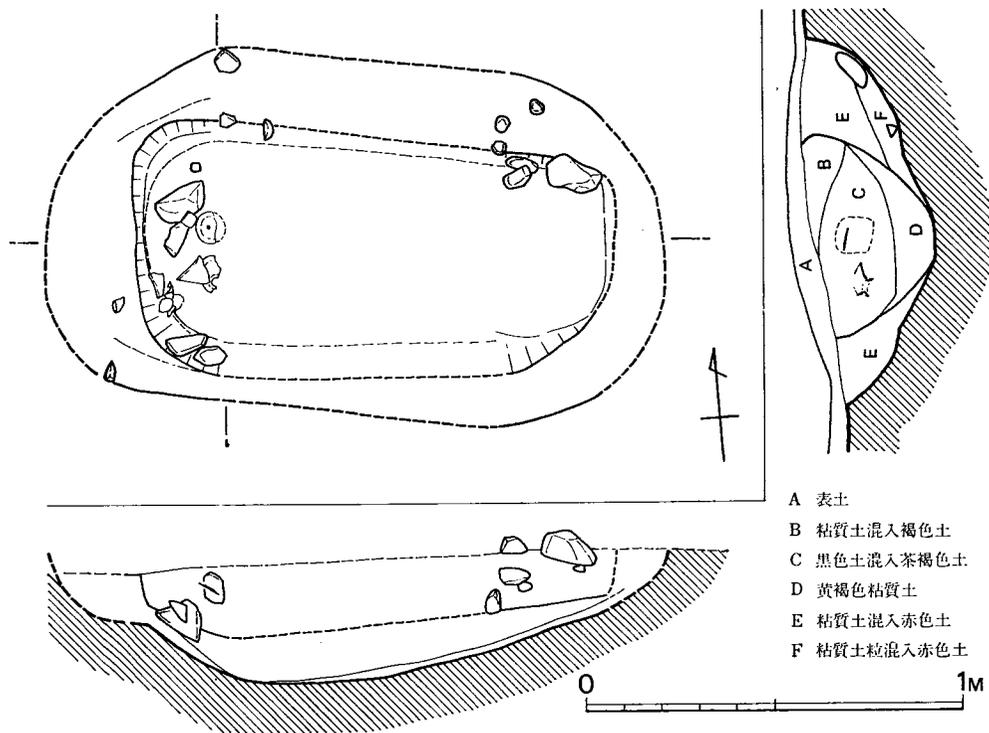
(柳田康雄)

3. 内部構造

(1) 墳頂部遺構〔図版10—2・11・12—1, 第13図〕

北トレンチの前方部寄りで確認されたもので、墳頂部の浅い位置にあったため木の根掘りの際遺構の一部を破壊してしまった。

遺構は、墳丘盛土に掘り込まれた不整長方形の掘方をもつもので、中に木棺らしきものを埋納したらしい。掘方は、長さ約1.65m、幅0.95mの大きさで、最も深いところで0.3mの断面舟形をしたものである。この中に長さ約1.3m、幅0.7mの隅丸長方形に黒色土混入の茶褐色土があり、舟形木棺状のものを埋納したことがうかがえる。またその下部には、黄褐色粘質土があり、粘土床とも考えられる。掘方内は、黄褐色粘質土が混入した赤色土で埋まっている。木棺と思われるその縁付近には小石が多く、中にもはいつている。棺内と思われる西側からは、銅製有孔円盤と土師器が発見された。銅製品の付近はとくに土が黒く変化していた。土師器は細片が多く、器形が判明するのは、小形埴と器台のみであった。これらの遺物は、粘土床と思



第13図 後円部墳頂部遺構実測図 (1/20)

われる黄褐色粘質土に接着しておらず、黒色土混入茶褐色土中にあり、土師器が細片であることから、棺上にあったものが混入した可能性が強い。

この遺構を埋葬遺構とするか否か、調査時から問題であった。遺構が墳頂部から浅く、土師器が細片であることから、主体部埋葬後の祭祀関係の遺構であろうという考えが強かったが、一応墓壇らしき掘方もち、土層断面から木棺らしき痕跡がうかがえるので、埋葬施設と考えたほうがよいようである。埋葬施設とすれば、この直下で発見された舟形木棺直葬の主体部より新しいことになる。この遺構は、主軸N85°Wで墳丘主軸がN5°Eであるから直交することになり、下の主体部がN78°Wであるからほぼ主軸を同じくして重なっている。

(2) 主体部〔図版12—2・13・14, 第 図〕

主体部は、後円部推定中心点から前方部寄り2.5mに、N78°Wの方向でほぼ墳丘主軸と直交した舟形木棺を直葬したものである。表土下70cmで木棺目張りの粘土を確認したもので、墳頂部遺構の直下にあたり、主軸もほぼ同方向である。この主体部は、東西側には中心に位置するが、かなり北側に寄っているため、南トレンチの東西両側に拡張区を設け、粘土目張りが確認された深さまで掘下げてみたが、この深さでは埋葬遺構を発見することができなかった。

墓壇 (第8図) 墳丘の調査で述べたように、主体部は墳丘築造過程で埋納されているので墓壇をもたない。しかし、墳丘をカルデラ状に築造した後に埋葬しているため、広義には墓壇を造ってその中に埋葬したことになる。墓壇は、東西径約13.5m、南北径13mのほぼ円に近いもので、地山が高い北と東側に合わせて築かれるため、墓壇底面は南と西側に傾斜し、北と東側には深さというものがほとんどないが、南側は約1m、西側は0.6mの深さになっている(第9図)。そしてこの墓壇内にやはり北、東の地山の高さにそろえて東西径8.4m、南北径約4mの台状に整地をしている。この時台の高さは南側で30cm、西側で70cmとなっている。木棺はこの整地された台上に安置されるが、明確な棺床を持たず、ただ棺外幅葬の遺物出土状態から木棺を安定させるために赤褐色粘質土で棺床らしきものを一応は造っているようである。

舟形木棺 木棺蓋目張と思われる青灰色粘土帯は、内法長さ2.75m、西幅1.3m、東幅1.0mの長方形にめぐっている。一部西側小口で粘土帯が切れるところがある。北側で切れているのは木根による攪乱のためである。粘土帯の内側は赤褐色砂質土で埋っていたが、棺底全面に赤色顔料が検出できたので埋土と棺床との分離は容易であった。掘り上った棺床は舟底状をしているので割貫式の木棺であったことは確実である。木棺外形は、棺床から見て長さ2.75m、西幅1.2m、東幅0.85mの大きさに復原できる。棺床の断面から判断して外形は自然の丸太のままではなく若干加工しているようであり、原木の大きさは直径1.2m以上の大木であったことがわかる。西側小口板を固定するための粘土の下で木棺主軸方向に走る木目を検出し、粘土が木棺内にあって、粘土枕の役目もはたしていることから、小口板は棺の外側にはみ出るもので

若八幡宮古墳

はなく、内側にはめ込む形式のものであることから木棺の内法も推測することができる。確認した小口板跡の溝の長さが木棺西側の内幅になる。その幅は1.05mで、小口板の厚さは約7cmである。木棺壁の厚さが一様であるとはかぎらないが、小口板の厚さと木板西側外形幅が1:2mで内法が1.05mであるから側壁の厚さが約7cmであることになり、これから木板内法を推測することができる。それによると、長さ2.53m、西幅1.05m、東幅0.7mの広さになる。東側小口の粘土は、木根の攪乱により明瞭ではないが、粘土だけで塞いだ可能性が強い。

木棺の蓋は、銅鏡の上に一部遺存していた。割竹形木棺であれば棺身と同様な形をしていたと思われるが、目張と思われる粘土帯は、木棺外形の痕跡を残す棺床の縁から約10m程離れ、その断面形も割竹形木棺の目張と思えないところがある。棺縁と粘土間の平坦な部分は、明らかに1つの面があり、埋土との分離は容易であったことと、粘土は目張以外に考えられないことから、木棺蓋は割竹形木棺と違い割合平坦なものであったことがわかる。つまり、身と蓋の幅が同じではなく、蓋の幅が広いものである。銅鏡の上で発見された木片の木目は、木棺主軸と同方向であるから、横に渡す蓋ではない。これまで述べてきたように、若八幡宮古墳の木棺は、刳貫式で長さが短かく、幅も一方が狭いことから、舟形石棺に似た棺身の木棺で、平坦な蓋をもつ刳貫式の舟形木棺であることが明らかである。この形式の木棺の類例は、若八幡宮古墳から直線距離で4.5kmのところにある平原遺跡で発見されている。これは42面の鏡が副葬された墓塚の中心にあり、若八幡宮古墳のものと似ている。(註1)。

次に問題になるのは、木棺の材質である。鏡の上下に残っていた3種の木片を九州大学農学部木材理学教室の松本勲教授と堤壽一助教授に鑑定を依頼したところ下記のような鑑定結果が出た。

A (鏡の上一木棺の蓋)

光学顕微鏡による木片の表面観察、およびマイクローム切片観察の結果、九州大学農学部木材理学教室に所蔵のマイクローム切片標本との同定によって

Cryptomeriaceae (スギ科) に分類される

Cryptomeria 属 (スギの属)

に属することがわかった。

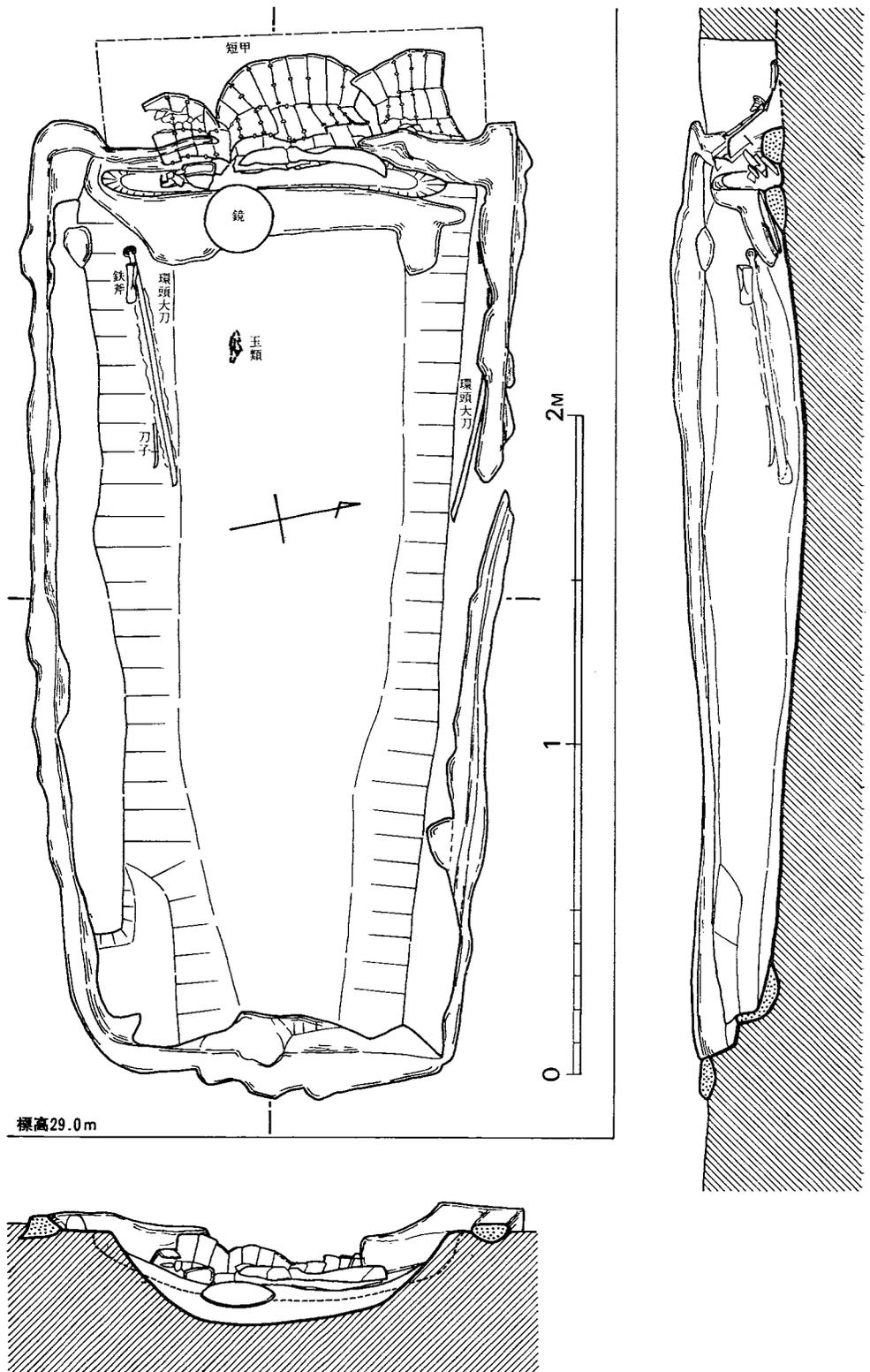
B・C (鏡の下一鏡の箱と棺身)

この2部については、木材片の老化がはなはだしく、マイクローム切片の製作が不可能であるため、光学顕微鏡による木片の表面観察のみを行なったところ、Aと木材解剖学上の大差が認められず、Aと同様に

Cryptomeria 属

であると推定した。

古墳出土木棺の木材鑑定が行なわれたものは少なく、そのほとんどがコウヤマキとされている。



第 14 図 主体部実測図 (1/20)

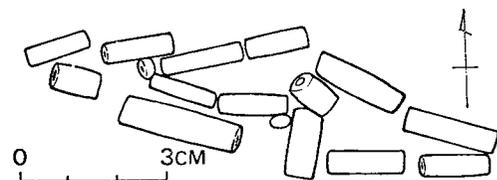
る。最近では、栃木県七回り鏡塚古墳出土の舟形木棺と組合式木棺は、資源科学研究所の山内文氏によるとヒノキの類と鑑定されている（註2）。したがって、精密な検査を行えばコウヤマキと違った材質があるものとする。スギと発表されているものもあるが、勝部明生氏によると科学的な分析によるものでないで除外してある（註3）。

(3) 遺物の配列〔図版13～19、第14～17図〕

棺内 主体部は盗掘を免れているもので、腐食するもの以外は検出された遺物が全てであると思われる。棺内には全面に赤色顔料が検出されたが、副葬品は全て南西隅に発見された。ここに二神二獣鏡と玉類が含まれるので、西側が木棺の状態から考えても頭部であることは確実である。二神二獣鏡は、小口板固定の粘土の上に一部小口溝にかかり鏡面を上にして発見された。鏡の上下には錆の化学変化で残ったと思われる木片があり、上のものは木棺の蓋と判断され、鏡直下の木片は木棺主軸と直交する方向に木目が走るので棺材とは思われない。さらに小口固定の粘土をはさんでその下の木片には、棺主軸と同方向の木目があるのでこれが棺身であろう。すると鏡直下の木片は、鏡箱の一部と考えられる。しかし、鏡上にこれと同方向の木目は検出されなかった。鏡が小口板が立っていたと思われる溝に一部かかっていることから、鏡面を内側にして小口板に立て掛けられていた可能性もある。鏡の位置は被葬者頭部右側になるが、この付近が最も赤色顔料が多く、点々と水銀朱を混えている。

鏡の東側24cmのところには、玉類がある。玉は碧玉製管玉14個とガラス小玉2個である。紐で連結したままのような状態にあることから、人体から離して単独に置かれたものであろう。

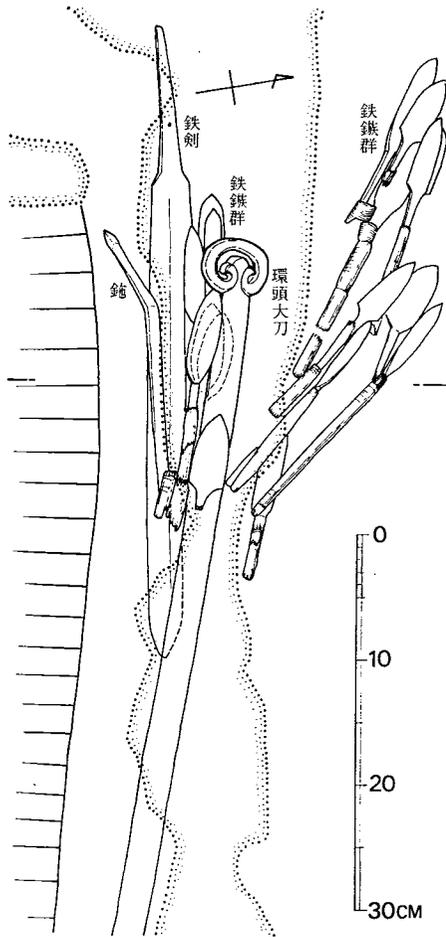
南側の斜面に鉄製環頭大刀1口、刀子1口、鉄斧1個がある。環頭大刀は、切先を東に向け、また切先付近には同方向に切先を向け刀子があり、環頭の方にはやはり刃を東に向けた鉄斧が密着している。環頭大刀の刀身付近には、薄い曲りくねった鉄片が多く、刀身も錆のためかなり剝離してい



第15図 玉類出土状態実測図（2/3）

る。またこれらの鉄器付近から棺縁の粘土目張のところには、炭化物状の黒色の薄い幕があり、棺床も堅くなっている。これは木棺以外に腐食する革製品などのものがあつたのであろう。これが革製品であれば盾である可能性が高い。

棺外 棺外の副葬品は、北側と西側の2群に分けられる。北側は、粘土の下にあり、棺内の調査で鉄製環頭大刀と鉈の一部が見えていた。粘土を除去すると、鉄製環頭大刀1口、鉄剣1口、鉄鏃19本、鉈1本が東になって発見された。環頭大刀は、棺内と同様切先を東に向け、



標高28.80m

これを中心に同じ方向に鉄剣があり、鉄鏃束と鈍
が先を反対に西に向けてそろえられている。鉄鏃
のうち9本は、下にずり落ちており、第16図の断
面のように鉄鏃のある面が棺床の断面形をあらわ
しているように思える。

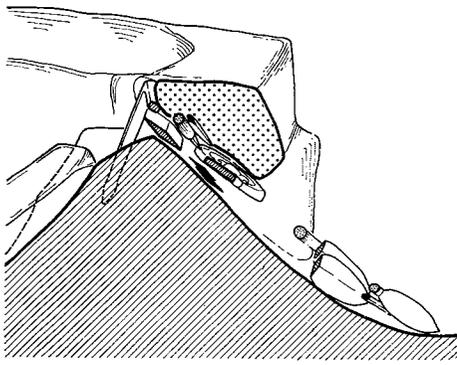
木棺西側小口の外には短甲が置かれていた。短
甲は、堅矧板革綴系のもので、前面を左右に広げ
展開した形で木棺小口板の外側に立ち掛けてい
る。棺外に副葬する場合も別に掘方はなく、主体
部埋葬と同様である。しかし、短甲の下に不規則
に走る木目が付着していることからなんらかの施
設があったか、あるいは別の副葬品があったもの
と思われる。

(柳田康雄)

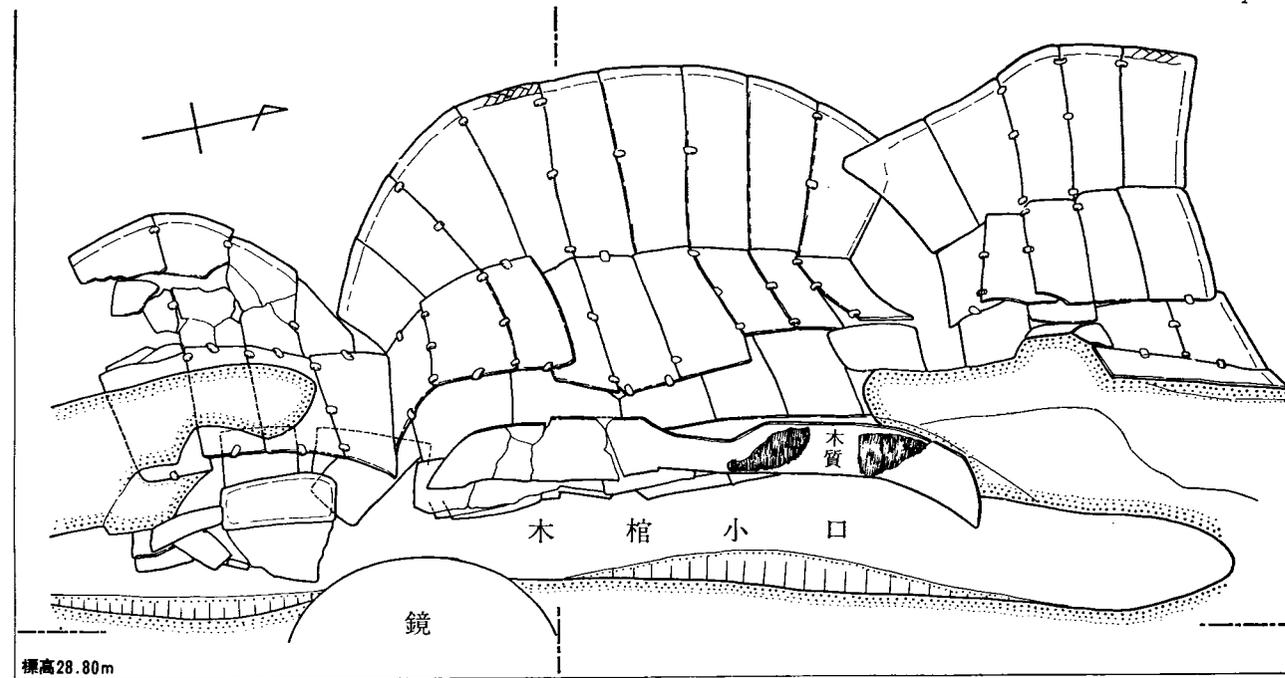
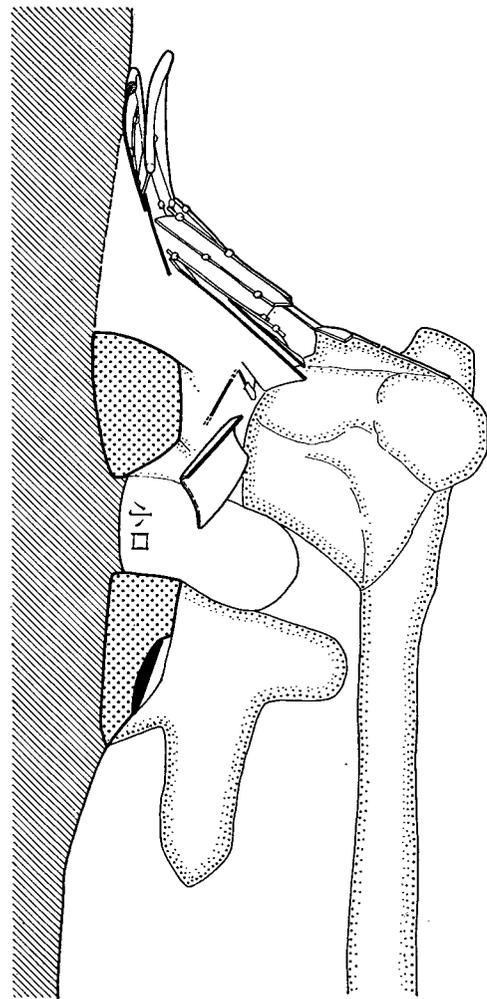
註1 原田大六「福岡県糸島郡平原弥生古墳調査概
報」(『福岡県文化財調査報告書』33, 1965)

註2 大和久震平「七回り鏡塚とその出土遺物」
(『月刊文化財』1969.9)

註3 勝部明生「前期古墳における木棺の観察」
(『関西大学考古学研究年報』1, 1967)

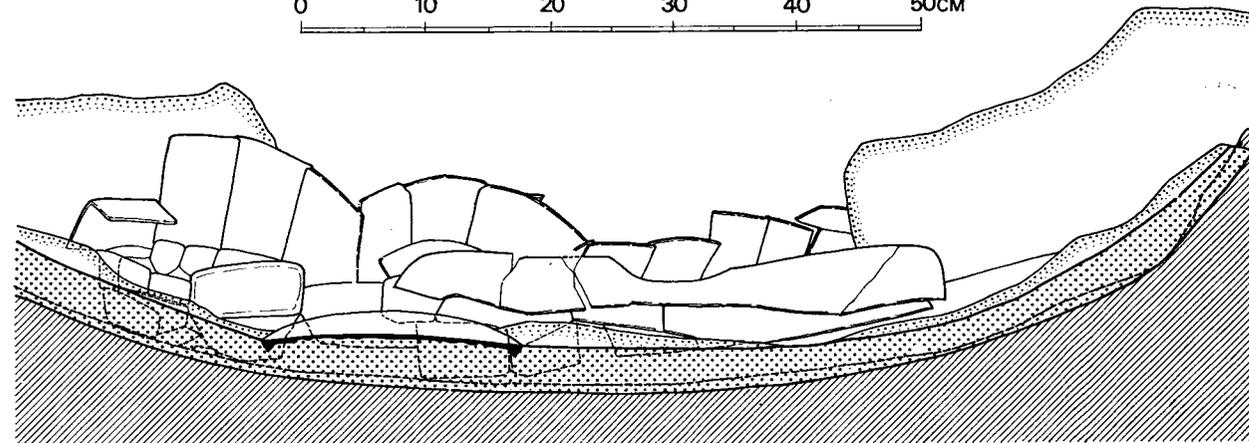


第16図 棺外北側鉄器出土状態実測図(1/6)



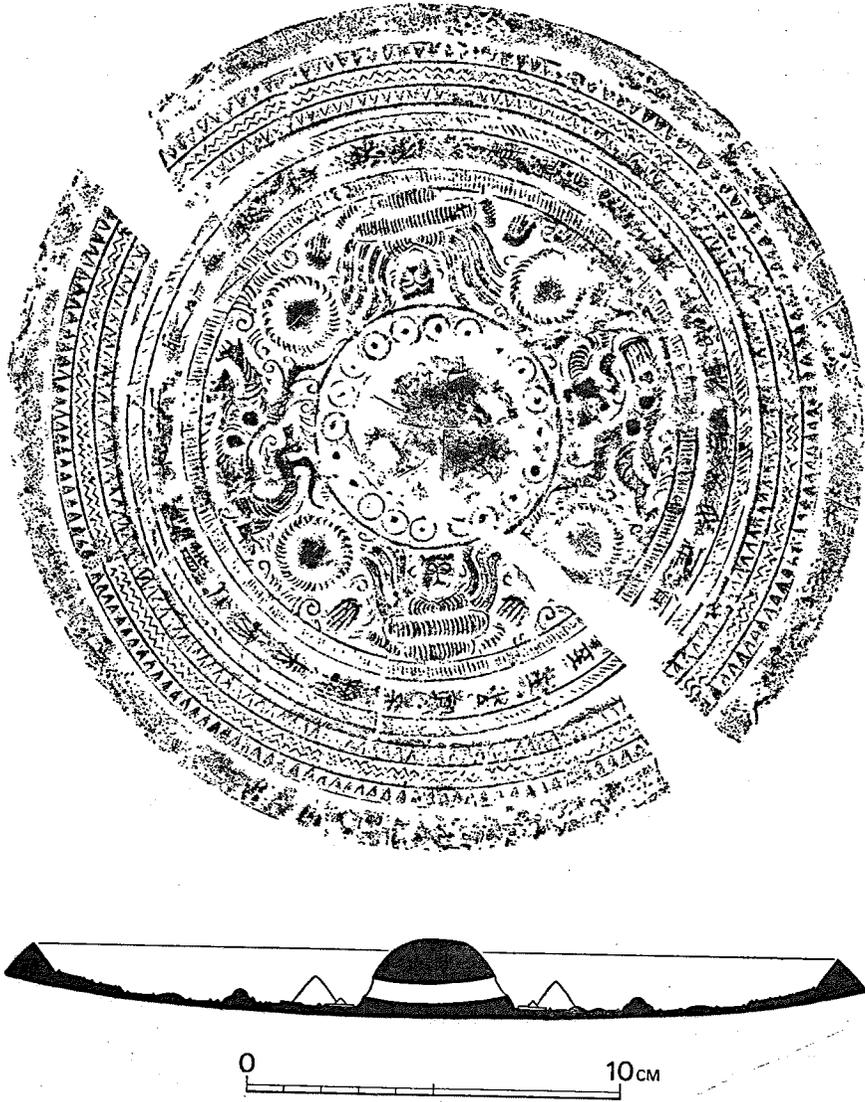
標高28.80m

0 10 20 30 40 50cm



第17圖 短甲出土狀態實測圖 (1/6)

4. 遺物



第18圖 □圓作二神二獸鏡拓影 (1/2)

若八幡宮古墳

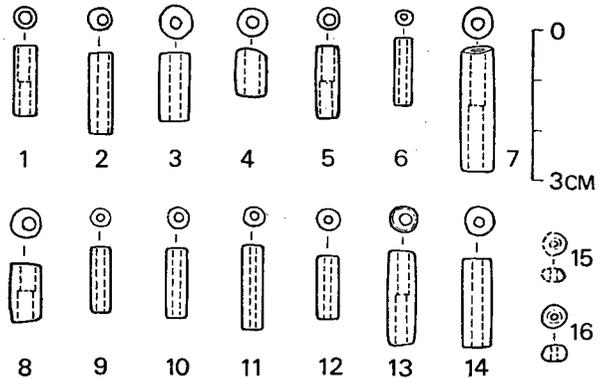
□**圖作二神二獸鏡** (図版20-1、第18図) 径約22.5cmの青銅鏡であるが、数の亀裂を無生じて歪み全面に緑青をふいているので、正確な面径と反りは測定できない。19個の素環座の小乳がめぐる鈕座をもつ、直径42.8mm、高さ18.9mmの円鈕を中心として、内区は4個の捩形座の乳で4等分し、神獸各1を交互に放射状に配したものであり、神像は両肩の翼が太くて長く、身体は形式化して大きく横長で、獸形は左向き横顔の龍虎と思われる。また神像の両側には、各1の松葉状の図文と各空間を渦文で埋めている。内区を区画する銘帯の両側に櫛齒文帯がめぐるが、外側の櫛齒は左にねじれている。銘帯は蒲鋒形に盛り上り、右廻りに約32字からなる銘文を刻んでいる。銘文は、「□**圖作竟**□□□□父母荆位至王公宜子孫長保二親剛古市買□□□□」と判読できる。外区は、線鋸齒文帯、複線波文帯、鋸齒文帯の順にめぐらして三角縁に続いている。

鏡は全体に極めて薄手で、内区1.75mm、外区3.0mm、縁8.6mm、乳高8.0mmとなっている。

鈕孔は鑄放しのままで、不整楕円形をしている。普通外区の鋸齒文帯や波文帯にも仕上の研磨が行なわれるが、この場合三角縁の内外面と鏡面にだけ研磨が行なわれている。また鏡面縁の角は、わずかに面取りされて角が落されている。鏡は出土状態から木箱に納められていた可能性があるが、縁付近には多くの細目の布片が付着していることから布でくるんであったことがわかる。

管玉 (図版20-2、第19図)

銅鏡の東側から出土した14個である。これらは質と大きさによって3種にわかれる。質は淡青色のもろいもの(3・11・12・14)と他の碧玉製品にわかれ、さらに碧玉製の中で細形(1・2・5・6・9・10)と太形(4・7・8・13)にわかれる。細形ものは灰白色で太形は淡青色をしている。穿孔は両面からが多いが、質が悪いものは不明である。大きさ

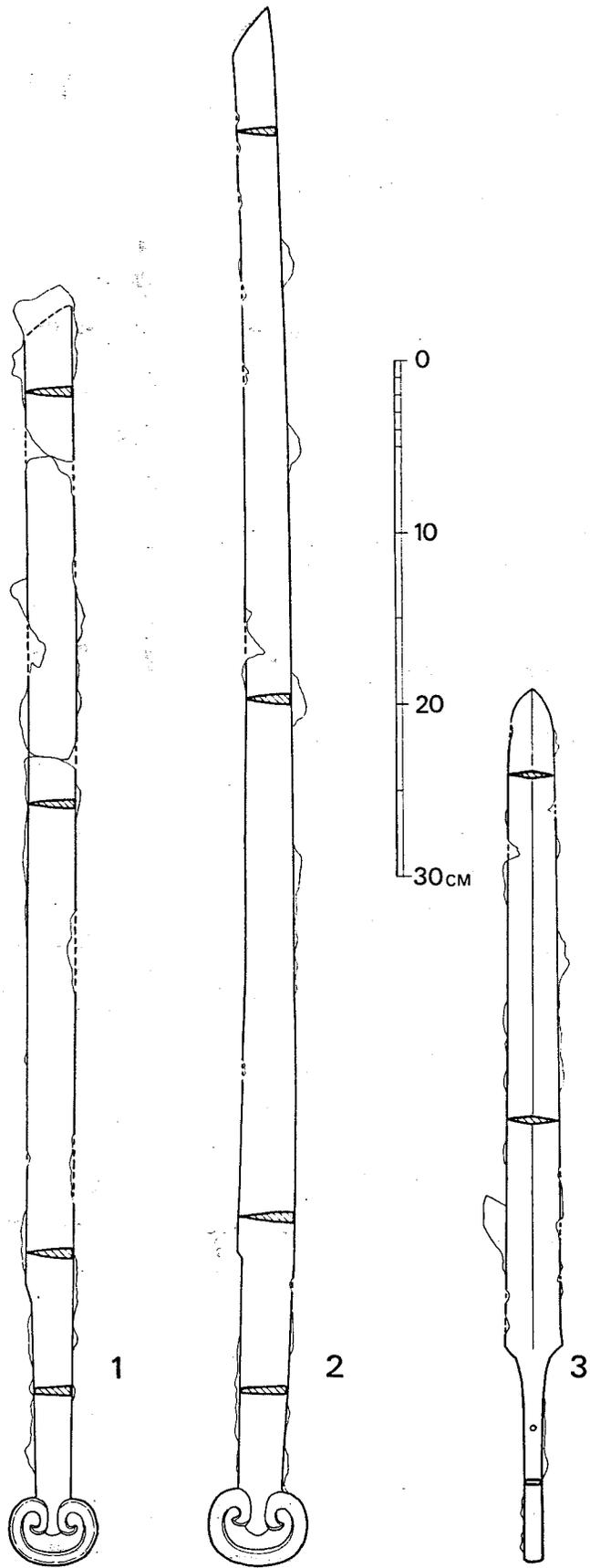


第19図 玉類実測図 (2/3)

表1 玉類計測表 (単位: 耗)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
長さ	14.4	16.7	14	9.8	15.0	14.2	25.3	12.1	13.4	14.3	17	13	19.2	18	3.0	3.6
径	4.8	4.7	6	6.3	4.3	3.5	6.5	6.1	4.1	4.3	3.5	3.5	5.8	6	5.0	4.7
孔径	2.2	3.0	2	3.1	2.3	1.1	2.9	3.1	1.3	1.6	1	1	2.6	2	1.9	1.2

註 1~14管玉, 15~16小玉, 下は推定



第 20 图

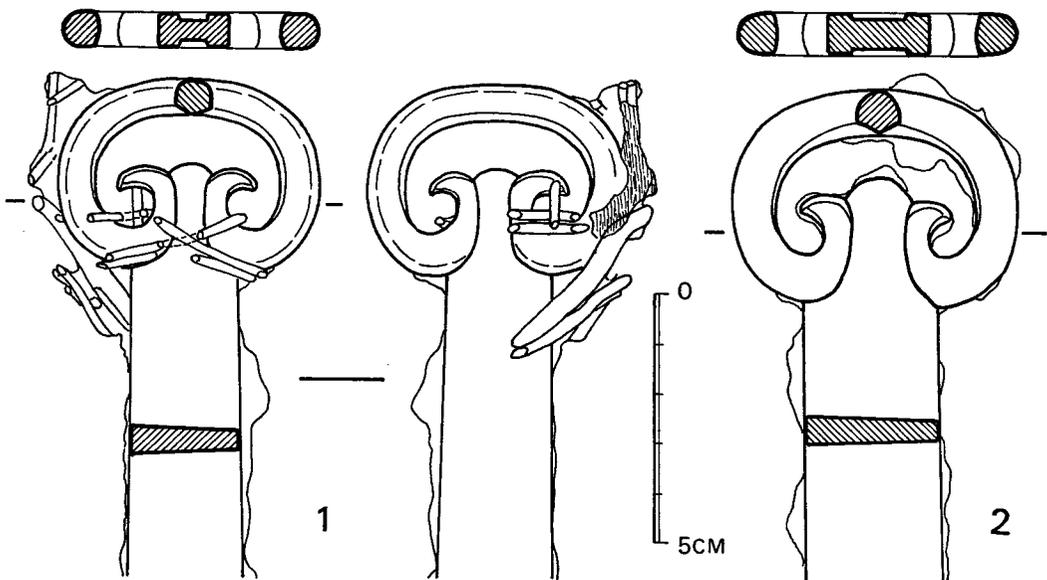
鉄製環頭大刀・鉄劍実測图 (1/4)

の別なく中ふくらみぎみのものもある(4・5・7・8・13)。質が悪くもろいものは、正式な鑑定は行っていないので不明であるが、ガラスである可能性がある。平原遺跡(註1)や須玖岡本遺跡(註2)その他(註3)で風化してもろくなったガラス製管玉が発見されているがこれらに類するものであろう。

小玉(図版20-2、第19図15・16) コバルト色のガラス製品である。一方は半分しか発見できなかった。

鉄製環頭大刀(図版21-1、第20・21図) 1は棺内南側出土のもので全長約73cmあり、長さ11.3cmの茎の先に長径5.2cm、短径3.8cmの環頭をつけている。茎は背が厚く断面梯形をしている。環頭は茎より厚く、環が中に巻き込んで2つの突起をつくっている。環は内側に陵をもつ。また環頭には紐状のものが巻きついているが何であるか不明。刀身は錆がひどく剝離しているところが多く、折れて分離していたため反り具合は不明であるが、わずかに内反りのきみがある。切先付近は布の付着がとくに多く3種類の布目が見られる。木質の付着はない。

2は棺外北側出土のもので、全長90.3cmの内反りのものである。長さ13.2cmの茎に長径5.2cm、短径4.2cmの環頭をつけている。環頭の形は1とまったく同様であるが、錆のため形がくずれているところもある。刀身は割合保存がよく、背もはっきりしている。幅は先の方がかなり細くなっている。背などに刀身に直接布が付着している。木質は鉄鏃の矢柄が付着しているだけで、鞘などの木質は付着していない。

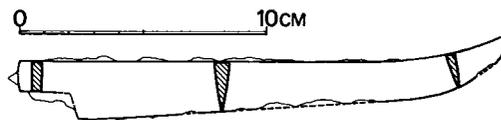


第21図 鉄製環頭大刀部分実測図(2/3)

若八幡宮古墳

鉄 剣 (図版21-1、第20図3) 棺外北側で発見された全長50.7cmのものである。剣身は厚さ6mmで鑄があり、幅が2段の角をつけて半減し細身の茎にいたる。長さ11.8cmの茎には目釘孔が1つあるが、木質は認められず、布目が著しい。剣身も同様である。

鉄刀子 (図版21-3、第22図) 棺内南側から鉄製環頭大刀と共に発見されたもので、全長19.7cmの異形のものである。刃幅は先にゆくにしたがって狭くなり切先付近が大きく反っている。茎付近は鑄のため明らかでないが、短い茎である。



第22図 鉄刀子実測図 (1/3)

鉄 鏃 (図版22-1、第23図) 棺外北側から鉄製環頭大刀と共に19本発見された。有茎柳葉式に属し、形状により4群にわかれる。(1)流線形の身から内湾して茎にいたり、わずかに鑄があるもの(1~6)。(2)割合扁平で身の茎よりに段をつけるもの(7~9)。(3)形どおりの柳葉形のもの(10~11)。(4)扁平な身の茎よりに1孔があり2つの段を有するもの(12~15)。(1)が最も多く9本あり、身の中央付近がややくびれるものがあり銅鏃に似ている。鑄で不明であるが刃近くに対象的に小孔があるものがあるのでこの類は全部あるかもしれない。(2)は3本で、長さのわりに幅が広いものと狭いものがある。(3)は2本で鑄で明らかでないが(2)の類になる可能性もある。(4)は5本あり、全部中心に1孔をもつ。

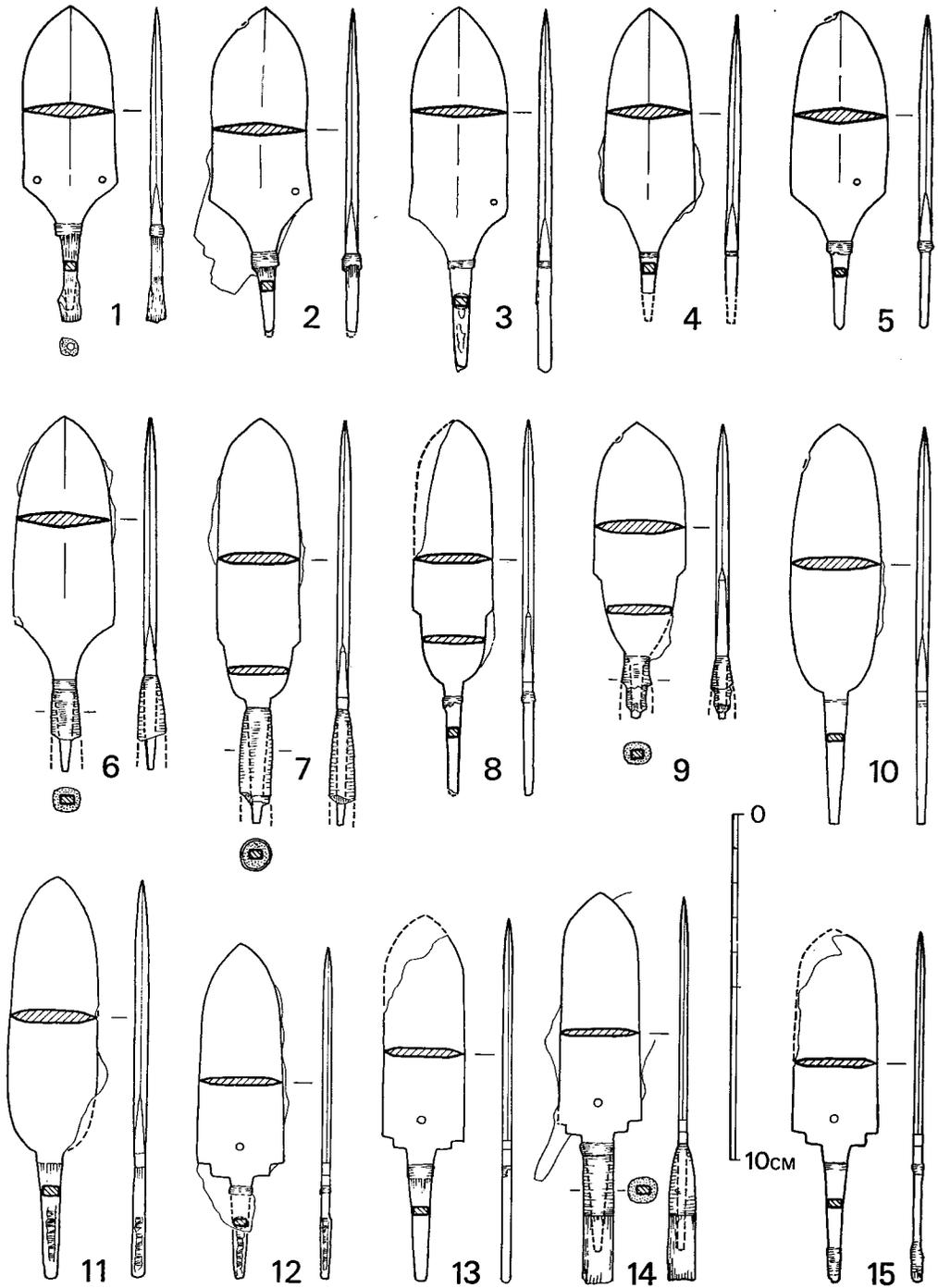
茎は長短はあるが、全部断面長方形のものである。茎には先ず、糸を巻きつけたもの(11、12)があり、その後矢柄をはめて根元に桜と思われる樹皮を巻いている。

鉄 鉈 (図版22-2、第24図1) 長さ約30cmあり、中ほどで大きく屈曲している。この屈曲は当初からとは思えない。刃先は三角形にふくらみ、表に鑄をもつ。鉄身の幅と厚さは、ほぼ一定であるが、尾端が尖り鉤状に曲っている。この類例は、大阪府富田林真名井古墳で2例出土している(註4)。真名井古墳例は、尾端が柄から出ていたらしいが、本例は鉄身にまったく木質の痕跡が認められないので、この点は明らかでない。

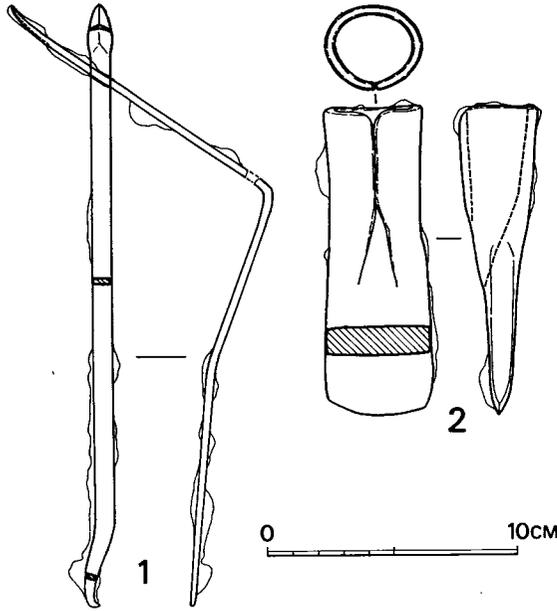
鉄 斧 (図版22-2、第24図2) 棺内南側で発見されたものである。長さ12.3cm、刃先幅4cmの大きさで、鉄板を折り曲げた袋部を設けた通例のものである。袋部の外径3.8cm、内径3.1cmで袋部から刃にかけてわずかに肩をもつものである。袋の中には木質はみとめられない。

銅製有孔円盤 (図版11-2、第25図) 後円部墳頂部遺構から発見されたもので、酸化がひどくかろうじて形をとどめている。直径7.6cmの薄い円盤の中心に径2mmの孔があり、中心が最も厚く2つの段を有して縁が一番薄くなっている。中心の厚さが約2mm、縁が約1mmで扁平なものである。実測図上面の縁には赤色顔料が付着している。用途が明らかでないが、形状は前期古墳出土の紡錘車形石製品に類似している。

土師器 (図版22-3、第26図) 土師器は、後円墳頂部遺構内とくびれ部で発見された。く



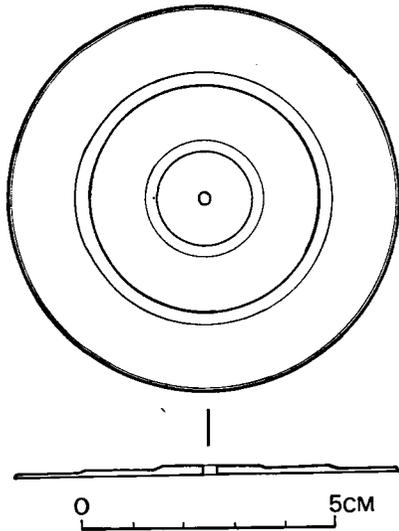
第 23 図 鉄 鏃 実 測 図 (1/2)



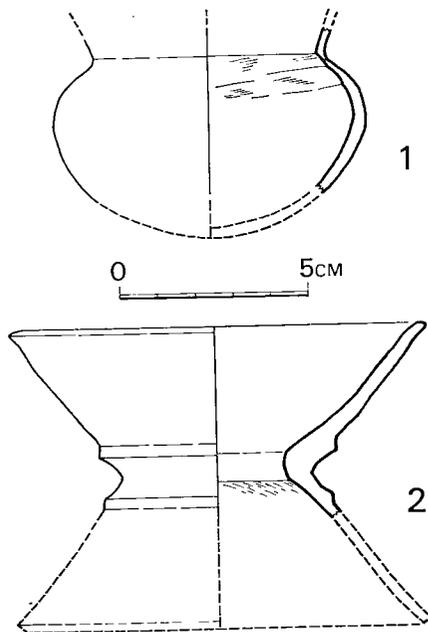
第 24 図 鉄 鉈・鉄 斧 実 測 図 (1/3)

びれ部で発見された土器片は、壺の胴部ばかりで底部に焼成後の穿孔が見られるだけで他に特長ある破片はなかった。破片から器形を復原できるのは墳頂部遺構から発見された第 26 図の 2 個のみである。1 は小片であるが、小形丸底埴としての器形がある程度うかがえる。口縁は大きく広がり、さほど高くはないと思われる。赤褐色のもろい焼成で、外面下部はハケの横などで調整が行なわれている。胴部内面はヘラ削りである。2 は鼓形器台の小形品で、1 とセットになるものと思われる。褐色の焼成のよいもので、外面は横などで調整が行なわれている。内面の上部は横などで調整であるが、下部は削りが見られる。とくに器

台は小形で、奈良県東大寺山古墳出土の石製品(註5)のように義器的な遺物のようである。



第 25 図 銅製有孔円盤実測図 (2/3)



第 26 図 土 師 器 実 測 図 (1/2)

短甲 (図版19、第16図) 短甲は堅矧板革綴系に属する(註6)が、整理、復原のための時間的余裕がなかったため、シリコン樹脂と石膏で固めて取り上げたままであるから、詳細を記述することができない。出土状態から観察すると長方形の鉄板を横2つ、縦3つの穿孔をし、革紐で綴りあわせた短甲である。背面には堅上板を2枚使用し、その下3段重ねで27枚の長方形板を組み合わせている。最上段の横板には中央にくり込みがある。前面の最上段には、左右に横板を使用するが、その下は背面と同様に長方形板を3段重ねにし、左右引合せの縦板がない。前面には長方形板が左右合計30枚使用されている。短甲内面には布目が多く見られ、上下縁および前面縁には革紐の縁どりがある。この種の短甲は、福岡県稲童15号墳(註7)、佐賀県熊本山古墳(註8)、奈良県新沢千塚500号墳(註9)、同上殿古墳(註10)、滋賀県瓢箪山古墳(註11)などがある。(柳田康雄)

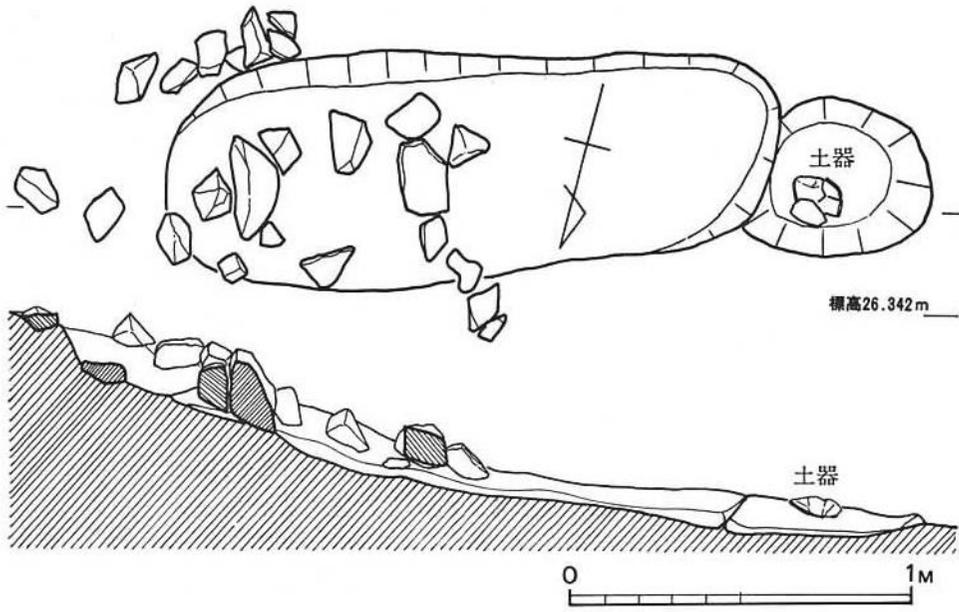
- 註1 原田大六「伊都国王墓展」(夕刊フクニチ新聞社, 1969)
- 2 中山平次郎「明治32年に於ける須玖岡本発掘物の出土状態」(『考古学雑誌』12—10, 1922)
- 3 福岡県筑紫郡春日町の甕棺墓と土塚墓から出土したと伝えられる2群のガラス製管玉が、福岡市立三筑中学に昭和35年当時保管されていた。
- 4 北野耕平「河内における古墳の調査—第3章富田林真名井古墳」(『大阪大学文学部国史研究室研究報告』1, 1964)
- 5 金関恕「東大寺山古墳の発掘調査」(『大和文化研究』7—11)
- 6 野上丈助「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」(『考古学研究』)14—4, 1968)
- 7 小田富士雄・石松好雄「九州古墳発見甲冑地名表」(『九州考古学』23, 1964)
- 8 小田富士雄「熊本山船型石棺墓—遺物」(『佐賀県文化財調査報告書』16, 1967)
- 9 小島俊次「奈良県の考古学」(吉川弘文館, 1965)
- 10 伊達宗泰「和爾上殿古墳」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書』23, 1966)
- 11 梅原末治「安土瓢箪山古墳」(『滋賀県史蹟調査報告』7, 1938)

5. その他の遺構と遺物

本古墳の前方部ほぼ中央部付近、葦石の裾直下に不整楕円形と円形が切り合っている土塚が発見された。その新旧関係は遺構の切り合いから、円形が古く、不整楕円形が新しくなると思われる。遺構は古墳を築くおりに大部分カットされ地山に切り込んだ部分が残った。

この遺構の時期は古墳より古くなることは疑うまでもない。そのほかに遺構の確認はなされてなく、遺物に関しては全部で魚箱一杯分の量であった。

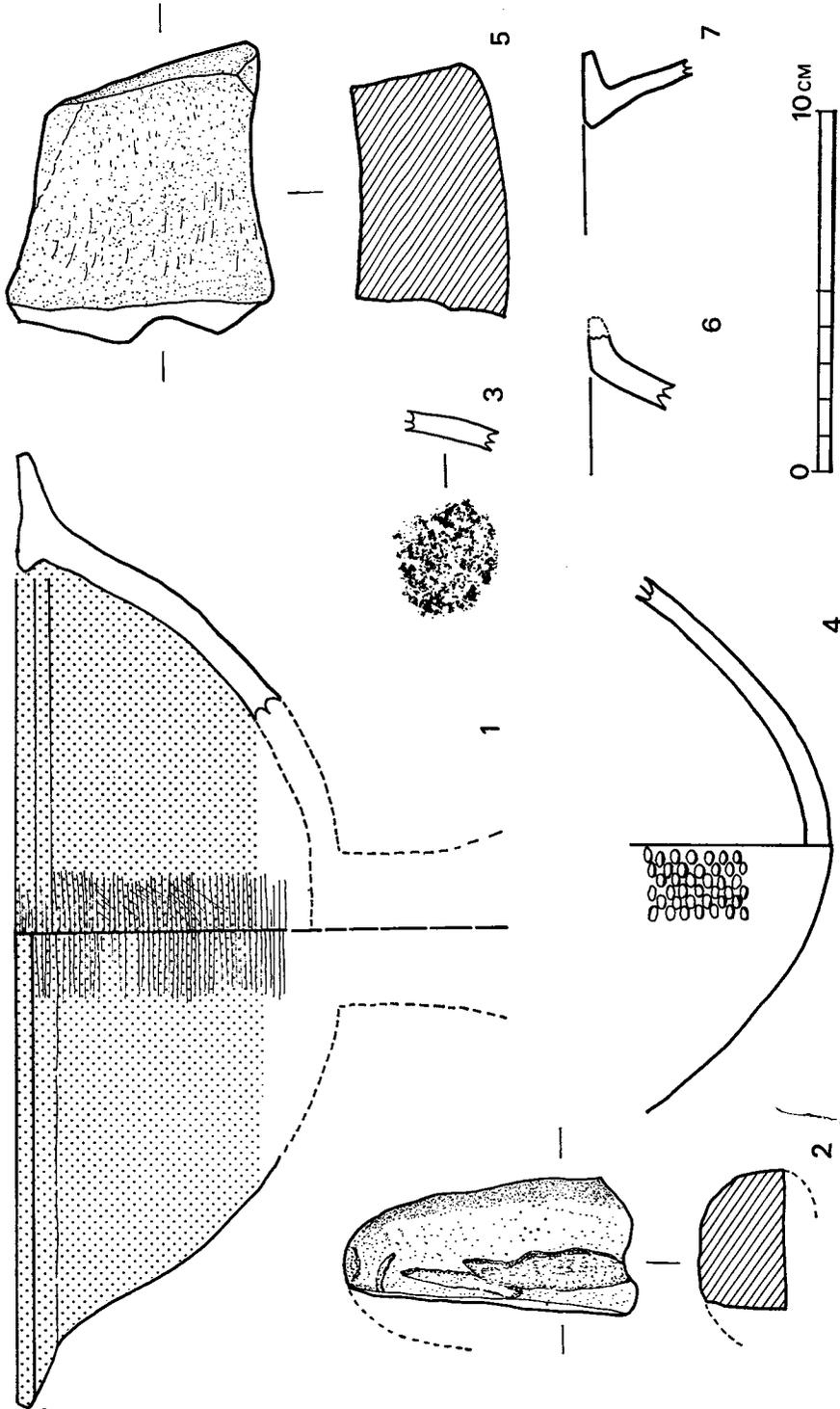
土塚(第27図)不整楕円形で長軸をN75°Eで、長さ180cm、幅70cmで、深さは一定で10cm前後である。地山の傾斜に沿って、遺構の大部分は失なわれ、地山に切込んだ部分が残ったものである。堆積土は暗褐色粘質土で、円形土塚を切っており、遺物の出土はみられず時期は不



第 27 図 土 塚 状 遺 構 実 測 図



第 28 図 土 塚 状 遺 構



第28図 土塚及び墳丘出土遺物(1/2)

明である。円形土坑は、堆積土は黒褐色粘質土で長さ48cm、幅47cm、深さ10cmで、断面は摺鉢状を呈している。ほぼ中央部に縄文早期の押型文土器の底部が埋設された状態で出土した。時期は遺構の切り合いで、不整楕円形土坑よりも古く、縄文早期に比定できるであろう。

遺物（第29図） 土坑及びその他の地区で出土したもの、出土量は少ない。

1は後円部の東トレンチで出土したもので、色調は黄褐色で、胎土に細粒砂を含み、焼成は良好で、器壁は1cmで、口唇部は平坦で口縁部はやや外反し、器面表は刷毛にて横なで、内面は刷毛の横なで、胴部は斜行縦位のなでにて調整している。口径は26cm、残高7cmで、弥生中期後葉の特徴を有する高杯で、表裏に丹塗が見られる。

2は前方部の西側トレンチから出土した磨製石斧の残片で、石質は玄武岩である。

3は主体部の覆土の中より出土した縄文早期の押型文土器の破片で、文様は楕円文で粒の小さないいわゆる穀粒文である。その単位及び原体巾は、拓本で示す通り、器面の剝離がひどく判読できない、楕円押型文であることがやっとなつかめる程度であった。色調は暗褐色で、胎土に小砂を含み、焼成は粗雑である。胎土に繊維の混入は見られない。

4は円形土坑から出土したもので、底部は丸底を呈しており、これも器面が剝離しており、拓本でとって見たが、あまりにもはっきりしないので実測図で示す。楕円文は3よりも若干大きく5mmで、ほぼ円形をなす。施文方向は横位の全面施文で、器形は砲弾形をなすものと思われる。色調は灰褐色、胎土に小砂を含み、焼成は粗雑で、器面の荒れ方はひどく、内面はうすい条痕が見られ、調整は表面よりよい。施文原体及び楕円文の単位はつかむことはできなかった。

5は砥石の残片で、東くびれ部で出土した。石質は玄武岩で、側縁まで研磨がほどこされており、よく使用されていたことが理解できる。

6・7は口縁部破片で、後円部西側トレンチで発見されたもので、口縁部の形態から弥生中期の甕形土器の破片である。色調は縄色で、胎土に細粒砂が混入し、焼成は粗雑である。表面は剝離して荒れている。

縄文早期の押型文土器の出土は、この地域では珍しく、前原町で一点楕円押型文が出土している。その後、飯氏鏡原遺跡で二点ほど押型文土器の出土が見られている。残片的な資料であるが、出土例は増加しつつある。しかしながら、縄文期の海進海退と、沖積平野及び海岸平野の形成期に包含層の流出が見られるため、遺跡の発見例は少ない。

このことから、縄文期には北九州に於けるオープンサイトを見い出すことができない要因ともなっている。そのためにも洞穴岩陰遺跡の発掘によって、層位的に土器編年をおさえることが重要である。弥生期の遺跡と比較して、あまりにも縄文期の遺跡が少ないのは、海進海退とともに人口差或いは食料の再生産等の要因によって規制されていることを物語っている。

(副島邦弘)

6. 考 察

(1) 墳 丘 の 復 原

墳丘築成（第30～32図）若八幡宮古墳は、付近の前方後円墳中最も立地条件にすぐれていることは前にも述べたが、墳丘築造にあたっては、良い条件にある丘陵の尾根上が選ばれている。

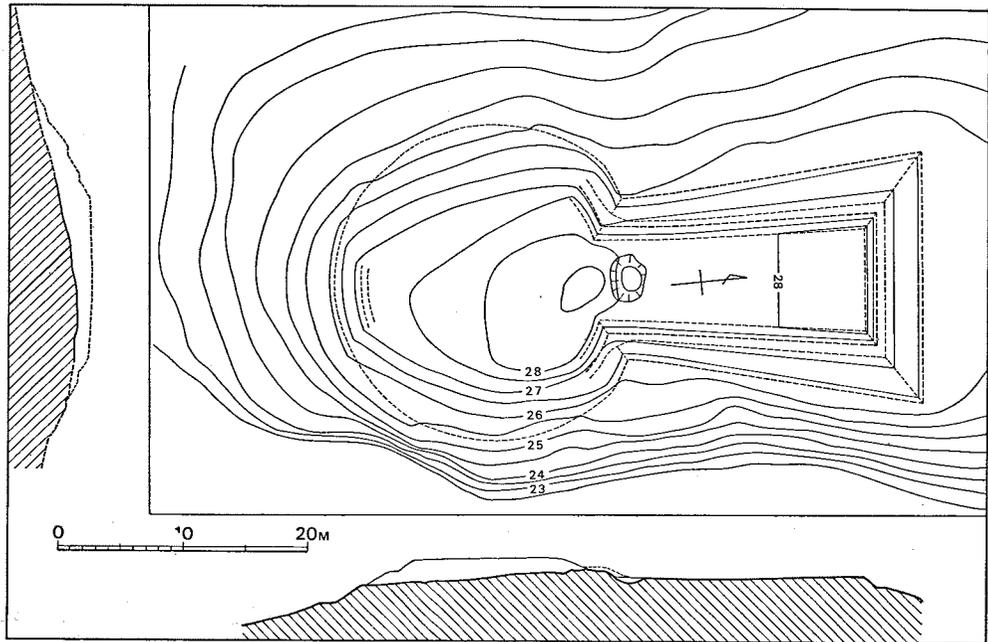
墳丘の築成については、後円部のトレンチの観察によって部分的な築成過程を述べたので、ここでまとめてみることにする。第30図は各トレンチに現われた地山面によって復原した地山削土図である。前方部の復原については、発見当時の略測と地形的観察によるものである。前方部の破壊された断面およびトレンチから、前方部は完全に地山整形による造出しであり、後円部も地山整形により約半分はできあがっている。この時すでに前方部上にはくぼみが掘られている。ここで地山は西側に下降しているので、後円部中央付近から西側は旧地表面が残っていることになる。後円部東側においては、古墳造営後に丘陵自身数度の土砂崩れにより、流失しているので第30図平面図では旧地表が残っていることになっているが、断面図で復原したように墳丘Ⅱ段あたりまでは、地山の削り出しと思われる。南トレンチの南半を除いて、地山の上に確認された青灰色粘土に混入している炭化物は祭祀的意味があるのか、またはたんに丘陵上の雑木を焼きはらったときのものか、はきめがたい。

地山を削ることによって前方部と後円部の半分はできあがっているので、地山の低い西側と南側にまず盛土を行なっている。この形がカルデラに似ていることは前に述べたが、この時は前方部のくぼみは埋められて、造出もできあがり後円部はⅡ段まで築造されたことになる（第31図）。

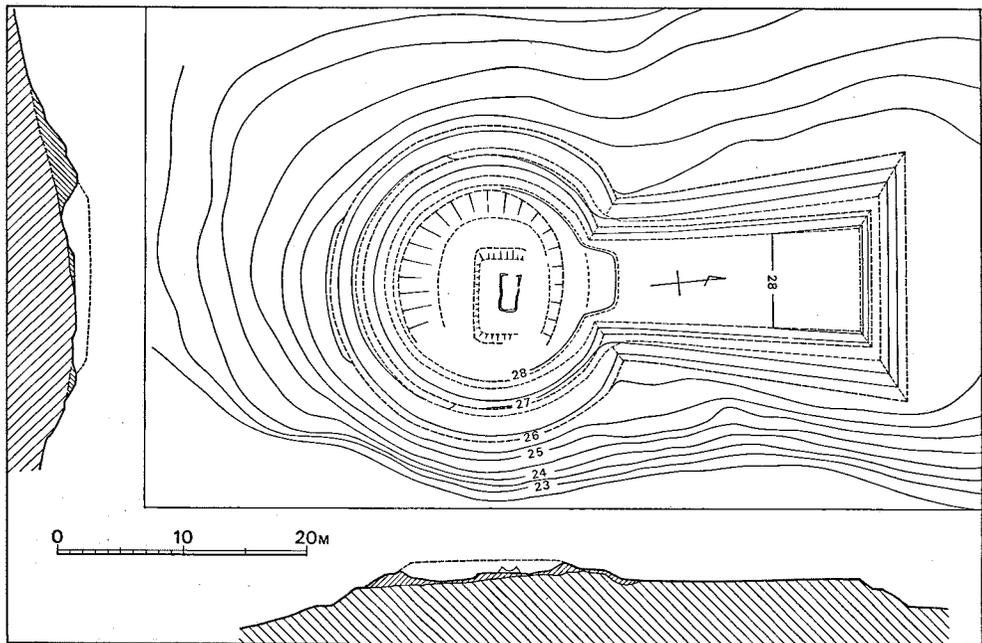
次に木棺を安置するため高い方の地山にあわせて、水平な棺台というべきものを造り、埋葬が行なわれて後、木棺上から順に盛土を行ない埋葬が終ると同時に墳丘も後円部のⅢ段が完成する。ここで問題になるのは、葦石がどの過程で築かれたかである。葦石が確認されたのは、地山の削り出しが行なわれたくびれ部と前方部だけであるから、後円部の4本のトレンチだけでは判断できない。しかし、わずかに盛土された造出しの部分に葦石のなごりがあるので、ある程度盛土されてから後積まれたのであろう。

こうして墳丘を復原して見ると第32図のようになるが、問題となるのは後円部の直径である。後円部を復原する手がかりは、東西両側が崩れている現状で、わずかに旧状が残っている南側斜面と葦石が完全に残っているくびれ部だけである。両くびれ部の葦石列がえがく弧によって円を復原してみると、東西両側、あるいはⅠ段、Ⅱ段とも多少違った中心点が得られる。したがって、それらの平均をとって円をえがくと直径32mとなる。これを墳丘実測図に合わせ

若八幡宮古墳



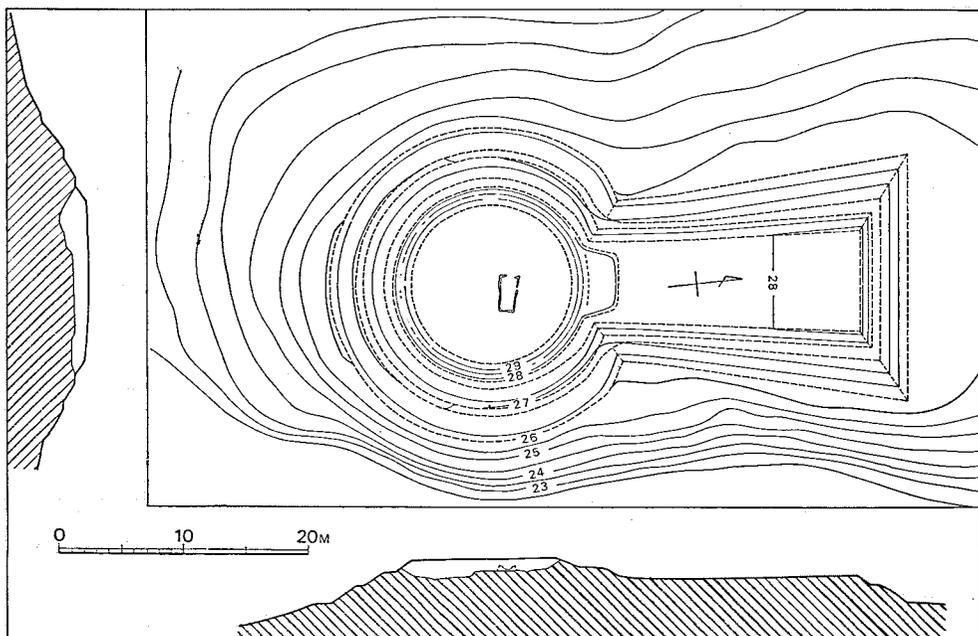
第 30 圖 若八幡宮古墳地山削土圖 (1/600)



第 31 圖 若八幡宮古墳築造過程圖 (1/600)

てみると、南側では標高24mの等高線にかかり、くびれの葺石基部の高さが26.1mであるから2m以上も下ることになる。東側の現地形では、はるかに崖から突き出て、数度の崖崩れでは説明つかない。西側はなだらかに地山が下降しているので、墳丘の裾を水平に保とうとすれば、墳丘以外にそうとうな盛土による基礎工事をしなければならない。さらに墳丘測量時に推定した南側の墳丘の裾は、26m付近にある段であったが、直径32mの復原でするとⅡ段から上の段になってしまう。葺石はくびれ部から後円部にゆくにしたがって多少下降していたが、直径32mの復原でゆくと以上のように多くの難点がある。したがって、葺石線が下降するのは、墳丘の基盤となっている丘陵の東西幅が狭いため、南側になるとまた上昇するものと考えられる。こうして進んでくると南側で26m付近の段を最初の推定どおり墳丘裾とするとⅡ段、Ⅲ段の墳丘も第31～33図のように合理的に復原できる。ここでただ1つの難点は、大きく開きかかったくびれ部の葺石列の角度を多少変えなければならないことである。この点はくびれ部以外の後円部には、まったく葺石が見られないことから可能なことと思われる。

主体部の埋葬は、できあがった墳丘上に新たに墓壇を掘り石室や棺を設置するのが通例であるが、若八幡宮古墳の場合は逆で、主体部の埋葬が終って初めて墳丘ができあがるのである。このことで問題になるのは、古墳の造営は被葬者の生前か否かということである。生前であるとすれば、墳丘はカルデラ状の大きな墓壇を開いたまま放置されていたことになり、いささか不自然である。したがって、死後に古墳の造営を急いだと見るのが妥当であろう。



第 32 図 若 八 幡 宮 古 墳 復 原 図 (1/600)

若八幡宮古墳

次表はその復原墳丘数値表である。

表 2 復原墳丘数値表 (単位m)

		I 段		II 段		III 段		合 計
		上 縁	下 縁	上 縁	下 縁	上 縁	下 縁	
前 方 部	幅	13.1	20.0	8.2	10.8			
	長	20.9	23.1	20.8	21.8			
	高	1.4		0.8				2.2
く び れ	幅	9.8	13.1	6.5	8.7			
	高	0.9		1.1				2.0
後 円 部	直 径	21.5	25.4	17.1	20.4	12.8	15.7	
	高	1.4		1.2		0.9		3.5

造 出 後円部から前方部にかけて不規則な突出が最初から確認できたが、東半分が山道としてくぼんでいたので、この突出は墳頂からの流土と考えていた。北トレンチによるとこの付近が最も地山が高く、葺石らしきものがあることから、一種の造出しがあることがわかった。この施設の名称は、大阪府弁天山C I号墳(註1)では「突出部」となっているもので、くびれ部に付設する「造出」ではない。弁天山C I号墳では「突出部」に埴輪列があるので、調査には注意をしたが、相当荒れているせいか、土師器片が両くびれ部で発見されただけである。弁天山C I号墳と若八幡宮古墳は、同様な時期にあると思われるが、九州ではこの造出が確認された例をしらない。ただ、一貴山銚子塚古墳(註2)の墳丘実測図と復原図を見るとそれらしいものがうかがえる。

(2) □ 罫 作二神二獸鏡

若八幡宮古墳出土□ 罫 作二神二獸鏡(以下本鏡とよぶ)には現在同範鏡が見あたらない。またこれを舶載鏡とするか仿製鏡とするかには多くの問題があるように思える。以下その問題点をあげて検討してみたい。

まず思うことは鑄がひどく、破碎していることから質が悪いということである。次に文様が全体的に平坦で変化に乏しく、内区と外区の厚さの差も少ない。こうして見ると仿製鏡ということになるが、さらにこの鏡の特徴をあげて他の例と比較してみたい。この鏡に全体的に見て最も似ているのは、京都府東車塚古墳(註3)と奈良県新山古墳(註4)出土の尚方作二神二獸鏡である(第33図)。この2面は同範鏡で舶載鏡とされている。この鏡と本鏡と大きく違うのは、鈕座だけである。細部を比較すれば、尚方作鏡より鈕座が大きいため内区の幅が狭くなっている。ちなみに数値を示せば、尚方作鏡は38.6mmに対し、本鏡は29.5mmである。このため神像や獸形が頭うちになっている。さらに、龍虎と思われる獸形が左右逆で、向きも反対で

ある。

銘帯は下記のとおりである。

若八幡宮古墳出土二神二獸鏡

□ 囧 作竟□□□□□ 父母

荆位至王公宜子孫長保二親

利 古市買 著 □□□□

東車塚・新山古墳出土二神二獸鏡

鏡

尚方作竟自有好明而日月世

少有刻治分守悉皆右長保二

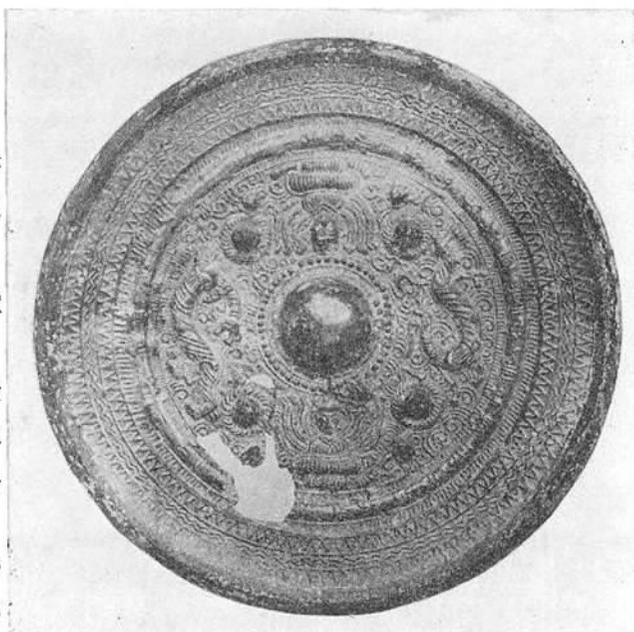
親宜孫子富至三公利古市告

后世

本鏡の作者銘がはっきりしないが、尚方作でないことは確実である。銘文も似ているところが多いが、尚方作鏡は左廻りである。

外区は内側から鋸歯文帯、複線波文帯、鋸歯文帯と続くところは同じであるが、尚方作鏡は鋸歯文が両方も線鋸歯になっているのに対し、本鏡は内側だけ線鋸歯である。さらに尚方作鏡は、外区に研磨による仕上げがなされているが本鏡は鑄放しのままである。重さは本鏡が914gで尚方作鏡は新山出土例が1,198gでかなり軽い。この外鈕孔が鑄放しのままであること、銘帯が蒲鉾形にふくらんでいること、銘帯の内側に櫛歯文帯があること、内区と外区の段の差が少ないことなど類似点が多い。反面この類似点が他の多くの舶載鏡といわれる三角縁神獸鏡と違う点でもある。

図文が形式化し、龍虎の頭が簡略



第33図 尚方作二神二獸鏡
京都府東車塚古墳出土



第34図 吾作明二神二獸鏡
(原版 東京国立博物館)



第 35 図 尚方作二禽二獸鏡
(尾崎喜左雄氏提供)



第 36 図 尚方作二禽二獸鏡

化され横向きになり、胴に縞文があるものに静岡県松林山古墳出土の吾作明二神二獸鏡（第34図）がある（註5）。さらに三角縁二神二獸鏡ではないが、群馬県前橋天神山古墳出土の尚方作二禽二獸鏡（第35図）は、龍虎の簡略化と渦文の配置、鈕座の小突起、銘帯のふくらみなど本鏡と類似点が多い（註6）。この2面は舶載鏡で銘文もしっかりしている。参考例として天神山古墳の二禽二獸鏡とまったく似ているものが中国本土から出土している（第36図）（註7）。この2面は同範鏡といってよいように銘文まで同じであるが、銘文と図文が多少ずれている。この例から見て、簡略化された図文も舶載鏡にありえるのである。

蒲鉾形の銘帯は、天神山古墳出土鏡のように獸帯鏡や画像鏡（第37図）に多く見られるものであるが、三角縁神獸鏡で新山・東車塚古墳例以外に例をしらない。第37図の奈良県佐味田古墳出土の尚方作画像鏡（註8）は、銘文が「尚方作竟佳且好明而日月世少有刻治分守悉皆右長保二親宜孫子富至三公利古市伝告后世棄無己」とあり、東車塚・新山古墳出土の尚方作二神二獸鏡とほとんど変わらない。また鈕座が珠文であるところも同じである。

以上のように、三角縁神獸鏡にない特徴をそなえているが、それが何も仿製鏡であるとする根拠にはなら

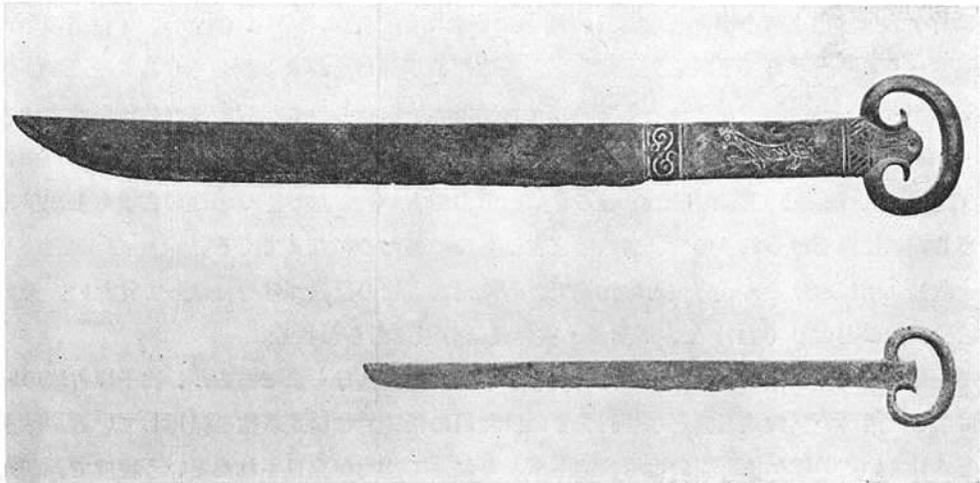
ず、参考例をあげたように舶載鏡にも見られることから、本鏡は舶載鏡とするのが妥当であるように思われる。また、参考例としてあげたこれらの鏡は作者銘こそ違うが何らかの関連をもっていることは否定できない。この中に尚方作鏡を含むことから同族集団による作品とは考えられないとして、本鏡があらゆる鏡式を取り入れて作られた仿製鏡とすることもできるかもしれないが、30字以上の文字がある以上それはあたらないだろう。日本以外の地で、原版を部分的に組合せて鑄型を作ったとすれば可能性があるかもしれない。



第 37 図 尚方作画像鏡
(原版 東京国立博物館)

(5) 鉄製環頭大刀

若八幡宮古墳の鉄製環頭大刀と同形のもので国内で発見された例をしらない。しいていえば三葉環に似たところがあるが、三葉にはならず素環が中に巻きこんで2つの突起をつくって



第 38 図 銀象嵌青銅環頭刀(上)と青銅環頭刀子(下)
(京都大学文学部陳列館蔵)

若八幡宮古墳

るだけである。しかし、三葉環の元祖であるといえるかもしれない。本例に最も近いものは、朝鮮・中国に発見されている。楽浪古墳第9号墳出土の鉄心金線巻複合刀子は素環頭となっている(註9)が、本例と同形式である。その外朝鮮大同江面石巖里出土金銅製三葉環頭大刀(註10)と第38図の中国出土銀象嵌青銅環頭刀、青銅環頭刀子などがあり、素環頭大刀と同じ漢代の所産であることがわかる。この大刀がいつ日本に渡り、若八幡宮古墳の被葬者の手にはいったか問題になるが、これはかなり早い時期に渡来し、伝世したものと考えるのが妥当であろう。

(4) 古墳の年代

さきに述べたように、付近の前方後円墳中であらゆる条件から古くなる可能性が強いが、はたして実年代はいかかなものだろうか。次に本古墳の特徴をあげて検討してみる。

墳丘築成の特異性は、他に例を知らないので問題にできないが、後円部の前方部側に付設する造出は、前期中葉から末葉とされる弁天山CⅠ号墳(註11)にも見られる。これは墳丘を細部にわたって調査した例が少ないので時期が限定されるかどうかかわからない。

主体部の木棺については、平原の例(註12)があるが、原田大六氏の年代については多くの問題点があるように思われるので極論をさけたい。

副葬品について見ると、鉄製環頭大刀により上限がおさえられ、墳頂部遺構の土師器によって下限が定まってくる。鉄製環頭大刀は伝世したものと考えれば、主体部埋葬後の遺構である墳頂部出土の土師器は、古墳が使用された下限を示すに十分な資料である。小形丸底埴と器台のセットは、九州で少ない鼓形器台もその編年が可能である。福岡市有田遺跡出土の鼓形器台は竹ヶ本遺跡出土の小形丸底埴と近い時期にされているところから(註13)、4世紀後半に位置づけられる。ここで下限を設定すれば、主体部の埋葬はこれより新しくなることはない。したがって、各遺物で参考例としてあげた古墳中最も新しい5世紀前半の佐賀県熊本山古墳(註14)の短甲は本例より新しいことになる。本例と最も近い短甲が出た滋賀県瓢箪山古墳(註15)は、前・Ⅰ期後半(註16)とされているので古い例となり、その他の古墳もⅠ期後半からⅡ期に位置づけられるので、若八幡宮古墳もこのあたりになってくる。

次に九州における古式古墳との比較で、若八幡宮古墳の位置づけを行なって見たい。その古墳は次表のとおり(註17)で、周防灘・玄界灘の沿岸にあらわれる。

石塚山古墳の竪穴式石室は、畿内で見られるような長大なものであるが、銚子塚古墳の時期になると短かい竪穴式石室となり、あるいは九州の伝統的な箱式石棺を採用している。粘土椀とされている香椎ヶ丘と原口古墳は粘土をとまなげて遺物が発見されたという程度で、若八幡宮古墳のようなものかもしれない。津古2号墳は主体部が一部残っただけでその規模は明らかでないが、粘土の中に赤色顔料の層があり、この中に遺物を含んでいたもので、これは粘土

槨といえるものである。このように主体部においては、その特色を示している。豊前地域に上陸した畿内型古墳は、すぐ筑前にも伝播するが(註29)、この時期はすでに主体部において特色を示し、銚子塚古墳のような短かい竪穴式石室は後出的な感があり、老司古墳、丸隈山古墳のような古式の横穴式石室に受けつがれていくようだ。すなわち玄界灘沿岸で、粘土槨や直葬が行なわれる時期は4世紀後半代に限られ、4世紀末には姿を消すのではなかろうか。

以上のことから若八幡宮古墳は、銚子塚古墳より古く、原口・香椎ヶ丘古墳と同時期の4世紀後半の年代があたえられる。(柳田康雄)

表 3 九州古式古墳一覽

古墳名	所在	墳形(m)	立地	内部構造	副葬品	註
石塚山	福岡県京都郡苅田町	前方後円(120)	低丘陵	竪穴式石室	神鏡 14 銅素環頭大鍬刀	18
忠隈	同・嘉穂郡穂波町	円(35)	山頂	竪穴式石室	神鏡 1 獸形管鏡玉 勾玉・管鏡玉 水晶・管鏡玉 水四葉座金具	19
原口	同・筑紫郡筑紫野町	円(約50)	丘陵	粘土槨?	神鏡 3 管斧玉・小玉刀	20
御陵	同・筑紫郡大野町	円	丘陵	箱式石棺?	神鏡 1 獸鏡	21
銚子塚	同・糸島郡二丈町	前方後円(102)	丘陵	竪穴式石室	方格規矩鏡 1 内行花文鏡 1 神獸鏡 8 勾玉・管玉・刀 劍・槍・鉄鍬	22
津古2号	同・三井郡小郡町	前方後円(32)	丘陵	粘土槨	刀子・小玉器 土師	23
香椎ヶ丘	福岡市香椎	円?	丘陵	粘土槨?	神鏡 1 獸鏡	24
五島山	福岡市姪浜町	?	丘陵	箱式石棺	平鏡 2 緑鏡・劍・勾玉 銅鍬・管玉	25
若八幡宮	福岡市徳永	前方後円(47)	丘陵	木棺直葬	神鏡 1, 鉄製環頭 大刀, 劍, 刀子, 管 玉, 小玉, 短甲, 鍬 鉞, 斧, 土師器	26
卯内尺	福岡市老司	円墳	丘陵	粘土槨	神鏡 銅獸鏡	27
赤塚	大分県宇佐郡宇佐町	前方後円(40)	台地	箱式石棺	神鏡 4 盤龍鏡 1 管玉, 刀, 斧	28

若八幡宮古墳

- 註1 原口正三・西谷正「弁天山古墳群の調査—弁天山 C 1 号墳」(『大阪府文化財調査報告』17, 1867)
- 2 小林行雄「一貴山銚子塚古墳の調査報告」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』16, 1952)
- 3 梅原末治「山城国八幡町の東車塚古墳」(『久津川古墳研究』1920)
- 4 梅原末治「佐味田及新山古墳研究」(1921)
- 5 後藤守一・内藤政光・高橋勇『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』(1939)
- 6 尾崎喜左雄「前橋市天神山古墳の出土鏡」(『考古学雑誌』55-3, 1970)
尾崎喜左雄「後閑天神山古墳」(『前橋市史』1, 1971)
- 7 小檀槃室鏡影卷二, 尚方鏡六
- 8 註3に同じ
- 9 末永雅雄「日本上代の武器」1941
- 10 註9に同じ
- 11 註1に同じ
- 12 原田大六『実在した神話』(学生社, 1966)
- 13 小田富士雄「有田遺跡—有田遺跡の土師器とその性格」(福岡市教育委員会, 1968)
- 14 小田富士雄「熊本山船型石棺墓—遺物」(『佐賀県文化財調査報告』16, 1967)
- 15 梅原末治「安土瓢箪山古墳」(『滋賀県史蹟調査報告』7, 1938)
- 16 大塚初重「古墳時代上一古墳の変遷」(『日本の考古学』IV, 1966)
- 17 小田富士雄「古墳時代上一九州」(『日本の考古学』IV, 1966)に追加。
- 18 島田寅次郎「石塚山の古墳」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1, 1925)
- 19 森貞次郎「福岡県嘉穂郡忠隈古墳」(『日本考古学年報』8, 1959)
- 20 島田寅次郎「異例の古墳」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』10, 1935)
- 21 小林行雄『古墳時代の研究』(1961)
- 22 註2に同じ
- 23 渡辺正気「津古内畑遺跡—津古遺跡」(小郡町教育委員会, 1970)及び筆者も調査に参加。
- 24 註17に同じ
- 25 島田寅次郎「五島山の石棺」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1, 1925)
亀井明德「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」(『九州考古学』38, 1970)
- 26 本報告
- 27 森貞次郎「老司古墳—老司古墳の発見—」(福岡市教育委員会, 1969)
- 28 梅原末治「豊前守佐郡赤塚古墳調査報告」(『考古学雑誌』14-3, 1924)
- 29 石塚山・赤塚・原口・御陵古墳の間に同範鏡の分有関係が見られるので, 4者の間に年代的な差がないことが知られる。

第3 ^い飯 ^し氏 ^ば馬 ^ば場 遺跡

福岡市大字飯氏所在弥生墓地群

本文目次

1. はじめに	45
(1) 調査の経過	45
(2) 遺跡の立地	47
(3) 発掘区設定	48
(4) 層位	48
2. 遺構と遺物	50
(1) 概要	50
(2) 住居跡	51
(3) 木棺墓	55
(4) 甕棺墓	59
(5) 石棺墓	73
(6) 土塚墓	78
(7) その他の遺構と遺物	82
3. 土塚墓出土の人骨	85
4. 結び	87
(1) 住居跡について	87
(2) 甕棺の編年	89
(3) 石棺墓と小型仿製鏡	90
(4) 調査の成果	97

第3 飯氏馬場遺跡

1. はじめに

(1) 調査の経過

福岡市大字飯氏字馬場に所在する飯氏馬場遺跡は国道202号（今宿）バイパスの予定路線を決定するために昭和45年12月7日から12月29日まで行なわれた予備調査である。これらの埋蔵文化財の調査はその緒についたばかりである。昨年度は福岡市拾六町を中心に8ヶ所の発掘調査が行なわれ、今宿バイパス関係発掘調査報告書第1集として報告された。本年度は福岡市大字徳永及び福岡市大字飯氏にまたがる3ヶ所の調査を行ない、本遺跡はその第2地点で、弥生時代墓地群としてリストアップされている。

本遺跡の調査関係者は

九州大学医学部教授	永井昌文
福岡県教育委員会文化課	技師 柳田康雄
〃	〃 浜田信也
〃	〃 副島邦弘（調査主任）

調査に関しては、国学院大学・福岡大学の諸君と九州女子高校考古学同好会の協力を受けた。また、地主の末松又生・中村敬・久保勝助・大字飯氏区長徳安盛恵の諸氏、作業員として参加された大字徳永と大字飯氏の各位の協力を得た。

整理においても、発掘参加した福岡大学、九州女子高校考古学同好会の援助を受けた。

以下調査日誌によって、調査行程をふりかえってみよう。

12月7日 曇 教育庁より発掘資材を搬入する。地主・区長にあいさつを行なう。

12月8日 晴 発掘開始、発掘区設定後、表土剥ぎを行なう。

12月9日 曇のち晴 甕棺墓を確認する。その数3基、時期は弥生中期頃と思われる。

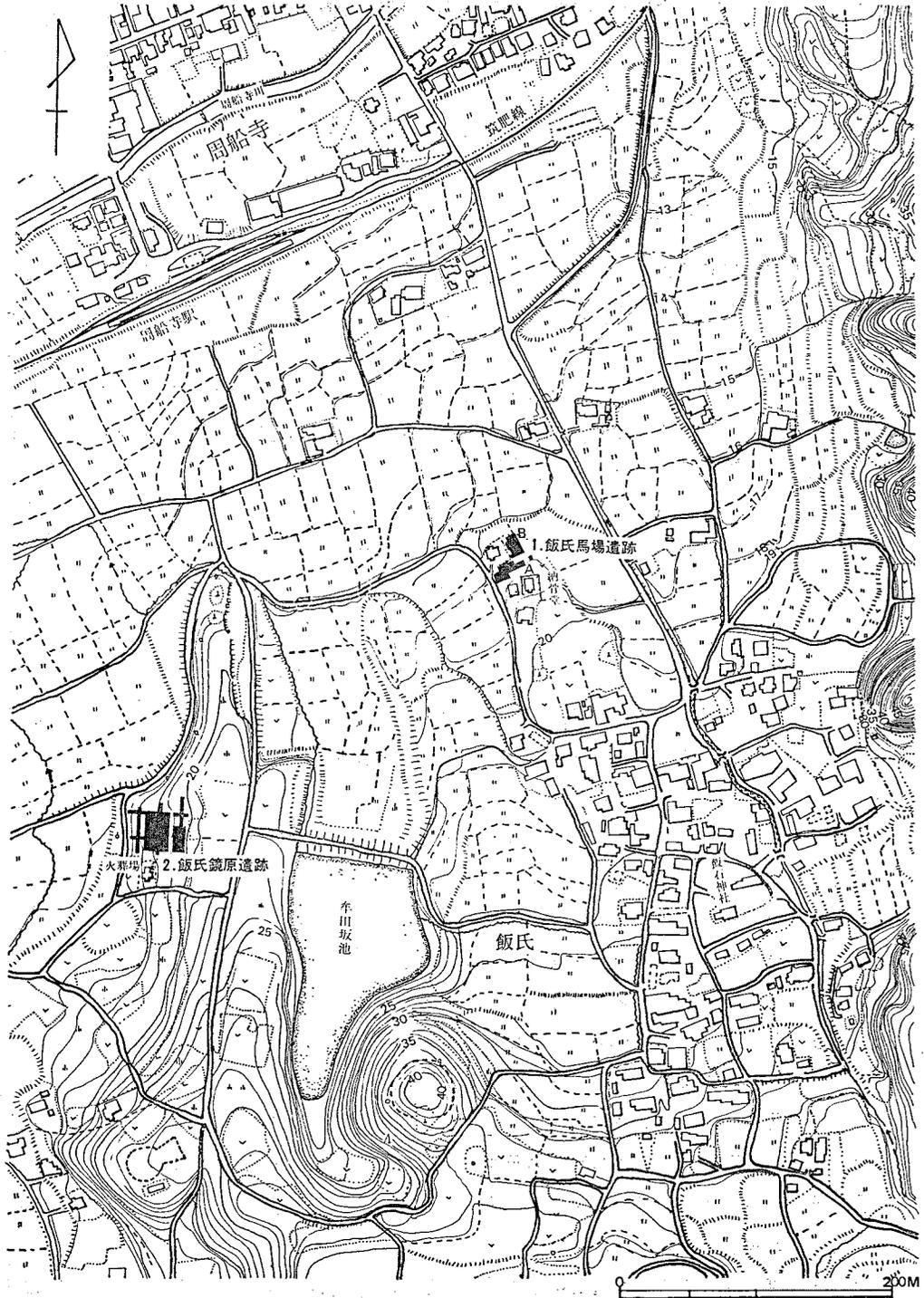
12月10日 雨のち小雪 遺構検出と確認をいそぐ。

12月11日 晴 木棺墓と土塚墓の発見。土塚墓中に人骨を確認する。

12月12日 曇のち小雨 北側に新しくグリット設定。9号甕棺を確認、西南より甕棺番号を付ける。A区西端に1号木棺墓を発見する。同志社大学森浩一氏ら来訪。

12月13日 曇時々雨 B区（Q～U-9区）を新たに設定し、表土を剥ぐ。石棺墓を確認。A区は写真撮影を行なうため清掃する。

12月14日 晴 A区の部分写真撮影と併行し、B区に住居跡を確認。石棺の抜き跡を確認する。



第 39 图 飯氏馬場遺跡附近地形图 (1/5,000)

- 12月15日** 晴 土塚墓掘り上げと1号土塚墓内に青磁破片を副葬している、この青磁より中世の時期のものと思われる。遠景撮影
- 12月16日** 晴 P-11区に拡張区を設定する。石棺墓2基確認。石棺墓は相当の破損をうけている。発掘全景撮影。各部分の実測を開始する。
- 12月17日** 曇 部分撮影、各甕棺実測。
- 12月18日** 曇 甕棺実測（1号、2号）。M-08区うめもどし及び部分写真。
- 12月19日** 晴 住居跡追及プランは円形である。それに併行して土塚墓実測及び写真撮影。
- 12月20日** 小雨 2号木棺墓実測、土塚墓実測、1号木棺実測。
- 12月21日** 晴 3号・4号甕棺墓実測後とり上げ、3号木棺実測。
- 12月22日** 雨 作業中止。
- 12月23日** 曇 甕棺とり上げ、B区全体撮影、遺構全体図作製。
- 12月24日** 小雪 各木棺及び甕棺実測・写真撮影、A区一部うめ戻し開始。土塚墓実測及び人骨取り上げ。
- 12月25日** 小雪 朝から小雪がちらつき非常に寒い。発掘もクライマックスに到る。撮影及び実測にピッチを上げる。それに併行してA区うめ戻し終了。
- 12月26日** 晴 うめ戻しに併行して住居跡の完掘にはいる。住居跡の時期は弥生前期末（城ノ越式土器をとこなう）と思われる。3号石棺墓付近より小型仿製の内行花文鏡を発見する。住居跡内に木棺を検出する。甕棺の取り上げ全て終了。
- 12月27日** 晴 うめもどしを併行し、残した遺構の実測と部分写真と遺物の梱包作業を併行して行なう。
- 12月28日** 晴 うめ戻し。4号木棺墓の写真及び実測。うめもどし機材と写真機材を残して、その他の機材を教育庁に搬出する。
- 12月29日** 晴 4号木棺墓実測終了とともにうめもどし、17:00までに終了する。地主・区長及び宿舎にあいさつし、残留機材を本庁へ運搬する。本日をもって飯氏欠場遺跡の発掘を終了する。

(2) 遺跡の立地

高祖山から張り出した多くの丘陵は各部分に多くの遺跡を残した。その遺跡は丘陵の裾に濃密に分布する。『魏志』倭人伝に記載されている伊都の国から奴の国に至る古代の道筋にあたるわけである。その丘陵には丸隈山古墳に代表される前方後円墳が点在する。本遺跡は、国鉄筑肥線の周船寺駅から南に300mの地点、標高16m前後の下位砂礫台地で洪積世の砂礫粘土層からなる海岸平野に相当する台地である。この地域は古くから定住生活が営まれた地域で、この母胎が伊都の国を生んだものと思われる。つぎの地点、飯氏鏡原遺跡は西に200mの地点である。

(3) 発掘区設定

本遺跡は低丘陵に属している。東西軸を算用数字とし、南北軸をアルファベットとする。基線東西軸（N-116°.30'-W）、南北軸（N-26°.30'-E）で丘陵中心を原点として直角にふる。本遺跡からは、住居跡1・甕棺墓9・木棺墓4・石棺墓3・土坑墓7を確認したのである。地番によって通称A区（N・M-10~16）とB区（P・Q・R・S・T・U-8・9区）とよんでいる（第39・41・42図）。

(4) 層位

本遺跡の層位はⅢ層からなり単純な層序を示めている。すなわち、第Ⅰ層表土の下に遺構面である灰黒色砂層があり、その下に砂礫粘土層の基盤にいたる。

第Ⅰ層 表土。耕作土で暗褐色を呈する砂質層、締りはなくパサパサした土質で厚さ20~50cmで北へ行くほど厚く堆積している。

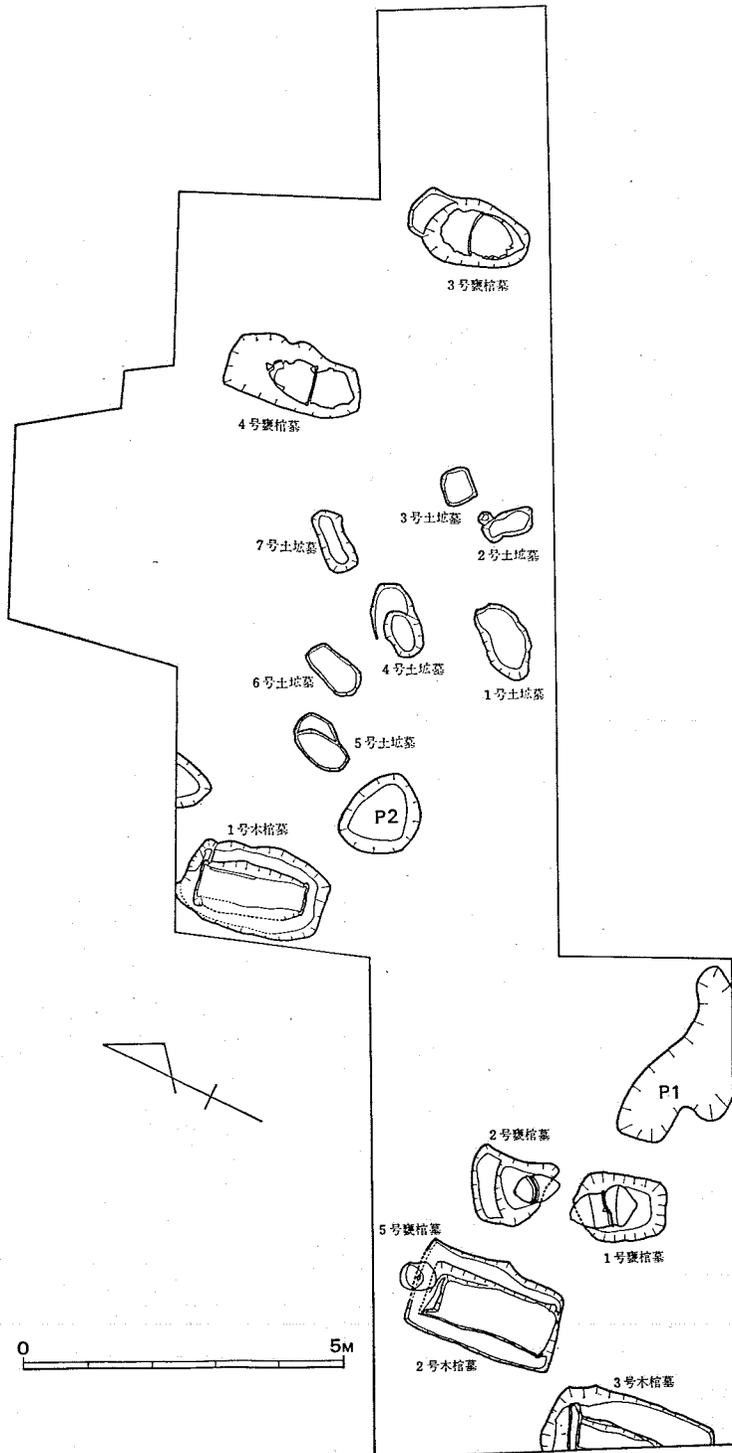
第Ⅱ層 黒色ないしは灰黒色を呈する有機質を含んだ砂質的な土壌で、耕作によって所々に攪乱が走っている。厚さ20~40cmである。この面を切って住居跡の存在が確認された。

第Ⅲ層 基盤。砂礫粘土層でかたさはしまっておりスコップの歯がたたない。

（副島邦弘）

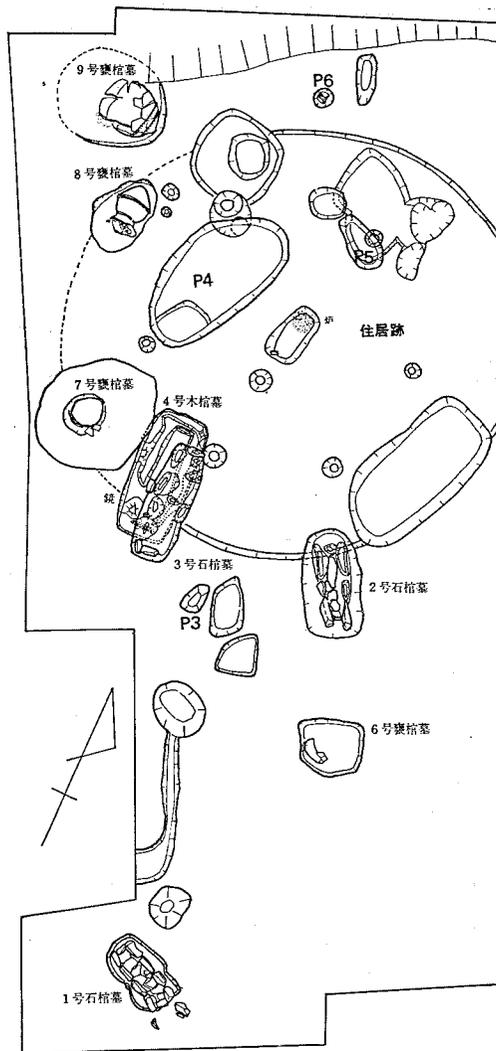


第40図 鏡出土状態



第 41 图 A 区 遺 構 配 置 图 (1/120)

2. 遺構と遺物



(1) 概要〔図版24〕

飯氏馬場遺跡は、弥生時代から近世までの重複遺跡で、各時期の遺物を表採することができる。近年、江戸時代の墓地を改葬し、まとめて納骨堂を建設された折、近世の和鏡の出土が見られている。この低台地は各時期の墓地が存在したのである。

本調査はわずか 290 m² の範囲を発掘したにすぎず、その遺跡の広がり、大字飯氏全域に渡っている。

まず、弥生前期後半に住居が営まれ、それと併行する時期に木棺墓、甕棺墓が存在した。

次の弥生中期から後期にかけても甕棺墓が存在し、墓地群を形成することとなった。本遺跡の甕棺墓の個数は少ないが、各々の時期が存在するということが特長である。

また石棺墓は甕棺墓のある時期に併行して存在したと思われる。

3号石棺墓の付近から刀子、弥生時代の小型仿製内行花文鏡が出土したことが注意を引く。土塚墓の時期はそれより下がり、歴史時代にはいるものである。付近に近世

第 42 図 B 区遺構配置図 (1/120)

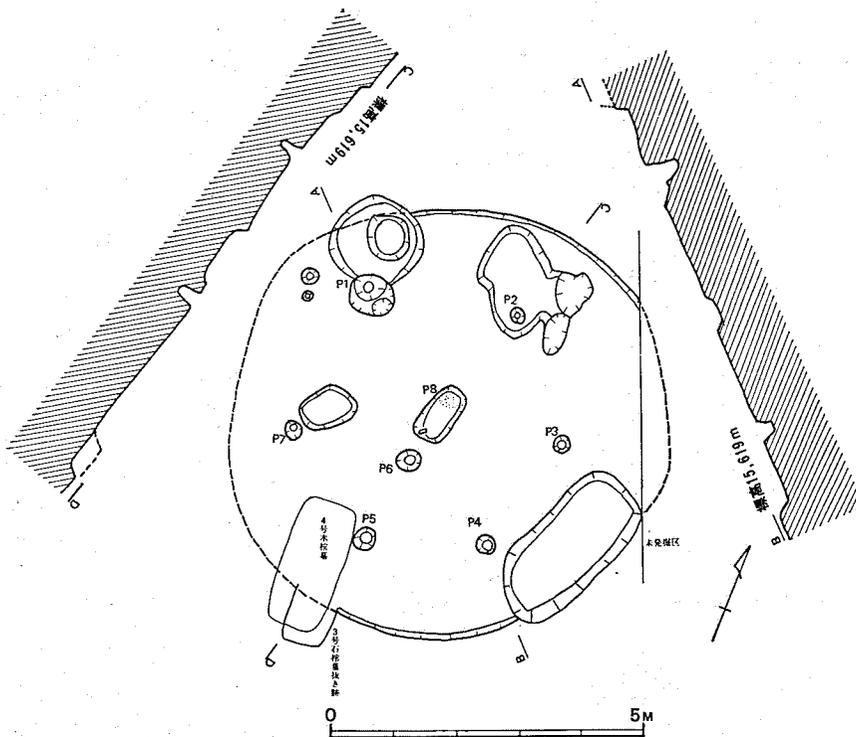
墓地もあり、各種の墓制が見られることが興味深い。

本調査では、住居跡1、木棺墓4、甕棺墓9、石棺墓3、土坑墓7の遺構がみられた。

次節以下で、各項について詳細な報告を行なう。(副島)

(2) 住 居 跡 [図版25・26, 第43~47図]

住居跡(第43図) 本住居跡は直径7m前後のやや不整な円形プランを呈し、甕棺や石棺、木棺等の遺構が重複したため、残存状態は非常に悪い。壁高は10~20cmで、床面は踏みかためており、中央部の不整形堅穴は南端に作業台と思われる砥石がある。北端は若干焼けているがいわゆる炉跡と考えるには焼土や炭化物が見られないので具体性を欠く。ピットは床面にP₈の他にP₁~P₇を本住居跡の柱穴と考えることが出来る。他に本住居跡に伴わないピット遺構が南東端と北西端にあるが、これらの遺構からは時期を決定するための遺物は見られな



第43図 住居跡実測図 (1/60)

表 4 柱 穴 計 測 表

	長 軸	短 軸	深 さ	傾斜方向	備 考
P 1	50cm	40cm	* - 5cm		
P 2	30cm	20cm	* -50cm	直 立	
P 3	30cm	30cm	* -30cm		
P 4	35cm	30cm	* -26cm	直 立	
P 5	40cm	36cm	* -25cm		
P 6	40cm	36cm	* -34cm	直 立	
P 7	35cm	30cm	* -30cm		

* 床面より深さ

面をととのえるために木棺上部を削平し、均らした上で床と使用したもので、木棺墓の状態は小口と棺材を固定したであろう粘土の一部が残っていた。詳細については、4号木棺墓の中で触れる。

柱穴の計測値は表4の通りである。

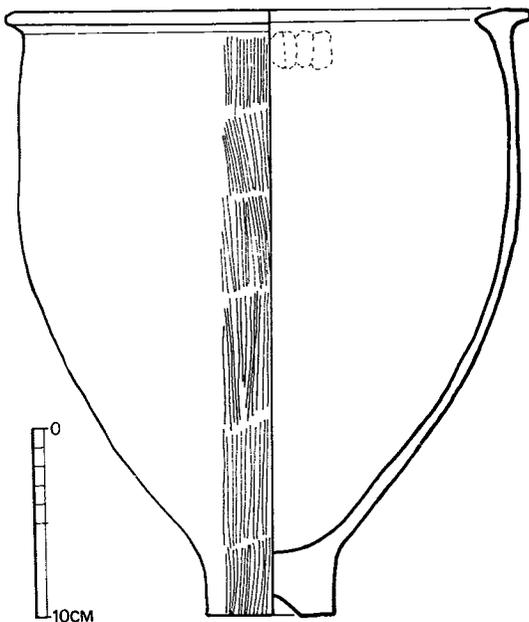
出土遺物 (第44・45・46・47図)

床面より出土したのは、甕形土器と壺形土器である。石器は床面と床面直上で6点出土して

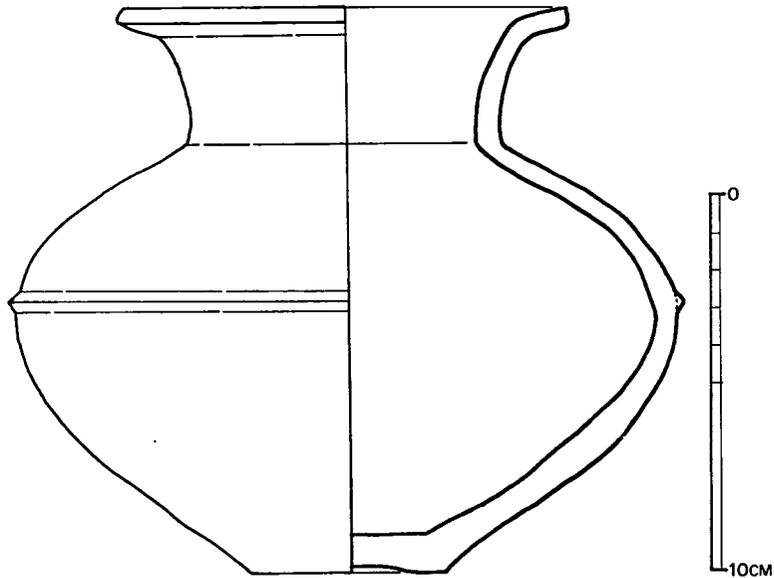
いる。

甕形土器 (第44図) 住居

跡床面の北端 P₂ 付近から出土した一括土器で、口縁部を住居跡の中央部に向けてつぶれた状態であった。口径28cm、高さ34cm、色調は灰黒色で、胎土に細粒砂をふくみ、焼成は良好である。外面の仕上げは縦位の方向に刷毛にて調整されており、胴部から底部にかけて、二次的作用によって煤の付着がみられる。底部はくぼみのある上げ底で、口縁部の内面の接合部は指痕が残っており、刷毛によって仕上げられてい



第 44 図 住居跡内出土遺物実測図① (1/4)



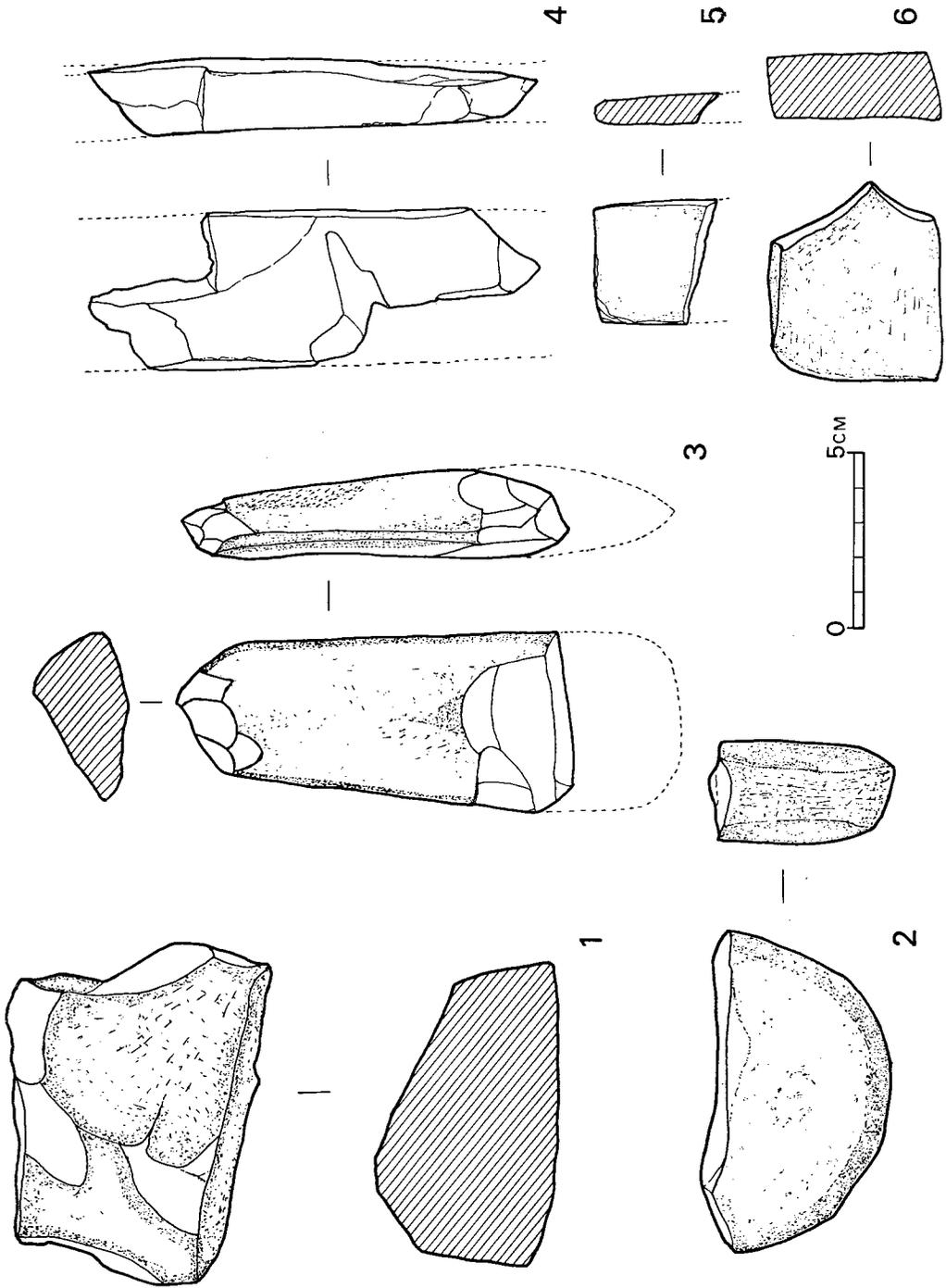
第 45 図 住居跡内出土遺物実測図② (1/2)

る。平坦口縁で胴が若干張り、刷毛目痕の残痕がはっきりし、胴部に凸帯がみられる。器形全体が無花果状を呈している。いわゆる城ノ越式の特徴を有している。

壺形土器 (第45図) 4号木棺墓の付近から出土したもので口径12.0cm、高さ15cmで、色調は灰褐色、胎土に細粒砂をふくみ、焼成はひじょうに良好で、口頸部は高く直立し、口縁部は外反する。胴部の最大幅17.5cm腹部に凸帯が一条付し、凸帯の断面は三角形の張付凸帯である。口頸部から底部付近までヘラによる研磨が施されている。底部は上げ底で腹部にかけて一部黒変している。この壺形土器も前述の甕形土器も弥生中期初頭の城ノ越式の特徴を所有する。

石器 (第46図) 磨製石斧・砥石・磨石である。1は砥石で石質は砂岩である。側縁部まで使用している。2は磨石で、石皿とセットとして使用されたものである。石材は安山岩製で、扁平な円礫全体を研磨し整形したもの、側辺部に研磨がみられる、床面直上から出土している。3・4は磨製石斧で、前者は今山製の玄武岩を使用したものである。後者は油質頁岩製で、柱状抉入石斧の残片かも知れない。前者は床面に密着してP₄付近から、後者は床面直上で住居跡の北端より出土した。5・6は砥石で、前者は硬質砂岩で、後者は砂岩である。両面及び両側辺を研磨している。5は形態から片刃石斧になる可能性がある。ここでは一応砥石の中に入れて分類を行なった。

また中央の竪穴から出土した砥石(第47図)は、ここに生活をしてきた人達の作業台ともい

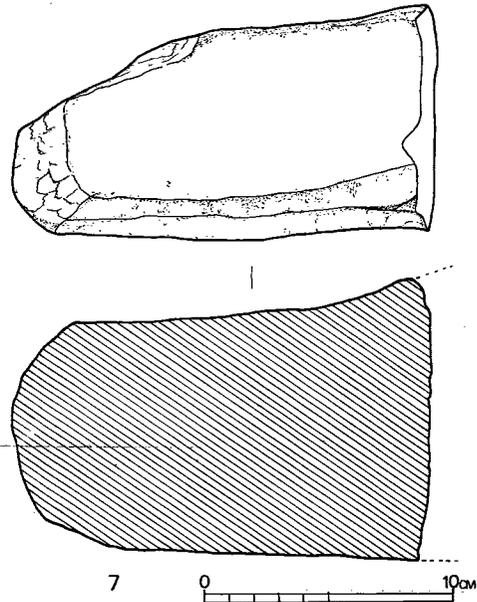


第47図 住居跡内出土遺物実測図③ (1/2)

えるもので、石材は砂岩、両面及び側辺まで使用されている。

以上のことを踏まえた上で、住居跡の時期は床面から出土した遺物により、弥生前期終末から中期初頭に位置づけることができるであろう。

住居跡の覆土中より、弥生前期板付Ⅱ式から中期までの土器片が出土している。一応流入土器として、特徴のあるものを選んで図版40-2に掲載している。(副島)



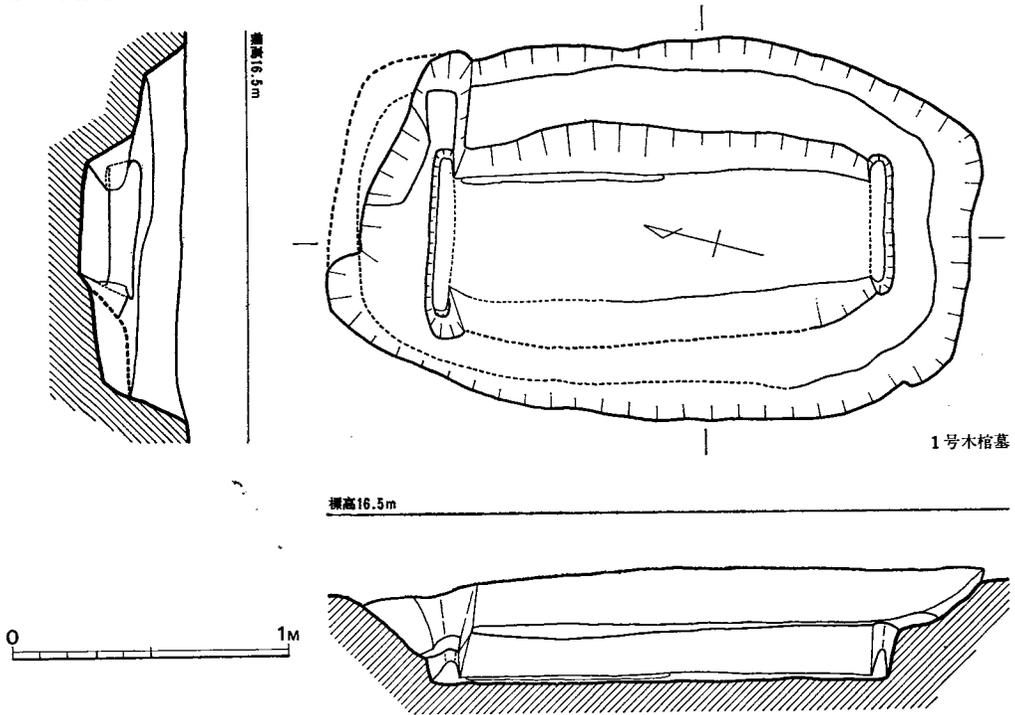
第47図 住居跡床面出土遺物実測図(1/3)

(3) 木 棺 墓 [図版27・28, 第48~50図]

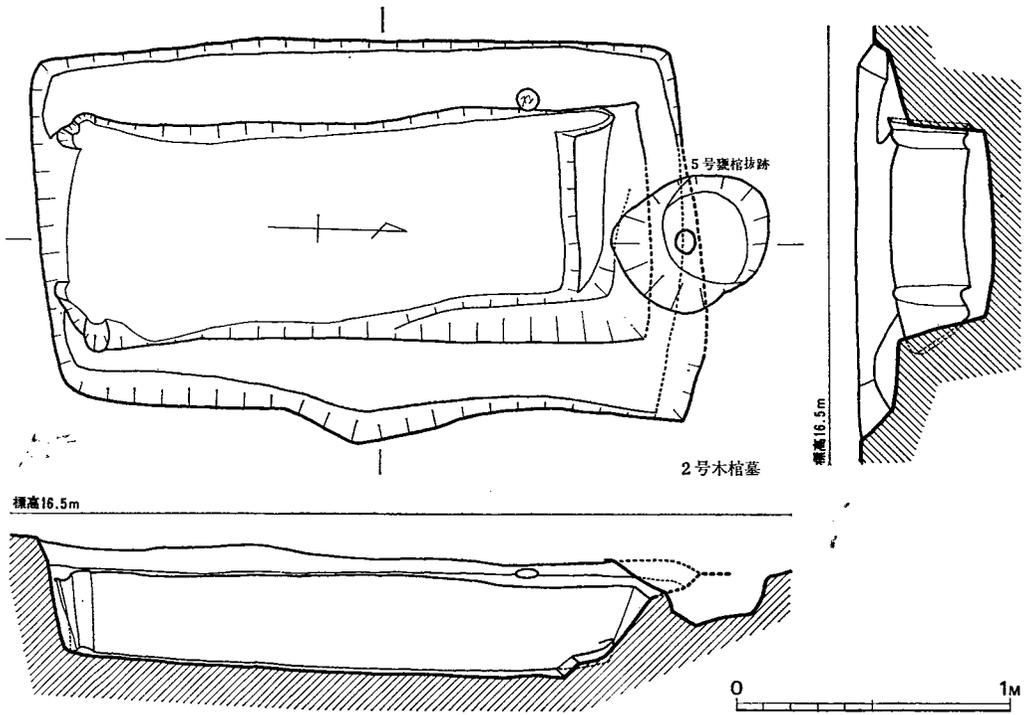
木棺墓は、A区の西側で3基、B区の中央付近で1基の合計4基が発見された。このうちA区の西隅で発見された3号は垣根のため半分しか掘れなかったため確認することはできなかった。木棺墓の時期は、4号木棺墓が弥生中期初頭の住居跡に破壊されていることから、住居跡より古いことが判明した。2号木棺墓の上に壺棺らしき抜き跡を確認し、その石膏型をとったが、肩の張りなど弥生式土器に見られないところがあるので新しい可能性が強い。しかし下の2号木棺墓は、弥生時代のもので見てよいだろう。2号木棺墓の東側には、中期初頭の甕棺墓が2基あり、木棺墓の時期も前期末から中期初頭のものと思われる。

木棺の組合せ方には、津古内畑遺跡で、A. 両側板の間に小口板がはいり、両側板は小口板の面より長く出るもの、B. 両側板が小口板で止められ、両小口板が両側板の外側幅と同じか、それ以上に長いもの、の2形式に分けたが(註1)、2号木棺墓において一部小口板と側板を井桁状に組んだ痕跡があるのでこれをC形式とした。一覧表(表5)の木棺形式はこれで示すものである。

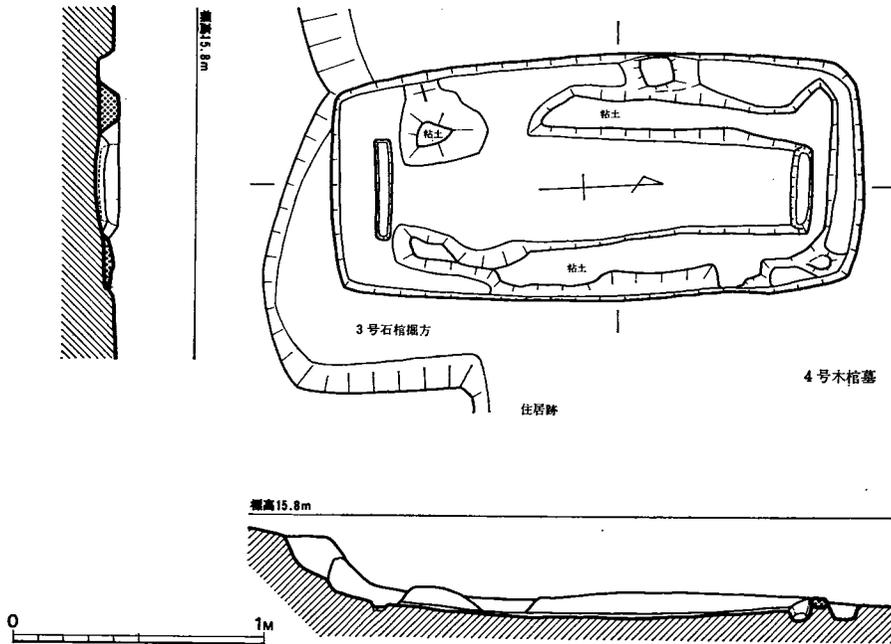
1号木棺墓(図版27-1・第48図) 典型的なB式木棺墓である。砂地に隅丸胴張長方形の墓壇を掘り、小口板を固定させるために地山に溝を設定したもので、両側板の外側は青灰色粘土で固定したらしく、その痕跡がある。棺の内法は長さ153cm、幅約40cmの大きさで、現状で



第48图 1号木棺墓实测图 (1/20)



第49图 2号木棺墓实测图 (1/20)



第50図 4号木棺墓実測図(1/20)

は深さ20cmとなっている。小口板の溝から板の厚さは6cm以内であることがわかる。

2号木棺墓 (図版27-2, 第49図) 長方形のわりにととのった墓壇をもつC式の木棺である。南側小口でわずかに井桁状に組んだ痕跡が認められるが、北側はA式の痕跡のみである。側板の外側には粘土と砂で堅くしまっているところが見られるので、側板固定のため粘土を使用したであろう。棺の内法は、長さ162cm、幅約55cm、深さ約35cmの大きさで、成人用のものである。木棺を埋葬した後に5号甕棺墓と付けた壺の抜き跡が確認されたが、その形は弥生式土器には見られないものである。またこの壺以前に2号木棺とわずかに重複している遺構が北側にあるが、小屋があるため調査できなかった。

4号木棺墓 (図版28-2, 第50図) B式の木棺と思われるが、1号・2号の墓壇の掘方と違って、墓壇に段をもうけず棺床と同じ深さにしている。この墓壇に小口板のみの溝を掘り木棺を組合せて外側から粘土で固める方式をとっている。この木棺は、中期初頭の円形竪穴式住居により上部が削平され、底部をわずかに残すだけであるから明らかでないが、墓壇、小口溝の掘方などから見て津古内畑遺跡のA式の木棺と同じで、これもA式になる可能性が強い。A式とすると木棺の内法160cm、幅30~40cmの大きさで、小口板の厚さ5cmとなる。

この3基の木棺墓は、主軸をほぼ南北に向けて一定している。これは津古内畑、伯玄社遺跡

表 5 木 棺 墓 一 覧 表

(単位 cm)

№	方 位	形式	墓 塚 寸 法 長さ×幅×深さ	棺 寸 法 長さ×幅×深さ	時 期	備 考
1	N15°W	B	235×140×40	170×80×20	弥生前期	5号甕棺より古い
2	N1.5°W	C	240×140×45	170×70×35		
3		B	260×110+?×60	150+?×50×20		未掘
4	N3.5°E	B	215×100×30	180×45×10	弥生前期	住居跡より古い

(註2)でも同様な現象が見られる。

馬場遺跡の弥生墳墓群は、調査面積が少ないので墓地群全体の構成を知ることができないが一応の内容を知ることができる。前期末から中期初頭には、木棺墓と甕棺墓がほぼ同時期にいとまれ、中期前半は甕棺だけとなる。中期後半が抜けて、中期末から後期前半にまた甕棺が出現している。後期後半になると甕棺が少なくなり箱式石棺が多くなってきている。このように木棺はこの地が墓地となった最初の遺構であり、糸島地方では最初の発見である。福岡県では、現在福岡平野に多く発見されているがそれは表6のとおりである。(柳田康雄)

表 6 福 岡 県 弥 生 時 代 木 棺 墓 地 名 表

遺 跡 名	所 在 地	立 地	形 式	時 期	備 考	文 献
金 隈	福岡市大字金隈	丘 陵	A・B			註3
伯 玄 社	筑紫郡春日町大字小倉	丘 陵	A・B	前末～中初	4基+4	4
一 の 谷	“ “ 大字下白水	丘 陵	A		1基	5
炭 焼	“ “ 那珂川町大字仲	丘 陵	A		1基	6
中・寺尾	“ “ 大野町大字中	丘 陵	B	前 期	2基	7
天 神 森	嘉穂郡穂波町大字椿	丘 陵	A		1基	8
日 上	“ “ “	丘 陵	A・B	中期初	7基	9
津古内畑	三井郡小郡町大字津古	丘 陵	A・B	前末～中初	11基	10
亀ノ甲	八女市大字室岡	台 地	A	後 期	2基	11

註1 柳田康雄「津古内畑遺跡—3、木棺墓と甕棺墓—P41」(小郡町教育委員会、1970)

2 松岡史「福岡県伯玄社遺跡調査概報」(『福岡県文化財調査報告書』36、1968)

3 折尾学「金隈遺跡」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』、1970)

4 註2に同じ

5 宮小路賀宏外「一の谷遺跡」(『春日町文化財調査報告書』2、1969)

6 柳田康雄外「炭焼古墳群」(『福岡県文化財調査報告書』37、1968)

7 酒井仁夫「中・寺尾遺跡」(『大野町の文化財』3、1971)

8 浜田信也「日上遺跡—位置と環境」(『福岡県文化財調査報告書』48、1971)

9 酒井仁夫「日上遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』48、1971)

10 西谷正・柳田康雄・副島邦弘「津古内畑遺跡」(小郡町教育委員会、1970)

11 松岡史「亀ノ甲遺跡—昭和38年度の調査」(八女市教育委員会、1964)

(4) 甕 棺 墓 [図版29~33, 第51~64図]

甕棺墓 木棺墓群と共に一つの共同墓地を形成しているもので、本調査では9基の甕棺墓を確認した。埋葬方向については、木棺墓のように一定していない(表7)。

表 7 甕 棺 墓 一 覧 表

(単位cm)

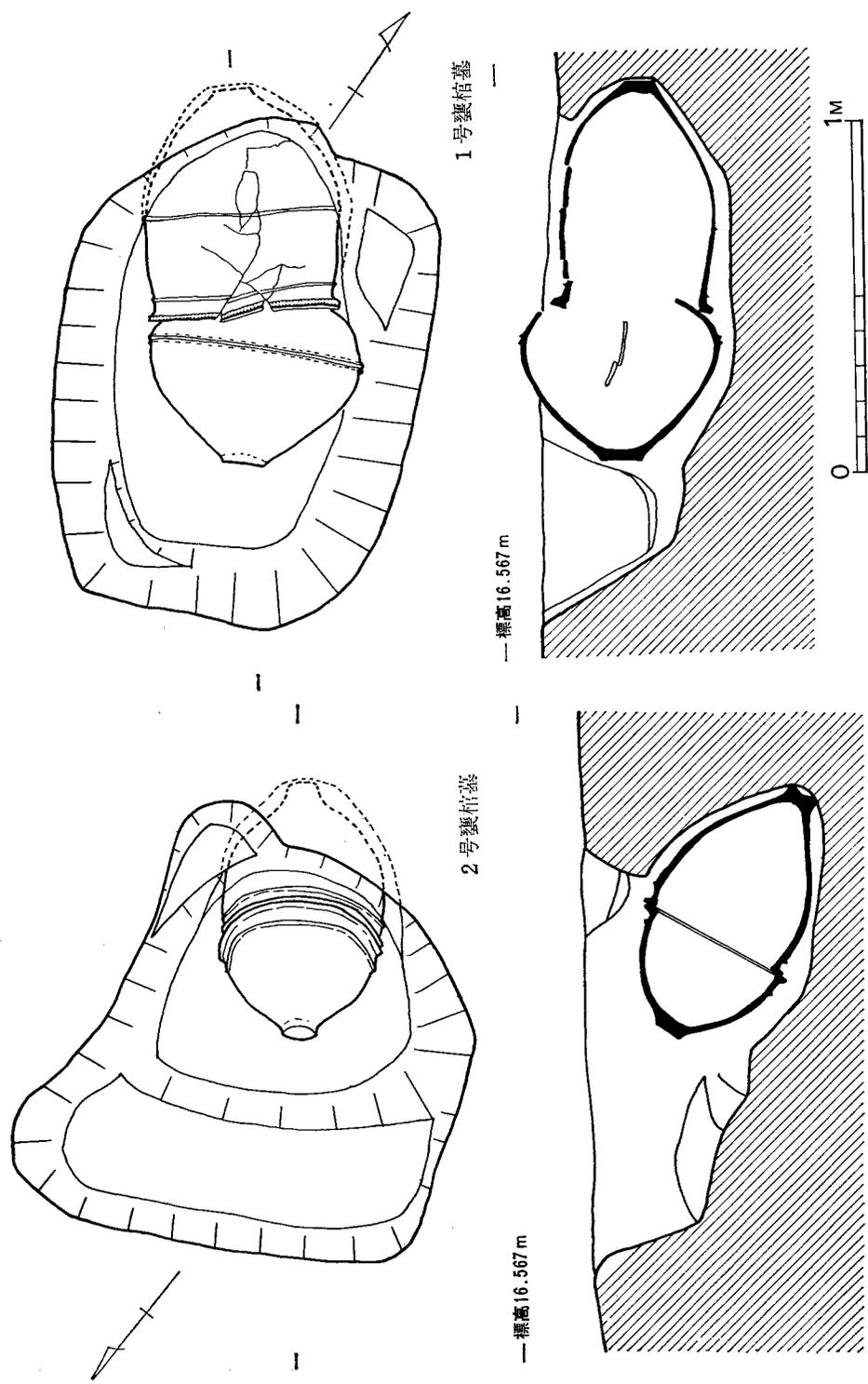
No.	方 位	傾 斜	墓 塚 長さ×幅×深さ	組 合 方	時 期	備 考
1	N37°W	-3°	方形 140×115×60	壺+甕 覆口式	弥生前期末のぼるか	上甕打欠
2	N38°W	-30°	115×120×70	甕+甕 接口式	弥生中期初頭	
3	N7°20' E	-10°		甕+甕 覆口式	弥生中期中葉	上甕打欠
4	N5°30' E	水平?		甕+甕 覆口式	弥生中期中葉	
5	N1°30' E	-54°		壺? (石膏型)	弥生中期初頭?	抜跡
6	N67° E	-16°		壺+?	弥生中期初頭	
7	N28°W	-28°		鉢+壺 覆口式	弥生後期前半	下甕打欠
8	N3°W	-17°	135×90×60	甕+壺 覆口式	弥生後期前半	
9	N80° E	-30°	130+?×130×60	単 甕	弥生後期後半	

1号甕棺墓 (第51図) 不整形の墓塚の一角に横穴を掘って埋葬された成人用甕棺である。棺は壺と甕の覆口式組合せて、ほぼ水平に近く傾斜3°で埋置されている。

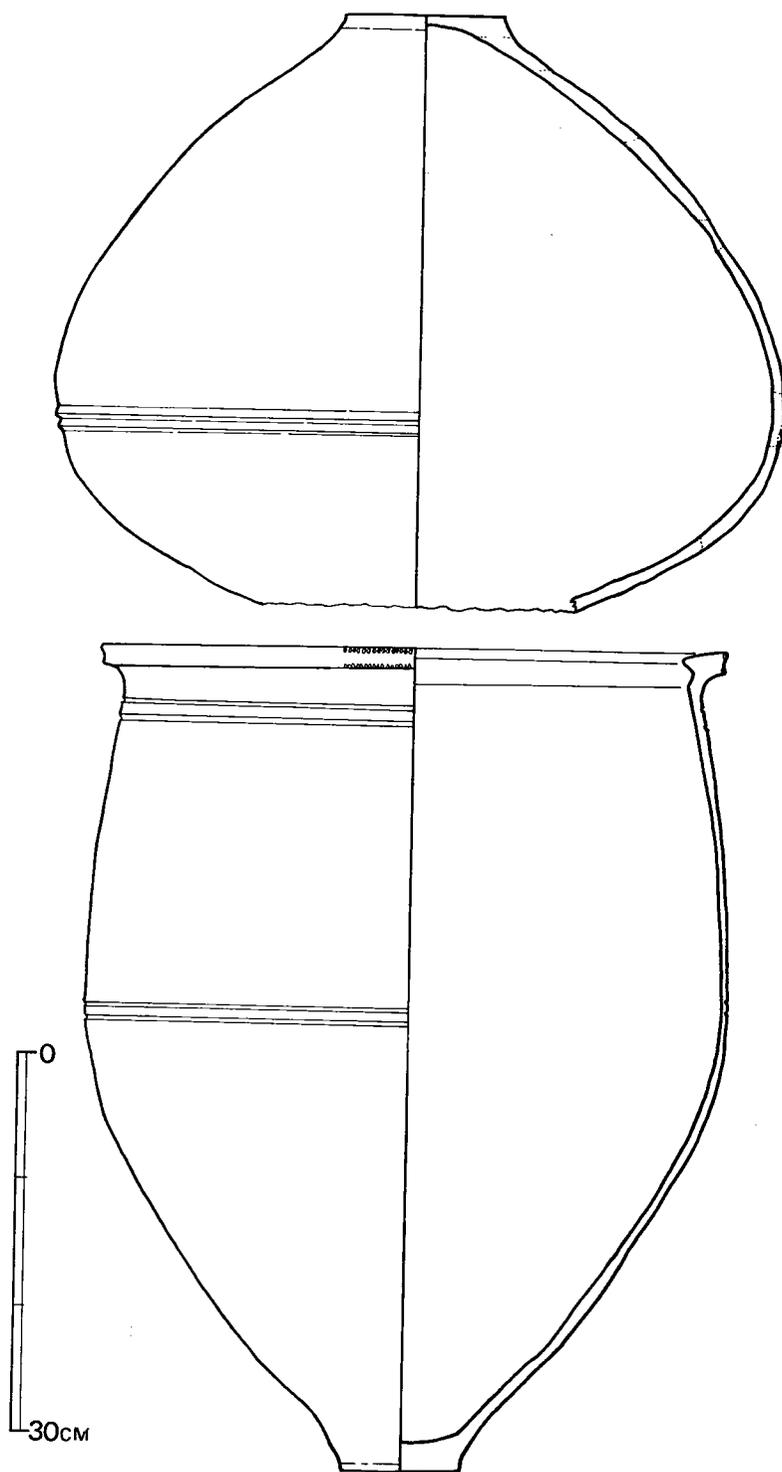
上甕(第52図)は、壺形土器で口頸部を打欠いており残高48cm、胴部に二条の凸帯を有し、胴部幅57.9cmで、色調は灰褐色を呈し、胎土に細粒砂を含み、胴部から底部までに媒の付着がみられる。器面は刷毛で横なでされ、その上から研磨されている。内面は凸帯部の接合部で刷毛にて斜めになでられている。器形から中期初頭の城ノ越式の特徴をもっている。

下甕(第52図)はいわゆる前期末の金海式の大型甕形土器で、口径50cm、高さ65.4cm、口縁部は外反し、口縁端の頂上部には、外側の上下端に刻目文をもつ断面方形の口縁部で、文様は頸部及び胴部に2本の平行横沈線文を持つ、胎土は砂粒を多く含み、器壁は胴部で1cm前後で、器面は研磨され内面は刷毛の横撫で研磨が行われており、焼成は良好で色調は黄褐色である。金海式甕と中期初頭の城ノ越式壺とが組み合されているのは、極めて稀であり、類例を引くと、嘉穂郡棕本に見られ、興味深い一例である。

2号甕棺墓 (第51図) 不整形の墓塚の一角に横穴を掘り埋葬した甕棺墓である。墓塚の北西側の一辺に1つの段を設け、南東側に斜めに下がるように埋設したもので、傾斜角は30°である。



第51図 1・2号葬棺墓実測図 (1/20)



第 52 図 1 号 甕 棺 実 測 図 (1/6)

甕棺は甕と甕の接口式組合せで、小児を埋葬したものと思われる。

上甕（第53図上）は、口径45cm、高さ29.4cm、口縁部外反し、口縁部直下に断面三角形の張り付け凸帯を持ち、口縁部下端に刻目文をもつ、この刻目は上→下についたもので、竹管状の工具と思われる。器面は刷毛にて横撫でされ、その上を研磨調整されて、内面も横撫で研磨されている。胴部から底部にかけて一部黒変し、煤の付着がみられる。器壁は1.2cm内外で、色調は灰褐色で、胎土に細粒砂を含み、焼成は良好である。鉢に近い甕である。

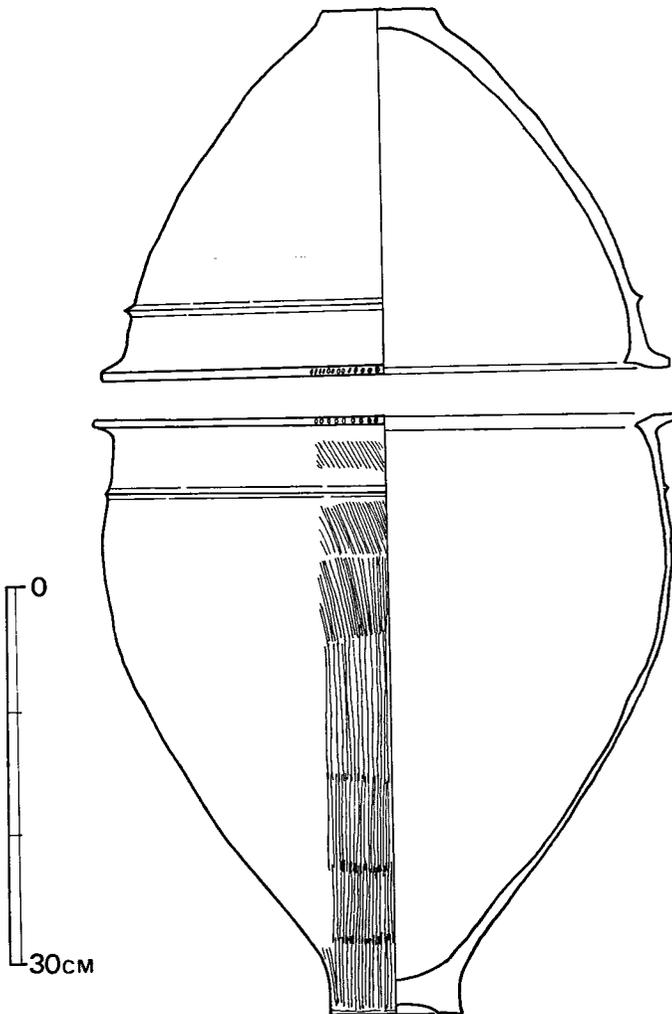
下甕（第53図下）は、いわゆる弥生中期初頭の城ノ越式の甕で、口径46cm、高さ48cmで、口縁部外反し、口縁部直下に断面三角形の張り付け凸帯を有し、口縁部に刻目文をもつ。底部は、

くぼみをもった上げ底で、器壁は胴部で6mm内外である。器面は縦位の刷毛によって調整されており、刷毛目痕は残痕として明確に残っている。また内面は刷毛による横撫で調整をおこない。胴部には2次的作用による煤の付着がみられる。色調は黒味を帯びた黄褐色で、胎土は細粒砂を含み、焼成は良好である。

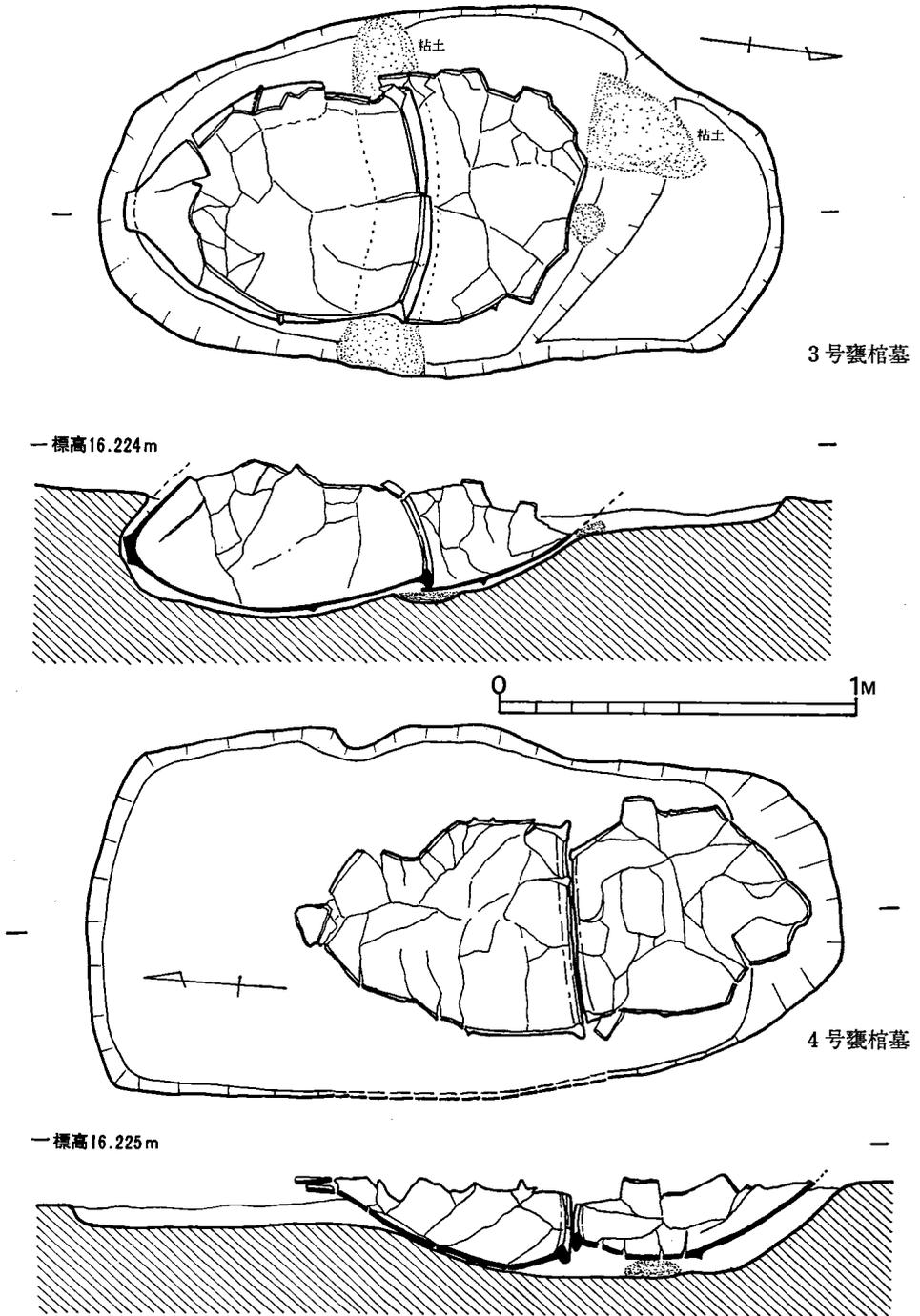
2号甕棺は以上により、時期は弥生中期初頭の所産である。1号甕棺より一時期新しいと思われる。

3号甕棺墓（第54図）

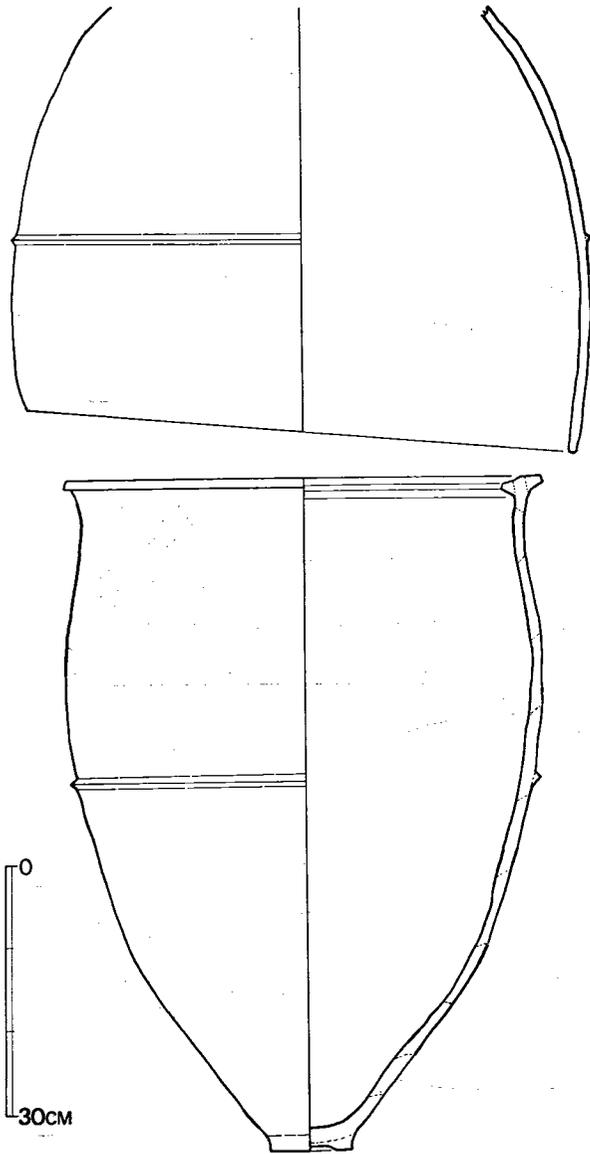
甕棺墓の半分以上は、畑の耕作中に除去され、辛ろうじて組合せ方と土器の形態は判明した。墓壇は不整長方形で、北東辺に一段のステップを有



第53図 2号甕棺実測図 (1/6)



第54図 3・4号甕棺墓実測図 (1/20)



第 55 図 3 号甕棺実測図 (1/9)

し、横穴を掘り、傾斜 10° で埋設した。組合せ方は甕と甕との覆口式で、接合点は粘土目張りを施している。また上甕を固定するために粘土を張り、接合点は一段くぼみを作り粘土を張って、棺全体を固定し密着させている。成人を埋葬したらしい、大きさにおいては今回の調査ではトップである。長さは150cm前後である。

上甕（第55図上）は、口縁部を打欠き、胴部に一条の三角凸帯を有し、器壁は1.5cm前後で、打欠きの部分は2次的に整えてある。色調は黄褐色、胎土に砂粒が含まれ、焼成は良好である。器面は刷毛にて横撫で研磨が施されて、内面も同様である。残高50cm、口径66cmである。

下甕（第55図下） 口径57cm、高さ81cm、口縁部は外反し、胴部は1条の三角凸帯を張り付け、底部は上げ底である。肩や胴の張りが少なく、口縁部のT字形断面は細めで、器壁は胴部で1.5cm前後で、器面の調整は刷毛によってなされ、色調は灰褐色で、胎土は細粒砂を含み、焼成良好で、煤の付着がみられる。本甕棺墓の差し合わせは上甕の口縁部を打欠き、粘土目張りを施して下甕と合わせてある。一般的に上甕は口縁部の内側突出部を、下甕は外側突出部を打欠いたものが多いと聞く。

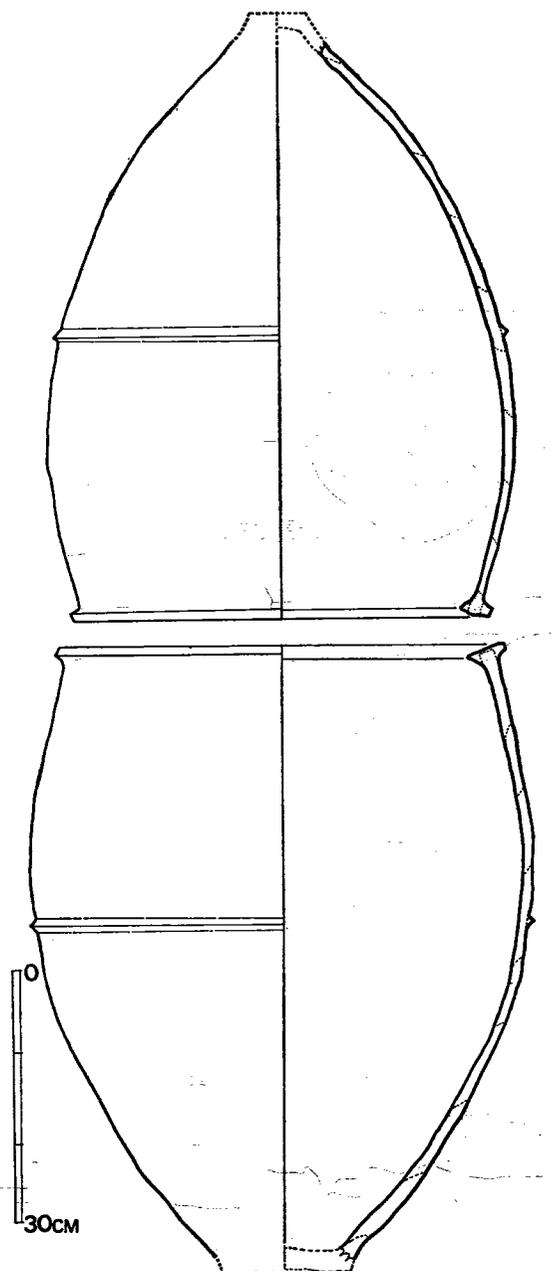
以上の器形特徴から、時期は弥生中期前半に位置すると思われる。

4号甕棺墓（第54図）

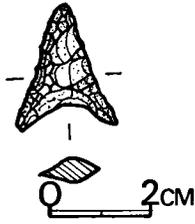
耕作によって大半は失なわれているが、辛ろうじて組合せ方と土器の形態が判明した。墓坑は不整長方形に近いと思われる。ほぼ水平に埋設し、組合せ方は甕と甕との覆口式で、地山を一段下げて、北甕を固定し、南甕は粘土をひいて、ほぼ水平に保ち、北甕との差し合せの位置を固定した。成人を埋葬した甕棺である。

南甕（第56図上） 口径50cm、残高70cm、口縁部は外反し、胴部は1条の三角凸帯を張り付け、肩や胴の張りが少なく、口縁部のT字形断面は細めで、器壁は胴部1.4cm前後で、器面は刷毛目調整がなされ、胴部下半に2次的作用による煤の付着がみられた。内面についても同様である。色調は灰褐色で胎土には細粒砂を含み、焼成は良好である。胴部の張りは3号甕棺の下甕より張り、口縁部の作り方は同じである。

北甕（第56図下） 口径53cm、残高73cm、口縁部は外反し、胴部に1条の三角凸帯を張り付け、肩や胴の張りは少



第 56 図 4 号甕棺実測図 (1/9)

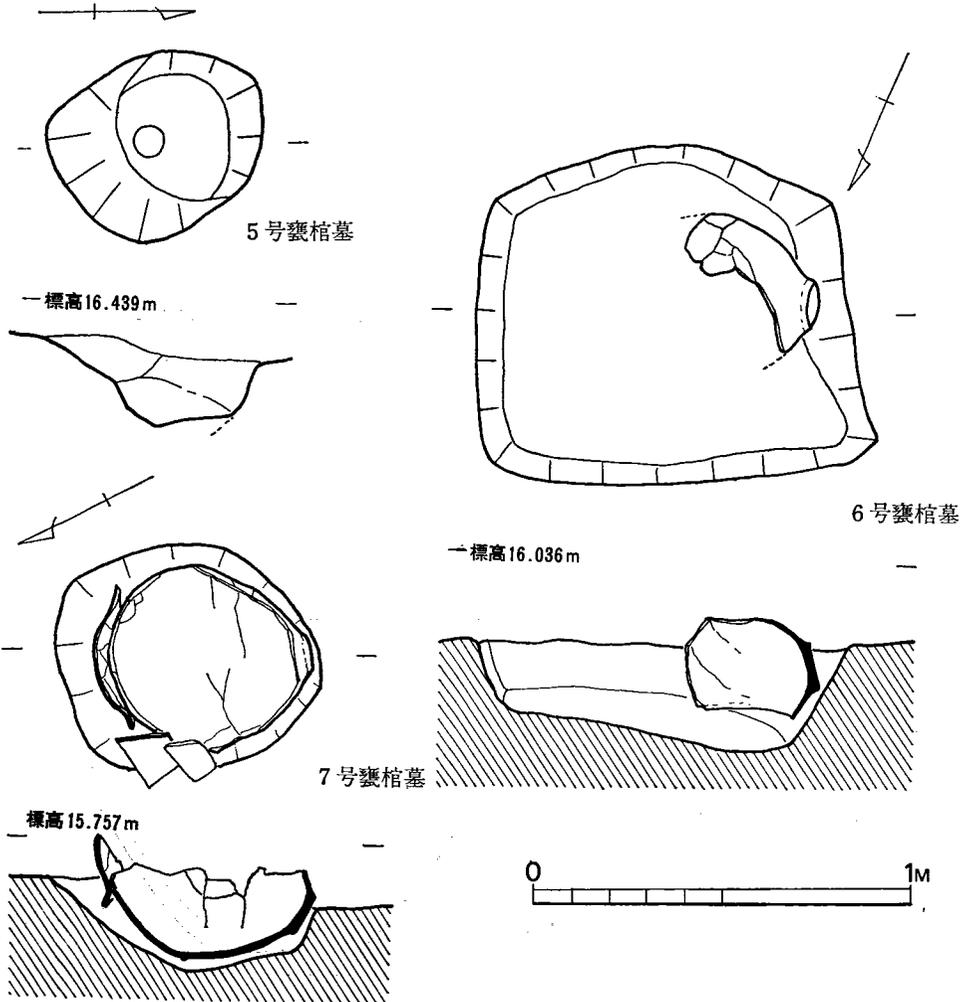


第 57 図 4号甕棺墓坑内出土遺物実測図 (2/3)

なく、T字形断面で内面突出部の張り出しが特徴的である。器壁は 1.5 cm 前後で、器面は刷毛にて横撫で調整が行なわれ、胴部下半は黒変しており、色調は黄褐色で胎土に細粒砂をふくみ、焼成は良好である。

以上、南甕と北甕の特徴を考えると、弥生中期前半に入るの
であろう。

墓坑内から石鏃が一点出土した。石質はサヌカイト製で剥離は細かく、retouch を加えており、押圧剥離によって製作されている。副葬品と考えるのは疑問である。



第 58 図 5・6・7 号甕棺墓実測図 (1/20)

5号甕棺墓 (第58図) 2号木棺墓の上において、
 抜跡だけあった甕棺墓である。耕作中に抜いたと思
 われるので、地主に抜いた甕棺をたずねたが記憶し
 ないということで、土器を当ってみることができな
 かった。遺構に石膏を流し込んで、石膏型(第59図)
 をとって計測してみた。

5号甕棺は、底辺のカーブからみて、壺形土器と
 思われるが疑問の点が多い。一応ここでは甕棺とし
 て上げる時期的に中期初頭の所産であろう。

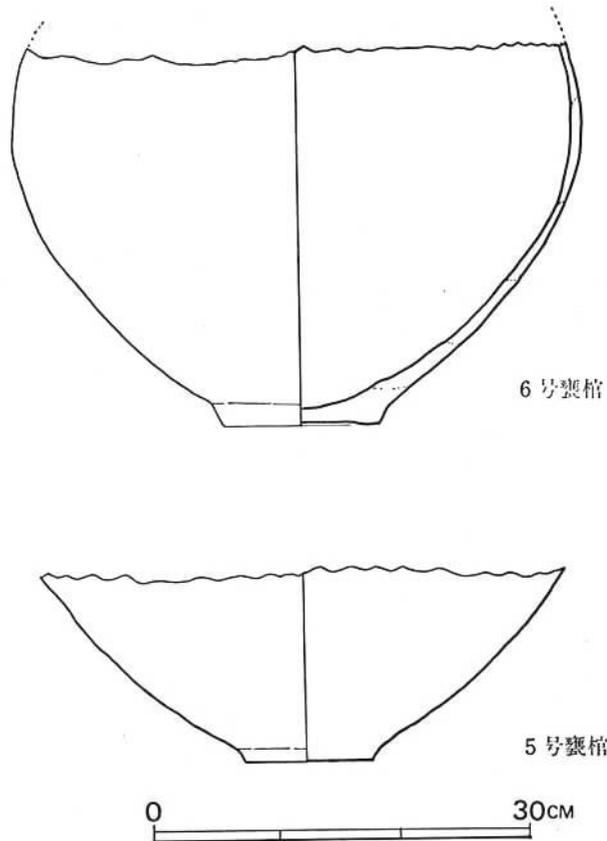


第 59 図 5号甕棺石膏型

6号甕棺墓 (第58図)

不整形の墓壇であつたらしく、一部東側に攪乱がはい
 っていたことと、耕作中に大半
 は除去されていたため不明の
 点が多い。壺形土器であつた
 ことは違いない。

壺形土器 (第60図) は、残
 高 30cm で、胴部最大幅 45.6
 cm。球形胴部の重心がやや上
 がり、胴部下半はほっそりと
 締った感じで、底は若干上が
 り、円盤張付けの底ではない。
 胴部から底部へのカーブは前
 期末の壺形土器特徴を有する。
 色調は灰褐色で、胎土に小砂
 を含み、胴部下半から底部に
 かけて、黒変しており、器壁
 は0.8~1cm前後で、器面調整
 は刷毛にて横撫で研磨で、内
 面は非常に荒れている。

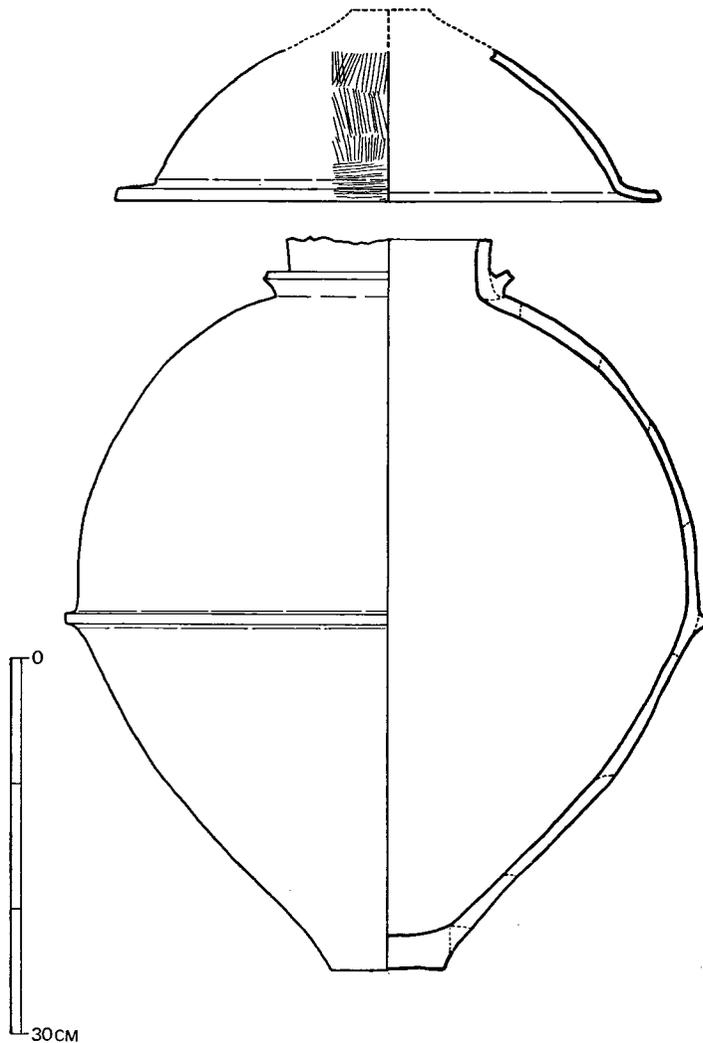


第 60 図 5・6号甕棺実測図 (1/6)

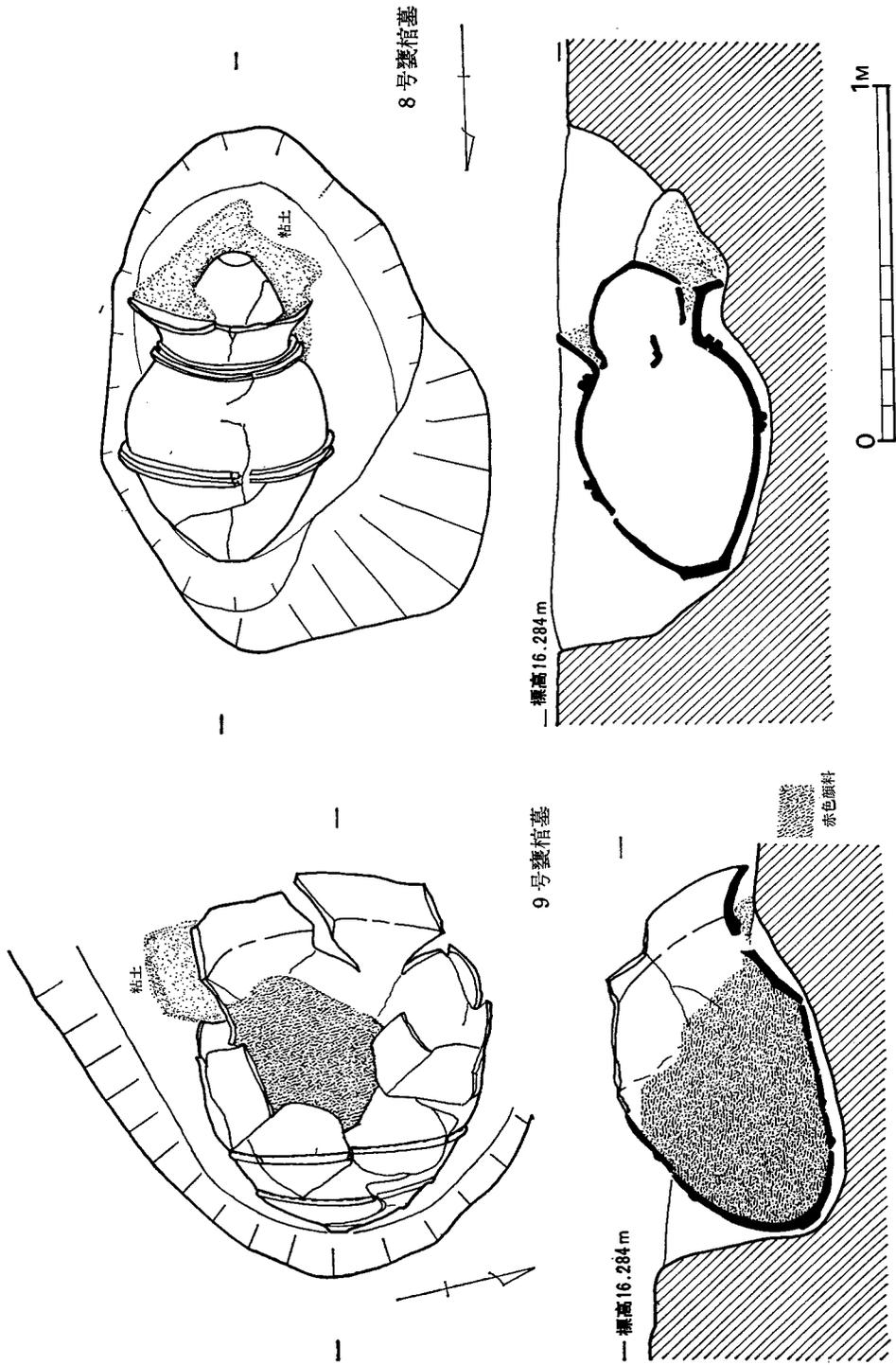
飯氏馬場遺跡

7号甕棺墓（第58図） 大半は耕作中に除かれており、辛ろうじて組合せ方と土器の形態が判明した。墓壇は不整形を呈し、長軸70cm、短軸60cmよりも大きくなる。横穴を掘り傾斜28°で埋設していた。小児用の棺であった。差し合わせは、上甕が鉢形土器で、下甕は壺形土器の口縁部を打欠いた覆口式組合である。

上甕（第61図上）は、器形は鉢形土器で口径43cm、残高12cmで、口縁部は外反し、口頸部に若干作り出しの段をもつものである。器面は刷毛にて口縁部から口頸部まで横撫で、それ以下



第 61 図 7 号 甕 棺 実 測 図 (1/6)



第62図 8・9号墓棺蓋実測図 (1/20)

飯氏馬場遺跡

は斜行縦位に撫でてある。刷毛目痕ははっきりと残痕しており、内面も同じく刷毛にて横撫で、ヘラにて調整を加えている。器壁1cm内外で、胎土に細粒砂で、色調は灰褐色を呈している。

下甕（第61図下）は壺形土器で口縁部を打欠き、残高58.5cm、胴部幅52cmで、壺形の器形から長く下がり、胴部に1条の断面コ字形凸帯を有し、底部は平底で胴部下半にいたって、締っていく。口頸部は直立し、直下に1条のコ字形張付け凸帯を持つ、器面は頸部から胴部にかけて黒変し、色調は赤褐色に近い暗褐色で、胎土に細粒砂をもち、焼成は良好である。器壁は胴部で1.2cm前後で、器面調整はヘラで研磨を加えている。

以上、甕棺墓の時期はその形態から、弥生後期前半にはいるであろう。しかし、下甕の壺形土器は一般的に器形が長くなり、安定感を失ないつつある。

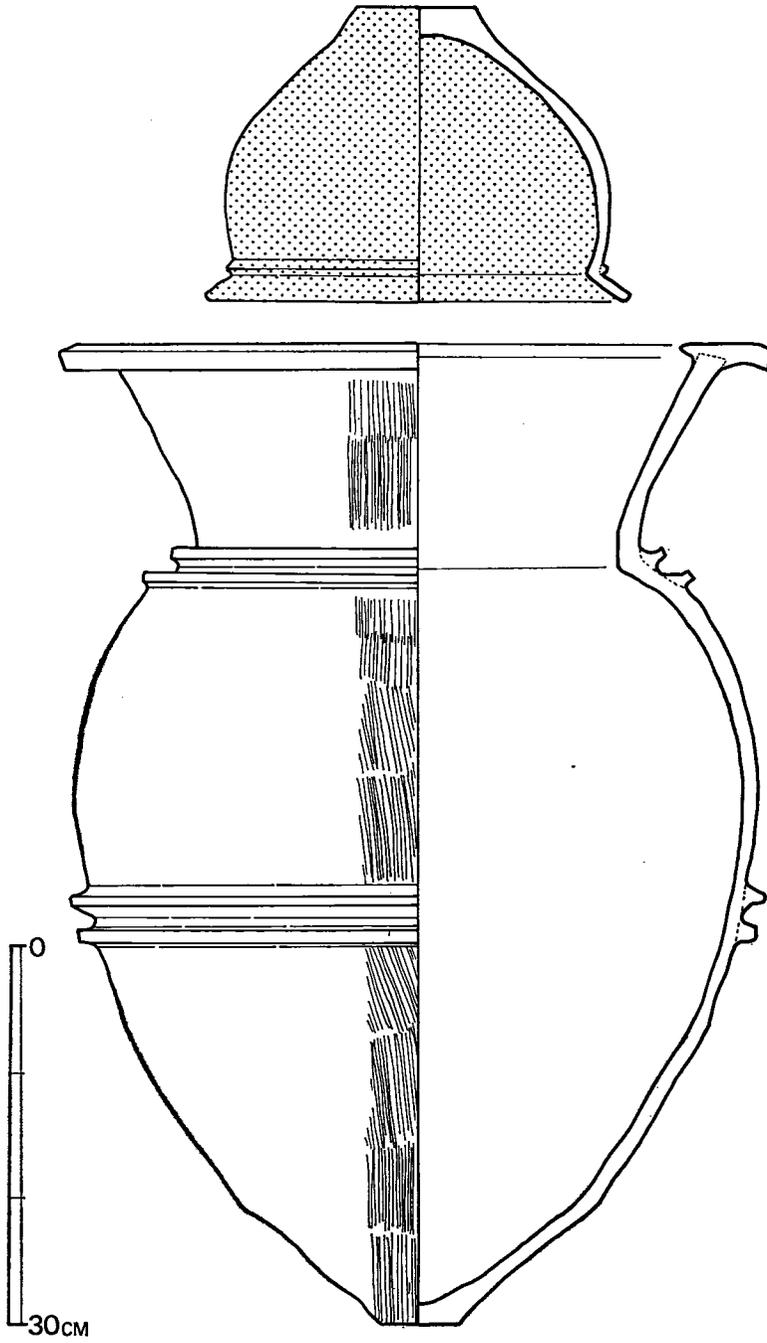
8号甕棺墓（第62図） 不整形の墓壇を掘り、下甕に相当する壺形土器を固定し、小児を埋葬したのち上甕を粘土目張りし、その上にさらに上甕を粘土で覆ったものである。差し合わせは、甕と壺との覆口式である。一般的に壺形土器は器形が細長い特長が目につく。

上甕（第63図上）は鉢形に近い甕で、口径33cm、高さ24cm、口縁部は外反し、口縁部直下にコ字形に近い三角凸帯を持ち、胴部の張りはゆるく、底部は平底である。器面は内面及び外面は丹彩で、口縁部は横撫で、胴部は縦撫で、内面は口唇部を横撫でし、胴部から底部まで縦撫で、仕上げはヘラにて研磨されている。胎土は細粒砂を含み、表面に丹彩のため傷が多く目につく、焼成は良好で、器壁は1.2cm内外である。

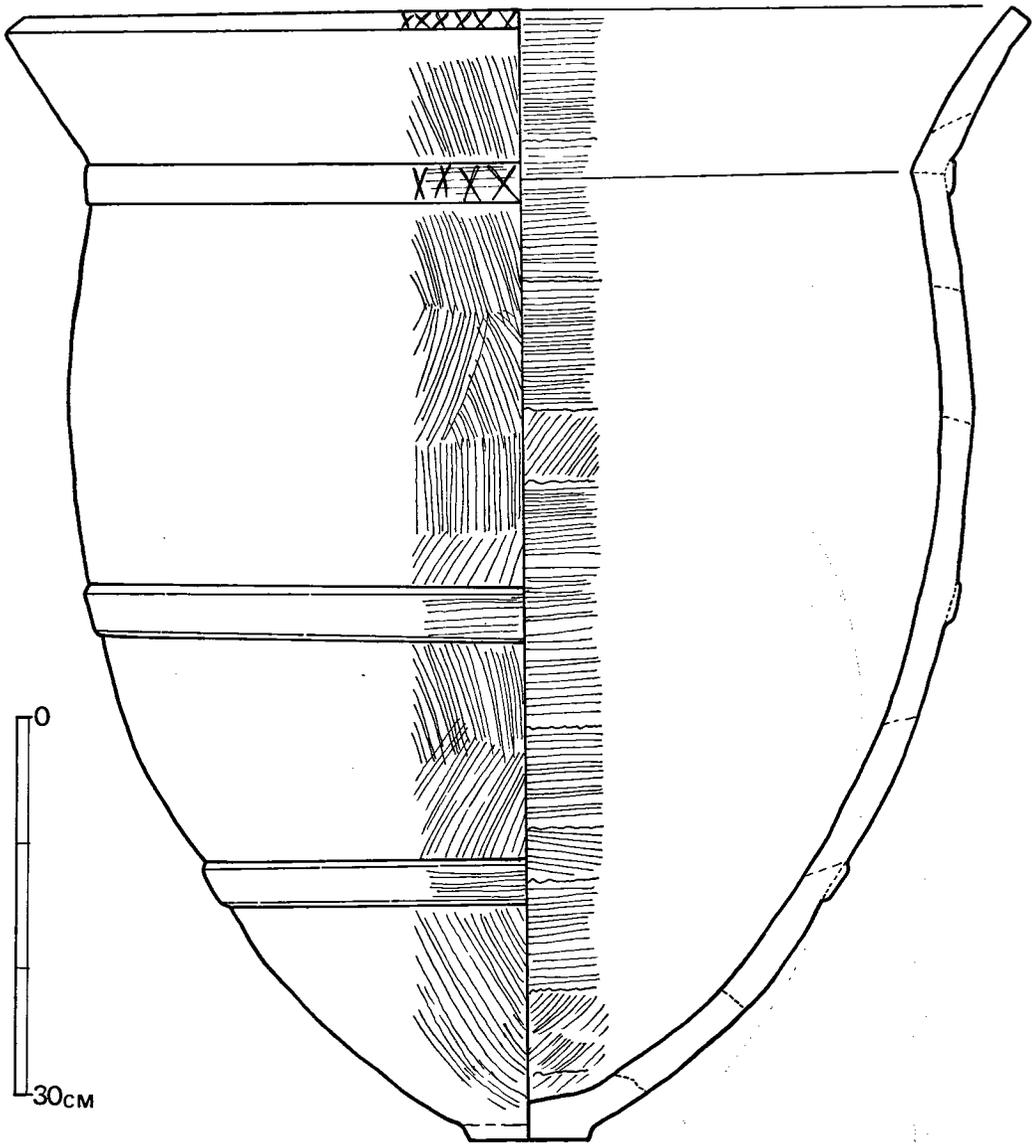
下甕（第63図下）は壺形土器で、口径55cm、高さ78cm、頸部に2条のコ字形凸帯、胴部に2条のコ字形凸帯を有し、肩張らず、細長い壺形土器となっている。頸部は大きく屈曲して外方にひろがり、口縁部は非常に誇張され、口縁部上端に平坦面をもち、内面に突出部を有し、いわゆる断面は鋏形になっている。中期的形態を充分に残している。器面調整は刷毛目の横撫で、頸部から胴部まで至っており、刷毛目痕ははっきりと残っている。内面は刷毛目の横撫でが頸部まで至っている。底部は平底で、器壁は1.5cm前後である。色調は赤褐色を呈し、胎土には細砂を含み、焼成は良好であるが、幾分脆さがある。

以上のことから上甕の形態は時期としては弥生後期的様相をもち、下甕の形態は中期後半様相を残している。本甕棺は、後期前半に入れるほうが、妥当性があると思われる。

9号甕棺墓（第62図） 不整形の墓壇の一部は耕作土によって攪乱を受けているため、不明な点がある。しかしながら、単甕であったことは違いない。ほぼ水平に掘り、はじめ底部を深くし甕を横に向け、粘土を頸部に張って固定させ安定を保った。甕の内部に赤色顔料を一面にひき、成人を埋葬したものである。



第 63 図 8 号 墓 棺 実 測 図 (1/6)



第 64 图 9 号 甕 棺 实 测 图 (1/6)

甕（第64図）は、口径81cm、高さ90cm、口縁部「く」の字に外反し、円筒状の胴部が続き、底部より20cm程のところから急にすぼまり小さな底部がついている。頸部に1条と、胴部中央部に1条、胴部下半部に1条の張付台形凸帯がめぐらしてある。口唇部及び頸部の台形凸帯には、×印状の斜行沈線文様を施している。器面調整は内外とも粗い刷毛目が施こされ、内面の調整は刷毛にて横撫でし丁寧に仕上げている。外面は、凸帯部だけ刷毛にて横撫でし、他部分は縦位の方向で乱雑に仕上げている。色調は黄褐色で、胎土に細粒砂を含み、焼成は良好で、胴部にかけて一部黒変しているところがある。

本甕棺の器形は、弥生後期後半の甕棺の特徴を有する。

以上が、1～9号までの甕棺について遺構と遺物をふくめた形で説明を加わえた。その結果弥生前期末から弥生後期後半までの時期差をもつことができた。編年については、4.結びで、項目として示めす。（副島）

(5) 石 棺 墓 [図版34～36, 第65～67図]

弥生時代の甕棺墓のある時期と併行して、小形の石棺墓が存在したと推定される。石棺墓はB調査区（第42図）だけで、3基発見されている。方向はほぼ北西から北東に位置している。

表土下40～60cmと浅く存在したために、そのほとんどの石棺は側壁及び天蓋が耕作のために抜かれており、完全な形では発見されなかった。

小形石棺墓の時期は弥生後期の所産と推測される。

棺内からの副葬品は見られず、しかしながら3号石棺墓の抜き跡の付近から、小型仿製内行花文鏡と刀子、2号石棺墓付近から不明鉄器が出土している。

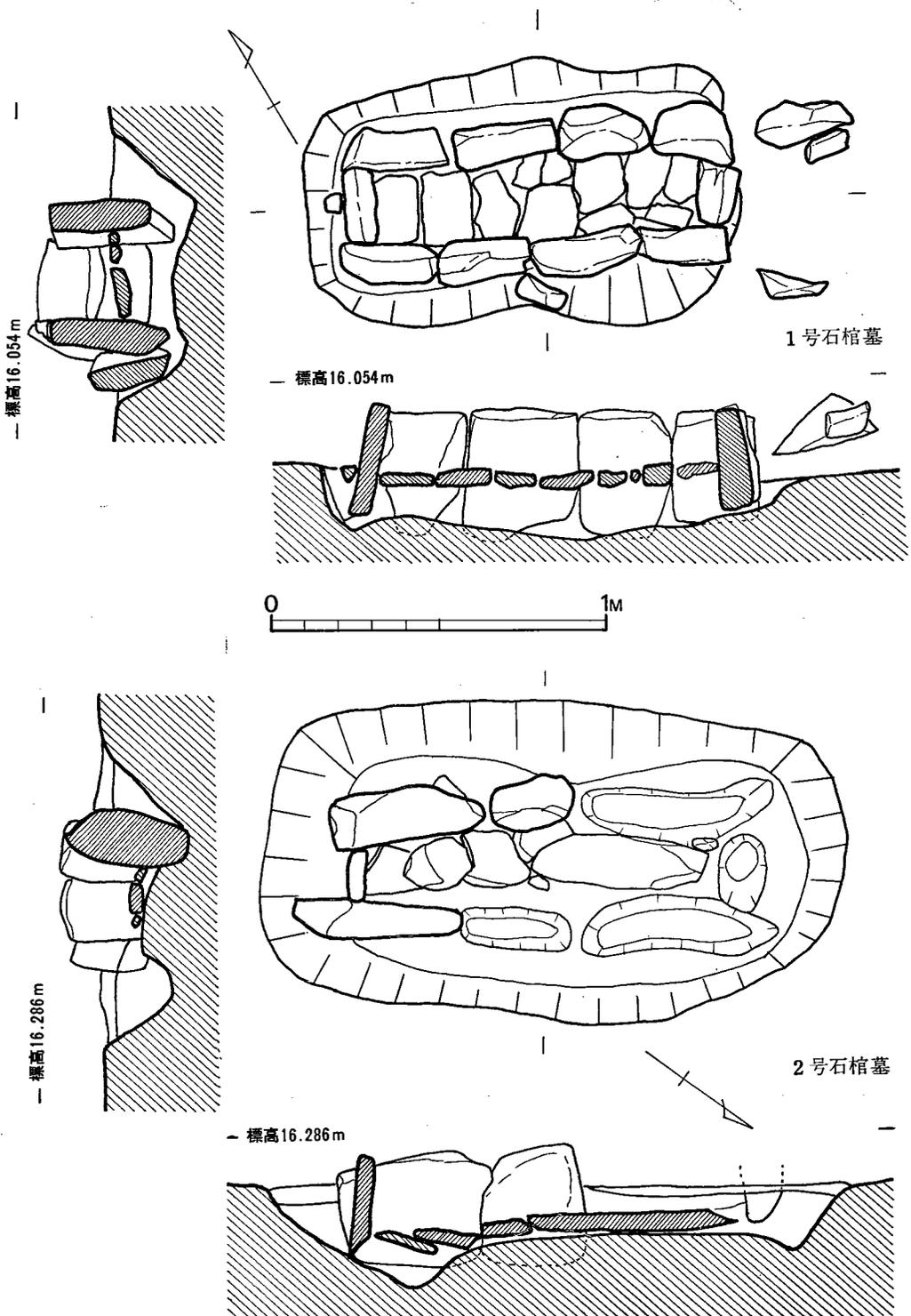
これらの遺物は、ほぼ石棺の中に副葬されていたものと考えられる。

方向及び内法は次表の通り。

表 8 石 棺 墓 一 覧 表

(単位cm)

№	方位	墓壇形状	墓壇 長さ×幅×深さ	石棺寸法 長さ×幅×深さ	時期	備考
1	N58°W	隅丸長方形	130×75×20	103×27×20		内面赤色顔料塗
2	N63°E	隅丸長方形	175×95×30	105×23×15	6号甕棺より新しい	不明鉄器 赤色顔料塗
3	N2°E	隅丸長方形	200×70×20	165×30×5	住居跡より新しい	抜き跡あと上げ土より鏡、刀子



第 65 图 1・2 号石棺墓实测图

1号石棺墓（第65図上） 石材は安山岩と一部に花崗岩を使用し、ほぼ長方形に組合せた石棺墓である。棺の内法は長さ103cmで、幅27cmである。

墓壇は、ほぼ隅丸長方形で、長さ130cm、幅95cm、深さ30cm、南側が徐々に上がり、15cmである。本遺跡の石棺の中では一番小さい。

積石の大きさは、40cmぐらいの石材を、縦にし、それを腰石とし、棺底からの残高は20cmである。すでに蓋石は完全に破壊されており、本来の高さは知ることができないが、天井石と側壁との接合部に粘土目張りが、行なわれていたためか、石棺内の床面には10～20cm内外の角礫を敷石として水平に床面を保ち、その上一面に2cm程粘土が堆積していた。

床面の敷石及び側壁内面は赤色顔料を塗布してあって、棺の内壁は少し内傾気味である。この棺の内法の大きさからは、成人の埋葬は考えられず、小児あるいは若年者の埋葬石棺と考えるべきである。

2号石棺墓（第65図下） 石材に安山岩を用い、ほぼ長方形に組合せた石棺である。棺の内法は長さ105cmで、幅23cmである。墓壇は、ほぼ隅丸長方形で、長さ175cm、幅95cm、深さ40cmで、南側は一段深く掘られ、側壁の石材を固定し、その後小口づめしたものと思われる。側壁の隙間に粘土を詰込んだもの、床面及び側壁、小口は赤色顔料を塗布したものと思う。床面は長方形の礫を敷き、棺床を水平に整えたもので南側が若干低くなっている。

側壁及び小口は抜き取られており、抜き跡の調査に重点を置いた。

墓壇は側壁の位置を1段深く掘り込み、固定するために、棺床を上げている。その上に敷石をしいたもので、棺内副葬は見られない。墓壇の一部は6号甕棺墓の墓壇を切っているため、この石棺墓は6号甕棺墓より新しく、時期的には弥生前期終末以後になる。

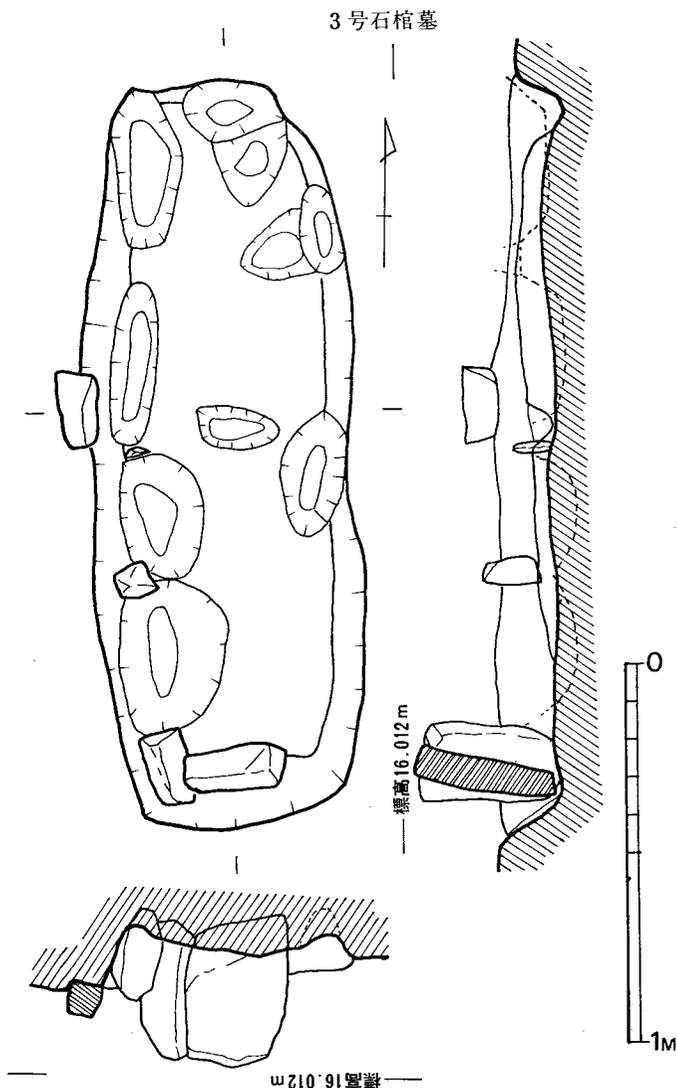
付近から鉄製品（図版36-2）が出土している。

不明鉄器（図版36-2） いっけん鉈をまげたものみみたいな形態をして、現在で見るところのピンセット状のものである。しかしながら、断面は細い竹管を2つに割った半截竹管の形をもつもので、ここでは用途不明鉄製品として上げておく。

3号石棺墓（第66図） 石材は安山岩で、ほぼ長方形に組合せた石棺墓である。棺の内法は推定で、長さ165cm、幅30cmである。大きさから成人を埋葬することは可能であると思われる。

墓壇は隅丸長方形で長さ130cm、幅70cm、深さ20cm前後で、大部分は破壊されており、南小口部が一部残存しているだけである。調査は抜き跡を追及することとし、この結果30cmから50cmぐらいの長方形の石材を立てて腰石としたもので、南小口部は内傾しており、棺床に敷石があったかどうかは不明である。

抜き跡から側壁の位置は1段深く掘り込まれ、固定されたため、棺床は上がっている。以上



第66図 3号石棺墓実測図 (1/20)

刀子(第67図上) 長さ7.6cm、幅1.6cmで柄の部分は残存しておらず、全体の形態は推しはかることはできない。断面は二等辺三角形の平棟平造である。全体錆化し茶褐色を呈している。

鏡(第67図下) 平縁一部欠失しているが、大部分は残っており、面径7.9cm、ソリ0.15cm、鈕径1.2(鈕の張り出し部を含む)cm、鈕高0.4cm、縁の厚さ0.3cm、縁幅0.9cm、重さ59gを計測する。錫の含有量は少く、手磨れがあり錆上りが悪く灰白色の粉がついてくる。鏡面の色調

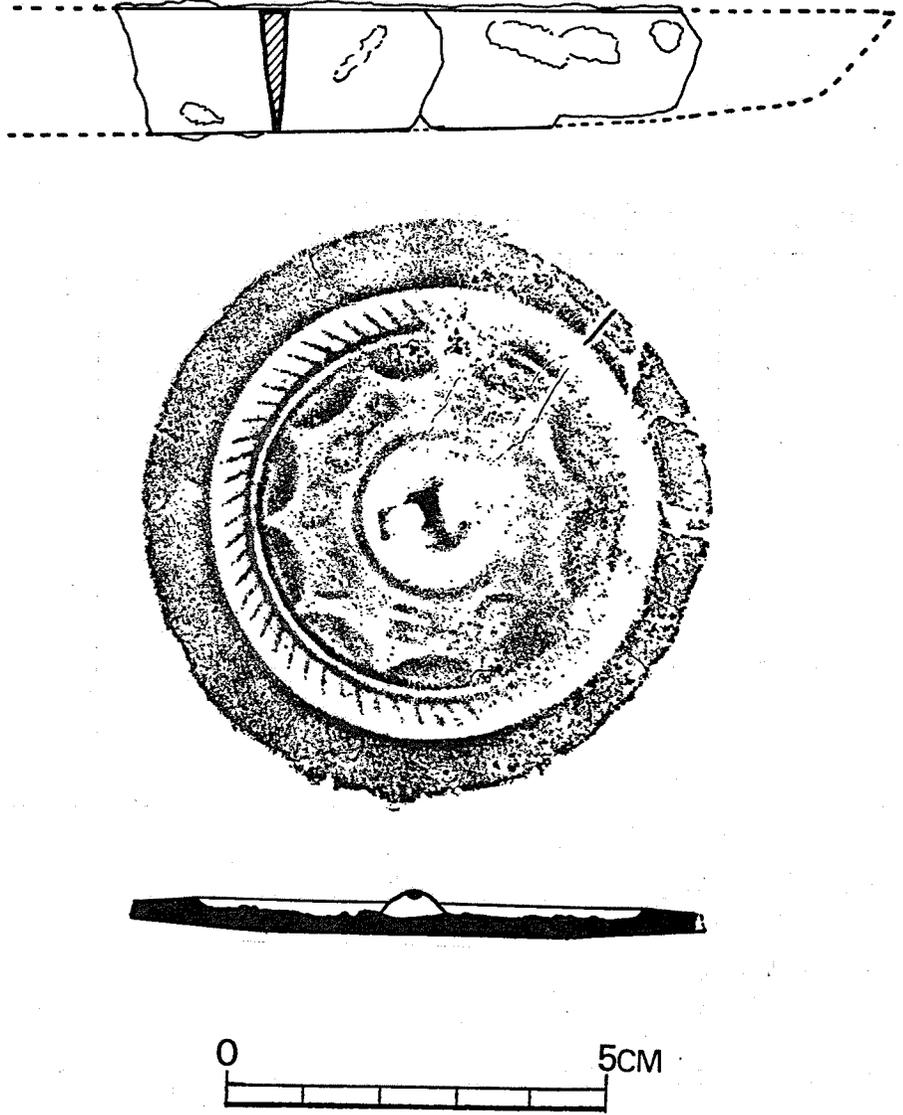
のことを考えると敷石があってもよいと思われる。

北側の抜き跡は若干攪乱を受けているため、はっきりしなかったが、西側壁の抜き跡は明確につかむことができた。

本石棺墓が、今回最大なものである。棺内には副葬品は見られず、付近から小型仿製鏡と刀子の出土がみられた。これらの遺物は遺構が破壊されているため、棺内に副葬されたものが流出したものと考えた方が妥当ではなかろうか。

時期は、弥生時代中期初頭の住居跡の上であって、それより新しくなる。B区では古墳時代の遺物は少なく、そこまでさかのぼることはないと思われ、弥生後期が妥当な線ではないだろうか。

刀子(第67図上) 長さ



第 67 図 3 号石棺墓付近出土遺物実測図 (1/1)

青灰色を呈し、鏡面および背面には赤色顔料の付着がみられる。

鏡背は、平縁から外区に0.45cmの斜行櫛歯文で、内区に10弧文の内行花文、その内側に前漢鏡の影響をうけた文様施し、鈕を一重圏で巻いている。鈕にコ字状の張り出し部を持っている。文様構成から漢代の日光鏡の影響が認められる。(副島)

(6) 土 塚 墓 [図版36・37, 第68~71図]

発見された土塚墓は合計7基である。A区中央部で一群をなし、頭をほぼ北方向に向け、平面形は隅丸長方形、不整楕円形に分類できる。

土塚墓全体にわずかであるが、人骨片が残っており、副葬品は1号土塚墓から発見された。

表 9 中世土塚墓一覧表

№	方 位	形 状	墓 塚 寸 法 長さ×幅×深さ	人骨年齢	副 葬 品	備 考
1	N35°40'E	不整楕円形	125×70×16	熟 年	龍泉系青磁	火葬骨
2	N36°30'W	隅丸長方形	79×38×10	小 児		
3	N38° E	不 整 円 形	45×47×5			
4	N36° E	不整楕円形	72×60×13			
5	N4° E	不整楕円形	90×70×15	熟 年		
6	N20° E	不整長方形	90×45×13	小 児		
7	N42° E	隅丸長方形	102×45×15	若 年		

註・年齢を表わす術語の意味は下記の通りである。

熟年は30歳台および40歳台

若年は10~20歳

小児 10歳以下

1号土塚墓 (第68図) 墓塚の大きさは長さ125cmで、幅70cm、深さ16cmで、その形状は不整楕円形で、頭部を深く掘り下げ、頭位置を北にして仰臥屈葬で埋葬されていたと思われる。

副葬品としては青磁片をもっており、土塚墓群の中では大きい方である。

青磁 (第70図) 底部の破片である。底径4.6cm、残高1.6cmの底はヘラ切によって作られ、高台は削り出され、器形は椀形と考えられる。内面の見込文様は花文様で、胎土は暗灰褐色粘土を使用し、釉に淡緑色の透明釉である。見込の花文様は濃紺の釉にて描写されている。

龍泉窯系青磁で、時代は宋代にのぼるものであると思う。時期的には12~13世紀代ということである(註1)。

2号土塚墓

(第68図中)

墓塚は隅丸長方形で、大きさは長さ79cm、幅38cm、深さ10cmで土塚墓の中で一番小さく、小児骨残片が出土している。頭位置は北西をむけて伸展葬であったかもしれない。

3号土塚墓

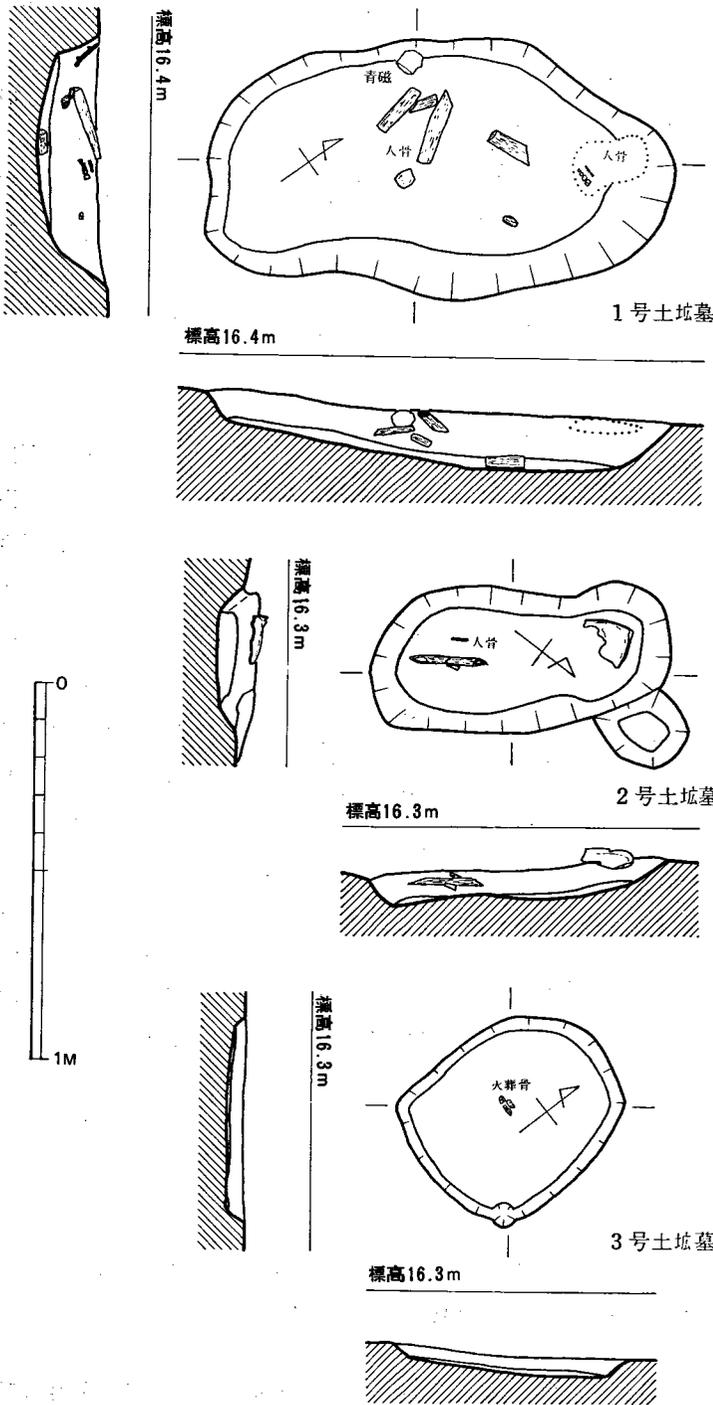
(第68図下)

墓塚は不整楕円形より円形に近い。大きさは長さ45cm、幅47cm、深さ5cmで中央部に火葬骨の残片が若干出土している。これらの骨では性別年齢も推定できなかった。

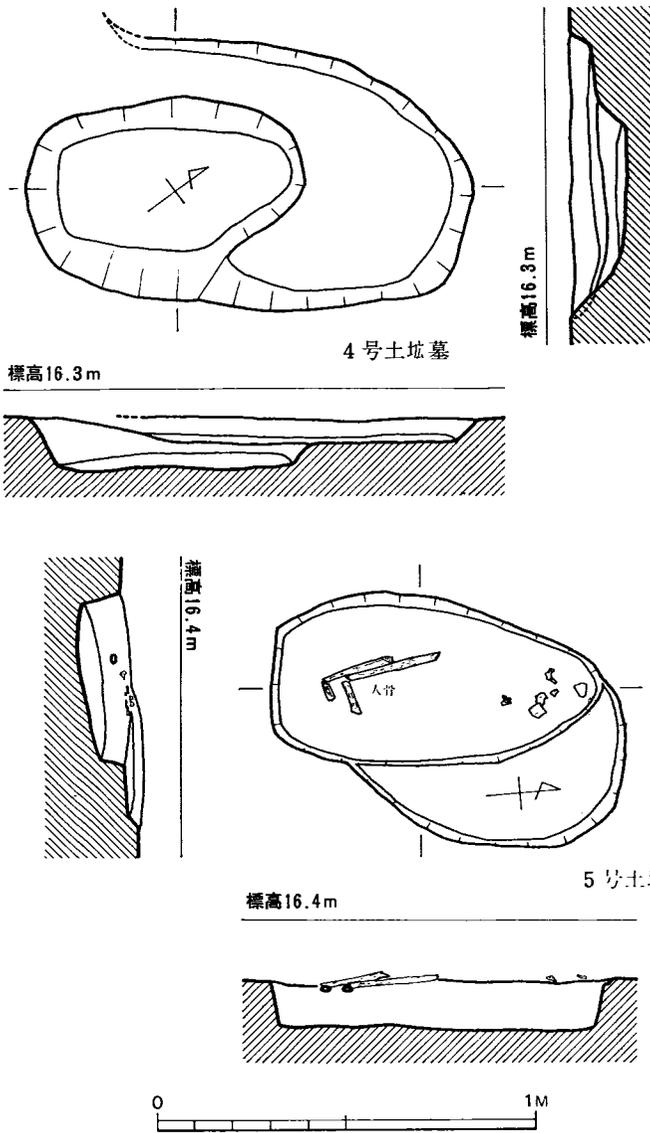
4号土塚墓

(第69図上)

墓塚は不整楕



第 88 図 1・2・3 号土塚墓実測図 (1/20)



第 69 図 4・5 号土塚墓実測図 (1/20)

円形で、大きさは長さ72cm、幅60cm、深さ13cmを計測する。2段に掘り込まれており、骨は消失していた。2段目の平面形は不整楕円形で長さ70cm、幅40cmである。

5号土塚墓
(第69図下)

墓壇は不整楕円形で、大きさは長さ90cm、幅45cm、深さ13cmを計測される。墓壇は2段に掘り込まれており、頭を北に向けて、仰臥屈葬しており、成人骨であった。2段目の平面形は不整楕円形で、大きさは長さ40cm、幅30cm、深さ10cmである。

6号土塚墓
(第71図上)

墓壇は不整長方形で、大きさは長さ102cm、幅45cm、深さ15cmを計測する。墓壇には歯の一部が残存している。歯の位置から頭は北向で、歯芽の状態から小児が埋葬されていたらしい。

7号土塚墓 (第71図下) 墓壇は隅丸長方形で、下顎の一部と歯、足部が若干残存している。骨の残りぐあいは、ひどく悪く、取上げに苦心を要した。足部のぐあいからみて仰臥

屈葬されていた。

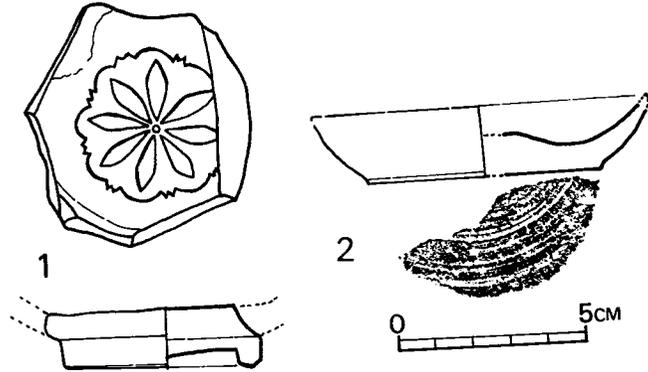
土塚墓付近から、土師器
(第70図2) が出土している。

土師器 (第70図2) 口
径9cmで、残高1.5cm、平
底で底部に糸切りがついて
いる。焼成もひょうじょうによ
く、色調は黄褐色で、胎土
に細粒砂を含んでいる。こ
の土師器は中世にはいると
思われる(註2)。

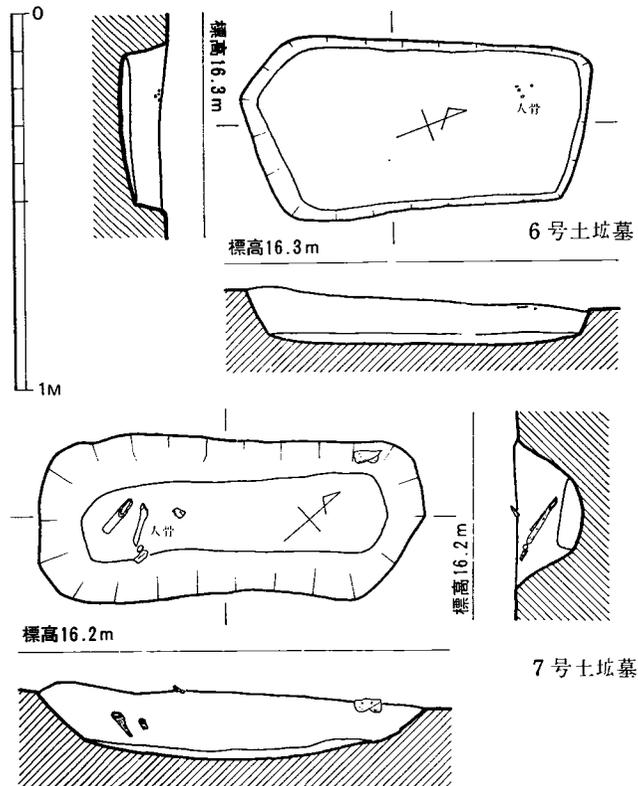
以上、各土塚墓の特徴を
述べたが、墓塚の大きさは
一覧表(表9)を参照され
たい。人骨については次節
で述べる。(副島)

註1 小山富士夫氏の御教示
を得た、記して謝意を
表す。

2 この時期の土師器の研
に宛ててはその端
緒ついたばかりで、前
川威洋氏の「浦城跡—
筑紫郡太宰府町所在中
世城跡の調査—」『福
岡県文化財調査報告書』
45、1970)の中で分類
してある。この土師器
はⅡ-2類に相当する
と思われる。



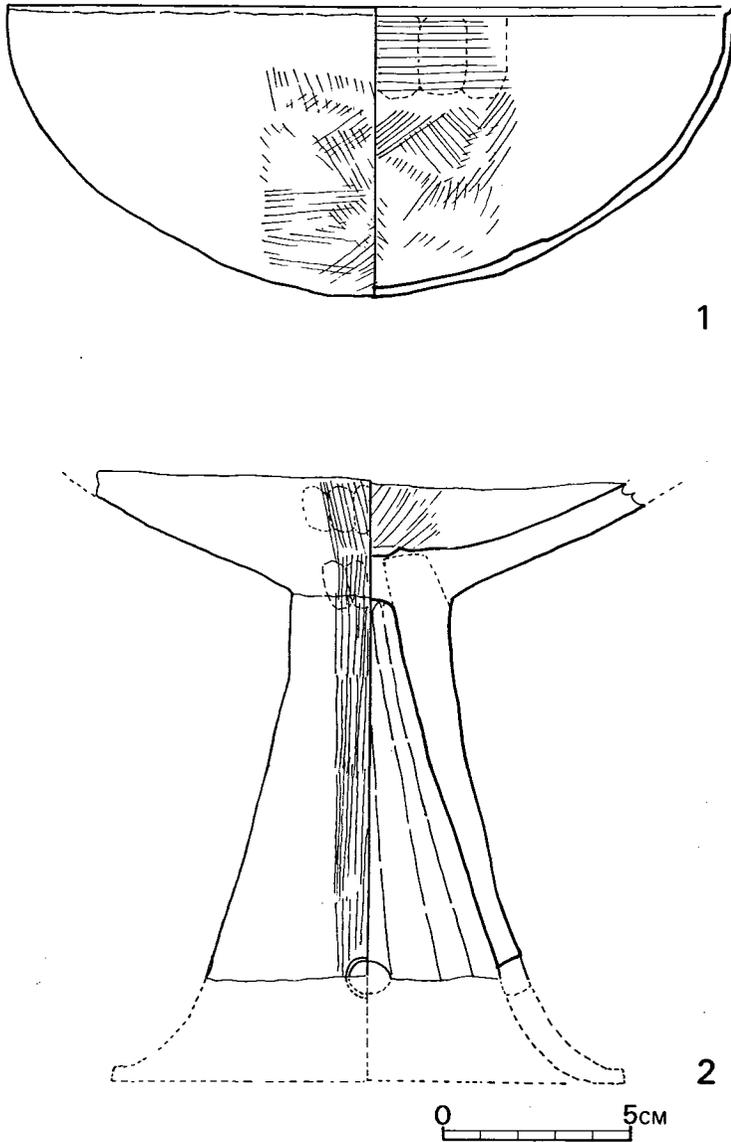
第70図 歴史時代遺物実測図 (1/2)



第71図 6・7号土塚墓実測図 (1/20)

(7) その他の遺構と遺物〔図版38~40, 第72~74図〕

この章は時代の古いものから順に説明してきたわけで、本節では pit 遺構と遺物を述べた後、II層出土の遺物、表土層遺物の順をおって述べてみる。



第 72 図 pit 遺構出土遺物実測図 (1/2)

A区(第41図)
pit 1 は不整形の平面形を持ち、西南端にあって、上部には攪乱がはしり、遺物の出土は見られず、断面は摺鉢状にだらだと落ち込み、深さ20~30cmである。この pit 遺構は時期を決定することもできず、その性格は不明である。

pit 2 は 1号木棺墓の横にある平面形は不整形で、大きさは長軸 120 cm、短軸 100 cmで、断面は摺鉢状で深さ 20 cm である。覆土中及び床面からは遺物及び骨片もみられなかった。そ

の性格不明であるが、ただ中世土坑墓群に隣近するところから、土坑墓になる可能性を持つ、これといった決め手をもたないので、pit 遺構としてあげておく。

B区（第42図）3号石棺墓南東側に不整形形のpit 3があり、これから古式土師器（第72図1）が出土している。

古式土師器（第72図1）口径19.3cm、高さ7.7cmで椀形土器である。色調は灰褐色、胎土に小砂を含み焼成は良好で、器面には口縁部から胴部下半にかけて、煤の付着がみられ、器壁0.4cm前後である。内面口唇部に段を設けている。器形は半球状を呈する。器面は内外面とも刷毛で仕上げられて、刷毛目は非常に不規則で残痕ははっきり残っている。内面の上半は横なで、指痕が残っている。pitにはりついた状態で出土した。時期的には弥生式土器の影響を受けているが、土師器的様相を持ったもので、ここでは一応古式土師器として考える。

文様土器（図版38-2-①）住居跡上面の中央部で不整形円形を呈するpit 4から出土した文様土器で、羽状の文様をもった壺形土器の胴部にある文様帯である。色調黄褐色で、胎土に細粒砂を含み、焼成は良好で器壁は1cmで、表面が研磨され、その上から2段の羽状文が施されている。施文具は貝殻口唇部を使用したもので、しかしながら若干疑問点があるが、施文具の復原まで時間的余裕がないために一応貝殻施文としておく、器形は大形の壺形土器である。

図版38-2-②は、色調は暗黄褐色で、胎土は細粒砂が含む、焼成は良好で文様は幅の狭い羽状文で構成されている。

図版38-2-③は、色調は赤褐色、胎土に細粒砂をふくみ、焼成は硬く締り、器壁は0.5cmである。器形は壺形土器で胴部に弧文が丹によって彩色されたものである。器面は彩色以前にヘラにて研磨され、その上に描き出されている。

これらの文様土器は時期として弥生前期後半になると思われる。

褐文様土器の他に住居跡の北東端のpit 5は柱穴の上面にあって、平面形は楕円形で、出土遺物は壺形土器片（図版38-1）である。

図版38-1は、ずんぐりした器形をもつ壺形土器で、口縁部は若干外方へひろがり、胴部上半に断面三角形の張付凸帯を三重にめぐらしたものである。色調は赤褐色で、焼成は非常によく器壁は0.7cmで器面はヘラにて研磨されている。弥生中期後半土器片である。出土状態はpit中より散々して流入した形であった。

遺構状態は断面が摺鉢状を呈し、長軸90cm、短軸50cmで、平面形は楕円形を呈したもので、深さ20cmであった。この時期の遺物が出土していることは、この遺跡のどこかに、生活面があったことが推定され、今後調査する時には重視しなければならない。

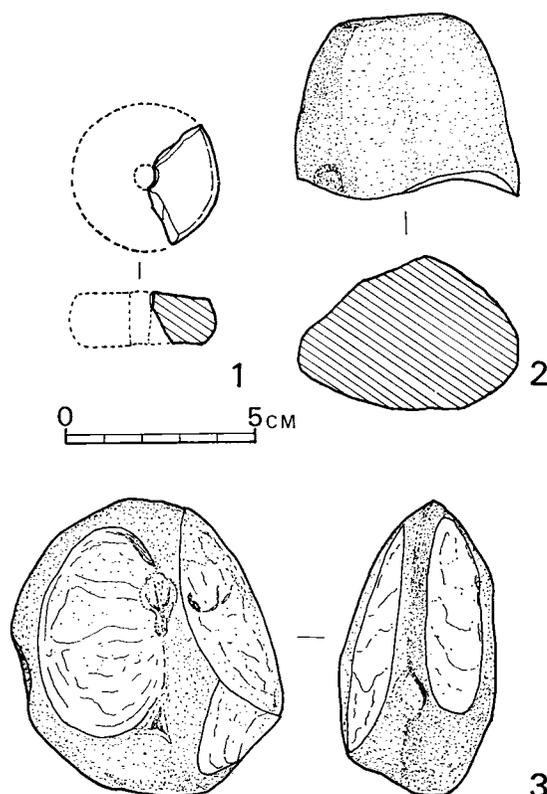
高杯（第72図2）住居跡の北側にpit 6がある。ここからは高杯を出土した。それは横倒しの状態であった。杯部及び脚部は破損していて、色調黄褐色で、胎土に細粒砂で金雲母の混入がみられ、焼成は良好である。残高は13cmで、高杯の脚部は上部まで中空である。その裾

飯氏馬場遺跡

部に4個の円孔を持ち、脚部はひろくものと思われる。器面は杯部と脚部の付け根とその上部に接合時の指痕が残って、全体を刷毛にて縦位に撫でられている。仕上げは研磨が施こされて、時期的には弥生後期後半から古式土師の特徴を有するもので、より弥生的様相が強い。

II層(図版40-2) 灰黒色土から出土したものの、大部分は弥生式土師の破片で、表土からの攪乱を一部受けている。弥生前期末から弥生中期の土器が主体であった。その中でも弥生中期前半の占める割合が多かった。色調は浅い黄褐色から灰白色に近い黄褐色までの色彩を呈し、胎土に細粒砂を含み、焼成は硬く締って、もろさがある。底部は平底が多く、甕形土器が主体を占めていた。器面の調整は内外とも刷毛で仕上げられたものが多く、研磨を施こし、器壁は0.5~0.9cmであった。

表土層(図版39、第73~74図) 出土した遺物は魚箱2杯分で、量的には少なかった。各時期のものが重複しており、須恵器・土師器・近世陶器等も含まれて、大半は弥生式土器片が多かった。



第73図 表土層出土の遺物実測図 (1/2)

本遺跡から出土し弥生式土器は他地域よりも残りぐあいがよく、表面に亀甲状のこまかな剥落はみられない。焼成は一般的にかたく良質で、胎土の粘土しまりはよい。この地方の低丘陵は砂の多い地質であることも一要因となる。

図版39・40は表土から出土したものを選擇して上げたものである。B区の中央部より壺形土器(第74図)が半分破損して出土した、それを復原すると口径24.7cm、残高27cmで、色調は暗い灰褐色で、焼成は良好で、胎土は細粒砂を多く含み、器面は縦位方向に刷毛撫でされ、刷毛目は残痕し、胴部には一部煤の付着がみられる。内面の口縁部には刷毛にて荒く横撫し、胴部は斜行縦位に刷毛撫でされている。口縁部と胴部のつけ

根には内外とも指痕が残っている。接合時を理解できるものである。口縁部は「く」字に外反し、口唇部にかけてぼったりした感じで、厚みが見られる。器壁は0.8cm前後で、丸底になると思われる。時期的には弥生後期終末かあるいは古式土師にはいるもので、より弥生後期終末の方が妥当かもしれない。

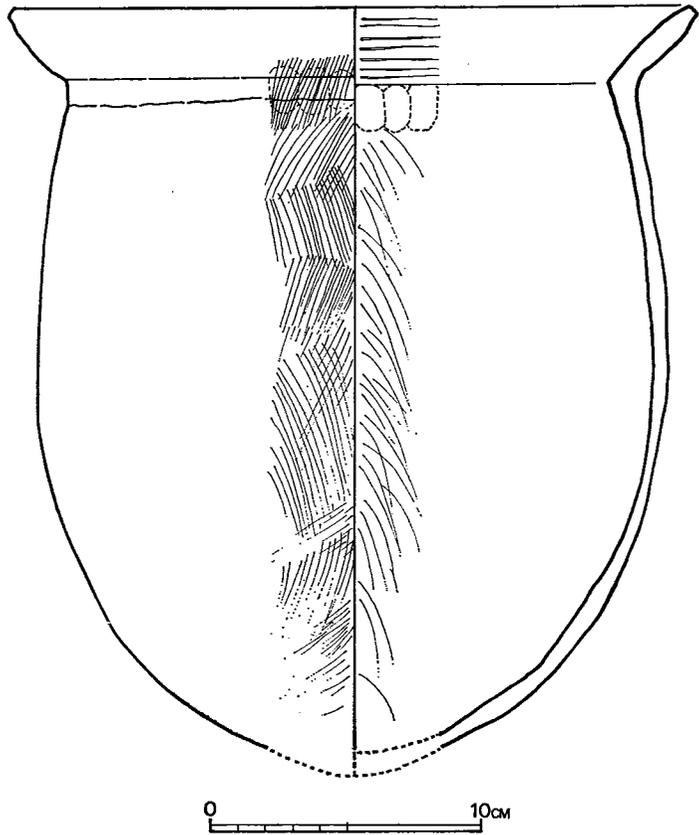
第73図は表土から出土した土製品と石器である。1は土製の紡錘車で直径4cmで、厚さ1.4cmで、孔は0.55cmで、若干内傾している。色調は赤褐色で、胎土に細粒砂を含み、焼成は非常に良く硬く締っている。2は石斧の破片で、安山岩製

で、側縁が磨かれている。3は磨石で、石質は安山岩で、てごろな円礫の両面を第1次剝離して、より手に握り良くして、側縁部を研磨したものである。その他に黒曜石の剝片が2点出土している(図版40)。石材の供給地は佐賀県腰岳のものと思われる。透明度もよく気泡もみられず、黒曜石の質は良質である。

以上が、2.遺構と遺物である4.結びで、若干まとめてみる。(副島)

3. 土塚墓出土の人骨について [図版37]

本遺跡で見出された土塚7基のうち、人骨の痕跡を辛うじてとどめていたのは下記の5基であった。塚内の黒色土には異臭が感じられたが、これは直上の耕作土に肥料として施された鶏糞によるものと思われる。包埋土壌が有機質に富む黒色土であるために人骨の保存状態は無論



第74図 表土層出土遺物実測図 (1/3)

飯氏馬場遺跡

きわめて不良であった。原形を保つての人骨採取は、溶融した臘でもしこませぬ限り不能の状態にあった。緻密質が厚い大腿骨々体部片、数個の歯など辛うじて残っている僅少の資料からの推定にはおのずから限度があるが、以下ようやく判定し得たことだけでも記録にとどめておきたい。

埋葬姿勢： 太い四肢長骨片、歯などの坑内出土位置、そして墓坑の大きさ、形などから成人骨の場合は屈葬であったと判断される。仰臥か否かは確証が掴めぬが、仰臥と見るほうが自然であろう。

埋葬方向： 人骨片の残った5基について言うと、頭位はすべて北乃至それに近い方位をとっている。

その他については表記することにするが、性別については残念ながらすべて推定不能であり、年齢は歯牙の性状からおおよそのところを知り得たに過ぎない。(永井昌文)

表 10 土 塚 墓 出 土 人 骨 一 覧 表

人 骨 人 骨	性 別	年 齢	推 定 身 長	備 考
1号土塚墓	?	熟 年	?	上、下顎大臼歯の咬耗3度 土塚側壁から青磁片出土
2号土塚墓	〃	小 児	?	右側頭骨岩様部の一部と細い 大腿骨残存
5号土塚墓	?(♀)	熟 年	約 141cm	右大腿骨最大長35cm前後、下 顎右第1大臼歯咬耗4度
6号土塚墓	?	小 児	?	下顎第2乳臼歯咬耗3度
7号土塚墓	?	若 年	?	上顎第1大臼歯の咬耗1度

4. 結 び

本遺跡の発掘記録を総括する意味で、2. 遺構と遺物を踏まえて若干の考察を加えて結びにかえたい。

(1) 住居跡について

弥生時代の住居跡で円形プランをもつものは、福岡市弥永原遺跡(註1)・福岡市上長尾宝台遺跡(註2)・筑紫郡筑紫野町野黒坂遺跡(註3)・朝倉郡夜須町八ツ並遺跡(註4)・三井郡小郡町津古内畑遺跡(註5)・三沢遺跡(註6)・甘木市金川町小田遺跡(註7)・嘉穂郡穂波町日上遺跡(註8)等で見られている。中期初頭から中葉にかけて円形プランが主流を占め、中期中葉から方形プランに変化している。いわゆる炉跡は有さないことが一般的である。

本調査では1軒の住居跡が発見されたのであるが、数軒をもって1つの集落を形成することは、すでに研究によって知られている。このことから、今後住居跡を見出すことは可能で、墓地と住居跡、そして生産基盤である水田跡を発見するのは可能である。そのためにも本丘陵と現在水田面である地域の総合的な発掘調査が、重要になってくると思う。

住居の廃絶は、いかなる意味をもって本遺跡に還元されたであろうか。住居と墓地との関係は、B区の北端に住居跡の発見が見られた。住居跡の時期は、弥生中期初頭と考えられる。

当時の墓地はA区の西端に位置するもので、低丘陵の北東端と南西端で直線30mの位置になる。舌状部に沿って集落を形成すると思われるから、現在宅地である位置に住居跡のある可能性は多い。しかし、この住居跡を切って、

弥生中期後半や後期墓地群の存在は、それ以上に有望で、一つの単位としてこの低丘陵を見るならば、弥生から近世にいたるまで墓地が置かれた場所で、墓地も古く伝承されていることが理解できる。

本住居跡の柱穴間の距離は表11の通りで、主柱穴は6本で、それを結んだ6角形は若干南に片寄る。

住居の廃絶が行なわれ、次時代のものが再びこの地に住居跡を作った時、過去の人

表 11 柱穴の間隔計測表 (単位cm)

	住居跡壁までの距離	P ₆ からの距離	柱の間隔	
P ₁	—	280	P ₁ ~P ₂	240
P ₂	155	290	P ₂ P~ ₃	220
P ₃	—	250	P ₃ ~P ₄	200
P ₄	130	190	P ₄ ~P ₅	190
P ₅	130	140	P ₅ ~P ₇	210
P ₇	—	190	P ₇ ~P ₁	260

飯氏馬場遺跡

が残したものを取りまとめて均した上で新しい生活を送るものと思われる。

住居廃絶→遺物および遺構の取りまとめ→新しい住居の建設が行なわれることを仮説として述べておく(註9)。

註1 「福岡県弥永原遺跡調査概要」(『福岡県文化財調査報告書』第32集、1965)、三野章「福岡市弥永原遺跡調査概要」(福岡市教育委員会、1967) 小型仿製鏡及びガラス勾玉笥型が検出された。弥生後期の集落遺跡である。

2 「宝台遺跡」(日本住宅公団、1970) 弥生時代中期集落及び墓地遺跡である。

3 弥生時代の集落及び貯蔵穴、古墳時代の集落遺跡。「南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集」(福岡県教育委員会、1971)

4 鈴木重治氏が本年度、夜須町教育委員会の主催で緊急調査した。弥生時代後期石棺墓と弥生中期集落遺跡で、小型仿製鏡の出土が見られた。

5 昨年度、第1次調査の結果は「津古内畑遺跡」(小郡町教育委員会、1970) 本年度は第2次調査で弥生中期住居跡が3基検出された。遺構密度はほぼ第1次調査と同じで、後期古墳の下からV字溝と弥生貯蔵穴が多数見られた。

6 本年度末1・2月に予備調査された。九州縦貫自動車道の土取り場で、弥生時代の住居跡及び貯蔵穴と古墳が確認された。「福岡県三沢所在遺跡調査概報」(福岡県教育委員会、1971)

7 本年度末に高山明、古賀精里氏等によって緊急調査されたもので、弥生中期住居跡及び甕棺墓をもった集落遺跡である。

8 本年度初頭に福岡県教育委員会が行なったもので、古墳の下より弥生中期の住居跡と弥生前期の木棺墓を伴う遺跡である。「日上遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』48、1971)

9 住居の廃絶については、東京都多摩ニュータウン調査団から刊行された(『多摩ニュータウン調査報告書Ⅶ』多摩ニュータウン調査会、1969)に記載されている。いわゆる縄文中期の「吹上パターン」・「井戸尻パターン」と称されているもので、住居の廃絶にともなって、住居跡床面より浮いた状態で、廃棄された一括土器をいうものである。この考え方を発展されていく段階で、住居跡の廃絶と土器廃棄についても、多くの問題点を示唆される。

しかしながら、土器だめあるいは土器塚と称され、住居跡遺構の付近に見られる堅穴で、一時期の型式ではなく、それを前後する型式あるいは、一時期相違する型式の出土が見られることがある。これらの土器の廃棄は住居の廃絶が行なわれ、次時期に新しい住居跡が作られる段階以前で、古い遺物、遺構を取りまとめる作業が生まれ、その後新しい住居跡や遺構が作り出される。ここに**取りまとめ**という新しい概念を考えることができる。

(2) 甕棺の編年

飯氏馬場遺跡から出土した遺物の大半は甕棺であった。その数は9基でそれぞれ一時期に多数群をなしているのではなく、本遺跡の甕棺の時期は弥生前期末から後期末まで時期差があった。

森貞次郎氏の編年(註1)を基礎とし、大別した。その結果5期の編年が考えられた。

飯氏馬場Ⅰ式 1号甕棺をⅠ式土器とした。その特徴は、弥生前期末の金海式と弥生中期初頭の城ノ越式との甕形土器と壺形土器との差し合せであった。金海式と城ノ越式のセットの類例は、福岡県穂波町椋本遺跡(註2)にみられる。

飯氏馬場Ⅱ式 2号甕棺をⅡ式土器とした。いわゆる弥生中期初頭の城ノ越式の甕形土器と甕形土器との差し合せである。

飯氏馬場Ⅲ式 3号、4号甕棺をⅢ式土器とする。いわゆる中期前半の汲田式の甕形土器と甕形土器との差し合せである。

飯氏馬場Ⅳ式 7号、8号甕棺をⅣ式土器とする。いわゆる後期前半に相当する桜馬場式である。過去、本遺跡より出土した甕棺もこの範疇にはいるものと思われる(註3)。

飯氏馬場Ⅴ式 9号甕棺をⅤ式土器とする。いわゆる後期後半の日佐原式に相当するもので、糸島平野独特の福井式甕棺である

表 12 飯氏馬場遺跡甕棺編年表

飯氏馬場遺跡 森貞次郎氏 編年		1号甕棺	2号甕棺	3号甕棺	4号甕棺	5号甕棺	6号甕棺	7号甕棺	8号甕棺	9号甕棺
		前半	板付Ⅰ							
後半	板付Ⅱ (伯玄式)									
期末	金海式	飯氏馬場Ⅰ式				?	?			
中頭	城ノ越式		飯氏馬場Ⅱ式							
前半	汲田式				飯氏馬場Ⅲ式					
中頃	須玖式									
後半	立岩式									
後頭	桜馬場式							飯氏馬場Ⅳ式		
中頃	三津式									
期末	日原佐式								飯氏馬場Ⅴ式	

(註4)。すなわち、器面に多くのコ字形の台形凸帯を有し、内外一面に粗い刷毛目を施し、「く」字状の口縁部をもち、底部には小さな底がついているものをいう。

飯氏馬場遺跡

以上、編年を組んだが、表12に示す通り、墓地としての空白期間がある、それを考慮して表土層及びⅡ層出土遺物を分類し、考え合えると中期後半や後期前半の破片は見られている。このことから、これらの時期の墳墓はどこかに眠っている可能性を秘めている。しかしながら、中期後半から後期前半までの時間の差は、そんなでないことを考慮して、今後の研究に待ちたい。一地域の様相から全体にあてはめることはむずかしい。本遺跡が糸島平野における甕棺墓の研究に寄与できる一頁を残したことに意義を持つものである。

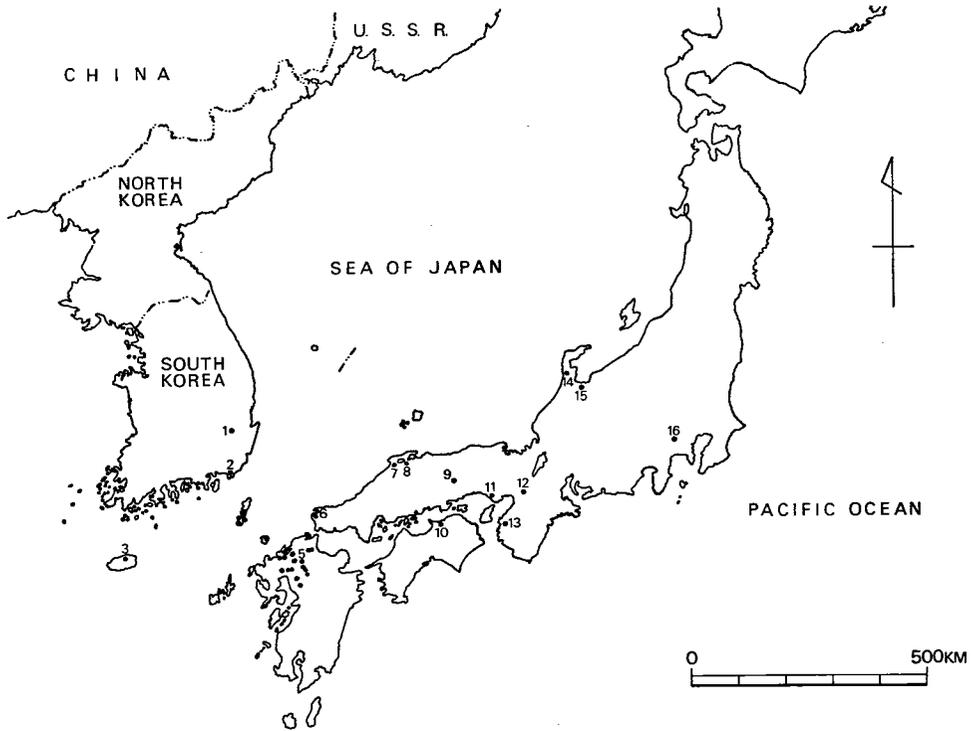
- 註1 森貞次郎「弥生時代における細形銅剣流入について」（『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念委員会編、平凡社、1967）の甕棺の編年による。
- 2 高島忠平「福岡県穂波町椋本、森原出土の甕棺」（『九州考古学』15、1962）
この中では記載説明として、3つの甕が合口となり、成人用甕棺として使用し、時期は城ノ越式の時期であると述べられている。各甕の特徴が述べられており、一番甕と二番甕は口縁部で差し合せ、二番甕と三番甕の底部を打欠き三番甕口縁部と合されている。しかしながら、森貞次郎（『日本の考古学Ⅲ』弥生時代、河出書房、1966）「弥生文化の発展と地域性—九州—」P48の中で、前期末の金海式の大形甕棺とセットをなす例として、椋本が記載してある。この金海式とは一番目甕と推定される。
- 3 昭和44年5～6月博多井筒屋で開催された「伊都国王墓展」に展示されていたもの、地主が植木を植えるための穴を掘った時に出土したもので、現在糸島高校に保管してある。
- 4 福井式と称せられ、糸島郡二丈町福井字フィキリ出土の甕棺で、原田大六「墳墓—西日本—」（『日本考古学講座4』河出書房、1956）糸島地方の弥生後期甕棺については、大神邦博「福岡県糸島郡地方の弥生後期甕棺」（『古代学研究』53、1968）に詳細に記載されている。

(3) 石棺墓と小型仿製鏡

石棺墓は調査において3基検出された、それも大半破壊されており、正式には時期を決定することができなかった。

しかし、3号石棺墓付近から小型仿製鏡と刀子の出土が見られた。これらの遺物を副葬する石棺墓はほぼ弥生時代後期に位置するものと推定されている。今回は小型仿製鏡を中心に述べていきたい。

現在、弥生時代の小型仿製内行花文鏡の出土は52ヶ所と聞いている（註1）。その大部分

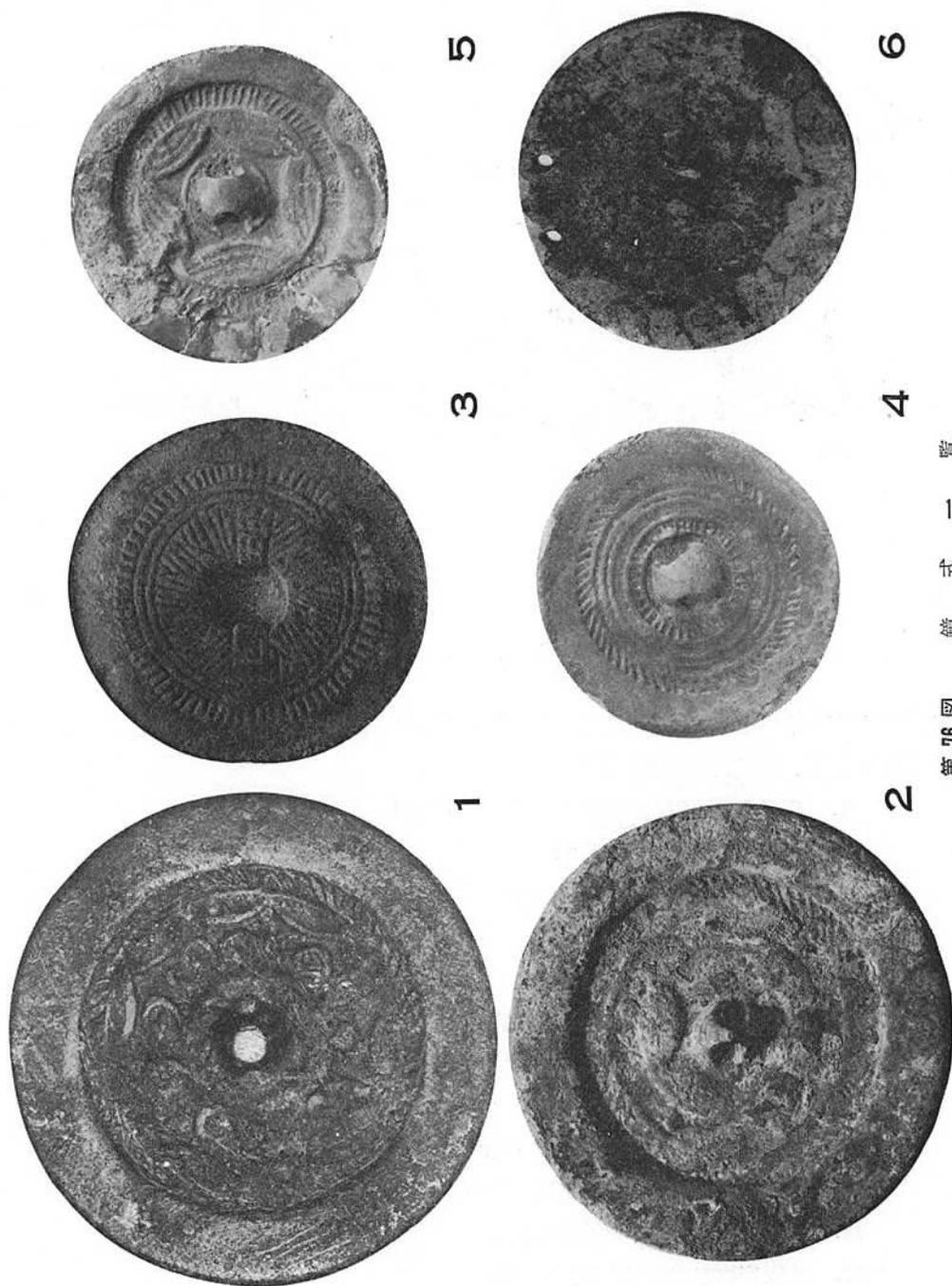


第75図 小型仿製鏡分布地図

は箱式石棺墓から出土している。面径は平均して約8cmに近い値を出す。一応代表的なものを分布地図に掲げ、地名表を記する(第75図)。

1. 慶尚北道永川郡琴湖面漁隠洞遺跡(註2)
2. 慶尚南道咸安付近(註3)
3. 済州邑健入里旧字山地(註4)
4. 福岡市飯氏馬場遺跡
5. 朝倉郡夜須町八ツ並遺跡(註5)
6. 山口県豊浦郡土井ヶ浜遺跡(註6)
7. 島根県八東郡東出雲町出雲郷春山遺跡(註7)
8. 島根県安来市切川町小谷遺跡(註8)
9. 岡山県津山市大篠桶内遺跡(註9)
10. 香川県善通寺市大麻山遺跡(註10)
11. 兵庫県赤穂市有年原遺跡(註11)
12. 大阪府枚方市鷹塚山遺跡(註12)
13. 和歌山県和歌山市北田井遺跡(註13)

66



第76圖 鏡式一覽

14. 石川県羽咋市次場遺跡 (註14)
15. 富山県射水郡小杉町上野遺跡 (註15)
16. 東京都八王子市宇津木遺跡 (註16)

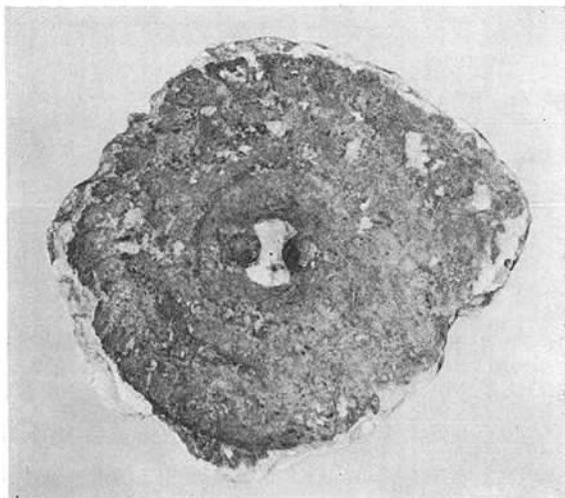
その分布は南朝鮮から北陸、関東までの広い範囲を示めず、その分布の中心は北九州で、発見され鏡の9割近く占める。若干研究史を述べてみたい。

古墳出土の鏡に関しては後藤守一博士、梅原末治博士の研究によって、多くの問題点が述べられ、それを集大成したのが小林行雄博士等壮年の研究者であった。

しかし弥生時代の小型仿製鏡については、中山平次郎博士の「壱岐国加良加美貝塚発掘の鏡に就いて」(註17)から出発する。その後この期の鏡に関しては、西日本の研究者に注目されながら、戦争等の要因が重なり、研究の立遅れが見られた。戦後復興期から一応安定期を迎へ、経済成長の昭和30年代の前半から地域開発のきざしを見せはじめた30年代後半にかけて、小型仿製鏡の類例は増加した。それを総括したのが梅原末治博士の「上古初期の仿製鏡」(註18)であった。この中で、南鮮永川出土の同種の小鏡(註19)と類似するけれども、技術や文様の細部では異なっており、日本製と考えられている。そしてその中に「この種の初期の仿製鏡は中国古鏡が先ず伝えられた北九州において、前漢の鏡式に習って作り出したもので、その実年代に於いて畿内地方のそれらに明らかに先行していた。」と述べ、この小型仿製鏡と古墳の銅鏡製作との関係は、すでに北九州の地において弥生後期に活発に行なわれていたこととした。この小型鏡は古墳時代まで伝世が考えられるわけである(註20)。小型仿製鏡を森浩一氏は小型斜行櫛歯文鏡(註21)と仮称し、古墳出土の小型内行花文鏡について、「その製作と副葬の主要な時期を古墳前期に求めることができる。このことは、小型仿製鏡について従来定説を修正する必要があるばかりか、さらには弥生後期に北九州を中心にして製作された仿製鏡(小型斜行櫛歯文帯)との鏡との製作技術の関連についても可能性をもたらすわけである。」として、今後研究の成果を予期している。また高倉洋彰氏は、形式、時期において、3グループに分類することが可能であるとしている(註22)。この分類は一応目安となる。しかし、これらが今後どの様に展開していくか興味深い。小型仿製鏡に関する研究はその緒についたばかりであることを明記する。

小型仿製鏡の背面の文様は、現在6分類(註23)できる。すなわち、綾杉文・素文・渦文・鋸歯文・重圈文・内行花文(第76図)である。これらの中には四蛇鏡の仿製鏡(註24)は見られないが今後出土する可能性が期待される。

本鏡は、その中でも内行花文鏡にあたり10弧の花文を有する。そして、当然、前漢鏡の影響を受けている。鏡面に対する鈕の割合(註25)によっても、分類できることが推測される。また、鈕にコ字形突出部を設けたものに、八女市亀ノ甲遺跡出土の鏡と福岡市弥永原遺跡出土の鏡(第77図)がこれらに該当し、これらを基準として結論を導き出すことによって、製作地ご



第 77 図 福岡市弥永原遺跡出土の鏡

小田富士雄氏は『後漢書東夷伝に安帝の永初元年（107）倭国王の朝貢後、「桓・靈の間（147～188）倭国大いに乱れ、更々相攻代し、歴年主無し」という不安定な状態がつづき、やがて女王卑弥呼が立って安定したという有名な記事がある。乃ち倭国が乱れる以前の二世紀前半に桜馬場甕棺墓の年代を考えることができるから、その後倭国の紊乱と大陸においても後漢末の混乱期に入って彼我の交通が中絶して宝器の輸入も中断した状態を考慮しなければならない。やがて魏の建国後の景初三年（239）に卑弥呼の遣使によって魏鏡の輸入が再開されるまで宝器の輸入は中絶されていたとみられよう。その欠を補う意味において小型仿製鏡の出現が考えられるであろう（註26）。』と述べているが、この説には一応賛同できるが、この鏡を製作するための技術的裏付はどこに由来するか考慮が必要となる。しかしながら、銅銚、銅戈の鑄範がみられ、その仿製品（註27）の分布範囲を考え合わせて、甕棺に副葬される鏡（註28）のありかたを踏まえた上で、ベールにつつまれた弥生時代を解明することができるのである。

以上、結論としてまとめると。

1. 小型仿製鏡の分布は南朝鮮から北陸・関東までの広がりをもつ、その集中は北九州にみられる。
2. 伝世する過程において、古墳時代の初期段階まで、地域によっては下がることがある。
3. 背文は現在6分類できる。これ以上増えることは可能で、本鏡は内行花文鏡に分類する。
4. 本鏡は前漢鏡の影響を認める。

とに分類でき、また時期差によって分類できる可能性を秘めている。

弥生時代の仿製鏡のメルクマールは外区に斜行櫛歯文とそれ以外にも、より多くのメルクマールを導き出すことができる。また遺構状態による分類もできる。すなわち、箱式石棺、住居跡、散布地等、それを細分すること、文様構成の分類をかみあわせる、資料操作が必要となる。ここでは一応方法の素材として掲げて、今後に待ちたい。

小型仿製鏡の実年代は、弥生後期に一般化することがいわれている。

5. 鈕を1とした時、本鏡の面径は鈕：内区：平縁＝1：2：1と割合となり、縁＝鈕となってくる、これらのことを踏まえることによって、鏡面はある程度鈕の大きさに規制されることが考えられる。今後課題として研究にまちたい。
6. 本鏡のメルクマールは斜行櫛歯文と鈕にコ字状の張り出部をもっている。

註1 とくに、九州大学文学部考古学研究室の岡崎敬・森貞次郎・小田富士雄・高倉洋彰の諸氏の調査表による。北九州の弥生の小型仿製鏡は「古代の日本—九州—」P45の中に分布地図が掲載されている。

2 藤田亮策・梅原末治「朝鮮古文化綜鑑第1巻」1947

3 松岡史氏の御教示による。主文は内行花文10弧文で面径7.9cm 釜山大学博物館蔵。福岡教育大学に保管されている鏡(第76図—1)福岡県筑後市出土?に、鏡背の文様は類似する。

4 註2に同じ。

5 前掲のように、鈴木重治氏の調査で面径6.9cmで内行花文8弧文であった。石棺内より出土した。

6 梅原末治「上古初期の仿製鏡」(国史論一所収)1959年・金関文夫、坪井清足、金関恕、「山口県土井ヶ浜遺跡」(『日本農耕文化の生成』本文編、1961)の中で、文様の退化がいちじるしく、製作年代が下がっている可能性があり。古墳前期の祭祀遺跡から出土したという。

7 近藤正氏教示。

8 内田才・東森市良・近藤正「島根県安来平野における土塚墓」(『上代文化』36、1966)山腹に一見小円墳状の隆起があって、組合せ木棺をおさめた土塚墓が併存していた。鏡は北棺の内に鉄製刀子が副葬され、棺上には多数の土器を埋納していた。鏡は面径8.2cm、内区には六弧の花文があり、その外区に帯があり、その中に六個の珠文を間隔をあけて配し、この珠文帯の外に斜行櫛歯文帯をめぐらし、さらに幅広い平縁につづいている。白銅色を呈する鏡(第76図—2)である。古墳時代に下がる。

9 津山市郷土館に保管されている鏡(第76図—3)、面径6.5cmで、外区は櫛歯文帯、主文部は鋸歯文、鈕は鷹塚山例に似る。近藤義郎・今井堯氏によると採集品で、遺跡は尾根の傾斜部で、弥生時代の遺物散布地であったらしく、堤を改修した折に検出されたという。墓地の可能性を充分に秘めている。近藤義郎・今井堯氏に御教示を得た。

10 梅原末治「上古初期の仿製鏡」によると開壟の折りに箱式石棺から検出され、面径8cmで、平縁で外区に斜行櫛歯文帯があって、内区に内行弧文圏と渦文様の2帯から成り、内行花文12弧文である。

11 梅原末治「上古初期の作製鏡」に記載されており、有年考古館所蔵のもので、面径8.5cm、内行花文9弧文帯である。

12 江谷寛・瀬川芳則、「大阪府枚方市鷹塚山弥生遺跡」(古文化シリーズ第1集、1968)「大阪府枚方市鷹塚山弥生遺跡調査概要報告」(枚方市水道局・枚方市教育委員会・鷹塚山遺跡発掘調査団、1968)鏡に関しては、瀬川芳則「畿内弥生遺跡出土の仿製鏡—大阪府鷹塚山遺跡を中心に—」(『古代学研究』53、1968)に詳細記載されている。鏡背文は重圏文で、面径7cmである(第77図—4)。

13 「北田井遺跡現地説明会資料」(和歌山市文化財研究会、1970)方形住居跡内より検出されたもので、時期は船橋K1期並行であるという。

- 14 橋本澄夫「石川県羽咋市次場・吉崎遺跡」（『日本考古学年報16』、1968）面径6cm、鈕は大きく、内行花文は弧は線で、5弧花文である。第3層の弥生終末から古式土師期から出土している（第76図一5）。
- 15 本年度 富山県教育委員会主催で調査されたもので、遺跡丘陵に立地し、円形住居跡から出土したもので、面径は約7cmで、内行花文は6～8弧花文をもつという。橋本正氏に御教示を得た。
- 16 大場磐雄「東京都八王子市宇津木遺跡」（『日本考古学年報17』、1969）第4区、第5号住居跡から検出されたもので、面径6cm、素文で鈕の一部欠けており、一端小孔二個穿ったものである（第76図一6）。検出された竪穴は弥生期の前野町式土器が出されている。
- 17 松本友雄「老岐国考古通信」（『考古学雑誌』17—4、1927）に記載している。
- 18 前掲で、本文献で出土例が17ヶ所あげられており詳細に説明されている。
- 19 註2に同じである。
- 20 森浩一「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味として」（『日本古文化論攷』榎原考古学研究所編、1970）古墳出土の小型内行花文鏡について記している。しかし、いわゆる弥生の小型仿製鏡の出土状態とは相違する。北九州から距離的に離れることによって若干古墳時代の前期にはいることとなろう。
- 21 森浩一「北九州の弥生墳墓と古墳発生の問題」（『文化史学』24、1968）に仮称されたもので、註20に掲げてある文献はそれを発展させた形で展開している。
- 22 高倉洋彰「弥生後期の仿製鏡について」（『九州大学考古通信』2、1968）弥生後期の仿製鏡一覧表として30ヶ所を掲げている。そして分類がこころみられており、Iを対馬出土の鏡と朝鮮出土の2ヶ所の鏡をいっている。これを時期的弥生後期初頭とし、IIを弥生後期末として、IIIを島根県小谷出土の鏡をいっており古墳前期としたもので一応の目安となる。
- 23 梅原博士は、内行花文、渦文、綾杉文、獣文、蕨手文、に分けている。この分け方は、内行花文帯内の文様である。
- 24 福岡県八女市室岡の亀ノ甲遺跡から検出された鏡には、その内区に四軸鏡の影響が見受けられる。波多野・岩崎・小田・松岡外（『亀ノ甲遺跡』福岡県八女市教育委員会、1964）
- 25 この期の仿製鏡は鈕の大きさによって、面径を導き出せ、その比率によって規制される可能性をもつ、10数点の鏡から、鈕を1としたとき、縁はそれと同値か、それより小さく $\frac{1}{2}$ の比率になる。そしてこれが面径に対しては偶数の倍率になるか奇数の倍率となる。しかしながら、これには数多くの資料分析が必要となるので、今後の課題として提起する。
- 26 小田富士雄「発生期古墳の地域相—北九州について—」（『歴史教育』15—4、1967）
- 27 森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」（『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念委員会編、1967）簡結には註21の文献に述べられている。
- 28 副葬されて鏡が出土する時期は、弥生中期前半の多鈕細文鏡からはじまり、細形銅剣、細形銅矛、細形銅戈、銅釧がみられる。中期中葉～後半は前漢鏡、ガラス製（璧、勾玉、管玉）、細形（銅剣・銅矛・銅戈）・鉄製短剣・鉈等が見られ、後期初頭は漢中期の鏡・巴形銅器・貝釧形銅釧・鉄刀である。後期中頃～末期は後漢鏡・素環頭刀といわれる。註27による。

鏡に関しては、九州大学文学部考古学研究室の岡崎敬・森貞次郎・小田富士雄・高倉洋彰、資料集めのおり、国学院大学文学部考古学研究室の大場磐雄・乙益重隆、八王子市郷土館の服部敬史、富山県教育委員会の橋本正、石川県立郷土館の橋本澄夫、大阪府枚方市教育委員会の平川清弐、岡山県津山市教育委員会の今井堯、島根県教育委員会の近藤正、福岡県福岡市教育委員会の三島格・下条信行、福岡教育大学の波多野院三、南九州短期大学の鈴木重治の諸先生及び諸氏に御世話になったことを記して謝意を表わす。

(4) 調査の成果

本遺跡の発掘調査において、弥生中期初頭の住居跡1基、弥生時代の墓制である木棺墓4基、甕棺墓9基、石棺墓3基等のパターンがみられ、それに中世の土塚墓7基見られたこと。また近世墓地までの分布を考え合わせ、墓地は伝承することは、裏付けされるものである。住居と墓地との関係及び遺物でみられた小型仿製内行花文鏡の出土とあいまって、この低丘陵の地形と遺物関係を総合的に考察する必要が生じる。

今後、水田跡の発見が期待され、生活跡である集落の検出の可能性は多いわけで一層重視されるわけである。

付近の丘陵とともに考え合わせて、今後これらの低丘陵を全面的な総合調査が必要となってくる。

考古学的なものだけでなく、歴史学・地質学を踏えた上での総合調査である。

最後に、木棺・甕棺・石棺・土塚墓に埋葬された人々の霊が安からんことを祈る。

(副島邦弘)

第4 鏡 原 遺 跡

福岡市大字飯氏所在中世遺構

1. 遺跡の位置と調査の経緯

2. 遺跡の概観

3. 遺構の調査と発掘

4. 遺構の年代と特徴

5. 遺跡の歴史的背景

6. 遺跡の保存と活用

7. 遺跡の意義と今後の展望

8. 参考文献

9. 謝辞

10. 索引

本文目次

1. はじめに	100
(1) 調査の経過	100
(2) 位 置	101
2. 第Ⅰ調査区	101
(1) 遺 構	101
(2) 遺 物	101
3. 第Ⅱ調査区	102
4. 第Ⅲ調査区	102
(1) 掘立柱穴	104
(2) 円形周溝墓	104
(3) 円形周溝墓出土遺物	105
(4) その他の遺物	106
5. むすび	107

第4 鏡原遺跡

1. はじめに

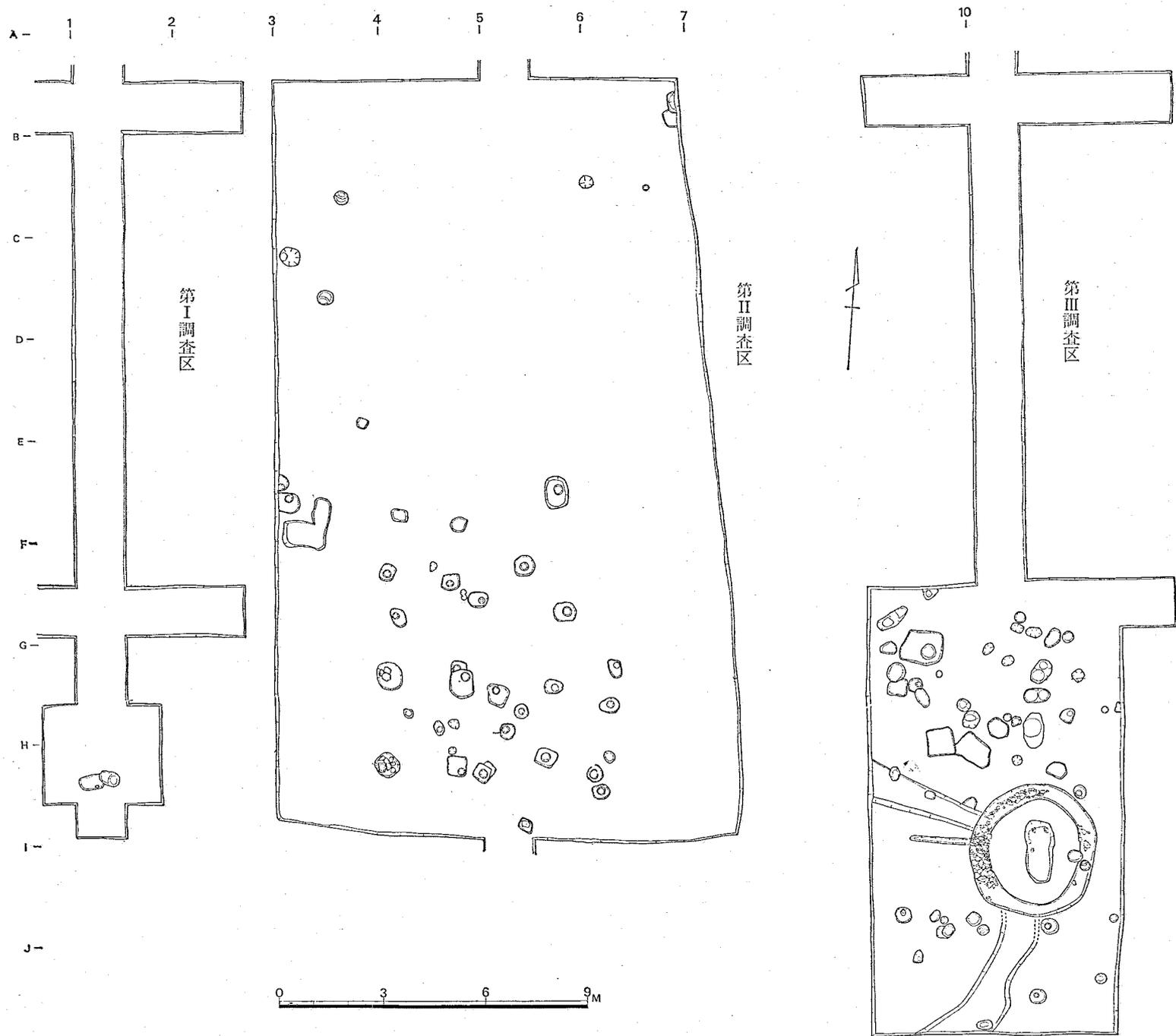
(1) 調査の経過

鏡原遺跡の調査は、昭和46年2月22日から3月10日までの21日間に実施した。本遺跡の調査員は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課 技師 柳田 康雄
 " " 浜田 信也 (調査主任)
 " " 副島 邦弘

なお、本調査の補助員として福岡大学の学生諸君の参加があった。

- 2月22日** 機材搬入。小雨で測量等の作業ができないので、付近一帯の遺跡分布調査を実施する。
- 2月24日** 遺跡は斜面に位置するが、調査地区が開墾等により三つの平坦地にわけられる。よって斜面下方より第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ調査区に分けた。調査はグリッド法を用い、3m×3mのグリッドを設定したA1～A11、F1～F11に東西トレンチを、1A～1J、5A～5J、10A～10Jに南北トレンチを巾1.5mで設ける。H1で土塚墓を確認する。
- 2月25日** F1～F11と5A～5Jのトレンチの発掘。掘立柱穴を確認する。
- 2月26日** 本日より第Ⅱ調査区の調査に入る。J1～J11のトレンチの表土剥ぎ。このトレンチの南側は盛土してあり表土層が厚い。G3～G6およびH3～H6区を拡張する。掘立柱穴群を確認する。
- 2月27日** B～Fの3～4区の拡張。
- 3月1日** B～Fの5～6区の拡張。
- 3月2日** 本日より第Ⅲ調査区の調査に入る。10F～10J区の調査。礫群が確認され、完形の土師器、瓦器を発見。落ち込み土のプランから住居址と考えられ、これに伴う遺物と判断する。午後は雨により作業中止。
- 3月3日** G～Fの9～11区の拡張。掘立柱穴群と住居址と考えられる遺構の全容が明確につかめない。礫が非常に多く判断を難しくする。午後から雨。
- 3月4日** 拡張の結果、住居址と考えられた遺構は溝となり、円形のプランであることがわかった。つまり先日発見された完形の土器類は土塚墓の副葬品で、この土塚を主体とする円形の周溝墓を確認する。第Ⅱ調査区の掘立柱穴群の発掘を行う。
- 3月5日** 第Ⅱ調査区の掘立柱穴群の発掘と清掃を行い写真撮影を行う。第Ⅲ調査区の円形周



第 79 图 遺 構 配 置 图 (1/160)

溝墓周辺の精査。

- 3月6日 B・M移動。第Ⅲ調査区の遺構群の調査。第Ⅱ調査区の実測。
 3月7日 第Ⅱ調査区の実測。第Ⅲ調査区の調査。
 3月8日 第Ⅲ調査の写真撮影及び実測。第Ⅰ・第Ⅱ調査区の埋めもどし。
 3月9日 第Ⅲ調査区の埋めもどし。
 3月10日 機材引上げ。調査を完了する。

(2) 位 置

鏡原遺跡は福岡市大字飯氏字鏡原に所在する。

この遺跡は大字飯氏に所在する独立丘陵の西側斜面に在り、糸島平野を一望できる位置である。またこの位置は丸隈山古墳の西南方向にあり、古くは糸島水道といわれたその西側口に位置するところである（第1図）。

また独立丘陵は、南から北へゆるやかな傾斜をもって延び、丘陵の稜線は平坦面がつづき、稜線から東西に傾斜する斜面も遺跡の立地に適したところである。

この独立丘陵には南に子捨塚前方後円墳を中心とする古墳群が所在しており、北側は弥生時代、古墳時代の散布地がある。

丘陵の北端東側は、古く採土工事により削平され、その際に多数の甕棺が発見されたことが伝えられており、飯氏馬場遺跡の調査の際にも崖面に甕棺一基を発見採集した。今回調査する遺跡はこの甕棺発見の地点の西南、つまり丘陵の西側の緩傾斜面に位置する。

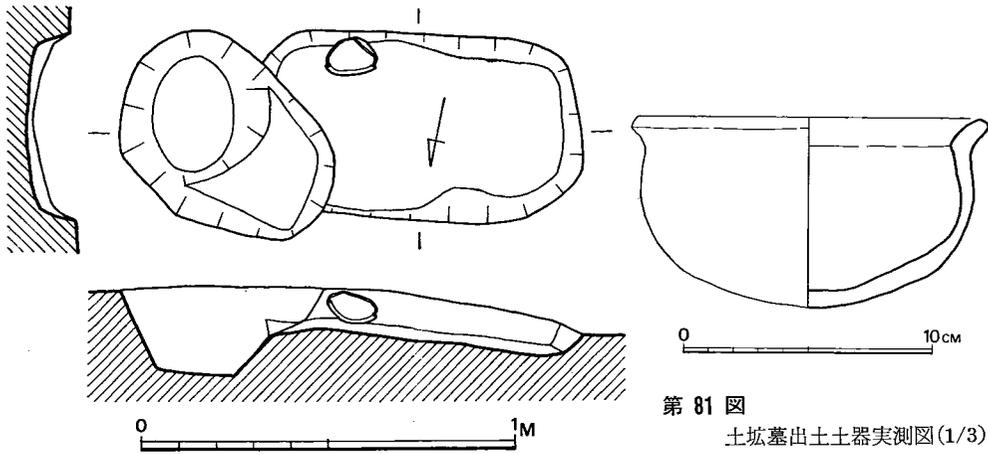
2. 第 I 調査区

(1) 遺 構

調査区の南側で発見された遺構である（第80図、図版41-2）。この遺構は長軸をほぼ東西におく。東側で小ピットと重複し全容をつかめないが、長軸約0.9m、短軸約0.5mの長方形のプランを呈する。遺構は暗褐色の粘質土を掘り込んだもので、深さは平均して12~13cmを測るが、斜面に位置することから全体的に西側が低くなっている。この遺構の東南側壁そばに鉢形土器が横に倒れた状態で発見された。この土器は削平により若干欠損している。この土器はその出土状態から落ち込んだものとも考えられるが、遺構の時期判断の資料となるものである。

(2) 遺 物

第Ⅰ調査区における遺物の出土は極めて少ない。発見された土器片は小片であるため種類の分類は可能であったが、詳細な時期の判断が難しい。弥生式土器片、土師器片、須恵器片が出土している。



第 80 図 土塚墓実測図 (1/20)

第 81 図
土塚墓出土土器実測図(1/3)

第81図の土器は土塚墓から発見されたものである。削平により欠損しているが、器形は知ることができる。口縁部径14.4cm、器高7.6cmを測る丸底の鉢形土器である。口縁部は厚みがあり、「く」字形に外反し、内側に稜をもつ。体部は頸部からややふくらみもちながら内反し、底部へ続く。器壁は体部最大径下が薄くなるが、全体に厚みがある。器面の調整は、口縁部はヨコナデであり、体部は篋磨きである。底部は器面の剝落が著しく、調整の方法は不詳である。おそらく篋磨きであろう。全体に黒褐色を呈する。縄文時代の後期あるいは晩期に比定されるものであろう。

3. 第 II 調査区

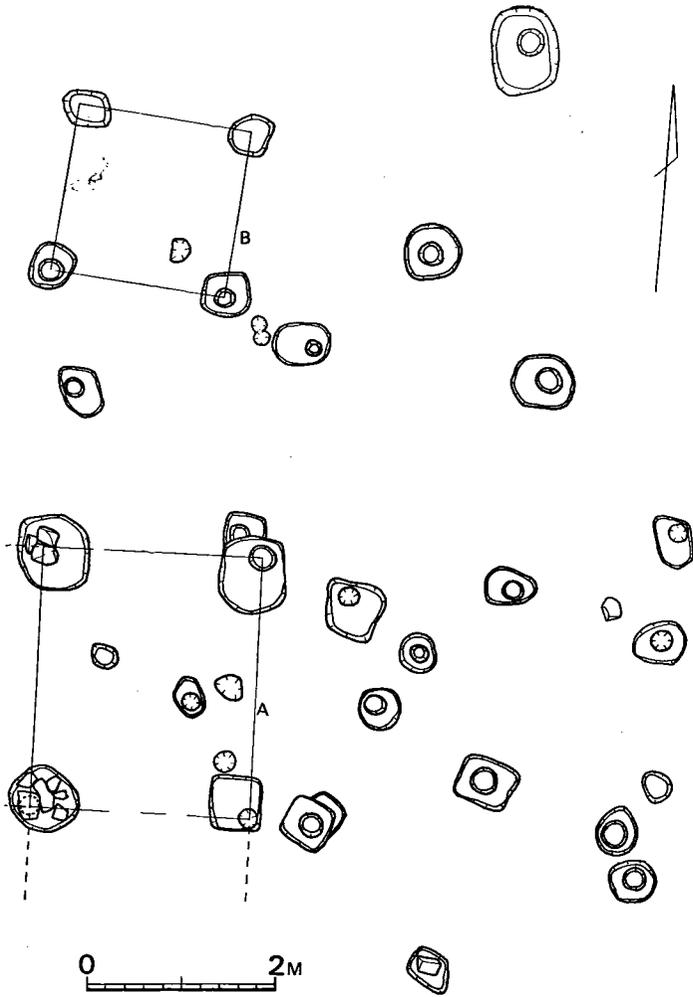
この調査区は3調査区のうち最も広い地区である(第82図、図版42-1)。東側は若干削平されており表土下に地山がある。遺構は調査区中央の南側に集中した掘立柱穴群である。掘立柱穴群は建築物としての組合せが非常に不明確である。調査区が狭いため建築物の組合せや規模は明確にしがたい。第82図に示すように、かろうじてA・Bのように二つの組合せが解かるものがある。Aは建築物の一部であろうし、Bは図示する以上の規模はなく、四本柱の建築物を考えなければならない。これら建築物の内容、規模については、今後の調査にまたねならない。

4. 第 III 調査区

この調査区は斜面の最上位に位置する。調査区中央は削平をうけ、表土下は地山であり、南

北に盛土してある。

遺構はとくに調査区の南側に集中して検出された。掘立柱穴と円形周溝墓である（第図79、
図版42-2）。



第 82 図 掘立柱穴遺構実測図 (1/80)

鏡原遺跡

(1) 掘立柱穴

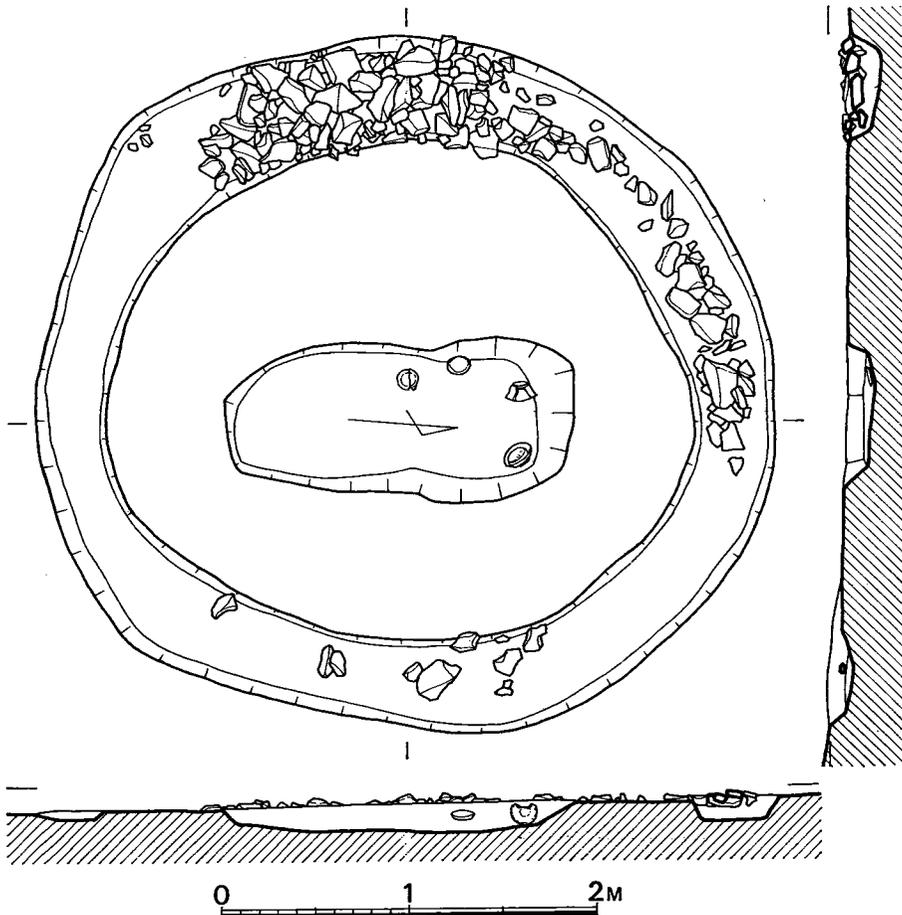
掘立柱穴は多数発見されたが、建築物としての組合せが明確でない。柱穴は大型の方形プランの掘方をもつものと小型の円形プランの掘方をもつものがある。柱穴底に河原石、角礫を根石として利用したものがある。

(2) 円形周溝墓〔第83図、図版43〕

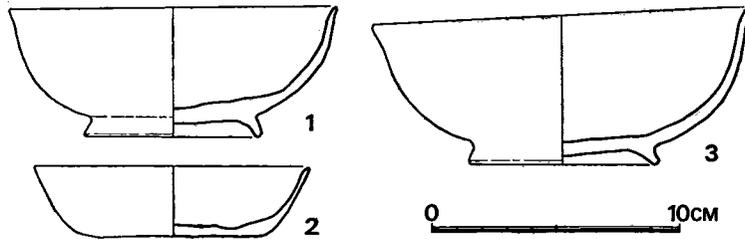
不整形の周溝をもつ土塚墓である。これを円形周溝墓と呼称した。

この周溝墓の主体部である土塚墓は、主軸をほぼ南北にとり、長軸1.85m、短軸約0.85mを測る。隅丸の長方形プランを呈する。この土塚墓の深さは8～15cmを有す。

この土塚墓から副葬品と考えられる土師器4、瓦器1が発見された。これらはトレンチで最初に発見されたもので、この遺構発見の契機となったものである。これらの土器は、保存の状



第83図 円形周溝墓実測図 (1/40)



第84図 円形周溝墓出土土器実測図 (1/3)

態がよくなく、とくに土師器杯2は風化が著しく復原不可能なものである。これは包蔵土の質が酸性であり湿性の強い地区であることがその原因であろう。

土塚墓をほぼ中心において周溝がある。南北径3.95m、東西径3.65mを測る。プランは不整円形である。溝の中は38cm～65cmである。深さは東側が浅く、西側が深くなっている。東西断面では東側4cm、西側14cmを測る。又溝には河原石や角礫がある。特に西側に多いが、いずれも溝底から浮いている。これはこの遺跡が湿気の多いところであり、この遺構が全体的に西側が低くなっていることも考えてみると、周溝は排水の用をたすためのものであり、この中にある河原石や角礫は排水をよくするために——すなわち捨暗渠に利用されたものではなかろうか。またこの遺構の西に、ほぼ東西の方向に巾18cm、長さ1.8mの溝がある。これは周溝から延びるものと考えられ、深さは周溝と接する側は、周溝とほぼ同じ深さであり、西側は浅くなっていることから、おそらくは周溝墓に付設する排水溝と考えられる。

周溝内にある礫群について付言すると、これが捨暗渠であるとする考えは、次の理由による。

まず、これらの礫群は溝底から浮いてはいるが、二次堆積だとすれば、礫は周溝内のみならず、その周辺にも検出されるということ。次にこの遺構が全体に積石によって覆われていたものが、崩壊して溝に落ち込んだものか、そして後世の削平により溝内の礫のみがかりうじて残存していたとする考えがあるが、この位置はむしろ盛土してあるところであり、この考えはあてはまらない。また掘立柱穴との前後関係も当然考えられるが、掘立柱穴は周溝墓より古く掘立柱穴遺構によって破壊されたとする考えはできない。このような理由により、礫群は捨暗渠と考えたいのである。

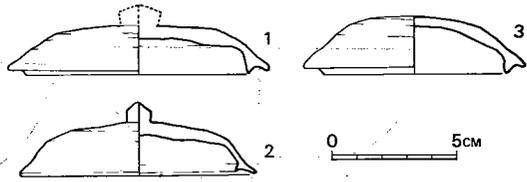
(3) 円形周溝墓出土遺物〔第84図、図版44—2・3・4〕

主体部から発見されたものである。土師器4、互器1である。土師器は2個体が保存の状態が好ましくなく風化が極めて著しく復原が困難である。

土師器 (1、2) 1は口径13.2cm、器高5.1cmを測る椀である。調整は全体に丁寧であ

鏡原遺跡

る。体部は底部から丸味をもって立ち上がり、口唇部下でやや外反する。焼成は良いのであるが、保存の状態がよくないので器面の剝落が著しい。しかし器面は全体に篋による調整の後にナデによる仕上げの手法



第 85 図 第Ⅲ調査区出土須恵器実測図 (1/3)

が観察できる。底部はタテナデによる仕上げで、糸切りか篋おこしかは観察が困難である。底部と高台の接合部には篋の痕跡が深くのこっている。高台は短かく伸びきっている。胎土はかなり精製されたものを使用しており茶褐色を呈する。

2は1と重なって出土したものである。口径11.1cm、器高2.9cmを測る杯である。体部は平坦な底からはほぼ直線的に延び、やや外反する口唇部へ続く。器面の調整の仕上げは、底部はタテナデ、体部はヨコナデである。器の外側の面は剝落が著しいが、体部はヨコナデの仕上げであることがわかるが、底部が糸切りであるか篋おこしであるか判断が難しい。

瓦器 (3) 口径15.4cm、器高6cmの椀である。体部はやや外反する口唇部から曲線を描いて続き底部へ延びる。これに短い高台がつく。器面調整は篋削りの後、ナデ仕上げである。口唇部に篋削り整形の痕跡が残っている。

このほか2つの土師器が出土しているが、どちらも保存の状態がよくなく、取り上げの際原形を止めないほどに破損してしまった。しかし器形はどちらも2の杯と同形のもので、あることは間違いない。

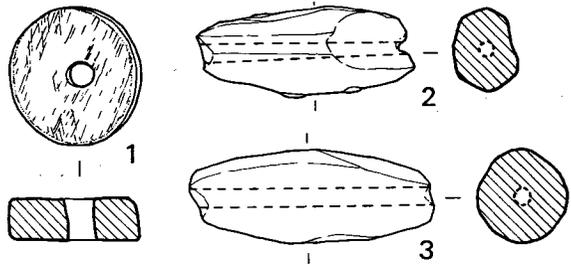
(4) その他の遺物

第Ⅲ調査区内で発見されたものである。須恵器、紡錘車、土錘がある。

須恵器 (第85図) 1は柱穴落ち込み土の最上部に発見されたものである。杯の蓋である。摘みは取れているが、おそらく宝珠摘みと考えられる。身受け部は浅く、かえりは大きく短い。かえりから天井部へはきつい角度をもって延びる。天井部外側は篋削りである。

2は表採である。宝珠摘みをもつ杯の蓋である。身受け部は浅く、かえりは小さい。かえり接合部には稜線がつく。

3は柱穴落ち込み土中から発見された杯の蓋である。若干変形しているが、身受け部は浅く、かえりは大きくしっかりしている。



第 86 図 第Ⅲ調査区出土遺物実測図 (1/2)

紡錘車 (第86図1、図版44-5)

滑石製である。長径3.7cmで、厚さ1.1cmの完形品である。孔は中心をはずれている。孔の径は0.7cmである。穿孔

は両側からなされている。研磨痕がよくわかる。

土錘（第86図2・3、図版44—6、7） どちらも表面が剥落しており、若干破損している部分もある。いずれも紡錘形のもので、製作方法は棒に粘土を巻きつけて整形をおこなったものである。一端が縄掛けのために切り込んだものがある（2）。

2は長さ5.6cm、径2.3cmで、3は長さ6.6cm、径2.6cmである。

5. 結 び

当遺跡における調査の目的は、その立地と隣接する遺跡から弥生時代の遺構の発見であったが、調査の結果は報告のとおりである。

発見された遺構は、須恵器第IV型式の時期頃と判断される掘立柱穴群と平安末期頃の円形周溝墓である。

特に円形周溝墓は全国に類例を聞かない。この遺構の時期の判断は、第84図2の杯から判断すると、これが太宰府町浦城跡出土の土師器（I—C類）に近似し（註1）、浦城跡I—C類と時間差の極めて接近した時期のものと判断され、平安末期頃に比定されよう。

また瓦器は久留米市宗崎遺跡出土の瓦器に類似するものがある（註2）。宗崎遺跡の瓦器は、当遺跡出土のものに比べて体部の立ち上がりが若干外反し、高台も短い（低い）ので、やや新しいものと考えられるが、伴出した土師器に浦城跡出土の土師器I類に比定されるものがあり、この瓦器も平安末期に比定されるものであろう。

遺構の時期は平安時代末期頃に比定して間違いのないであろうが、先述のごとく全国にその類例を聴かず、その説明資料もなく当遺構の研究に不十分な点が多く、周溝を暗渠とする資料も不十分である。十分な研究については、今後の調査に類例の遺構の発見を待ちたいが、大方の御教示を願いたい。

（浜田信也）

註1 福岡県教育委員会編「浦城跡」（『福岡県文化財報告書』45, 1970）

2 大川清、伊藤博幸「宗崎遺跡」（福岡県教育委員会編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—1—』所収 1970）

第5. 福岡県内前方後円墳地名表

(1971. 3. 31 現在)

番号	名称	所在	地	主体部構造	出土品	備考
1	石並	行橋市大字石並				(帆立貝式)
2	丸山塚	" " 徳永小字引石				
3	牟人塚	" " 高瀬 " 欠塚			人物埴輪、円筒埴輪	
4	八雷神社	" " 長木 " 宮のエン八雷神社境内				
5	姫神	京都郡犀川町大字木山小字姫神1325				
6	東城山	" " " 山鹿 " 東城山				
7	八幡	" " 勝山町 " 箕田 " 宮の裏				
8	丸山	" " " " " 丸山				
9	庄屋塚	" " " " 下黒田小字庄屋塚		横穴式石室	単龍埴頭大刀、直刀、矛刀子、鏃、馬具	九州大学保管
10	寺田川	" " " " 中黒田 " 寺田川		" (前方部)		
11	浄古庵	" " " " " 浄古庵				
12	石塚山	" 苅田町富久町1丁目		竪穴式石室	三角縁神獸鏡、銅鏃、鉄製素環頭大刀	⑦ 宇原神社保管
13	番塚	" " 大字尾原小字与原		"	画像鏡、挂甲、刀剣、胡鏡金具、矛、斧、鏃、玉類	九州大学保管
14	御所山	" " " " 与原 " 御所山		"		
15	丸山塚	" " " " 徳永 " 塚本		"	鏡、鏃、馬具、勾玉、管玉、瘡玉、丸玉	④
16	上入山	北九州市小倉区上曾根小字潤崎		横穴式石室(?)		
17	茶臼山	" " " " " "				
18	荒森	" " " " 中曾根				
19	片山	遠賀郡岡屋町大字手野				
20	位登	田川市西区大字位登小字下位登1593			鏡	

21	堤下	田川郡糸田町大字上糸田小字堤下	横穴式石室	杏葉ほか馬具類、大型器台	
22	官の脇	飯塚市大字川島	横穴式石室		
23	寺山	" "	"		
24	野添(瀬渡)	嘉穂郡稲築町大字野添	横穴式石室		
25	沖出	" " 漆生小字才木	"	鬘龍鏡、画文帯神獸鏡、挂甲、衝角付冑 馬具類、鉄斧、鋤先、楯刀、玉類	③①
26	山の神	" " 穂波町 枝国	(?)		③①
27	向	" " 若菜小字向	縦穴系横口式石室	三環鈴、挂甲、馬具類	福岡県教育委員会保管③①
28	森原	" " 椋本 森原			②②
29	金比羅山	" 桂川町			②②
30	大平	" " 寿命 " 大平			②②
31	官ノ上	" " " "			②②
32	王塚	" " " 坂元	横穴式石室	変形半円方形帯神獸鏡、鍔片、薙刀型鉄器 曲釘型金物、楯、轡、鉄鏃、鏢、耳玉	⑩ 東京国立博物館保管
33	天神山	" " 土屋 " 下宮原			⑭
34	北古賀	" 筑穂町 " 北古賀小字下村			②⑨
35	ホウケン塔	" " " 平塚			②⑨
36	野中	鞍手郡宮田町 " 上大隈小字谷頭			
37	高野	" 若宮町 " 高野			
38	剣塚	" " " "			
39	京場	" 鞍手町 " 新延小字京場			
40	神崎	" " " " 神崎			③⑤
41		宗像郡福岡町 " 両谷			
42	スベットウ	" 宗像町 " 田熊小字中尾		挂甲片、飾金具、帯金具、小刀、ガラス玉	福岡教育大学保管
43	東郷・高崎	" " " 東郷小字高崎			②③

44	相原	河東	相原	横穴式石室		㊦
45		玄海町	神湊			㊦
46		宗像郡津屋崎町大字勝浦	小字新原			㊦
47						㊦
48			大石		形象埴輪、須恵器片	㊦
49						㊦
50			生家小字裏			㊦
51	薬師山		茨山			㊦
52	奴山 9		小字原の辻			㊦
53	奴山 13		伏原			㊦
54	奴山 16					㊦
55			大練原			㊦
56	天降神社		須多田小字下ノ口			㊦
57	観音堂					㊦
58			上ノ口			㊦
59			立石			㊦
60	ミソ塚					㊦
61	ツルギ塚		ツルギ塚			㊦
62						㊦
63	葛葉(姥山)	粕屋郡粕屋町大字山ノ鼻				
64	光正寺	宇美町	下宇美小字光正寺			
65	今里	福岡市大字御陵				
66	剣塚		東光寺朝日麦酒工場内	横穴式石室	円筒埴輪、形象埴輪	㊦

67	老司	老司老松神社裏	竪穴系横口式石室	九州大学保管	②⑤
68	鋤先	福岡市大字今宿小字鋤先	(消滅)		
69	本村 1	" " " " 本村	横穴式石室(単室)		②⑥
70	今宿大塚	" " " " "	"		
71	谷上	" " " " 小字谷上	(消滅)		
72	小松原 1	" " 女原 " 小松原	粘土槌、蒔技木棺		
73	下谷	" " 徳永 " 下谷	竪穴式石室(?)		
74	若八幡神社	" " " " 下引地若八幡神社境内		福岡県教育委員会保管	
75	山の鼻 1	" " " " 山ノ鼻			
76	山の鼻 2	" " " " 山ノ鼻			
77	丸隈山	" " 周船寺小字ウエノ	横穴式石室	妙正寺及び周船寺公民館保管	⑥③④
78	子捨塚	" " 飯氏小字鏡原			②⑦
79	竹ヶ本大塚	筑紫郡春日町大字小倉小字竹ヶ本			②⑧
80	下白水大塚	" " " " 下白水			②⑨
81	日拝塚	" " " " 小字日拝塚	横穴式石室	春日町公民館保管	③
82	安徳大塚	" " 那珂川町大字安徳小字大塚	盗掘		②⑩
83	大万寺前	" " " " 後野小字大万寺前	横穴式石室		②⑪
84	妙法寺	" " " " 道善	"		②⑫
85	小丸 1	" " " " 片繩小字小丸	" (?)		②⑬
86	小丸 2	" " " " "	"		②⑭
87	浦の田 4	" " " " 浦の田	"		②⑮
88	原口	" " 筑紫野町 " 武蔵 " 原口	粘土槌(?)		②⑯

89	劍塚	筑紫野町大字衫塚	箱式石棺(?)	内行花文鏡(柏載)、鉄製品、円筒埴輪、	福岡市教育委員会保管
90	井原	糸島郡志摩町大字井原			葦石 ¹⁵
91	大塚1	前原町 大塚			葦石 ¹⁵
92	大塚2	前原町 大塚			葦石 ²¹
93	端山	前原町 三雲			葦石 ²¹
94	築山	前原町 大塚	(消滅)		葦石 ²¹
95	先山1	前原町 曾根原			葦石 ²¹
96	先山2	前原町 大塚			葦石 ²¹
97	ゼニガメ塚(同3)	前原町 大塚	横穴式石室(?)	家形埴輪	糸島高校保管
98	先山4	前原町 大塚			葦石 ²¹
99	先山5	前原町 大塚			葦石 ²¹
100	有田1	有田 大塚			葦石 ²¹
101	二塚	有田 二塚			葦石 ²¹
102	大鷲2	高祖大鷲			葦石 ²¹
103	高祖	高祖 大塚			葦石 ²¹
104	銚子塚	二丈町 田中	竪穴式石室	三角縁神獸鏡、方格規矩四神鏡、内行花文鏡、勾玉、管玉、刀、劍、槍、鏃	京都大学保管
105	二塚	糸島郡二丈町大字松末			葦石 ¹⁵ ¹⁶
106	二塚	波呂	舟形石棺	(鏡、勾玉、管玉、刀、劍、槍、鏃)	糸島高校保管
107	長浦	鹿家小字長浦			糸島高校保管
108	鬼の枕	甘木市大字菩提寺丸山公園内	横穴式石室(?)	土師器、馬形埴輪、円筒埴輪	朝倉高校保管
109	茶臼塚	小田小字茶臼塚582		横板短甲、鉄鉾、勾玉、丸玉、鉄鏃、衝角付冑、四環鈴、肩繩、轡	葦石 ²⁹
110	ヤツ工	三奈木	(消滅)		葦石 ³⁰
111	劍塚	朝倉郡朝倉町大字菱野劍塚		円筒埴輪	葦石、別区造出

112	宮地嶽	朝倉郡朝倉町大字宮野小字宮地嶽		円筒埴輪	福岡教育大学保管	⑩
113	津古1	三井郡小郡町大字津古	粘土郷	刀子3、小玉2、土師器		
114	津古2	" " " "	横穴式石室	刀子3、小玉2、土師器		
115	穴観音	" " " 千渴城山1543	" "	刀子3、小玉2、土師器		
116	木塚	久留米市大字木塚	" "	刀子3、小玉2、土師器		
117	日輪寺	久留米市京町6丁目	冢形石棺(横口式)	四獣鏡、銅環、勾玉、管玉、小玉、鉄鏃 須臾器	日輪寺保管	①
118	浦山	久留米市上津町大字上津荒木小字浦山	冢形石棺(横口式)	円筒埴輪	(帆立貝式)	②
119	甲塚	" 甲塚	冢形石棺(横口式)	形象埴輪、円筒埴輪	(帆立貝式)	⑤
120	御塚	" 大字宮本	冢形石棺(横口式)	埴輪(円筒、人物、家形、蓋) 藤手刀子 管玉	福岡県教育委員会保管	②④
121	石櫃山	" " 鎌水				
122	追分	久留米市 " 安武本小字追分	(消滅)			
123	銚子塚	" " 山の町	(消滅)			
124	二子塚	" " 荒木小字二子塚				
125	清澄橋	浮羽郡田主丸町大字石垣小字清澄橋				
126	御善塚	" " " " "				
127	女塚	" 吉井町大字新治				
128	月の岡	" " 若宮八幡神社境内	竪穴式石室(長持形石棺)	短甲、眉庇付冑、鉄鏃、鏡	若宮八幡宮保管	③
129	日の岡	" " " "	横穴式石室	円筒埴輪	葦石	③
130	の堂	" " 大字吉田塚の堂	" "	短甲、衝角付冑、袖獣鏡、貝釧、滑石製品 刀、刀子、鏃、鉄鏃	東京国立博物館保管 浮羽高校保管	⑫
131	重定寺	" 浮羽町 " 朝田楠名688	" "			
132	正法寺	" " " " 法正寺734				
133	東隈上	" " " 東隈上小字屋次郎丸519の1	横穴式石室 冢形石棺(横口式)	石人、冢形埴輪、人物埴輪	九州大学、京都大学保管	⑬
134	石山人	八女郡広川町 " 一条 " 人形原				

135	神奈無田 4	八女郡広川町大字太田薬師塚			
136	善藏塚	" " " 六田		須惠器大形器台	
137	茶臼塚	八女郡立花町北山区小倉谷		須惠器、土師器、石人、石馬、石刀、石壺 石臼、石鳥	聖福寺及びび収蔵庫、東京 国立博物館、福岡教育大 学保管 ㊦
138	茶臼山	" " " 上ノ原			
139	岩戸山	八女市大字吉田小字甚三谷			
140	乗場	" " " 乗場	横穴式石室		
141	鶴見山	" " 豊福鶴見山			
142	丸山	" " "			
143	釘崎 2	" " 釘崎			
144	釘崎 3	" " "			
145	久保 1	" " 久保(?)			
146	長田	山門郡瀬高町大字長田			
147	大塚	" " " 大草			
148	車塚	" " " 山門藤尾			
149	石神山	三池郡高田町大字上楠田	舟形石棺	武装石人	
150	黒崎	大牟田市大字黒崎			

※ 備考欄の○中の数字は参考文献番号である。

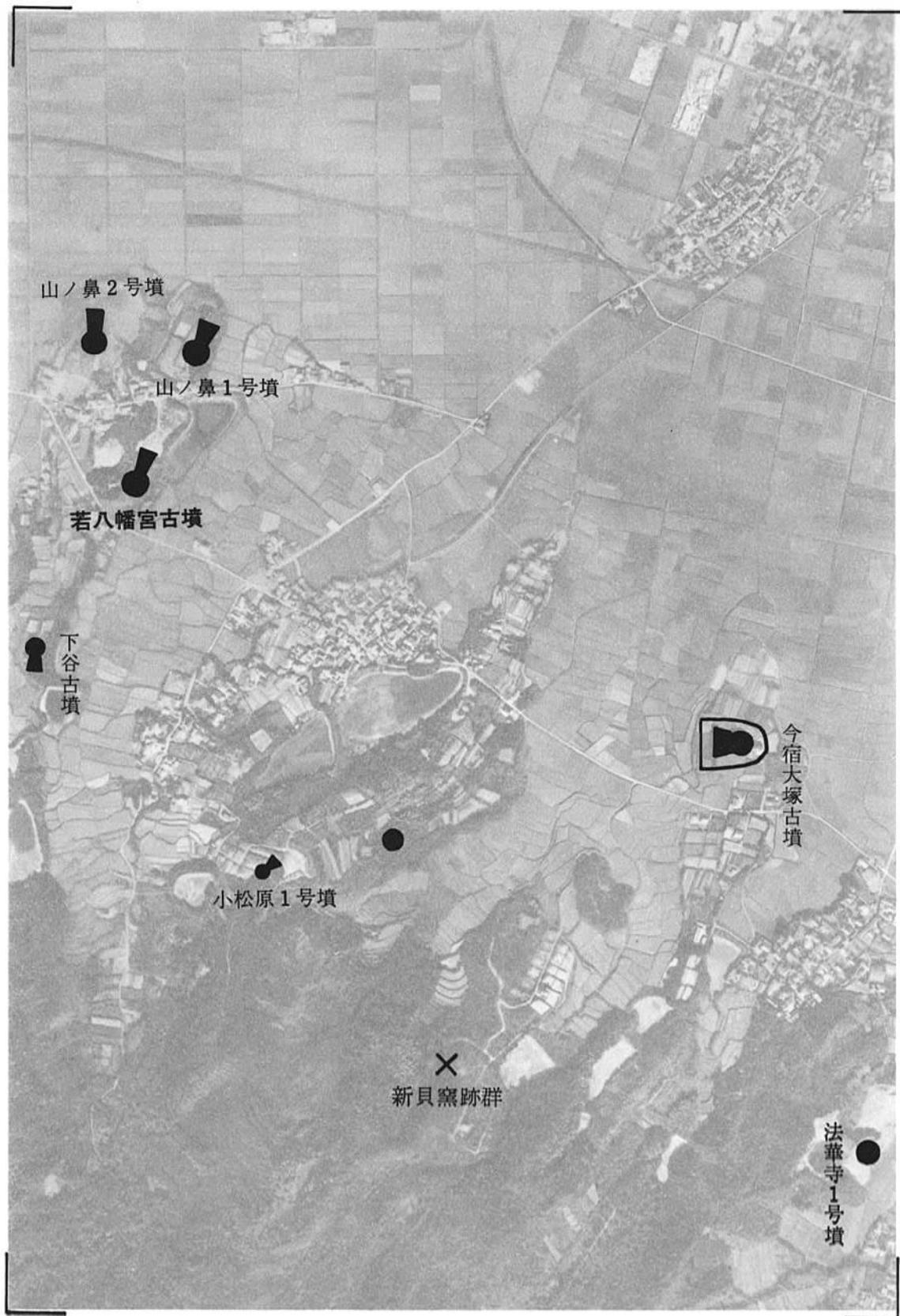
(浜田信也)

参 考 文 献

- 1、梅原末治「筑後国久米米市日輪寺古墳」（『京都大学文学部考古学研究報告』1, 1917）
- 2、浜田耕作「筑後国三井郡上津荒木村二軒茶屋の古墳」（『京都大学文学部考古学研究報告』3, 1919）
- 3、島田寅次郎「石室古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1, 1925）
- 4、島田寅次郎「与原古墳（御所山古墳）」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1, 1925）
- 5、島田寅次郎「東光寺古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1, 1925）
- 6、島田寅次郎「丸隈山古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1, 1925）
- 7、島田寅次郎「石塚山の古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1, 1925）
- 8、島田寅次郎「日拝塚」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』5, 1930）
- 9、武藤直治・石野義助「御塚及権現塚に関する調査」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』7, 1932）
- 10、川上市太郎「筑前王塚古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』11, 1935）
- 11、島田寅次郎「異例の古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』10, 1935）
- 12、宮崎勇造「筑後国浮羽郡千年村徳丸塚堂古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』10, 1935）
- 13、武藤直治・鏡山猛「筑後一条石人山古墳」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』12, 1937）
- 14、梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚裝飾古墳」（『京都大学文学部考古学研究報告』15, 1940）
- 15、小林行雄・有光教一・森貞次郎「一貴山銚子塚古墳の調査報告書」（『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』16, 1952）
- 16、小林行雄「福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究」（1953）
- 17、渡辺正気「九州前方後円墳集成1」（1959）
- 18、渡辺正気・松岡史「福岡県京都郡番塚前方後円墳」（『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』1959）
- 19、石人石馬研究会編「九州前方後円墳地名表」（1963）
- 20、九州考古学会編「北九州古文化図鑑第2輯」（1951）
- 21、原田大六「福岡県糸島郡平原弥生古墳調査概報」（『福岡県文化財調査報告書』33, 1965）
- 22、桂川町編「桂川町誌」（1967）
- 23、波多野院三「東郷遺跡群」（1967）
- 24、宮小路賀宏「石櫃山古墳」（『福岡県文化財調査報告書』41, 1969）
- 25、福岡市教育委員会「老司古墳」（1969）
- 26、亀井明德「福岡市およびその周辺の古墳文化」（福岡市教育委員会編『福岡市とその周辺の文化財』所収1969）
- 27、福岡市教育委員会編「埋蔵文化財遺跡地名表」1,（1969）
- 28、渡辺正気・柳田康雄「油田古墳群」（『福岡県文化財調査報告書』42, 1969）
- 29、児島隆人「立岩」（1969）

- 30、朝倉高校史学部編「埋もれた朝倉文化」(1969)
- 31、穂波町編「穂波町誌」(1969)
- 32、森貞次郎「装飾古墳の発生まで」(『古代の日本3九州』所収 1970)
- 33、小田富士雄「畿内型古墳の伝播」(『古代の日本3九州』所収 1970)
- 34、福岡市教育委員会編「丸隈山古墳」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』10, 1970)
- 35、渡辺正気「銀冠塚」(『福岡県文化財調査報告書』28, 1963)
- 36、宗像大社祭祀遺跡調査団編「宗像—古代遺跡地名表—」1 (1969)

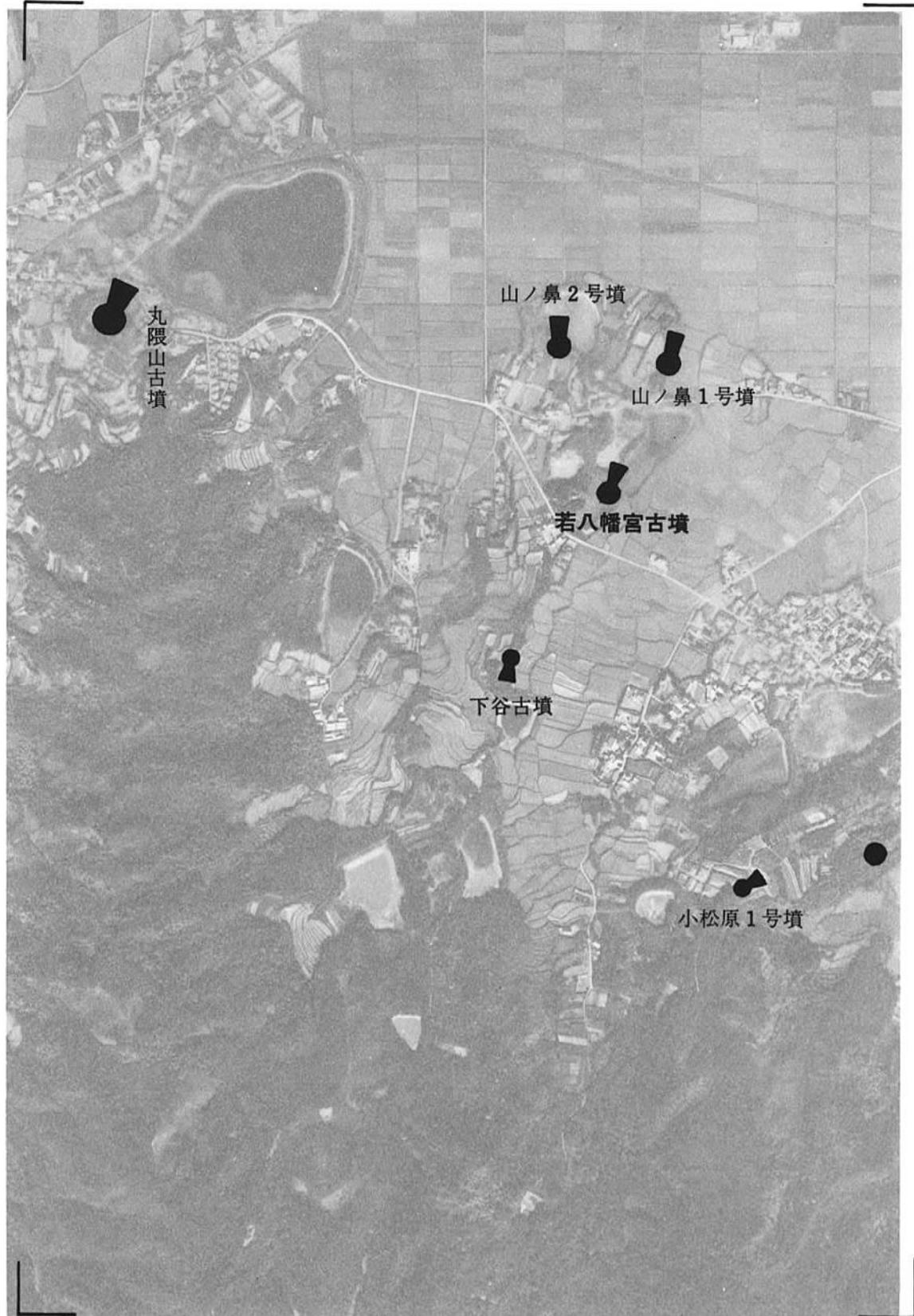
図 版



女原付近航空写真 (1/8,000)



女原付近航空写真 (1/8,000)



徳永付近航空写真 (1/8,000)



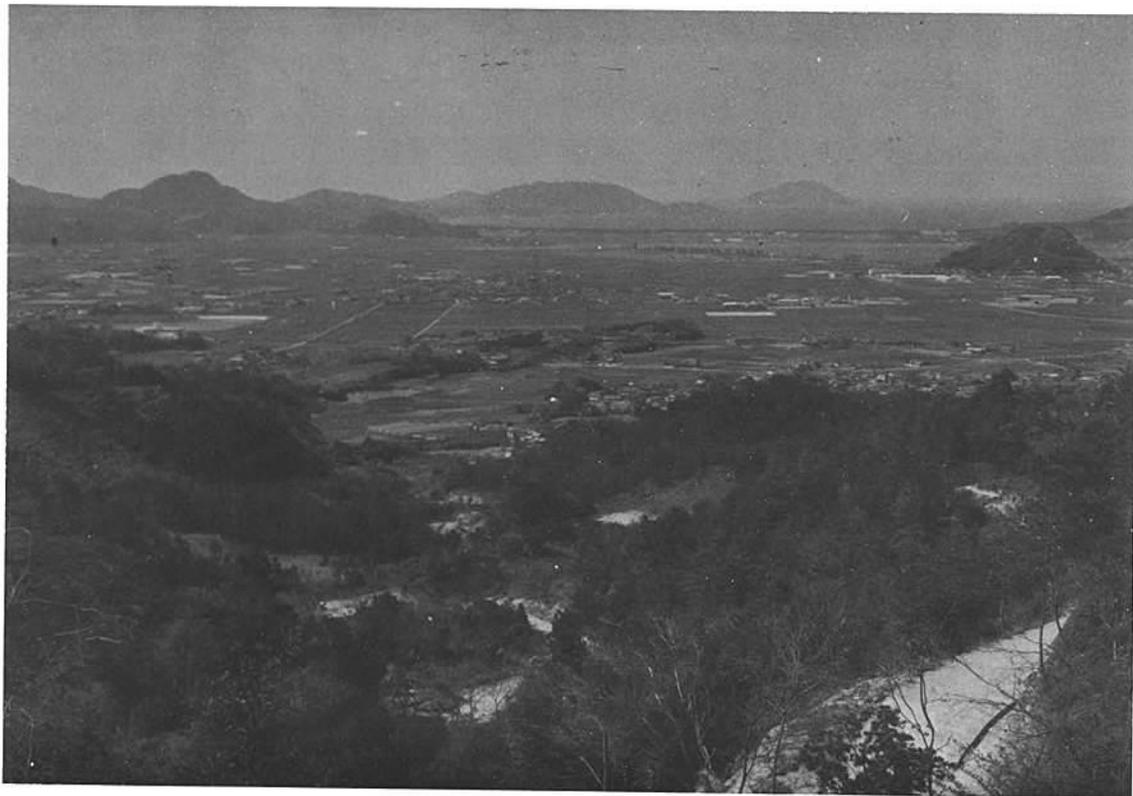
徳永付近航空写真（1/8,000）



飯氏付近航空写真 (1/8,000)



飯氏付近航空写真 (1/8,000)



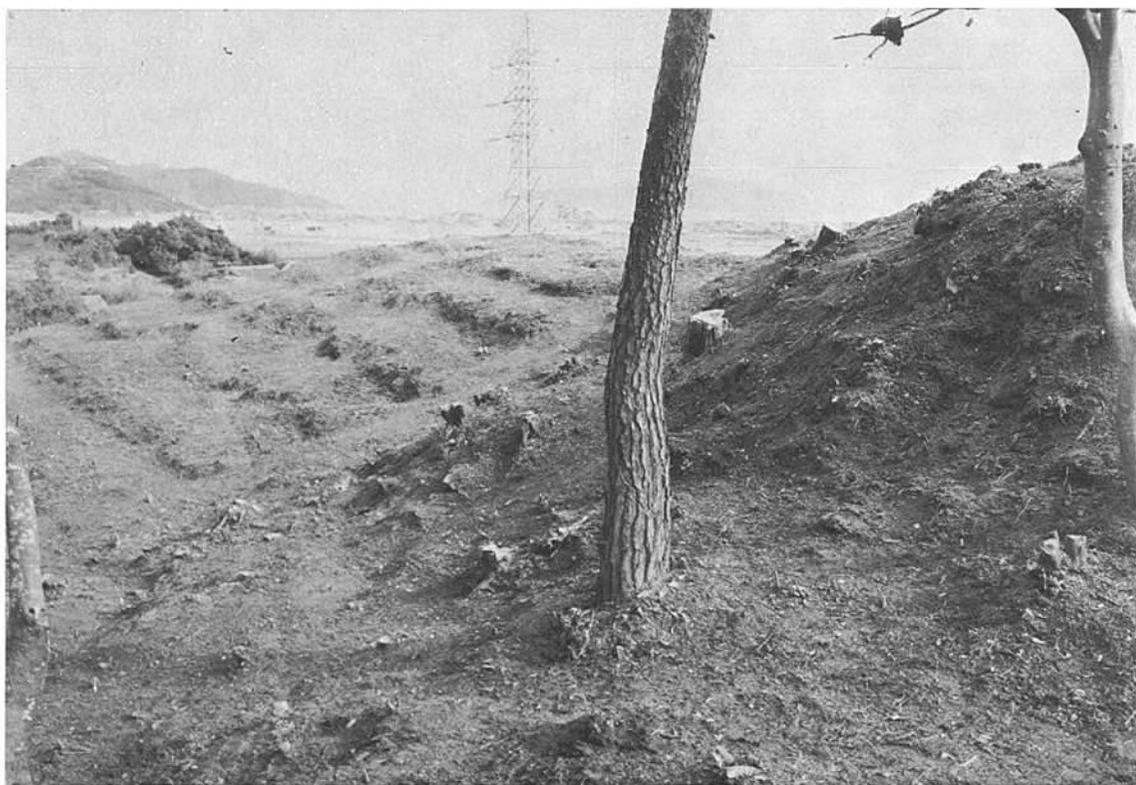
1 若八幡宮古墳遠景（南から）



2 若八幡宮古墳近景（東から）



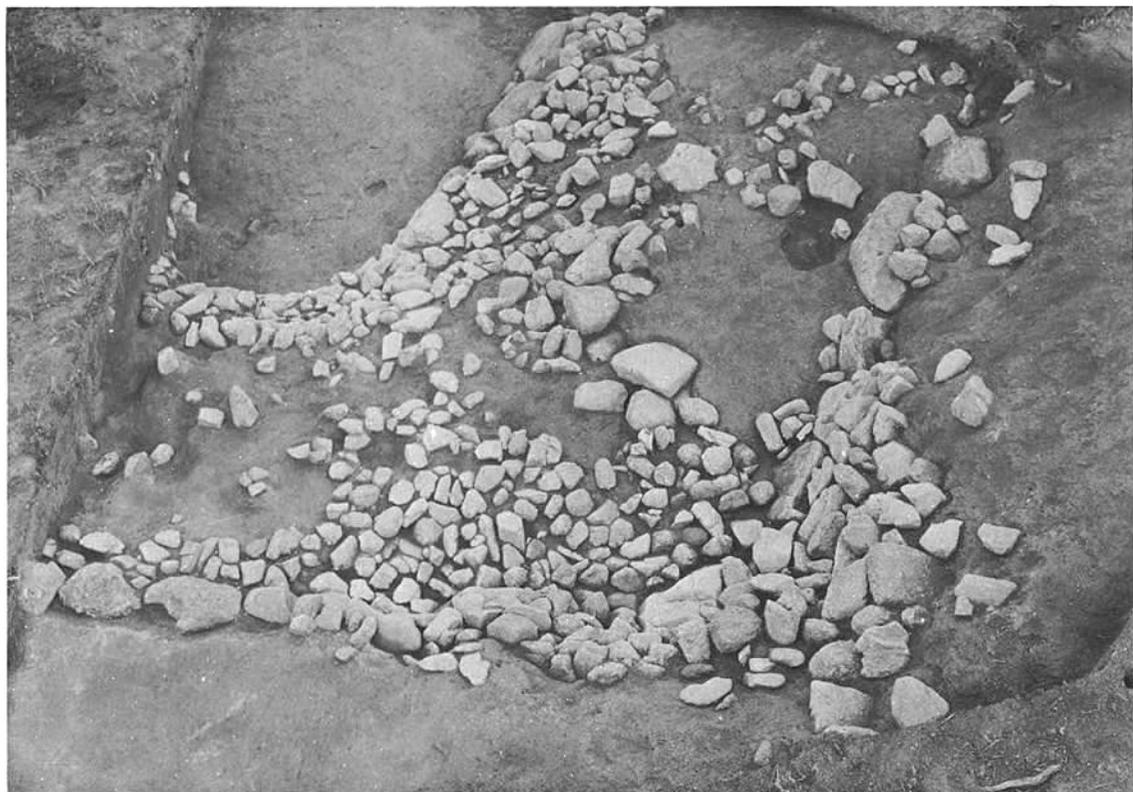
1 調査前の古墳の側面（北西から）



2 調査前の古墳の側面（南西から）



前方部全景（後円部から）



1 東くびれ部葺石俯瞰



2 東くびれ部葺石側面



1 後円部東側葺石部分



2 前方部東側葺石部分



1 西くびれ部葺石俯瞰



2 前方部西側葺石側面（北西から）



1 西くびれ部葺石側面（北西から）



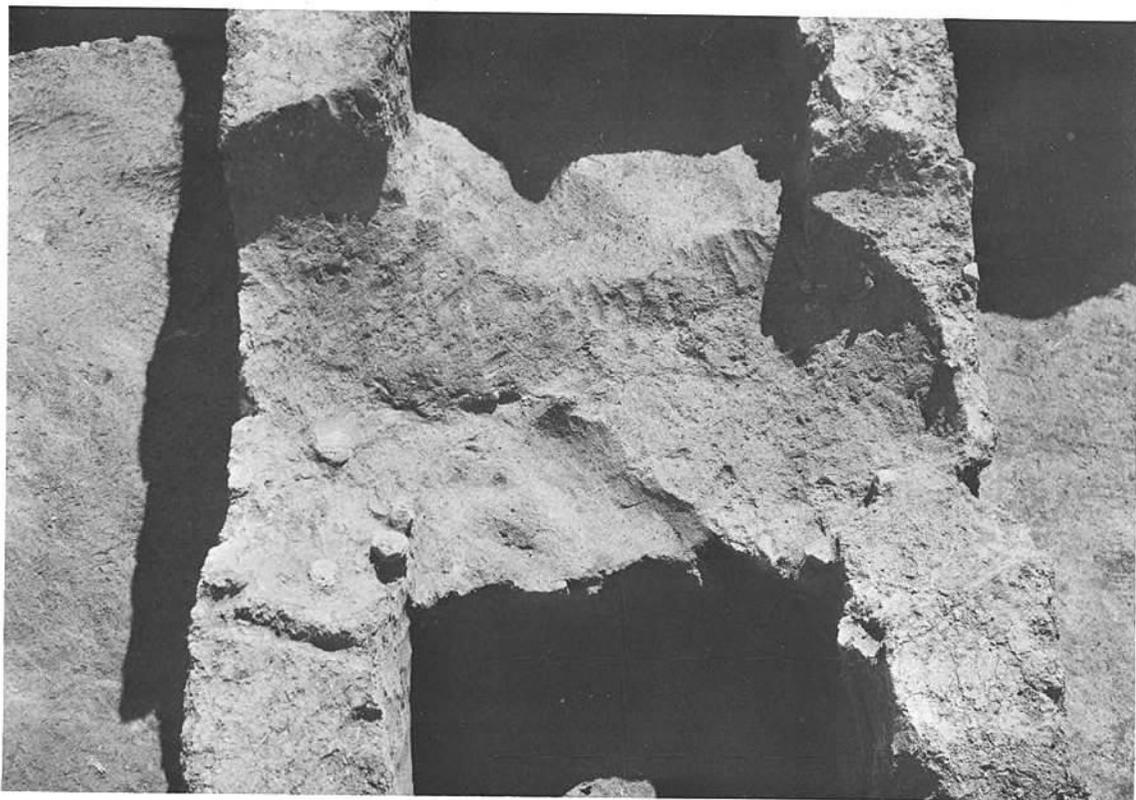
2 墳頂部遺構全景（北から）



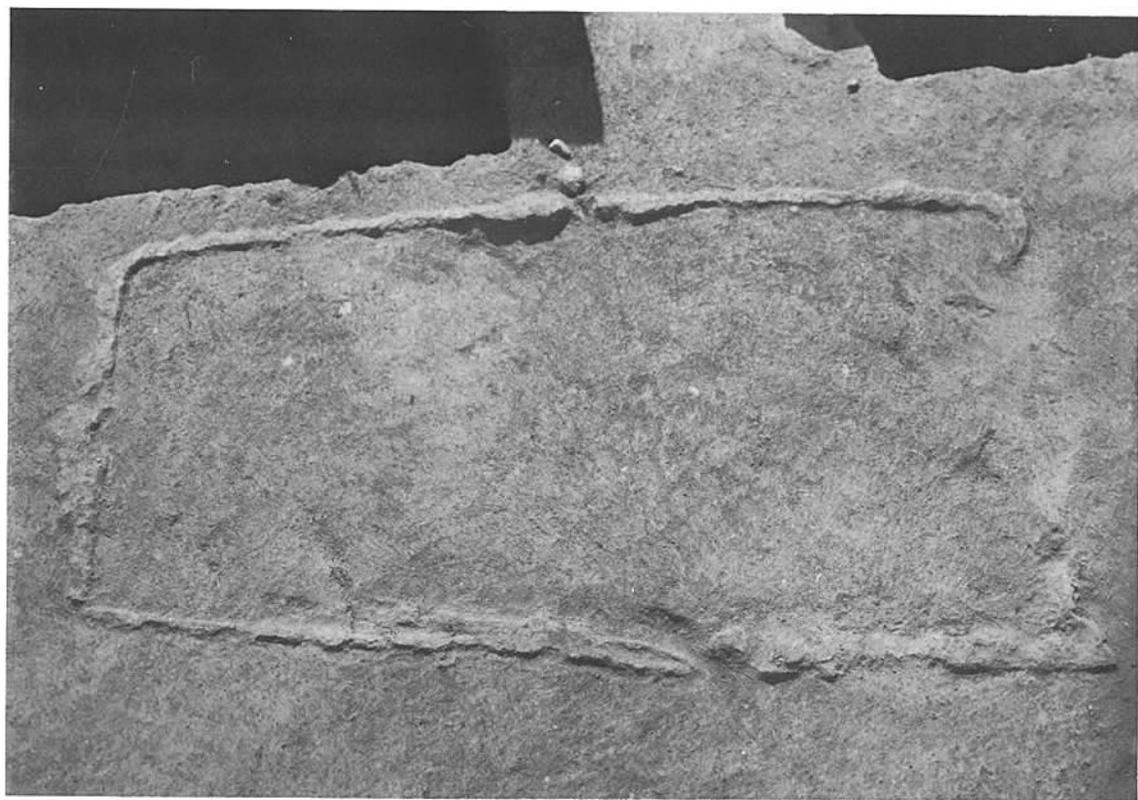
1 銅製円盤と土師器の出土状態（東から）



2 銅製円盤



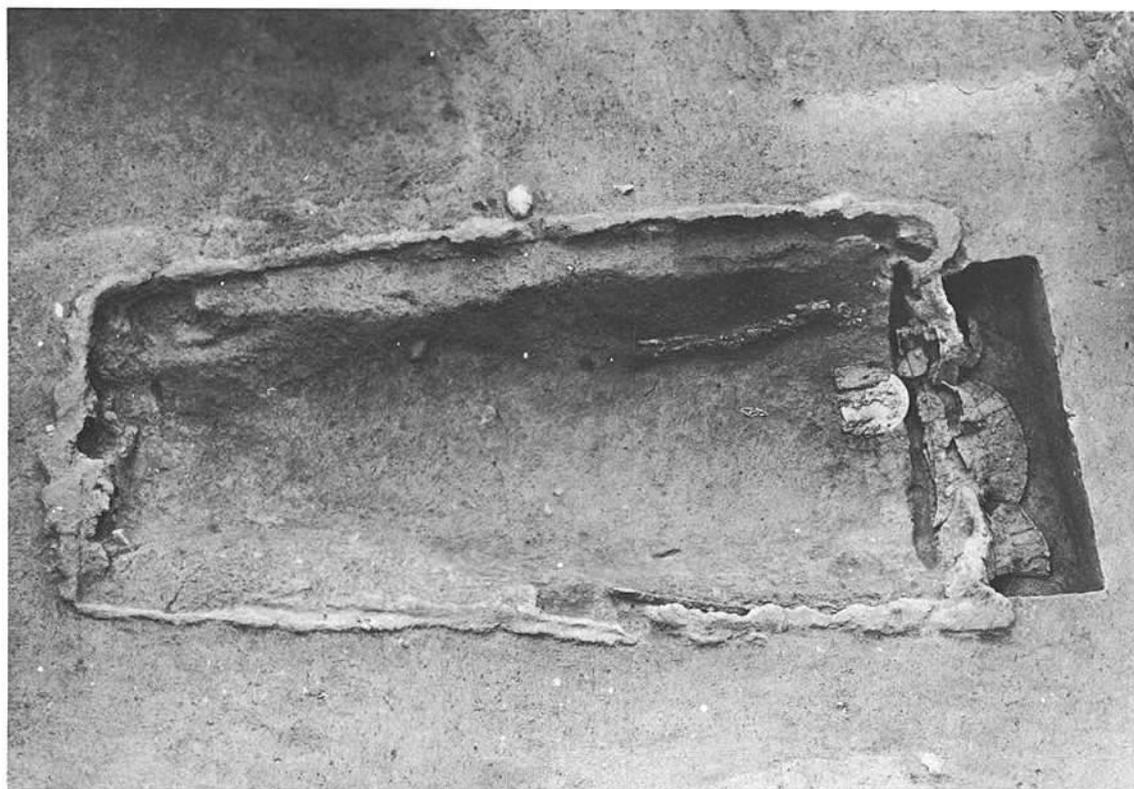
1 墳頂部遺構（調査後）



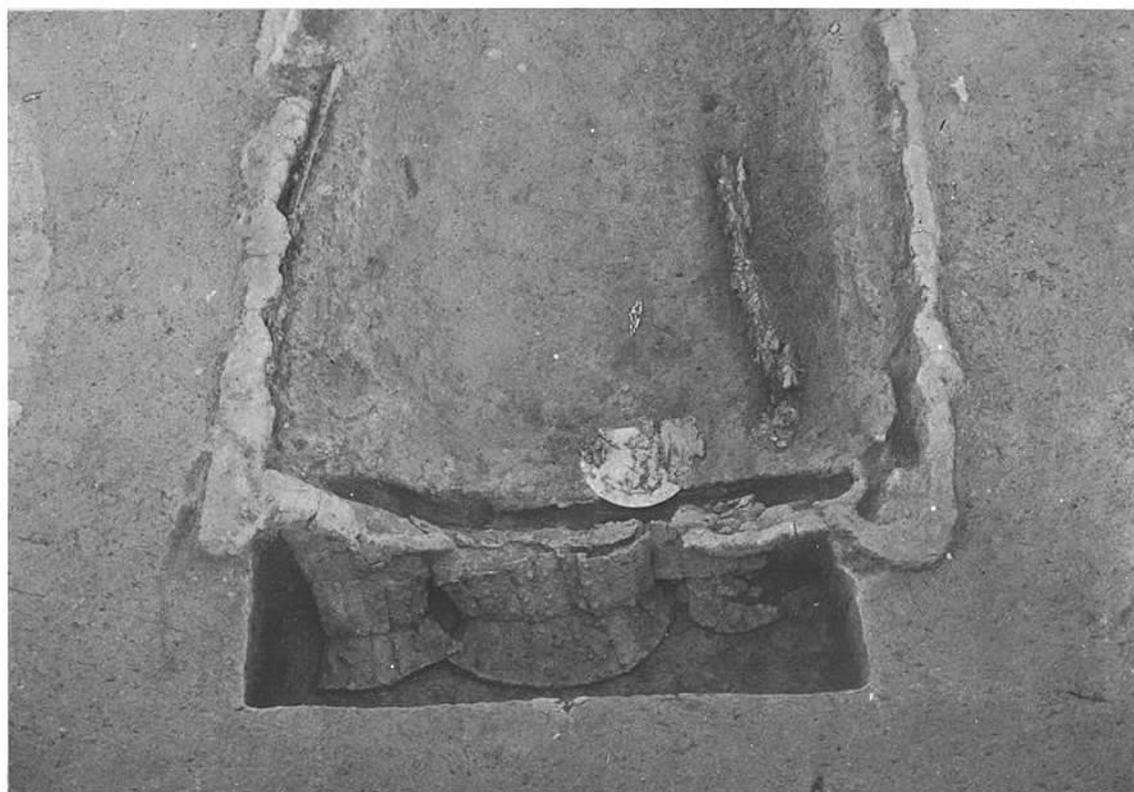
2 主体部調査前（北から）



主体部全景（東から）



1 主体部全景（北から）



2 主体部頭部（西から）



1 銅鏡上面の木片



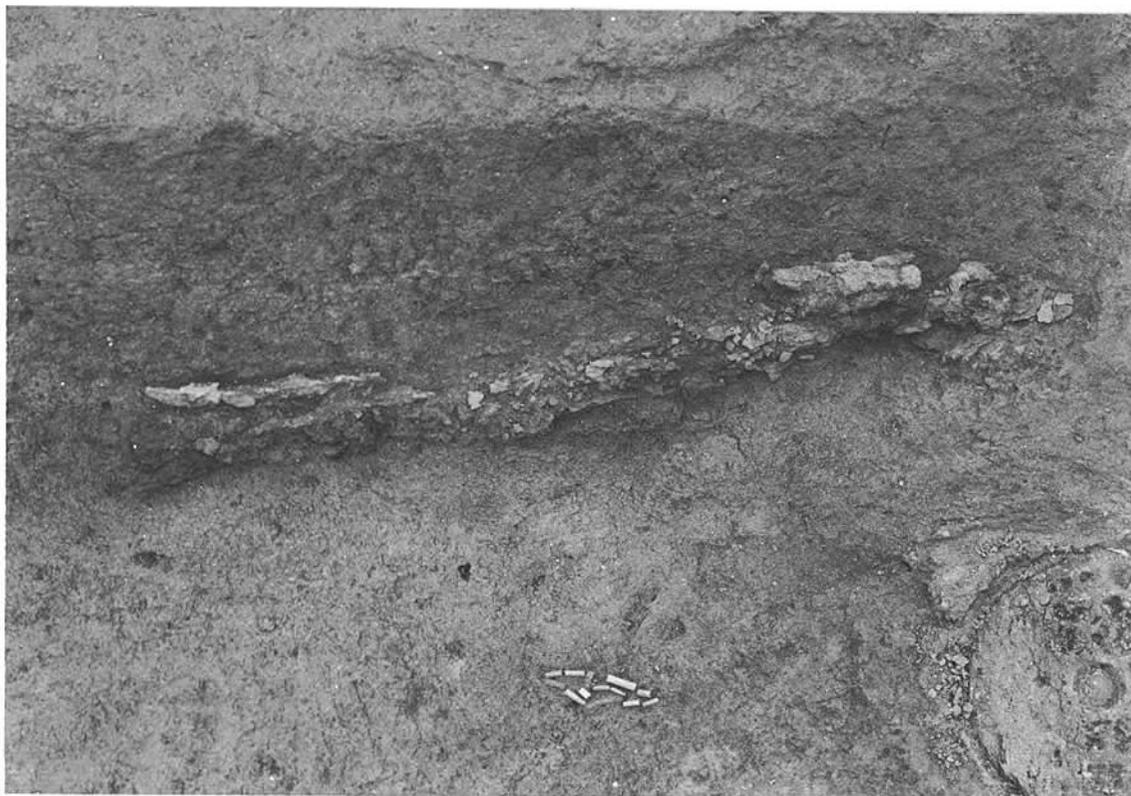
2 銅鏡出土状態



1 銅鏡直下の木片



2 玉類出土状態



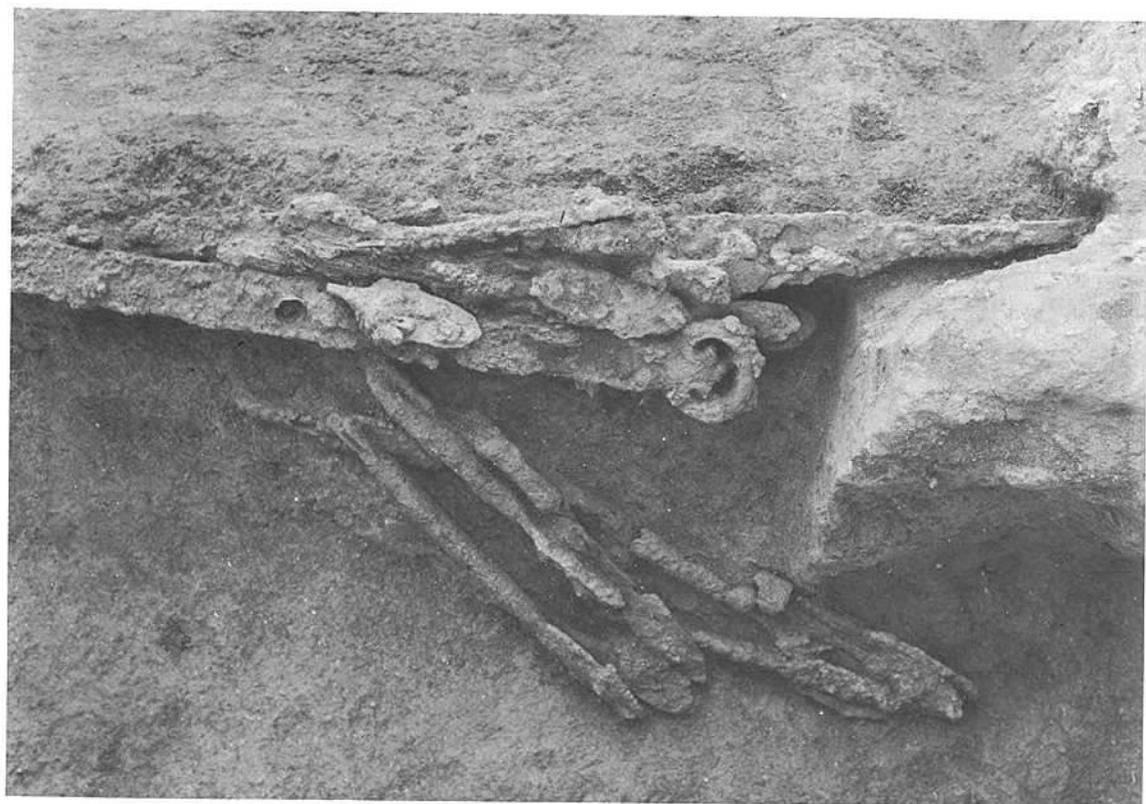
1 棺内南側出土遺物（北から）



2 棺外北側粘土下の環頭大刀（南から）



1 棺外北側出土鉄器（北から）



2 棺外北側出土鉄器部分



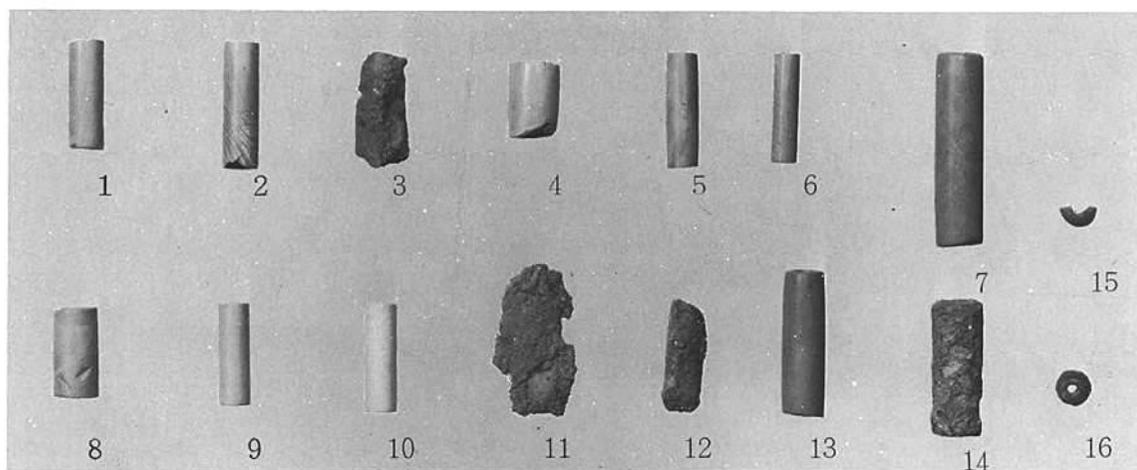
1 棺外西側出土短甲俯瞰



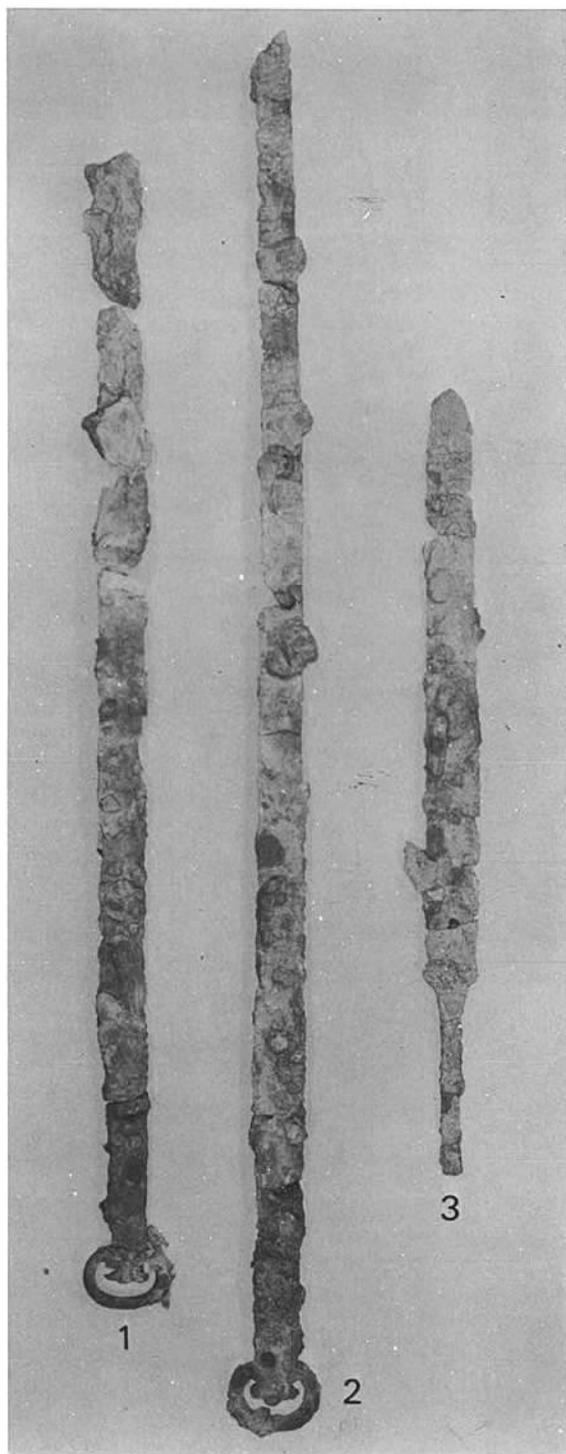
2 棺外西側出土短甲（西から）



1 □是作二神二獸鏡



2 管玉·小玉 (実大)



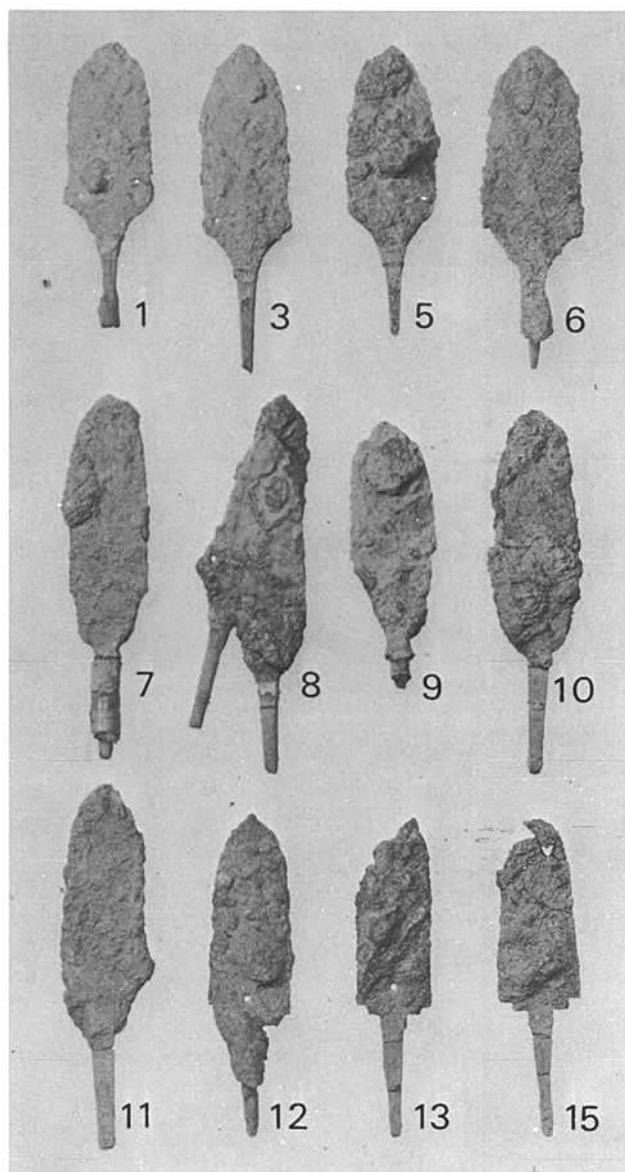
1 環頭大刀・鉄劍



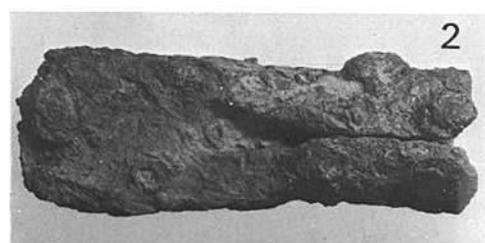
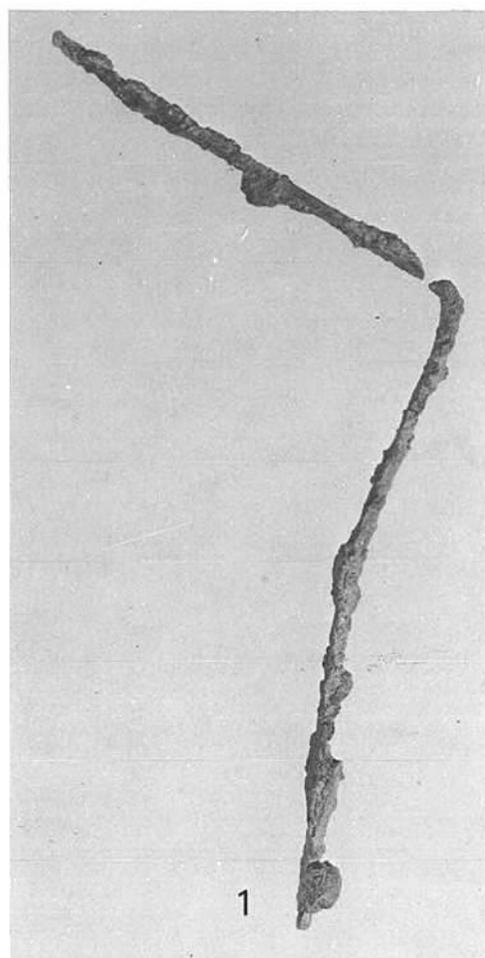
2 鉄製環頭 (実大)



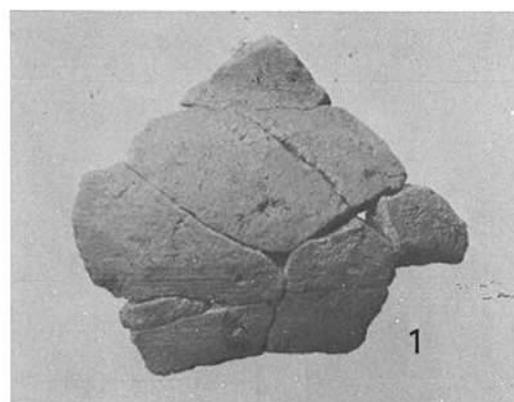
3 刀子 (1/2)



1 鉄 鏃



2 鉤・鉄斧 (1/2)



3 土 師 器





1 遺跡遠景 (矢印1 飯氏馬場遺跡 矢印2 飯氏鏡原遺跡)



1 A区遺構全景



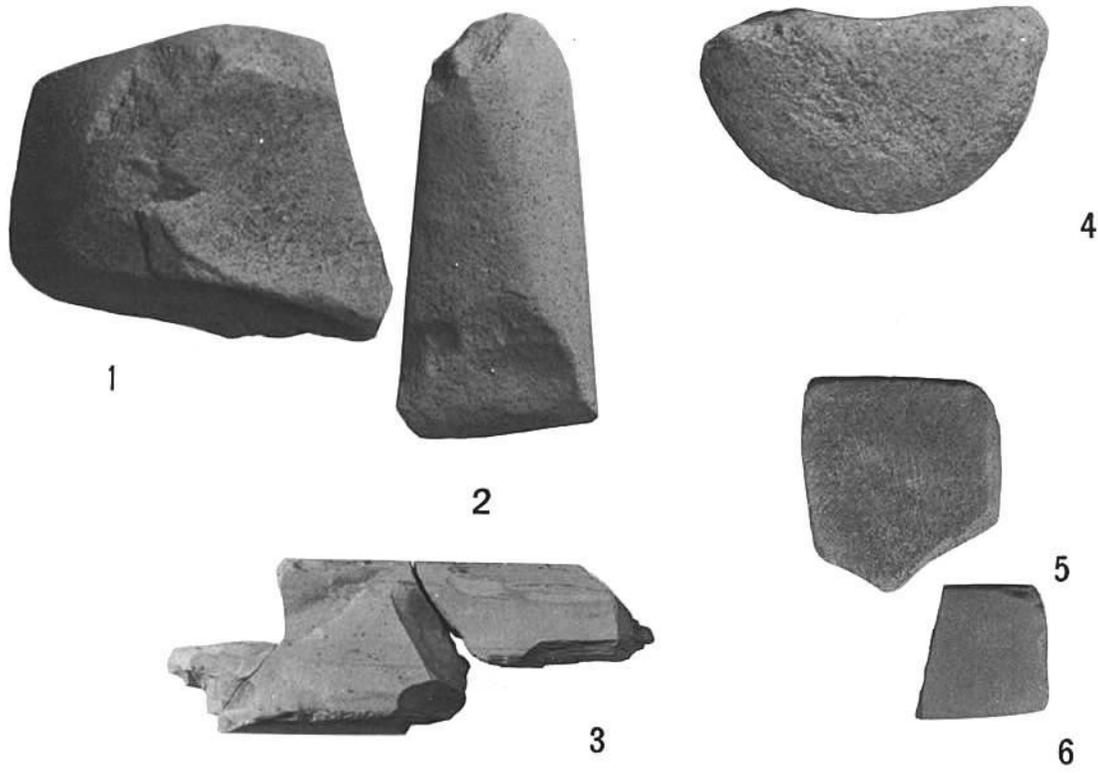
2 B区遺構全景



1 住居跡（北から） 矢印 鏡出土地点



2 住居跡内出土土器



1 住居跡内出土遺物 (1/2)

- 1 砥石
- 2 磨製石斧

- 3 磨製石斧
- 4 磨石

- 5 砥石
- 6 砥石



2 住居跡覆土 出土遺物 (1/2)



1 1号木棺墓



2 2号木棺墓



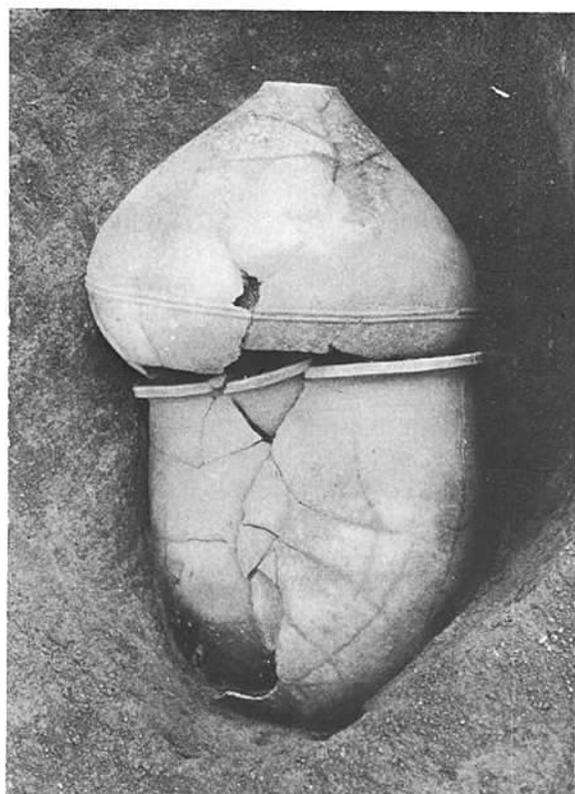
1 3号木棺墓



2 4号木棺墓



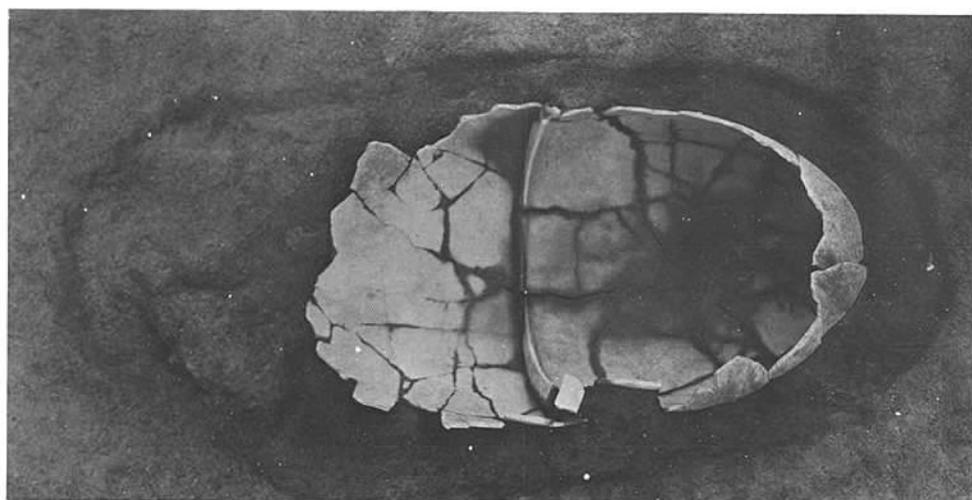
1 A区西端の甕棺墓と木棺墓



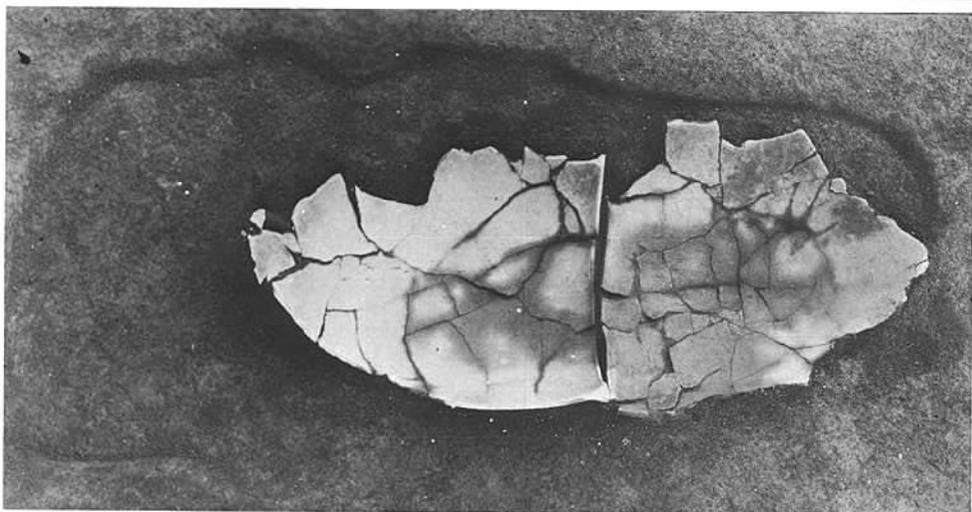
2 1号甕棺墓



3 2号甕棺墓



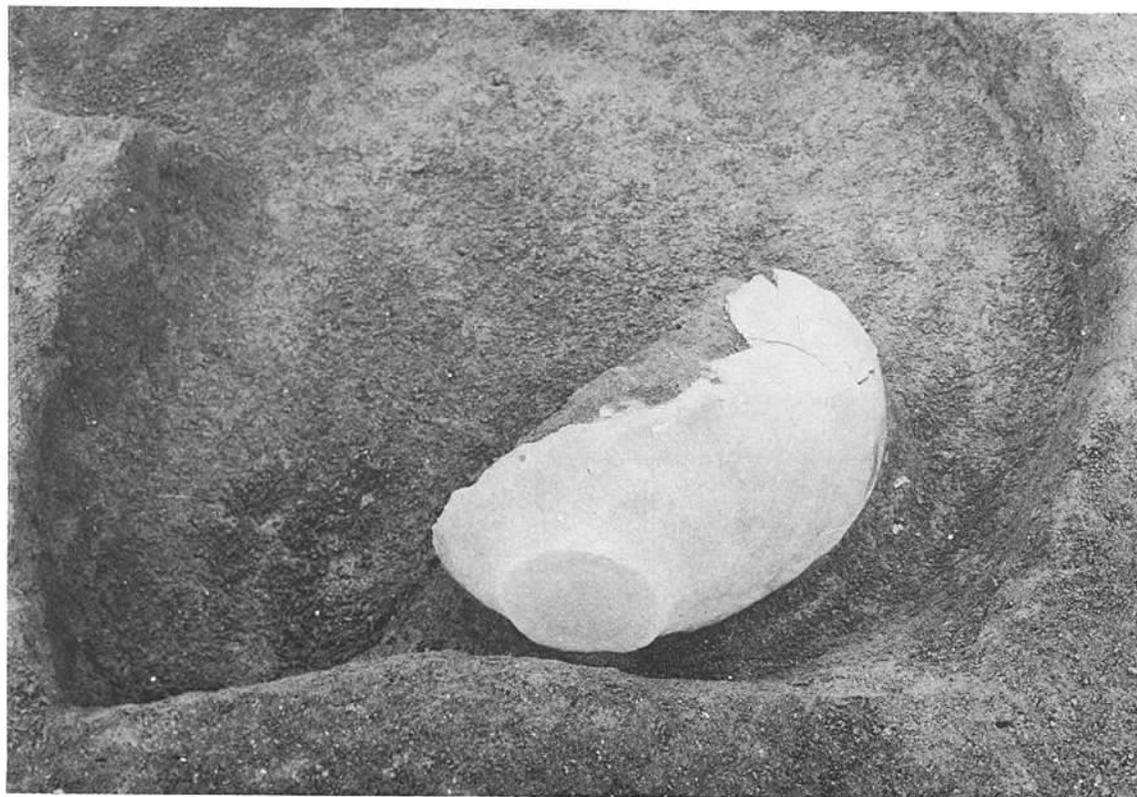
1
3号喪棺墓



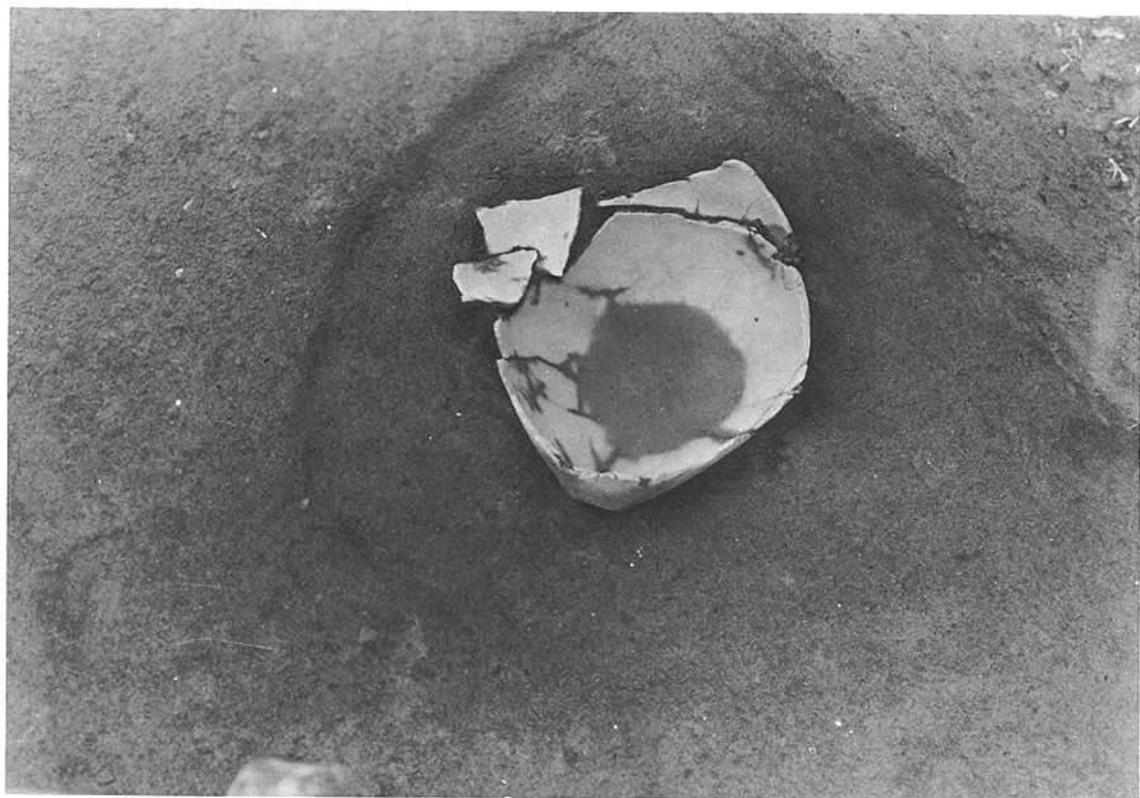
2
4号喪棺墓



3
5号喪棺墓抜き跡



1 6号裹棺墓



2 7号裹棺墓



1 8号甕棺墓



2 9号甕棺墓



1



2



3



8



7



9



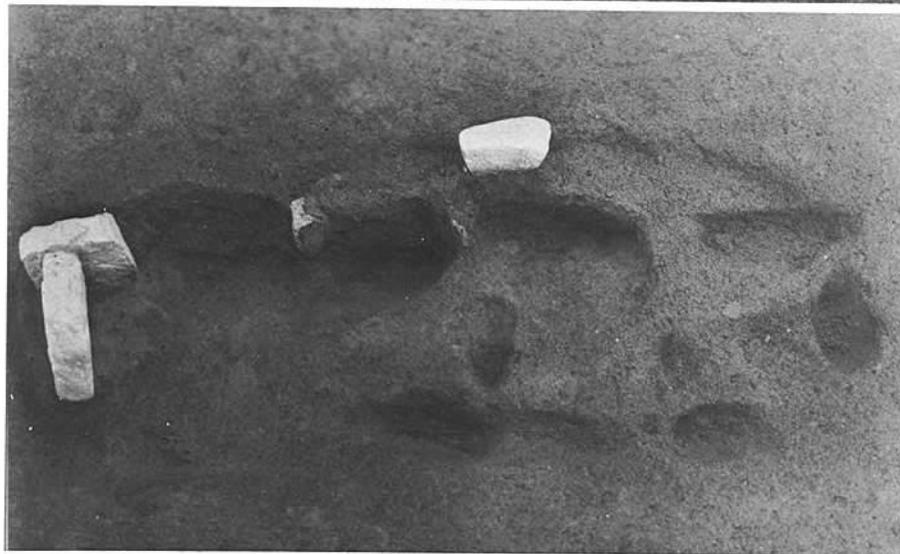
甕 棺 (番号は甕棺番号である。上が上甕である。)



1
1号石棺墓



2
2号石棺墓



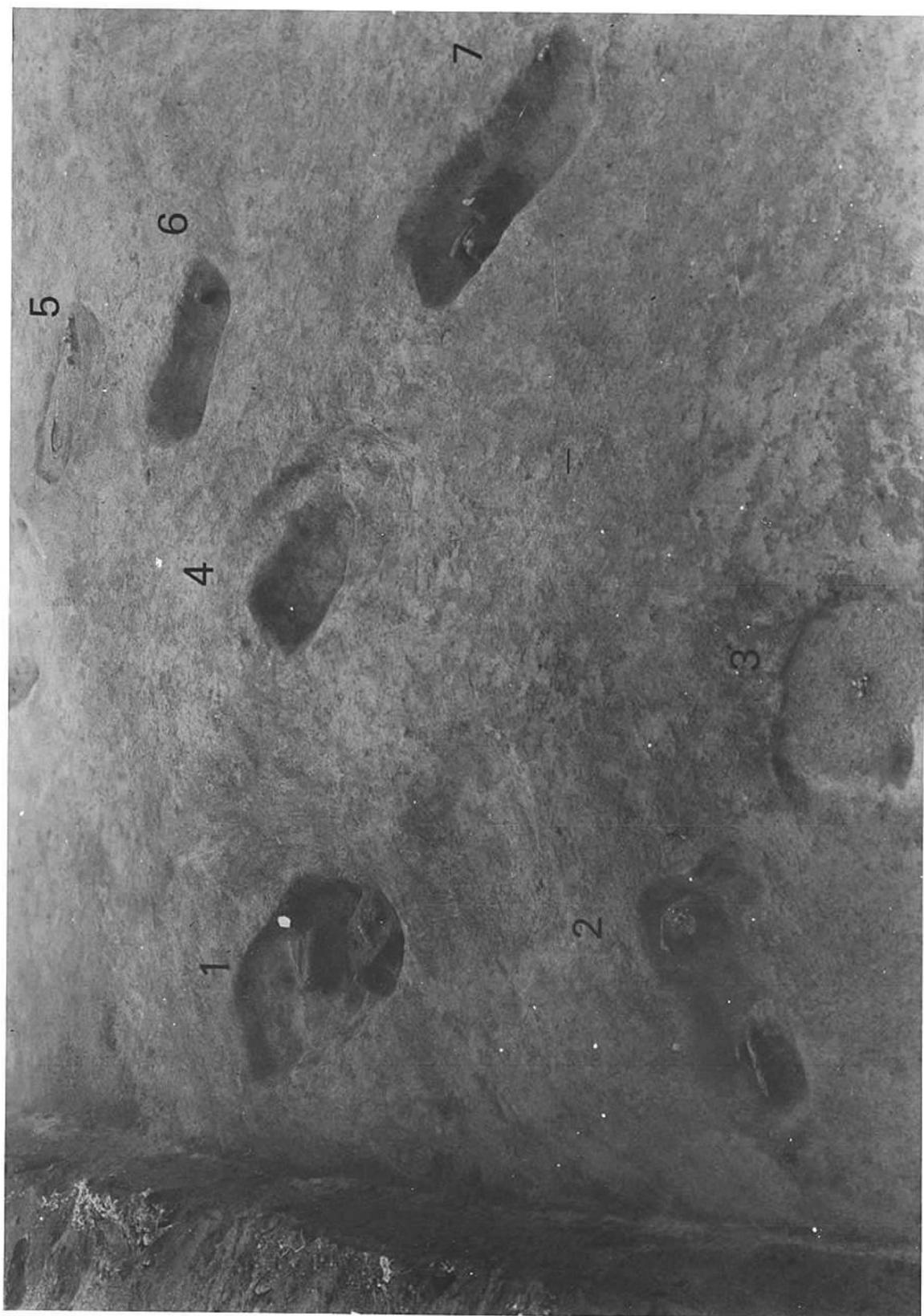
3
3号石棺墓



1 3号石棺墓付近出土の刀子（実物大） 2 2号石棺墓付近出土の不明鉄器（実大）



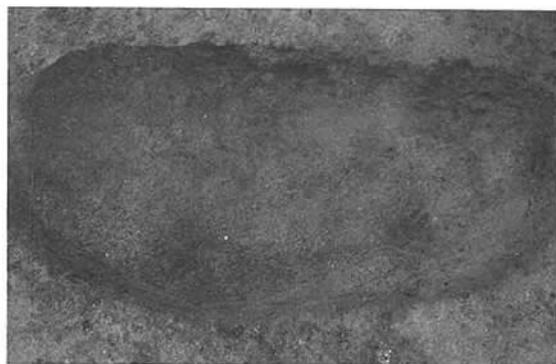
3 3号石棺墓付近出土の小型仿製内行花文鏡（実大）



1 歴史時代土塚墓 全景(東から) 番号は土塚番号



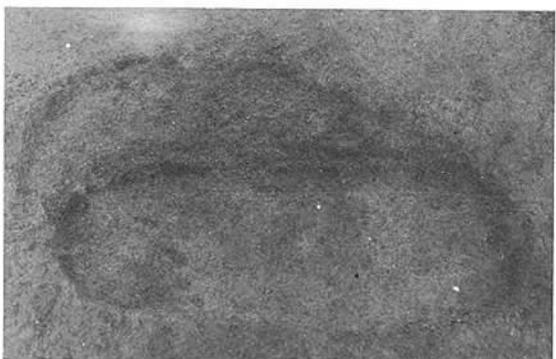
1号土塚墓



2号土塚墓



5号土塚墓



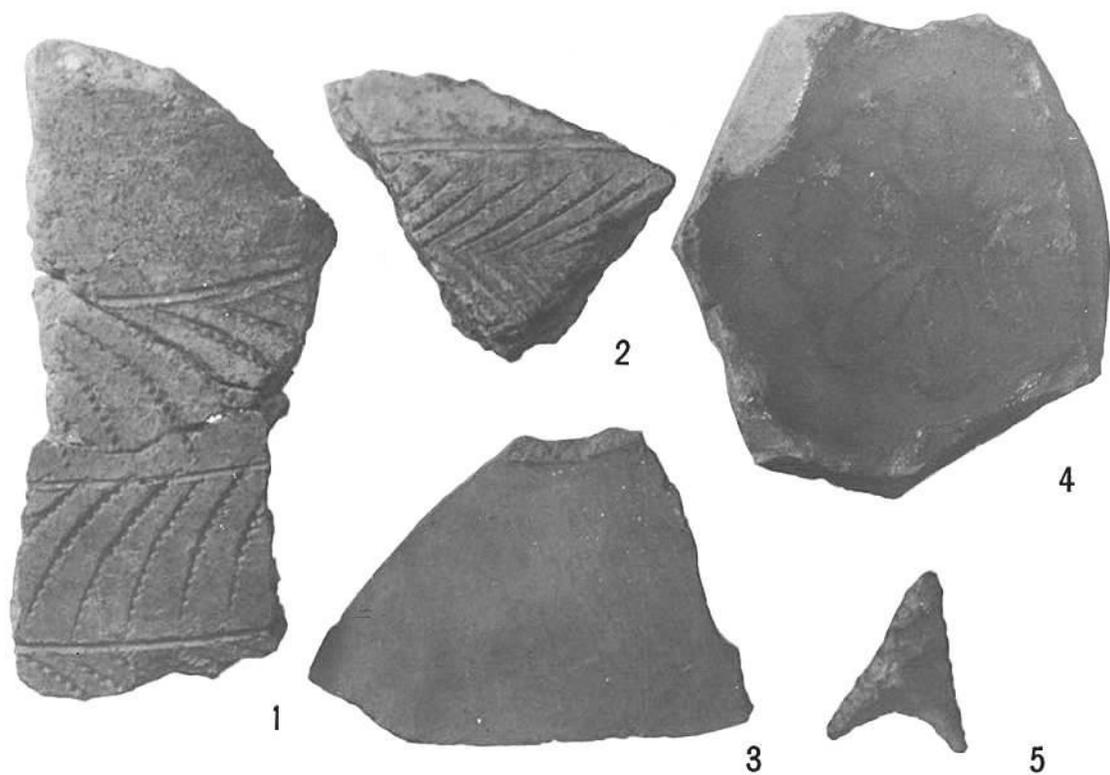
7号土塚墓



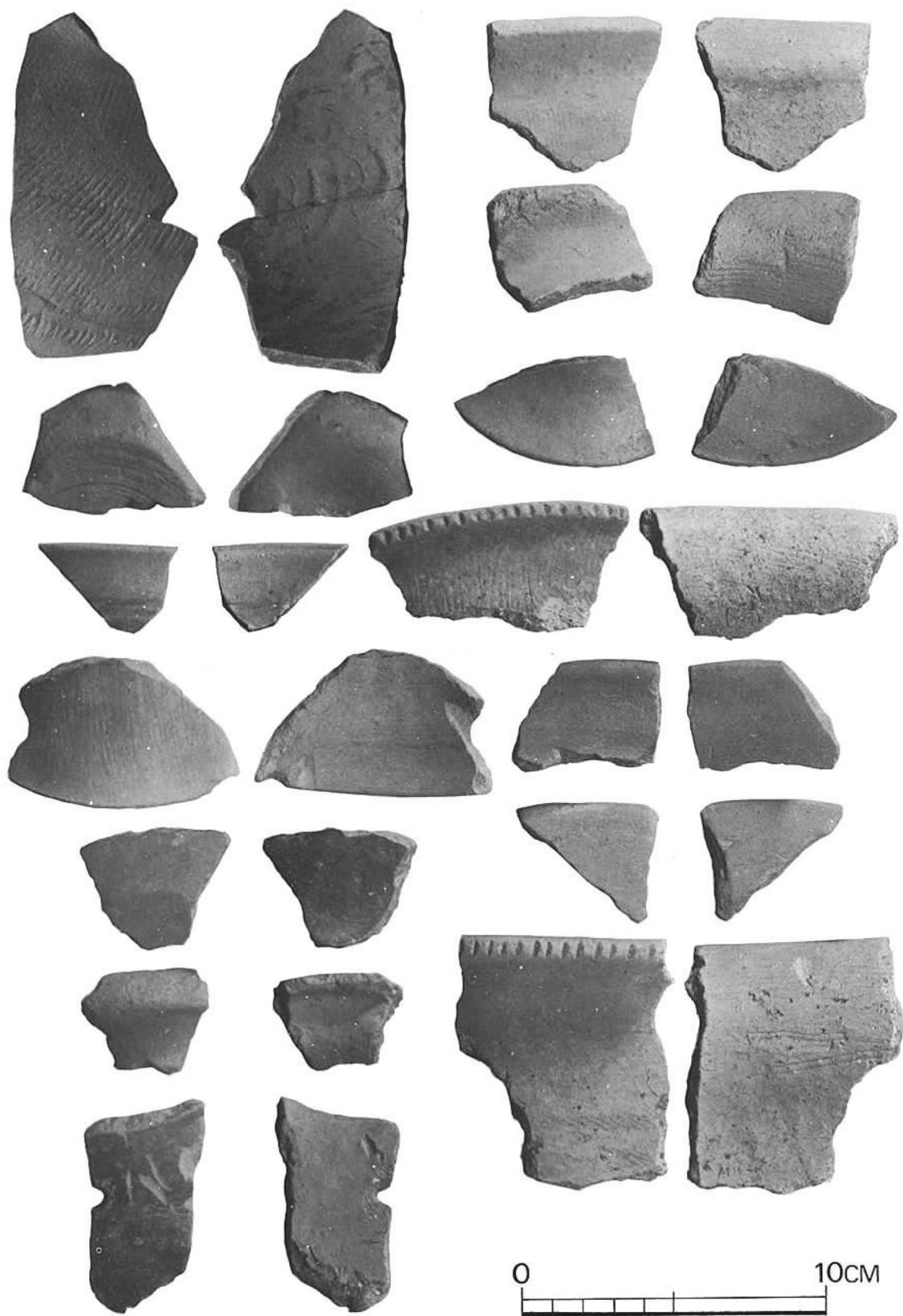
土塚墓 (左)は人骨出土状態 (右)は人骨を取り上げた土塚である。 番号は土塚墓番号である。



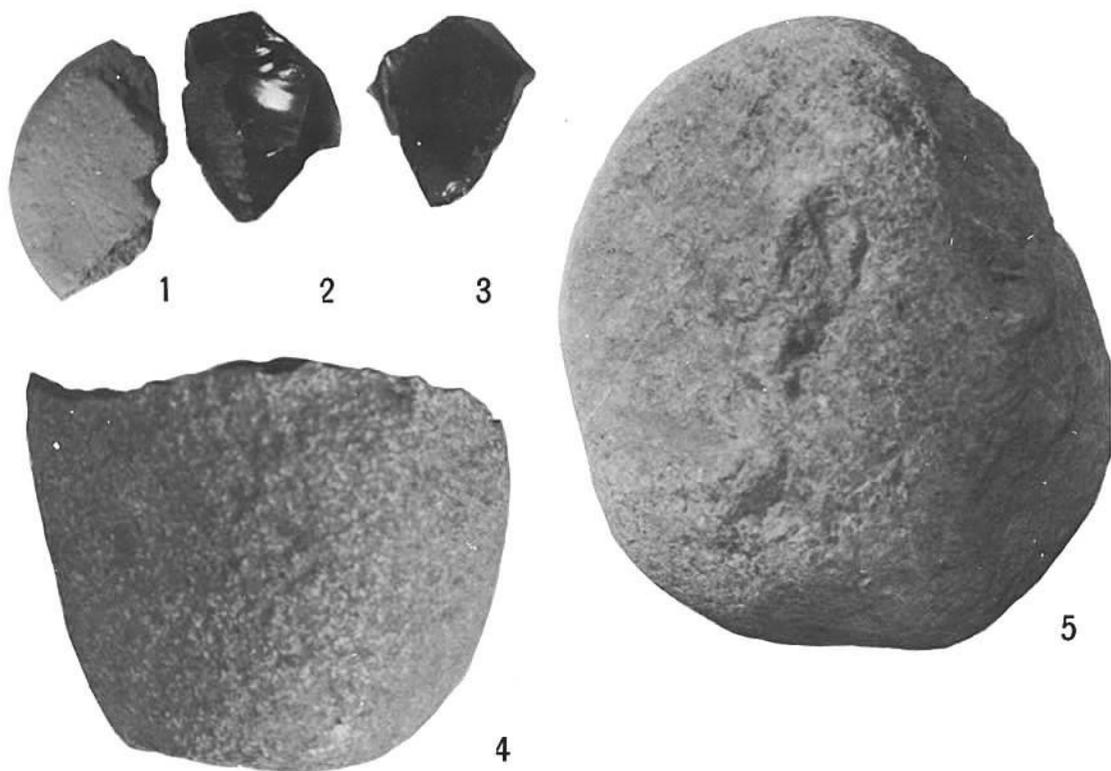
1 Pit 遺構出土遺物 (実大)



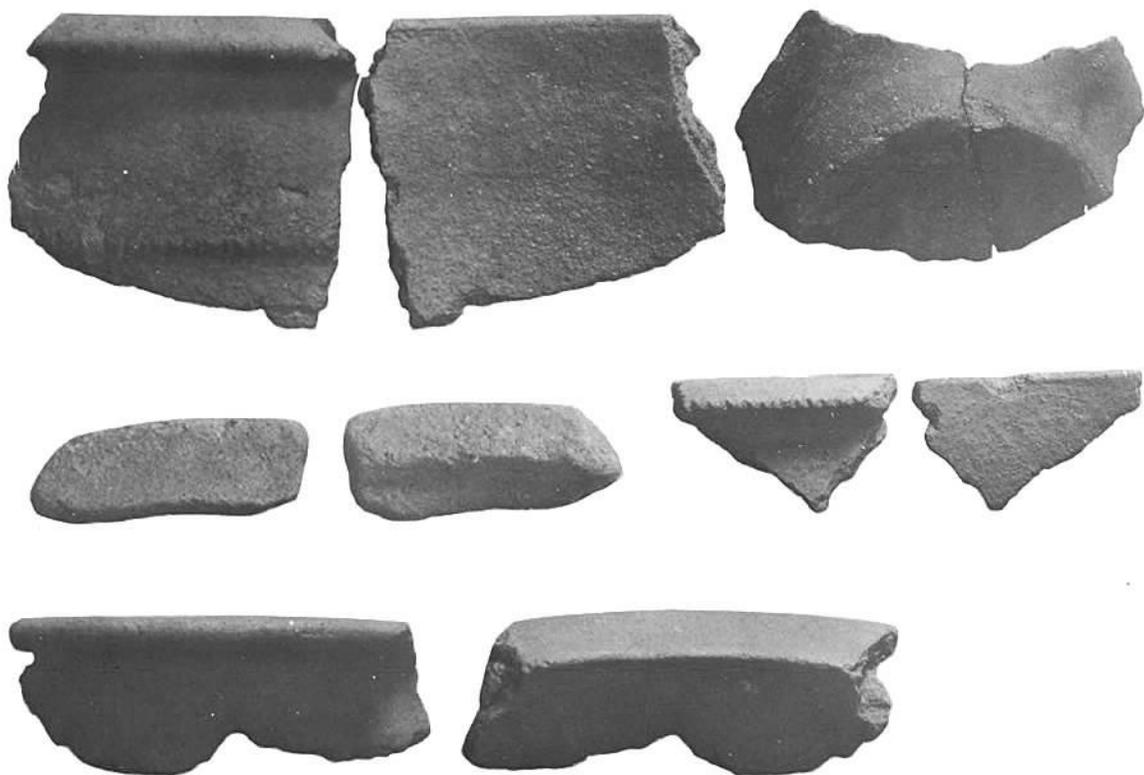
2 文様土器及び土壇内出土遺物 (実大)



表土層出土遺物 (1/2)



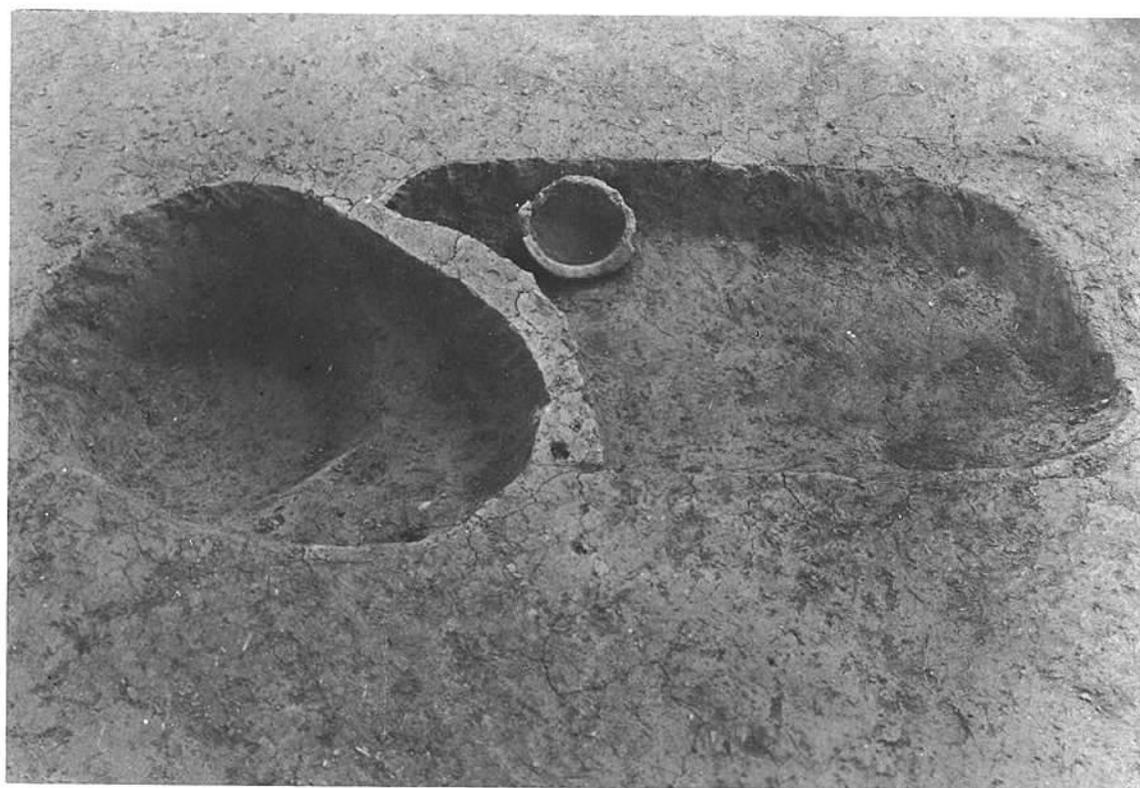
1 表土層出土遺物 (1/4) 1 紡錘車 4 石斧
 2.3 剝片 5 磨石



2 第II層 出土遺物 (1/2)



1 鏡原遺跡遠景



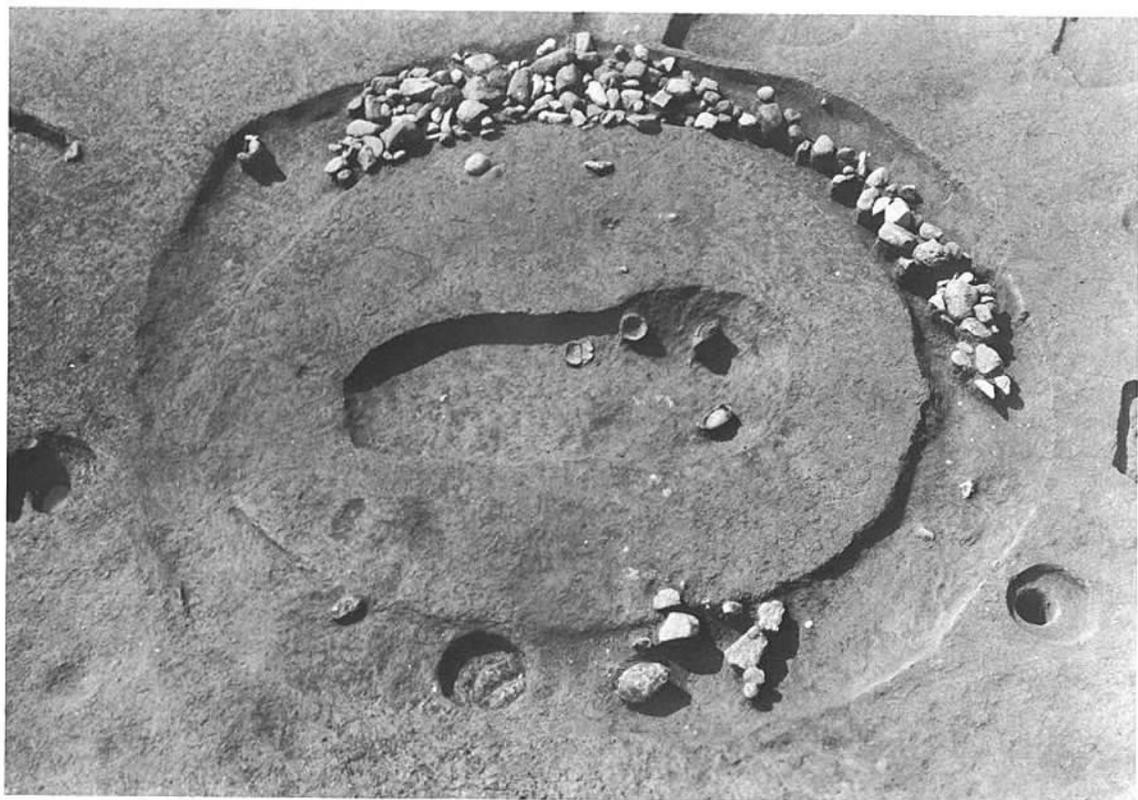
2 第1調査区発見土坑墓



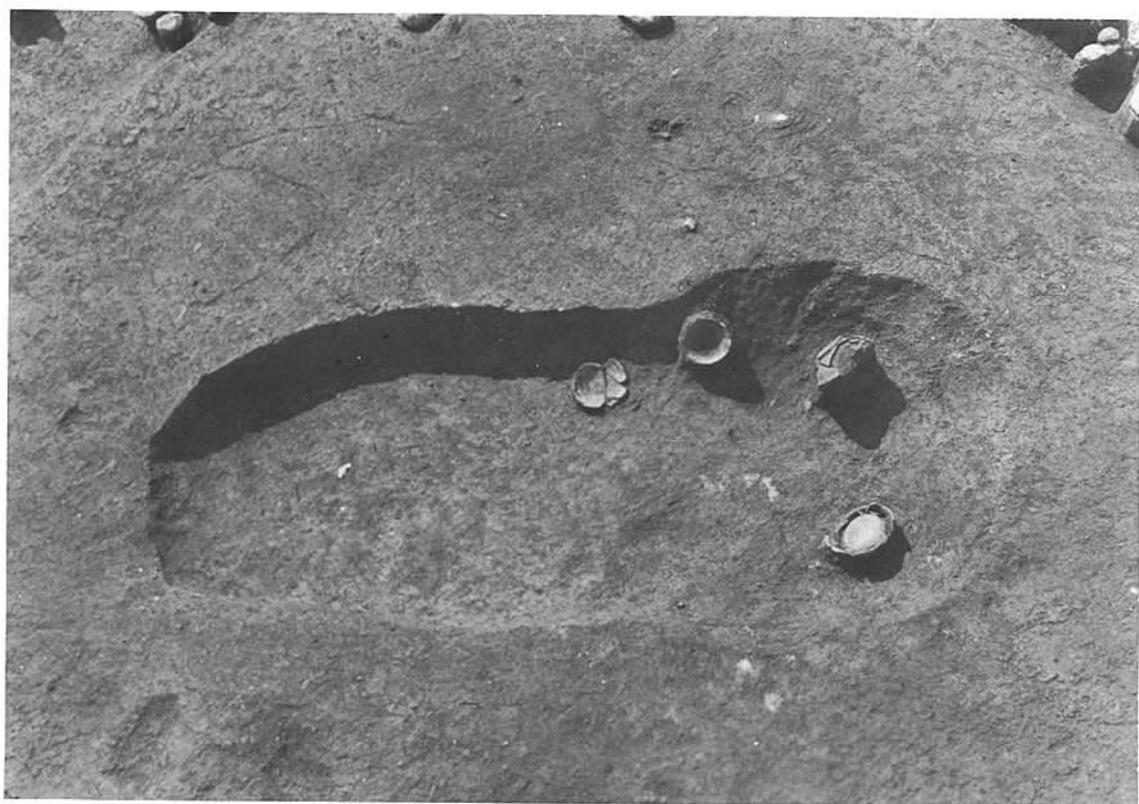
1 第Ⅱ調査区全景



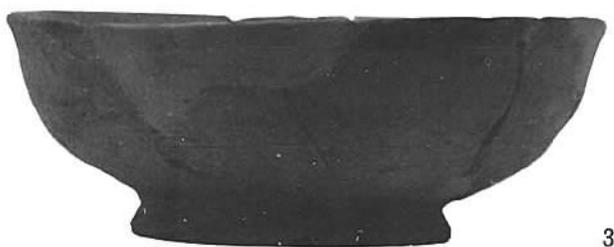
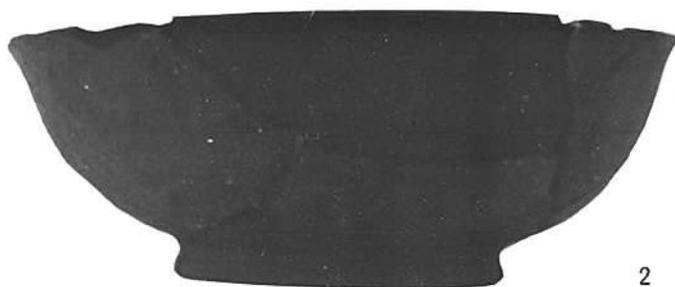
2 第Ⅲ調査区全景



1 円形周溝墓



2 円形周溝墓主体部



今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 2 集

昭和46年 3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市西中洲6-29

印刷 株式会社 川島弘文社
福岡市舞鶴1丁目5-6